

どうやったらこの駄女神に知性を与えられるかについて

コへへ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人に利用されまくった男は、最後は悪意で生涯を終えた。

しかしながら、彼は『人生』を全て受け入れていた。

わずかな心残りはあつたが、不要だった。

それなのに、全てをぶち壊す『女神』が現れた。

転生プランを提示し、自らの未練を無くすことを提案されたが。

彼は気が付いた。

転生プランの致命的な欠陥と目の前の女神がこれっぽっちも他者のことを考えていないことに。

… 忠告はした。しかし、想像以上に頭の悪い女神だった。

全てが、無意味だったため彼は決意した。

チートなしで、魔王討伐及びこの女神に知性を与えることを。

女神と共に、異世界に転移した彼は、何と幸運最低値だった。

さらに『冒険者』しか選べない。

魔王討伐など、能力だけみれば、完全に詰みだった。

故に、彼は、持ち前の『才能』だけで何とかすることにした。

どう考えても、無理ゲーも良いところだが彼は決して諦めない。

…それが、何故なのか気が付かずに。

目次

第一話	致命的な判断ミス	1
第二話	異世界でパーになる思考	12
第三話	魔王の才能	28
第四話	勝てば官軍世は情け	47
第五話	『計画』	62
第六話	闇黒神エリスへの恐怖	80
閑話	最悪の最終手段の放棄（閲覧注意）	96
第七話	幸運という名の不幸。変態という想定外	110
第八話	死の宣告	135
閑話	人としての欠けるサプライズ	170
第九話	道化の日常	192
第十話	欠けた愛	210
第十一話	理不尽な商才なき店主（シリアスブレイカー）	231
第十二話	悪魔との取引	251
閑話	悪夢（閲覧注意）	298
第十三話	宣戦布告	322
第十四話	人類最強戦力との決闘と魔王軍最前基地爆破	364
第十五話	シンフォニア家の『恥』牢屋直送事件	400

第一話 致命的な判断ミス

幼くして両親を亡くした『少年』がいた。

彼の両親は財産を持っていた。

本来であれば残された財産で彼は幸福な人生を歩めたかもしれない。

だが、親戚がこれをほぼ全て奪い取った。

彼に残されたものは本当に最低限の財産だけだった。

保護者の名目で財産を好きに使う親戚。少年の面倒等一切見なかった。

不幸にも少年は身の回りのことを一人でできるだけの才能を持っていた。

故に、誰も止める者も気づく者もいなかった。

本来まだ親戚の行為すら理解できない年頃であるはずの少年は、何となくこうなることを予期していた。

だが、何もできなかった。

少年は才能しか持っていなかったから。知識がなかったから。何よりも幸運がなかったから。

…せめて、両親の教えだけは守ることを決意した。

何も無い自分を亡くなった両親が誇れるように。

困っている人がいたら助けなさいという『思いやり』の教えを。

その日、少年は『彼』になった。

彼は、『孤独』の中で独学した。

思いやりの精神を。誰も教えてはくれないから。

教科書や物語等で学んだ。

道に迷う老人がいれば、荷物を持つのを手伝った道案内をした。会話の中で同じく孤独にあった老人に同情し、定期的に手紙のやり取りをするようになった。

同級生が不始末をやらかせれば彼がフォローした。その同級生は彼を友人と呼び、色々手伝わせた。それが彼には嬉しかった。

親戚が彼の財産を使い果たして呆然とする中で、手を差し伸べた。：彼は親戚がもはや誰も頼れないと知ったから、財産があると思われているせいだ。

しかし、彼の行為は無意味だった。

友人だと彼が思っていた同級生はただ単に簡単に騙せる、自ら汚名を背負うことができる彼を利用していたに過ぎなかった。

散々彼を利用した挙句に、彼に全ての責任を押し付けた。

彼は『友情』を理解できていなかったことを悟った。

彼の親戚は彼に一時は感謝したが、彼の最低限の財産の存在を知ると奪い去っていった。

本当に彼がアルバイト等で努力して貯めたり、維持していたものすらほぼ全てを親戚は持っていった。

彼は結局、最後に残された身内だと思っていた存在からすら、全く感謝などされていなかったことを悟った。

しかし、彼はこう思った。

自分が至らないせいで彼らをつけあがらせてしまったと。

自分のやったことは思いやりなどではなかった。
：所詮、『自己満足』に過ぎなかったのだと。

だから、もう一度頑張ることにした。今度こそ両親の思いを叶える
為に。

そんなある日、手紙のやりとりをしていた老人が亡くなったという
知らせが届いた。

彼は本当に自分が孤独になってしまったことに嘆き悲しんだ。
しかし、老人の死よりも孤独を悲しんだ自分自身に失望した。

彼に取って老人の死は本当に自らの死よりも辛かったし、悲しかった
がそれでも自分に失望した。

老人の遺族から最後の遺言があると知らせがきた。
彼は自分を奮い立たせて、その遺言を聞きに行こうとした。
彼の孤独を癒してくれた、老人の最後の言葉を知りたかった。

だが、それは畏だった。

端的に言えば老人は資産家だった。それも相当な。
同じ孤独を最後に癒してくれた彼に自分の財産を与えたかった。
問題はその額だった。老人は本当に彼への感謝から判断を誤って
しまった。

それは普段の老人なら絶対しないミスだった。大金を彼に残そう
としてしまった。

誰も老人の身内は、最後まで孤独にできませんでした。
老人の最後の死までこの遺言に気がつけなかった。

それを遺族は激怒した。

遺族の遺産を他人が、敢えて作った老人の『孤独』を救うなどという、

偽善者風情が財産を奪おうとしていると逆恨みした。

老人は現役、若しくは少年に会う前だったらこの遺族の思考を簡単に理解できた。

つまりは、彼は亡き者にされた。事故を装った呆気ない最後。

彼は最後まで不幸な人生だったと第三者は言うだろう。

だが、不幸にも頭の良い彼は今わの際に全てを察した。

それは、彼が最も気にしていたこと。

唯一、たった一人だけ、『思いやり』で救えた人がいた。

この事実だけで彼はこれまでの行為が無駄ではなかったと確信していた。

それは、他者からすれば異常であり理解不能な思考だった。

だが、彼はその事実、たったそれだけで全てが満足できた。

彼は彼なりの人生を満足して終えられた。

欠落した自分でも思いやりができたのだと、彼は満足した。

彼が両親から教えられた『愛』は欠けていてもできたのだと、最初からできていたのだと知れた。

彼自身が、果たせない無念があれば絶望したかもしれない。

だが、確実に老人は彼に救われたのだと確信できた。

しかし、最後まで、彼は『孤独』なのだけが心残りだった。

.....

…その余韻をぶち壊す存在が目の前に現れた。
透き通った水色の髪、人間離れした美貌の女神と称する存在だった。

彼は髪の色もその美貌もおかしいとは思わなかった。

彼の生前出会った人々の何人かは人間離れした美しさだった。

だが、死後の世界という状況で目の前の存在が女神だと納得した。
生前出会っていたら黄色い救急車を彼は呼んでいただろう。

彼は神の存在等信じていなかった。しかし、流石にこの状況下では認めざるを得なかった。

彼は女神の話を聞くことにした。

女神も仕事なら余韻ぶち壊しても仕方がないだろうと寛大な心で女神を許した。

勿論、言葉には出さない。

彼は仮にも神に対してナチュラルに上から目線だがいつものことだった。

彼は女神に話の続きを促した。

彼は早めに切り上げたかった。

もし可能なら両親に自分の人生を報告したかった。

何より老人に感謝と謝罪をしたいと思った。

老人の意思とは反するだろう形で彼は死んだから。

だが、彼は話を聞くにつれて少し死後の世界を誤解していたことを悟った。

女神の仕事は魂を転生させることにより世界秩序の維持を図ることだそうだ。

つまりは行政機関の役人だった。

彼の両親も老人も天国にいないらしい。彼はもう未練はなかった。

彼が転生を希望する前に女神がこんなことを言い始めた。

「うんうん。天国なんて退屈なところはあなたは嫌でしょう？」

かといって今更記憶を失って赤ちゃんからやり直すと云われてはいそですか言うはずないわよね？」

彼は確信した。女神は全能ではない。

彼ははいそうですかと言う気満々だった。

そんな彼の思いに気が付かない女神は色々語り始めた。

それは志半ばで死んだ若者への救済プランだった。

異世界転生等とほぎく、ライトノベル等によくある展開だ。

女神は俗世に敏いようだ。

彼の確認に対して、そういう知識で合っていると彼に吹き込んだから。

だが、この目の前の『女神』の本性は、彼は一瞬で察した。

皮肉にも、生前ほぼできなかつた他人を疑うことが彼にはできるようになっていた。

だが、女神の提案は確かに彼を救おうとした行為ではあつた。

生前、誰からも救われなかつた彼を救おうとしてくれた。

そのやりくちはギリシャ神話並みの理不尽だった。少なくとも彼に取ってはそうだった。

彼にとつて、不本意極まりない。彼は人生をもう満足していた。

∴彼は本当にこれ以上の生はいらなかつた。

故に、感謝としてこれだけは伝えようと思つた。

彼は輪廻の輪に戻るつもりだった。

「失礼ながら、その『転生プラン』には致命的な欠陥があります。

∴もう一度、転生プランを、考え直すことを提案いたします」

チートなど与えたら、志半ばで死んだ若者が何しでかすかわかったものではなかった。

この女神は表だけ取繕っているだけだった。

危険性に気が付いていない。自分の仕事なものにも関わらず。

つまり、言い方は不敬だが、馬鹿だと彼は確信した。

なので、わかりやすく丁寧に忠告することを決意した。

それを説こうと彼は言葉を使おうとした。

彼の言葉はそれこそ誰もを欺ける自信があった。

生前は、友人のために日常では控えていた…。それは、彼の思い込みであったが。

彼は良き友でありたかったからなるべく誠実に他者と関わっていた。

なので、彼は女神とともにより良い転生プランを共に再計画し、

過去の経緯を掘り下げて魔王討伐の是非を説き、自分はさつさと輪廻の輪に戻る決意をした。

だが、

「何ですって！このぼつちを拗らせた悲劇のヒロイン気どりの糞男！！」

彼は流石にキレた。

おそらく、転生先のことと碌に知らないで送り出していると女神との会話の中で彼は確信していた。

具体的なことを何も言わないのだ。

転生先がどういう『世界』でどういう人材、そして能力が求められているかが、ぼんやりとしか伝わってこない。

彼が神の立場であればチートなど与えて送り出すのであればきちんと説明した。

確かにそこまで面倒見切れないというのはあるだろう。

だが、この目の前の女神は理解して説明していない。せめて、女神がそういった背景を理解して言うのであれば彼もキレはしなかった。

彼からしてみれば、職務怠慢も良いところだった。

…彼は根が真面目過ぎた。

この自称女神は教育せねばならない。なので、彼は決意した。

輪廻の輪に戻ることを諦め、チートを捨てて、魔王退治という恐らく無謀な魔王討伐とやらをしてみせる。

全ては、この女神に『知性』を与えるために。

「…異世界に持っていく『もの』が決まりました」
彼は決意した。

女神の不在も想定されているなら、この提案は受け入れられる。恐らく、人間社会も神社会も代わりない。替えの人材はいるだろう。

彼は、少なくとも上位の神の存在はこの目の前の駄女神との会話から察した。

故に、女神に情けは不要だと彼は思った。

「へえ…このアクア様の偉大さに気が付いて自分を顧みたのね。

じゃあ、さっさと言いなさい。

私もこの後、他の死者の案内がいっぱい待ってるんだからね？」

この抜け穴に気が付かない時点で致命的な欠陥があると彼は、警告しようとした。

それを反故したのは目の前の女神。

論理的に自分は悪くない。目の前の自称女神の責任だ。

：一応、救いの手を差し伸べてくれた相手を自称呼ばわりは失礼だと彼は思った。

彼的には自称神は前世で充分だった。しかも全部邪悪だった。

彼は意識を取り戻して、女神に望むチートを宣言した。

「持っていくものは、あなた。つまり、女神のアクア様です」

女神なのだから、使える能力はあるはず。

先ほどの一覧表のチート以上にチートかもしれないと彼は推測していた。

問題は自分自身の才能だけで行動しないといけないことかなどと彼は考えていた。

彼の才能は危険かもしれないと今、彼は薄々感じていた。

この一連の女神とのやり取りの思考及びこれからの計画の想定は、彼からすればまるで悪役だったから。

「あーはいはい。それじゃ、この魔方陣の中央から出ない様に……」

そこまで言って、女神はピタリと動きを止めた。

彼の想定よりも気づくのが遅い。

思ったより使えないかもしれない。だが、腹は括った。

「…今何て言ったの？」

呆然と呟く女神と、そして彼の足元には、青く光る魔方陣が現れた。

天使が舞い降りて告げた。彼の願いが受け入れられたという。

やはり、致命的な欠陥だ。

：神といえども全能ではないことが発覚した。
生前、神に祈らないで正解だった。

「ちよ、え、なにこれ。え、え、嘘でしょ？」

「いやいやいやいや、ちよつと、無効でしょ!?!こんな無効よ!待って!」

だから警告したのにと彼は思う。もう全てが遅いのだが。

「女神様、あなたには明らかに知性が足りません。」

故に学びの旅をしましょう。俺が魔王を何とかするので協力してください」

彼はそう言つて、女神に近づき、手を差し伸べてみる。

こうなったのは無理やりだが、せめて友好関係でありたいから。

彼は何故か、ほんの少しだけ嬉しさを感じていた。

：： 彼はこの自分の感情が全く理解できなかつた。

「わあああああー!ちよつとあんた何してくれてんの!?!いやあああああ!」

ダメだ。聞いていない。

先ほどのチート一覧から彼は推察した。

あれらの能力があつても勝てない魔王には半端なチートなど無意味。

故に、女神くらいのイレギュラーを起こさないと状況は打破できない。

：：ひよつとしたら、魔王が過去送り出したはずの勇者候補の『転生者』なんてこともあり得る。

この女神なら。失礼ながら、鳥頭だ。

どうやって教育したものが悩ましい。

そんなことを考えていた彼と喚き散らす女神は白い光に包まれた。

第二話 異世界でパーになる思考

彼は、死後の世界での白い閃光から気が付いた。

明らかに未知の光景がそこにはあった。

：ファンタジーの中世の街並みだ。

女神の言うことは正しかった。確かに『異世界』だ。
少なくとも日本ではない。

駆け出し冒険者の街「アクセル」に彼と女神は降り立った。

彼が、まず察したのは「アクセル」の治安が良さだった。

女神の異世界転生の説明で大よそ中世のファンタジー世界なのは聞いていた。

だが、説明では世界は蹂躪され、魔王に脅かされていると散々女神が言っていた。

：彼は観察してわかった。

「アクセル」の子供たちはあんなに嬉しそうにはしゃいでいる。

見える範囲の露店も気性が荒いながらも賑わっている。

女神の説明にあった魔王に滅ぼされる寸前の『世界』とは思えない活気だ。

：彼が魔王なら駆け出し冒険者の街「アクセル」を初手で滅ぼす。
なのに、それをしないのは単純に馬鹿と思った。

だが、女神が何人もの勇者を送り込んでいるのは確定事項。

それに耐えている魔王軍がここを滅ぼさないわけは：

魔王軍も話がわかる連中なのかも知れない。

ひょっとしたら魔王の手の者が潜んでいる可能性も有り得る。

反人類思想の人材確保、または、街に潜む異常なレベルの強者と敵対を避ける為にこの「アクセル」を守るなどの条件つきなら、彼が魔王の立場でも見逃すだろうと思った。

有り得ないと内心思ったが。

彼は、女神が送り込んだ転生者としてあるまじき『思考』していた。完全に魔王側の視点で物事を考えていた。だが、これは彼の才能だった。

そういう物騒なことを考えていた彼だったが、

「ああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

女神が発狂して、我に返った。

しまったと彼は思った。

街の観察などより女神のフォローをすべきだった。

言うなれば彼のやった行為は女神の『拉致』に等しい。

∴犯罪はいけないと思っただ彼は謝罪した。

「申し訳ありません。女神様。

しかしながら、恐らく魔王討伐しないと帰れませんよね？」

彼は自身の転生チートが女神ならば、魔王を倒さなければ決して帰れないだろうと推測していた。

∴謝っているようで謝っていない。彼は自分の『発言』に違和感を覚えた。

これでは、この言い方ではある意味、いや完全に脅しだと彼は思った。

女神はキツと効果音が出そうな勢いでこちらを睨みつける。

「あんた、どうすんの!? ねえ、どうしよう! 私これからどうしたらいい!?!」

睨みつけていた目に涙を浮かべている。

これは、謝罪等よりも行動を見せた方が良いと彼は判断した。

「…この場合、この『世界』の冒険者組合的なものの場所はご存知ですか?」

一応聞いてみる。多分知らないと思うが、この女神なら。

女神がこの異世界をよく知っているならあそこまで発狂はしないだろうと考えた。

「…え? 私にそんな事聞かれても知らないわよ。」

この世界に送る事は出来ても、別にこの世界に詳しい訳じゃないし。

大量にある異世界の内の一つでしかないし、そんなもの一々知るわけないでしょ?」

知っていた。

この駄女神、やはりダメだ。

日本の若者担当の、女神らしいと言えばそうかもしれない。

この無警戒さが。無計画さが。

「この場合、魔王に攻め込まれている以上そういった組織があるはずですよ。」

…勇者だけで対処できないモンスター討伐などもあるでしょう。

この世界は中世ファンタジーなのですよ?」

言葉を選びながら、丁寧に女神の目を見て話す。

彼は女神を観察した。彼は女神の『知性』を知らなければならな

かった。

彼は、段々女神を哀れに思えてきた、何だか駄犬を見ている気分になった。

「ちよつと、何よーその憐みの目は!!」

彼はこの女神が面倒臭くなった。

彼の前世で出会った人々は大体賢過ぎた。若しくは凄まじい悪人だ。

この女神はどちらにも当てはまらない。

今後、女神の思考を誘導しきれるかやや不安になってきた。

計画上、彼の想定する魔王軍対策を女神に隠す必要があった。綺麗なことだけでは魔王討伐など無理と彼は確信していた。

彼は泣いていた女神にポケットに入っていたハンカチを渡して自身の状態を確認した。

彼は何故か銃痕も血も燃え跡すらない彼の死ぬ寸前の綺麗な状態で異世界転生していた。

ハンカチもポケットティッシュすらある。だが、スマートフォンの電池はなかった。

スマートフォンのリチウム電池をとっさに爆弾にしたせいだと彼はわかった。

どうやら彼は死の一時間前の状態で転移したようだった。

女神が顔を拭いている間に自分の状況の確認していたら周囲から不審がられてしまった。

幸いなことに女神との会話は聞かれていなかった。

彼はどのみち異世界の話など聞かれていても理解不能だろうと思った。

彼は周囲の状況を察して、この街に来たばかりの常識のない冒険者候補として振る舞うことにした。

身支度を整えるおのぼりさんなら不自然ではない。

実際、間違っではない。

彼は気を取り直し街の住民に話しかけることにした。

「申し訳ありません。お嬢さん。冒険者ギルド的なものをお教え願えないでしょうか？」

彼女の反応から察していただけたと思いますが、私達はこの街に来たばかりでして…」

彼は、そう言っ年配の女性に話しかけた。

「あら、やだ。お上手ね！…この通りをまっすぐ行っ右に曲がると看板が見えるわよ」

年配の女性はすんなり場所を教えてくれた。

素晴らしい。

彼は現地人とのファーストコンタクトが成功したのと、

女神の説明にあつた翻訳が完全に働いていることを確認できた。

…頭がパーになるとかはないようだ。

運が悪いとパーになると言われて彼は凄まじい恐怖を覚えていた。

「やだ。この男、熟女趣味？うわあ…引くわあ」

彼は、この駄女神は面倒臭いと思った。

何でこういう知識だけあるのだろう。

「サブカルチャーだけ詰め込んだ若者の末路の女神ですか？」

彼は思わず素で聞いてしまった。

この失言は、本来の彼なら絶対しないミスだった。彼は思った、これは頭がパーになっている。考えたことがそのまま言葉にでていた。

：幸い全部の考えを言葉に出すわけじゃないようだが、非常に不味いと彼は思った。

チートがない状況で、『思考』こそ、彼に残された最後にして、最大の武器だったからだ。

「失礼ね！私、この世界で崇められている神様の一人なのよ！

水の女神アクア様その人なのよ!!

：冒険者ギルドでの活躍を見てなさい！」

彼は登録前に、自分の幸運は恐らく最低値だろうことを察した。

そして、絶対女神は冒険者ギルドで何かをやらかすと確信した。

.....

その後、女神様は確かに凄かった。

水の女神アクアだと公然と名乗ったのに全く信用して貰えなかった。

挙句に同情され、二人分の登録料をアクアの後輩の女神というエリス神を崇めるエリス教徒から恵んで貰った。

：これは、ある意味助かったが。

彼は『登録手数料』を前借できる制度が恐らくあると考えていたがなかった。

無理もない。信用できないフリーターに大よそ千円相当でも貸したくはないだろう。

中世では。

彼は自分の浅はかな考えを自覚した。ここは『現代』ではないのだ。…どうも、冒険者ギルドをハローワーク等として同様にとらえていたと彼は実感した。

実際、その考えも間違いではなかったが。

この際の出来事から、混乱しないように『女神』ではなく『アクア』と呼ぶことにした。

彼は望んではないとは言え自分を助けてくれた女神を敬つても良かったのだが、

アクアはどうも甘やかすとつけあがるタイプと確信し、呼び捨てにすることにした。

「敬つてよー甘やかしてよー女神様なのよー私は!!」

このような具合だ。

彼はアクアの言うことは本当のことだが、

周囲の目を気にして欲しいと真剣に女神アクアに祈った。

「あら？私を信仰する気が起きたのかしら？信仰の祈りの気配がするわね…」

女神アクア様を毘に嵌めた外道なあなたでもアクシズ教は受け入れられるわよ。

洗礼を受けなさい。そして、私を甘やかしなさい、敬いなさい!」訂正しよう。金輪際、神に等祈らない。どの道、彼は前世でも神に祈っていなかった。

「ちよつと、信仰が完全に消えたんだけど!どういうことよ!!」

彼は静かに決意した。

.....

冒険者組合での登録もひと騒動あった。想定内だが。

アクアは登録の際、アークプリーストの適正がずば抜けていた。幸運値と知力が極端に低かった。

その一方で彼は、知力だけやたら高く、あとは軒並み低い。幸運に至ってはアクアと同等だった。

「…冒険者稼業ではなく言いにくいのですが、学者になった方が良いと思います」

登録の際、受付の女性ルナ女史からそう言われた。彼は敢えて混んでいる受付に並んだ。

冒険者ギルド内で情報網の一役をになっているのは恐らくこの目の前の美人受付だったから。

彼の魔王討伐の計画は既に始まっていた。誰にも悟られずにこの段階で大筋が決まった。

冒険者ギルド内での彼の印象操作はアクアのせいで死んだが、挽回はまだ可能だった。

彼は転生チート等ないせいか、最弱の『冒険者』しかなれなかった。だが、これは寧ろ都合が良いと彼は思った。

チートなどないのだから、フォローに徹する他ない。それが開き直れた。方向が完全に固まった。

彼は致命的な何かを失った気がした。彼はまだそのことに気づいていない。

気分を変えて、転生前に想定していた計画を表舞台での計画を彼は考え始めた。

誰がどう考えても、問題は『前衛』の確保だと思った。それを前提に行動しようとした。ところが、それ以前の問題があった。

.....

彼はまず、モンスター討伐の装備費を整えるため、日雇いのアルバイトを女神アクアと行うことにした。外壁工事が一番合理的と判断し、嫌がるアクアを説得した。

アクアの土木工事への偏見のせいで、初日は滅茶苦茶嫌がり抵抗されまくった。

結果、街の住民でも話題となってしまった。

彼の思考が言葉に出るのも災いした。

：アクアへの悪態が勝手にでてきてしまったのだ。意図せずに。しかも、それはよりもよってアクセルの住民達が集まっているときに起こってしまった。

彼は能力が低いくせに、頭の弱い高ステータスの美少女を騙し、連れ歩き土木工事までさせる鬼畜、畜生だと囁かれた。

その噂に拍車をかけたのが、先ほどの悪態もそうだが、大体幸運値の低さだった。

彼はアクアをフォローしていただけなのだが、アクアの不幸が彼に襲い掛かった。

皿を割り、宿の部屋の一部を壊し、馬小屋に泊まる羽目になり、宴会芸で物を消す。

全て、彼のせいになった。

アクアの分の悪評が彼に集中した。

彼はこの現象から、幸運の推測を仮定できた。運命の法則を確信した。

さらに後日、転移初日のアクアの発言を聞いていた住民伝手で、熟女趣味の変態という汚名を着せられた。

アクセル内で、困っている人を手助けしたのが、軒並み年配の女性だったのも悪化の原因だった。

彼は、異性関係等の噂でアクアに迷惑がかかるよりはマシ。

不幸が自分に集中するのは、不本意ながら彼の恩人である女神を利用した天罰なのだろうと諦めた。

だが、『友』として仲良くなったと思っていた

アークウィザードのエキスパート『紅魔族』の少女ゆんゆんが上記の勘違いした挙句に、

自分を避けるようになったのはショックだった。

彼はその翌日、流石に仕事を休もうとした。日雇いだからできる行為だ。

：何だか裏切られたような思いになってしまったからだ。

彼自身は最低限の交際費で済ませていたため、金は溜まっていた。物を消す類の、宴会芸を止めるために見張っていなければならなかった。

彼は女神アクアの浪費癖というか、
貰った給料を貯めようとしなのにはほとんど疲れていた。

ほぼ、彼一人の貯金だった。

今後計画しているモンスター討伐用の装備を買うための費用は彼
が賄っていた。

「何やってんの！ 勤労は義務よ！ 働きなさい！」

外壁仕事をあんなに嫌がっていた初日と比べ、大分『成長』してい
るアクア。

それを見て、彼は『初心』を思い返し、自分を奮い立たせた。

自分の寿命以内には、文字通り、死んでもアクアを神の世界に、天
界に返さないといけない。

元々、生に執着などない。

完全に不本意だったが、救われたからには『恩』は返すつもりだっ
た。

教育が済んだら、自分は不要。彼はそう思った。

彼の計画は本当に完成していた。この段階で。

アクアの『教育』は順調だ。

…まだ『知性』の成長の兆しは全く見えないが。

少なくとも他者を見るようになった。

あの彼との転生前のやり取りまで雑ではなくなったと推測してい
た。

：女神としてはひよつとしたら、ダメかもしれない。
人間に思い入れしかねない危険な思想とも言えるかもしれない。

だが、彼は良い傾向だと思った。

アクアはこの『世界』を楽しんでいる。

学ぶ楽しみを覚えれば、いつかきつと知性が芽生えるはずだ。

彼は唯一アクアのこの成長だけは本当に嬉しかった。

同時にこういう考え方を本当に人間がして良いのかここで危機感を覚えた。

だが、彼の計画はもうほぼ完成していた。故に、彼は危機感という悩みを消した。

もはや、後戻りはできないと彼の中で覚悟が決まっていた。

彼の最後のブレーキは壊れようとしていた。

.....

2週間が経過した。

今日の仕事の、給与で最低限の装備が買える。

アクアは絶対本分を忘れているだろう。魔王討伐等忘れているに
違いない。

彼はアクアがそういう鳥頭だということが二週間で簡単にわかつた。

確信した。

：どう教育すれば良いのか悩んだ。

魔王討伐は彼とアクアの二人だけでは不可能だ。

というか、二週間も一緒に過ごした彼にとっては本当に『世界』を救う勇者を送る女神がアクアで良いのか極めて疑問だった。

明らかに人材配置を間違えている。

彼はアクアの上司にあたる上位神とやらに一度会ってみたかった。

何となく彼は神というものの存在をギリシヤ神話の世界観のよう
に感じてきた。

神の存在が実在したからこそその理不尽を感じた。

神を信じれば救われると言いながら、救われない者達を彼は前世で
散々見てきた。

彼はどうあがいても絶望の光景を神に祈り、未来を直視できない者
達の末路を数多く見てきた。

同時に利用された。彼の思いやりは無駄だった。

だが、彼は女神アクアに皮肉にも救いの手を差し伸べられたのだ。
彼が生前信じていない神に、彼の望まない形とはいえアクアは確か
に救いの提案を提示してきた。

だから、彼は計画を立てた。

前世でも差し伸べられなかった彼はアクアに恩を返すために全て
を懸けた。

だが、このどうしようもない二人組だけでは計画の実行は無理だっ
た。

最弱の悪評だらけの冒険者と知性のないアークプリースト。

故に、彼は切実に『仲間』が欲しかった。

…ゆんゆんのことは残念だったが、
元々、彼には元の世界にも『友人』などいなかった。

生前に友と想っていたのは、彼が一方的に思い込んでいただけだった。

…今回も勘違いだったのだろうと彼は思った。

それに彼女、ゆんゆんの行為は客観的に見て正しい。

これ以上、自分と関わるのは将来有望な彼女を妨げるだけだろう。

異世界で何も知らないに等しかった彼と色々話してくれただけ『幸運』であった。

彼はそう思い込んだ。思い込むことにした。

…強力なアークウイザード、紅魔族ゆんゆん。

彼女が『仲間』になってくれなかったのは、色んな意味で辛かった。

彼は、この世界に来て打算的な考えになってしまう自分が嫌だった。

大概、アクアのための、フォローのせいであんなってしまったのだが。

弁償とか、負債とか、宴会芸とか、宴会芸とか。

本気で辞めて欲しい。消すマジックの類は特に。

「芸は請われて見せるものではないわ。魂が命じるとき自ずから披露してしまうものなの」

このアクアの発言には、流石に彼もキレそうになった。

彼には本当に実害が発生している。計画の妨げになりつつあった。

それに、魔王討伐の計画が遅れるのは、アクアのためにもならないと彼は思った。

だが、仕事後にはしゃいでいるのを見ると怒りもどこかへ行ってしまう。

なので、彼は宴会芸を止めるのを大体諦めた。

：流石にピアノを消そうとしたりするのは止めるが。

彼は、アクアを甘やかし過ぎているのは自覚したが、

これくらいは許さないといけないのだろうと思った。きっとそうだろう。

神の教育など、本来は『人間』の範疇を超えているのだから。

.....

後日、ゆんゆんの件は、ゆんゆんの厨二で面倒くさい『友達』に追及されることになる。

しかし、彼女は、彼の望んでいた最短で魔王討伐の条件の一つを満たす逸材だった。

だが：面倒臭い。紅魔族で初めてあったのが、ゆんゆんだから余計に面倒臭く感じる。

初対面で彼女と会っていたら、対処も容易だったかもしれない。

彼は、そのような、ゆんゆんに対して失礼な言葉を言いそうになった自分をぶん殴った。

…ある程度、頭がパーになる初期段階の対応ができるようになった。
ようは、パーになる気配を感じたら自分を殴れば、戻るのだ。思考が。

彼は、『マゾヒスト』という汚名が追加された。

最悪、自分が捨て駒になっても不信がられないから良いと無理やり利点を考え出した。

第三話 魔王の才能

目が覚めると、中世の荘厳な神殿を思わせる内装の部屋にいた。

：彼はこの事態を転生前から想定していた。

転生チートを女神アクアにすると決めた時点で想定せざるを得なかった。

故に、対処法を二週間で整えていた。

その活動は全てアクアが寝た深夜に行った。

さらには、アクアの愚痴という形で天界という存在を大よそ理解した。

異世界中の魂を扱う、膨大な事務作業だ。彼は人間社会と神社会が規模こそすれあまり変わらないと確信した。

日本担当のアクアですら、平和な国の若者を主に扱う女神ですら、面倒臭がるほぼ単調な作業だった。

故に、ただの『転生者』と思われている最初の一回のみなら気が付かない。

：現に女神エリスは未だに女神アクアの下を訪れていない。

まだ、彼に気が付いていない何よりの証明だった。

：だが、ここに来て彼は一つ、これまで行ってきた対策の全てに根本的な、致命的な欠陥を発見した。

それは、もう遅い気づきだった。

彼は前提が機能することを思い込んだ。

彼にはそれしかもう道がなかった。

少なくとも彼にはこれ以外の方法が思いつかなかった。

そう思い込まないと魔王討伐及び女神アクアの教育など彼には不可能だから。

せめて、最低限以上の幸運さえあれば話が違ったのだが。

この世界の理不尽な法則性には色々苦労した。前世より使い勝手が悪すぎた。

彼の取柄だった狙撃技術が一切使えなかった。正直、幸運というより呪いに近い。

彼の前世の敵にすら勝てない可能性が出てきた以上、魔王討伐自体が危ぶまれたからこれしか手がなかった。

最も彼は生前、正攻法で相手にしなかった。

彼は貧弱な頭でつかちと変態メイドに罵られたものだ。

：彼は仕返しできていなかったことに気が付いた。

彼の毒殺を幾度となく試みたのはどうでも良い。

だが、食べ物で粗末にしたことは許せなかった。

彼は前世の忌々しい記憶を今思い出すわけにはいかなかった。

これから国教の神を相手取るのだから。

彼は計画を悔いた。

：これしか思いつかない自分自身に改めて、失望した。

.....

「ようこそ死後の世界へ。私は、あなたに新たな…」

白い羽衣に身を包む『聖女』を思わせる女性が何かをしゃべり出す。だが、彼はその隙を与えなかった。

隙を与えたら彼は死ぬ。文字通りの意味で。

だから、神罰不可避の狼藉をする。

「こうして、直接お話するのは初めてですね。クリスさん。何度か冒険者ギルドで見るとはありましたが。」

：お会いする時間すらなく、私が死ぬというのは想定外でした」
彼は驚いている女神エリスを見て、改めて確信した。

まだ、表面しか彼の人生を見ていないこと女神エリスの表情が教えてくれた。

女神エリスは彼を転生させる気しかなかったことを悟った。

故に、この方針が確定した。皮肉にも条件は満たされていた。

彼は内心の不安を押し殺し決意した。

神罰不可避の狼藉を。

「さて、クリスさんが行っている義賊稼業をアクセル中に広めたくなければ、

さらに言えば『ご友人』のダステイネス家のご令嬢に迷惑をかけたくなければ、

どうか私の話を聞いてください」

彼は神罰など恐れはしない精神性の持ち主だ。

何故ならもう既に毎日、神罰や天罰を受け続けているような状況だからだ。

この二週間で不幸という不幸、悪評という悪評を受け続けた彼は悪い意味で成長した。

だが、彼は最初から女神アクアの教育が終わったら、天国でも地獄でも行く覚悟などとづくにできていた。

彼は、もはや自分の、魂の消滅すら恐れはしていない。

故に、目の前の『狂信者』など決して恐れはしなかった。

「…えっ？い、いや私は、女神エリスです！

クリスではありません！…彼女は敬虔な私の信者。

決して、そう決して、義賊などではありません!!」

何て読みやすい『女神』だ。彼はそう思った。

彼女の、その拒絶している行為そのものが何よりの証明だった。

彼は、クリスの正体に思い至った時、半信半疑だった。

そして、この国の警察機関は大分『占い』と『魔法』に頼り過ぎていることを知った。

だが、国教になっている女神がわざわざ義賊の真似事をするなどは、誰も思い至るはずがない。

これは、彼が別世界の転生者だから気が付けたのだと推測していた。

彼が前世で出会った連中ならこれを口実に嬉々として女神エリスを脅しに行くからだ。

きっと女神エリスは鴨にされる。

最も、悪人が多いので神罰という大義名分で対処可能だろうが。

アクアもこれくらい素直だと楽なのに。

彼は内心深いため息をつき、気が付いた。

死後の世界では、頭がパーになっていない。

あらゆる失言を想定して、自分の思考を制限する必要がない。

だから言うことができた。

わかりやすく女神エリスがもう詰んでいることを。

彼の提案という名の脅迫を聞かないとこの世界が不味いことを提示する。

彼は、女神エリスの真実を完全に確信した。

「もう、あなたは詰んでいます。

まず、初めに説明しましょう。

私の『転生チート』は女神アクア様です。

…あなたの先輩の女神です。

そして、私は個人的にアクセルの冒険者ギルド長にコネがあります。

アクセルに限らず、王都の情報から貴族や他国のあらゆる情報まで、

ギルド長の知っている、私の求める情報を聞き出しました。

…一部魔王軍幹部の情報は、敢えて聞きませんでした。

あの存在は知れば知るほど、私が勝てなくなる。

…あなたの真相等、容易にたどり着けました。

私がこのまま死ねば、とある封書を全世界にぶちまける様に、命令しています」

彼は誰に命令しているとは言わなかった。

…封書の内容など実はブラフだ。何も書いていない紙切れ。

彼は女神エリスとの交渉が万が一失敗した際に、

アクアに被害が及ぶぬようにギルド長の思考をズラした。

故に、これは女神エリスにここまでわかっていきますよ、という脅しだった。

彼の知力を、知識を持ってすればアクセルの防衛責任者。つまりギルド長に興味を引くような技術や知識の提供など容易だった。

彼はその危険さ故に、自らの消滅を計画に組み込んだ。

アレクセイ・バーネス・アルダープは恐らく、思考をズラせる悪魔を使役している。

：彼の入手した情報が、意図的に改ざんされていた。

あまりの杜撰さに気が付けた。

：どうやらアルダープ領主は悪魔を使いこなせていない。

故に、冒険者ギルド長しかまだ取引できなかった。

確実に信用できる取引相手がギルド長しかいなかった。

彼はたった二週間では、その一人しか用意できなかった。

アクアが寝ている隙に防衛についてのありとあらゆる想定を提案を書いていた。

それを元に、冒険者ギルドの受付ルナ女史を唆せば冒険者ギルド長に彼への興味を抱かせることは容易だった。

彼の不幸を考慮しても簡単だった。何せ、彼が動くわけではないから。

幸運とは運命に作用するステータスなのだと確信した。

故に、必然なら確実に動かせる。

線路を引けば列車が走るのが運命だ。

だが、事故になりうる石ころの除去や線路自体を変えてしまうのは必然と彼は確信した。

彼は、最初の三日間、アクアとのじゃんけんでその法則に気が付いた。

アクアを騙せれば確実に勝てたのだ。

…それ以外はほぼあいこだった。

罪悪感でそれをバラしてしまい、アクアにはその日口を聞いてもらえなかったが。

ギルドの受付、ルナ女史からならば顔が広い。

彼の荒唐無稽な極論でも何度も言っていれば、わかる人間に伝わった。

…ギルド長個人との密約に成功した。

無論、女神アクアはこれを知らない。

全てはアクアが寝た時間帯、深夜に行われたから。

アクアが気づくことなど決してあつてはならない。

…『教育』に悪い取引までしたからだ。

極端に低い自身とアクアの幸運のせいで、悪評が止まらないと悟った彼は敢えてギルド長を通じ、彼の悪評をそのままにするようお願いした。

いずれ、女神アクアの教育材料として彼自身を使うために、だ。

彼の才能はこの異世界で、アクセルの街で真価を發揮し、完全に開花した。

…完全に悪い方向に。

「えっ？ち、ちよつと待ってください!!」

女神エリスは彼の想定通り、あからさまに慌てている。

アクアの情報も意外と正しいのだなど、彼は感心していた。

なので、女神エリスに彼は捲し立てた。
全ての要求を。これから行われる、全ての前提を。

「天界の法律、天界規定と私の転生チート女神アクアを重ね合わせれば、

女神エリス様なら、私の『無限蘇生』がギリギリ可能なはずですよ。
これを飲んでいただかないと、アクアからあなたへ恐怖のメッセー
ジが届きます」

アクシズ教なら、女神アクアを信じなくともアレは信じるだろう。

：彼はアクアを止めるのに苦労した。

そんなくだらないことで、ベルゼルグ王国の国教に、エリス教に
喧嘩売るなど恐ろしかった。

彼にとっては。

：だが、アクシズ教に伝わればもう彼にはアクアを止められない。
死んでいるのだから。

アクシズ教は、エリス教には何をしても良いと『素』で考えている
カルト教団だ。

祀り上げるアクア自体がああなのだから彼は数々のアクシズ教に
関する噂は本当だと思っている。

：彼はそう言いつつも、様々な策を用いながらも、
アクアが自分をリザレクション、つまり蘇生をしてくれるか不安
だった。

最初に気づくべき、問題点だったと彼は自らの馬鹿さ加減に嫌気が
さした。

アクアは無理やりこの異世界に連れてきた、女神を騙した人間の彼を恨んでいないわけがない。

彼は、一応、恩のある女神であつたアクアが心配だつたから、この世界に連れてきた。

だが、アクアからすれば完全に余計なお世話だろう。

現に、転生初日は滅茶苦茶だつた。

「全部終わつたら、必ず神罰を与えてやるんだから！覚えてなさい！絶対よ!!」

アクアの言葉は本気だつた。彼は確信した。
必ずいつの日か『神罰』が来る、と。

…だから、彼はアクアに見捨てられて、
本気で地獄に落ちることも、天国に監禁されることも、消滅することすらも覚悟していた。

彼は、女神エリスがどういう存在なのか伝聞でしか知らない。
恐らく、真実を全て打ち明ければ良かったのかもしれない。
彼女がこの世界を守護する女神様ならばそうすべきだつた。
しかし、それを判断するまでの時間がなかった。

…モンスター討伐初日で死ぬのは、完全に彼の想定外だつた。

「アクア先輩に何をしたんですか!!」

場合によつては、あなたはただではすみませんよ!!」
女神エリスは本気で怒っている。
彼は無理もないと思つた。

…人間風情が『神』にこのような狼藉を働いたのだ。

だが、彼はそんなのは知っていた。

彼は完全に覚悟を決めていた。

全てはアクアの『成長』のためだ。

彼はアクアに本気で恩を返したかった。

そして、彼の最後にできることだと確信してしまった。

ステータスにある知力と自身の才能を存分に活かせば、一週間もしない内に、アクセルの防衛上の弱点、隙など容易に思いついたし、見つけられた。

だから、冒険者ギルド長と直接話せた。

：初日に想定したアクセルを攻め込まない最大の原因である『強者』の存在も確認できた。

魔王軍と、敵対か友好かまではわからないが。

少なくとも、彼女が善人なのは確かだ。

さらに、女神であるアクアからの死後の世界、天界についての情報収集、

あらゆる情報源や新聞・伝聞等を用いて、この世界、現世での女神エリスの内情を調べ尽くしていた。

無限蘇生、それは女神エリスが、天界規定と彼の転生チートである女神アクアの2つの隙間を縫えば可能だった。

彼が考えた強引な屁理屈だった。

彼は、この隙間を縫うような真似をしないといけないような状況を全て整えた。条件は全て満たしていた。

彼は、そのつもりだった。

しかし、これらの努力は、アクアが、彼を蘇生してくれないと話にならない。

全てが無駄に終わると彼は悟ってしまった。

：彼はそれが一番怖かった。

地獄に落ちるよりも遥かに。消滅よりも遥かに。

彼は『神』に祈らないと誓った。故に、アクアの慈悲などには縋れない。

彼は、あの死の間際の、『孤独』を覚悟した。

彼が、そう思っていたら全てを台無しにするあの声が部屋中に響き渡った。

『早くー蘇りなさい！この糞男!!私に、迷惑だけかけて逝くんじゃないわよ!!』

：彼は、賭けに勝ったと確信した。

前提が、アクアが蘇生してくれることが、彼の思い込みで終わらなかった。

そして何より嬉しかった。彼はアクアに見捨てられなかった。

.....

死亡までの経緯は極々簡単だ。

まず、冒険者ギルドからジャイアントトード五匹討伐の依頼を彼とアクアは引き受けた。

ジャイアントトードは、金属を嫌う事前情報もあり彼は金属の武装の準備は整えてあった。

しかし、アクアは、

「こんなダサイもの、女神である私に相応しくないわ！

それに：プリーストって言ったら素手じゃないかしら？

メイスもいいけど、素手でモンスターを屠る武闘派美人僧侶ってよいわよね？」

彼の二週間の努力と計画を全否定した。

彼は流石に凹んだ。

これ揃えるのに、ほぼ彼の全財産を支払ったからだ。

貯金はあるが、これは別に使うものだ。

さらにいえば、転生二日目にアクアにこの装備で大丈夫かも確認していた。

ジャイアントトードの討伐は彼の中で確定事項だった。

なので、わざわざアクアを店に案内し、これからの『方針』として装備について説明していた。

：アクアの言うように少しダサく、女性が身に着けるのもどうかとも思ったからだ。

「ああ、いいんじゃないかしら。うん」

アクアは、そう返答していた。

：今思うと、話を全く聞いていなかったかもしれない。

：ここままで、アクアが忘れっぽい。

所謂、鳥頭なのは彼の想定外だった。

アクアは彼の用意したものを身に着けるのを拒否した。

：ジャイアントトードにいきなり殴りかかりに行った。

彼が物理攻撃が効かないと言ったのにも関わらずほぼ真つ直ぐ殴りに行った。

止める間もなく、ジャイアントトードに丸のみされた。

アクアのストレートの衝撃波を感じた彼は、女神のステータスの異常さに気が付いた。

彼の前世の人間の上位に入る勢いの威力だった。

神格と自称する自称邪神らよりは劣るが、アクアは彼が無理やりつれてきたせいで能力が低下しているようだから本来は同等だと判断できた。

だが、物理攻撃が効かないカエルには無力だ。

彼はその後、何とかアクアを救出した。

泣き叫ぶアクアを宥めすかせて、今日はもうカエル退治などもう辞めることを提案した。

彼はもつとアクアの希望を聞いていればこのような事態にはならなかっただろうと反省していた。

だが、さらに想定外が起きた。

急にジャイアントトードが五匹も地中から現れた。

冬でも冬眠の時期でもないのに突然現れた。本当に前兆などほぼなかった。

：彼は冷静にこの事態を二人の『幸運』最低値が揃ったせいだと確信した。

世界が彼を拒絶しているような運命だと思ったが、今更だと苦笑した。

アクアの身の安全を確保するために、アクアに無理やり金属の武装をつけさせた。

彼はアクアを守るために、アクアが落ち着くまでの少しの時間を稼ぐために、

ジャイアントトードに無謀な特攻をした。

もはや、策など練っている状況ではなくなったから。

彼の計画はこの段階で壊れてしまったから。

流石に前もって、考えうる全てを対策していたとしても、

最弱の『冒険者』では、レベル1では、

五匹ものジャイアントトードには勝てなかった。

それでも彼は、何とかジャイアントトードを数匹倒した。

だが、彼は倒したはずのジャイアントトードの巨体に押しつぶされて死んだ。

彼は、片手剣と初級魔法くらいしか取得できていなかった。

さらに言えば、こういった正攻法の戦い等、学校の授業や部活でしかやったことがない。

それも試合形式だ。実戦など平和な日本ではありえない。

だが、アクアが最初から彼の言うとおりにしていれば、この緊急事態にも容易に対処できた。

これくらいの不幸は、ジャイアントトードが五匹以上同時に出現まで彼は想定していた。

アクアが、彼の用意した金属の武装、装備を拒否したこと。

さらに、アクアが勝手に特攻したのが、完全に彼の想定外だった。

故に、冒頭の事態に陥った。

：モンスター討伐依頼受注初日で死亡は彼の想定外過ぎた。
確実な、安全策を練っていたはずだった。

転移初日から、全力でアクアに内緒で、彼が考え着く対策をしていなければ、

そのままあの世逝きだったかもしれない。

彼はそう思っていた。

.....

アクアに蘇生された彼はジャイアントトードが全て倒されていることを確認した。

彼はホツとした。

だが、またしても彼の想定外があった。

アクアが泣いていた。：彼にはそう見えた。

彼はそれが何故なのかわからなかった。

「どうして泣いているの？……アクアらしくない」

彼女、アクアは女神だ。

ただの人間の、彼の『死』など笑い飛ばす精神性のはずだ。

：彼にはできない神の視点の持ち主だ。アクアは。

人間に憐みを抱くことはあっても泣くまではいかないはずだった。

少なくとも最初にあつたときはそうだった。

…彼は、まさかと思った。だが、それは有り得ない。

彼は魔王討伐で完全に死ぬ予定だから。

その前提がなければ魔王討伐など不可能だから。

彼は、転生前の説明からそれを想定して計画していたから。

…それしかどうやっても思いつかないから。幸運最低値で、魔王に勝つ方法等。

「…泣いてないわ！それより感謝の言葉を寄越しなさい！」

ほら、女神様ありがとうございます！アクシズ教に入信しますって誓いなさい!!」

ただの気のせいだった。

彼はホツとした。

人間風情に愛情か愛着かはわからないが、『それ』を持つなど、神話では破滅しかないから。

彼の計画にも反していた。それは有り得ない想定外過ぎる。

彼はそれを知らないのだからどうあがいても計画を変更せざる負えなくなる。

計画に不安定要素を、暗中模索の思考錯誤を組み込むのはアクアがいる以上、危険すぎた。

だって、彼は確実に天界にアクアを返さないといけないのだから。

「ええ、ありがとう。本当にありがとう…」

だから、彼は感謝した。

アクアに、見捨てられると勝手に思い込んでいたから。

だから、女神エリスを脅す神罰不可避の手段まで探してしまった。
最悪に備えて。

そもそも、アクアから見捨てられるなら意味のない手段を彼は模索してしまった。

彼は、自分がアクアに依存しかけていると確信した。

彼は良くない傾向だと思った。

計画の妨げになる『依存』は排すべきだと決意した。

魔王討伐、その計画のためには、

絶対にアクアと共にあることなど、

不可能だという、彼の冷静な思考が、その感情を簡単に否定した。

…彼の計画を止められる者は『まだ』いなかった。

或いは、彼が顔を伏せていないで、アクアの顔を見ていればまた違ったのかもしれない。

彼は不器用過ぎて、何より女神には知性が足りなかった。

.....

— エリス視点 —

アクア先輩に脅されて天界規定を捻じ曲げてしまった…

この後の行動は、先ほどの彼の想定通りだ。

というより、彼の脅しそのものが無意味だった。

彼はアクア先輩の『転生者』は、全力で空回りしていた。

アクア先輩ならそれくらいの無茶ぶりはいつものことだった。

だが、アクア先輩でなければ、私は彼の脅しに屈していた。

あそこまで女神エリスが、クリスという一個人に肩入れしているという風評を広められるのは不味かった。

どうい内容が広められるかわからない以上は、取引に応じたかもしれない。

彼は本当にギリギリの取引を持ちかけてきていた。

…人間が神を脅す。

どんな人間なのか、私は興味を抱いた。

私は改めて、彼のことを調べた。

…私の現世での活動に、『クリス』に気が付き、

転生して二週間で、人間が知らないはずの、神々の世界である天界についておおよそ知る等は、

今までかつて、有り得なかったからだ。この異転生プラン史上初だった。

…たとえば、アクア先輩を転生特典に入れたことを含めても、有り得なかった。

.....

…彼について、調べた結果、わかった。

流石に全てがわかるわけではない。

…人生のおおよそと、善か悪かわかる程度だ、私の権能は。

アクア先輩ならまた違ったのかもしれない。

…だが、私にはこれしかわからない。

彼は、決して、『勇者』などではない。

彼は、完全に、その思考が、才能が…

『魔王』だった。

これほどの、空前絶後のレベルの魔王の才能はこの世界に取って危ない。

アクア先輩は、何故、彼を、『勇者候補』として選んだのか、私にはわからなかった。

：確認する必要があった。アクア先輩抜きで彼と接触して確認しないとイケなかった。

女神エリスとして、もしも彼が規格外の悪人なら野放しにできなかった。

私はこのとき完全に彼を警戒し過ぎていた。

だから、彼に誤解されることになることに気が付かなかった。

後に気が付いて後悔した。彼の中で私は完全に邪神となつてしまった。

私はこのことに関しては、本当にアクア先輩を恨んだ。

第四話 勝てば官軍世は情け

ジャイアントトードを六匹初日で討伐という、結果。報酬は、外壁工事の日雇いよりも儲かることが判明した。

彼はアクアなら喜んで、毎日討伐クエストを受けるだろうと思っていた。

だが、

「私をカエルの粘液でグチョグチョにしたいなんて…

あなたやつぱり変態なのね！

私も嫌だけど、あなた、アクシズ教に改宗しなさい。

その業、いや性癖すらアクシズ教は受け入れるわ…」

彼は、アクアから謂れのない非難を受けた。

彼はアクシズ教など死んでもごめんだった。

何より、エリス教の『過激思想』よりはマシだが、

アクシズ教の教えというか教義という名のダメ人間製造機でも、

致命的なものが含まれている以上、彼のこれからの計画の妨げになるからだ。

彼は、『地獄の公爵』と取引する計画を立てていた。

アルダープ領主を安全に排除するため。

…悪魔なら取引を遵守する。彼も取引を遵守している。

正直、神より悪魔の方が彼にとっては理解できた。

どう考えても割に合わない対価で、

こき使われている同胞の悪魔を救ってくれるかもしれない。

最も、基本的に無害、心が読めるという情報だけで彼は地獄の公爵の情報を得るのをストップした。

地獄の公爵は偶発的遭遇でしか勝てないと彼は確信していた。

ある意味、今回の女神エリスとの不本意な接触は、幸運かもしれないな
かった。

彼は自分を女神エリスが、危険視して接触を試みると最初から気づ
いていた。

故に、クリスを騙し、取引に誘導するのは彼の計画どおりだった。
彼にとって、心を読まれようが、記憶を読まれようが、全て対策済
みであった。

このようなことが出来る彼は、神や悪魔の『天敵』だった。…まだ
誰も気が付いていないが。

.....

そんな、彼にとって弱点は、想定外の馬鹿の存在だった。
彼の想定を上回るほど無邪気な馬鹿は把握できなかった。
悪意があればまだ彼には対処できた。
悪意はあることはあるが、彼にとって小物過ぎる悪意だった。

それは、アクアだった。
子どもをそのまま大人にしたというだけでは、無理がある程彼には
理解不能だった。

彼はアクアから早速、粘液プレイを好む変態という汚名を着せられ
た。また、アクアにやられた。

さらに言えば、アクアは冒険者ギルドでその発言をしたので、
周囲からガチで引かれた。

彼が本気になれば、ギルド長を使えば、彼の言葉を使えば、容易にその汚名を濯げる。

だが、頭がパーになるのと計画のために彼はその汚名を濯げなかった。

現にこうしている間にもパーになる自分を押さえつけるために、彼は自分を何度も殴っていた。

完全に冒険者ギルド全員にドン引きされているが、アクアや周囲への、罵詈雑言が飛び出しそうになるのを抑えるためにはしなくてはならなかった。

：計画の範囲内なのだが、流石に彼は辛くなってきた。何故、ここまでしなければならぬのか。

彼は思わずアクアを見た。

「うわ、やだこの男。本気だわ。ねえ、皆！

この男、本気でさっきのこと考えているわよ！」
もうヤダ、この駄女神。彼は、本気で落ち込んだ。

だが、同時にこの後にある冒険者ギルド長との密談のおおよその内容を彼は必死に考えた。

女神エリスとの接触は、想定内だが、どう考えても早すぎた。

モンスター討伐初日で死亡は彼にとって完全に想定外過ぎた。どう考えても幸先が悪すぎた。

ギルド長にアクアのことを勘付かれないように必死で頭を回転させた。

白紙の封書の件も上手く誤魔化さなければならなくなったのもあった。

女神エリスとの接触は、まだ先と思っていたので、ギルド長に、ブラフを取り除く説明をしていなかった。

…このままだと、アクアが『女神』だと冒険者ギルド長にバレてしまう。

彼はその件に関しては、ほぼ詰んだことを悟った。

.....

アクアが騒いだ、その隙について、受付のルナ女史にギルド長への接触の合図、

数種の内の一つのカードを渡せた。

今夜、午前二時の密談の知らせだ。女神エリス案件での知らせ。

女神エリスとの接触、その合図を彼は冒険者ギルド長に知らせた。

彼は、自らへ完全なる忠誠を誓うギルド長との接触は避けたかった。

その光景はまるで彼が魔王だからだ。

彼は完全にギルド長を心の底から、屈服というか、従属させてしまった。

ギルド長が求めているアクセルの安全及びギルド長の全ての悩みについて、

彼が、解決策を出してしまったのが不味かった。

…彼からすれば容易く解答ができてしまった。

もはや、ギルド長は彼を、神とほぼ同等に扱っていた。

皮肉にもギルド長はこう言った。

「信じて救いの考えがない中に来たあなたの方が、私にとっては神だ」

彼は本当に嫌になった。流石に前世でもこんな経験はなかった。

彼が悪意を行使していたら、前世は変わったのだろうか。

無意味なことを考え逃避してしまうくらいには、目の前の光景を信じたくなかった。

だから、精神安定の観点から、彼は、あまりギルド長とは接触したくはなかった。

だが、女神エリスとの接触は、計画どおり。

しかしながら、彼にとってエリス神との接触は、完全に早すぎた。

故に、これから女神エリスがこちらに接触するであろうことを前提とした対策を用意しないといけなかった。

それも急いで。

ギルド長との、今までの言葉遊び、女神エリス対策は不要になった。

もう、アクセル内に隠れ住む、喫茶店で働くサキユバスの件は、ギルド長と彼の間で話がついていた。

…『女神』エリスは気が付かないだろう。

ギルド長との世間話が悪魔を見逃す密約だったとは。

彼のその時の内心を読めても無駄だ。

ギルド長との会話では、思考すら偽装している。

そこまで、女神エリスの権能が無敵じゃないとアクアから聞いていたが、

念には、念を入れた対策だった。

彼は毎回ギルド長との密約ではかなり疲れていた。

：『女神』アクアとサキユバスの接触も想定に入れた対策は完了した。

彼は後一つ、誰か第三者が欲しかった。

アクセル中に、顔が利きそうに欲望に忠実で簡単に恩を着せられる誰かを必要としていた。

悪魔を見逃せなどとは、流石に女神であるアクアには言えなかった。

だが、アクセルの性犯罪防止には、彼女らが必要不可欠。

人口減よりも治安維持を優先したいという冒険者ギルド長の取引は理に叶っていた。

彼が、サキユバス達と接触しなければ、

さらに今後想定される『地獄の公爵』との取引が成功すれば想定外の馬鹿：アクアだろうが、

彼なら対処可能だった。

：ようは、女神エリスが気が付かなければ勝ちなのだ。

彼女はどうも抜けている。死後の世界での会話で確信した。簡単に思考が誘導できる常識ある『女神』だった。

悪魔やアンデッドを問答無用で滅ぼす狂信者でなければ、

女神エリスに、祈りをささげたかも知れない程度には彼はエリス神

を高く評価していた。

彼は有り得ない仮定としつつも、神の存在がそれだけインパクトがあつたと悟った。

：比較対象の女神アクアが酷すぎるだけだとも思ったが。

酒飲んで寝て、宴会芸で物を消し、彼の財布から金を抜き取り、あらゆる彼の未知の変態性をアクセルの住民に悪意なく吹き込む女神など彼は想定外だった。

悪意がない分性質が悪すぎた。彼に取って相性最悪の読めない女神だった。

サキユバス対策の件は、

本当は、『地獄の公爵』の願いが知れば一番楽だった。

魔王軍幹部になどなっている以上何か願いがあるかもしれないと彼は考えていた。

地獄の公爵は、恐らく魔王軍幹部に拘っていない。彼はそう推測していた。

基本的に無害という情報が何よりの証明だった。

魔王城の結界維持要員とかだと彼は思った。

だが、倒して残機を減らさないと『取引』不可能。

地獄の公爵は、魔王軍幹部の内は信用できない。

故に彼は、地獄の公爵に対して、情報と思考を制限するしかなかった。

彼は心を読めるのは、チート過ぎると思った。

だが、対策はできると確信した。

彼の才能と頭脳とこの世界の逸脱した魔法道具を駆使すれば可能だった。

悪魔の公爵からアクアを守れると彼は考えた。

他人の頭脳をのぞき込み可能な公爵は、対国家レベルの情報工作員との闘いに等しい。

だが、個人だ。地獄の公爵の隙を彼は理解した。

異世界人の彼にだからこそ突ける隙だ。

成功すれば予測可能回避不可能な計画は彼の最大の作戦だ。

彼は前世にもいなかった同等以上の戦略家との闘いを予想した。

彼は無自覚に興奮していた。自分の才能を活かしきれぬ相手に歓喜した。

これは不味い傾向だった。彼はそれに気が付かない。

しかし、知り過ぎれば負ける相手とは、本当にセオリー通りにいかない者達ばかりだ。

彼は魔王軍幹部連中のチートさにほとほと疲れていた。

だが、恐らくアクセルに偵察にくるであろうデユラハンへの対処は容易だった。

これは、彼が、ゆんゆんとの会話とギルド長の『魔王軍幹部』の情報から類推したものだ。

大変、重大な情報だった。

『女神』光臨の気配はこの世界に伝播していた。

.....

転生初期。

まだ転生して二週間経過したばかりだが、それよりも前。一週間も経っていない頃。

彼は、『友』になったと思われるゆんゆんから色んな話を聞いていた。

：彼の知らぬ間に、二度も悪魔騒動があったそうだ。
当事者の緊迫感溢れる話は彼の興味を引くには十分過ぎた。
だが、彼はゆんゆんが何かを隠していることに気が付いた。
まるで、彼を心の奥底で有り得ない何かだと疑っているように感じた。

彼は自分の変態の噂が原因かもしれないと思いつつ、友の話を心の底から喜んで聞いていた。

ゆんゆんも喜んで話してくれていたと彼は確信できた。

それは、前世にはなかった感覚で彼にとっては喜びであり救いだっ
た。

一度目は、定期的に彼と女神が転移したときだった。

追い詰められていたゆんゆんとその友人は、凄まじい神聖な気配を感じたという。

その神聖な気配の間について、
ゆんゆんの友人が悪魔に爆裂魔法を打ち込んだという。

爆裂魔法はチート魔法だ。

この世界の住民が爆裂魔法をネタ魔法にしていると彼が知った時、
この世界の住民はアホか何かかと思った。
彼からすれば、個人で戦略兵器と化すこの魔法は全アークウイザー
ドが取得すべきだと思っていた。

魔王軍との戦いであれば、雨天以外無双可能な魔法だ。

この世界のチェスでもエクスポーションは盤面破壊の一手だった。

彼はそれはそうだろうと思った。

そして、この世界のチェスは戦前日本の軍人将棋みたいだと確信した。

彼に取っては、隙だらけの番外工作ありなこのチェスは無敵だった。

十分でルールを理解し、ゆんゆんと勝負してみた。

：ゆんゆんを泣かせる程度には彼の手は酷いらしい。

なお、ゆんゆんの友人はどうも彼と同じ手を使うらしい。

寧ろ彼の方が酷いと言われた。

彼はゆんゆんくらいの年の子だろうが勝負では容赦しなかった。

彼は自らの悪意を最大限フル活用してこの異世界チェスをやっていたので当然の評価だと思った。

最も、彼は異世界人なので、爆裂魔法についてどうこう言うつもりはなかった。

彼は、魔王もろとも『自爆』するために爆裂魔法を欲していた。

凄まじいスキルポイントさえあれば、彼の職業の冒険者なら取得可能だった。

正直、テレポートと爆裂魔法さえあれば、ほぼ無敵だと彼は確信した。

若しくは、その友人に彼もろとも、爆裂魔法を打ち込んでもらえるかと大変嬉しかった。

現に、ゆんゆんの友人は、悪魔に連れ去られた自分のペットごと、爆裂魔法を素で打ち込むつもりだったという。

彼は、その精神性を見事な『勇者』だと絶賛した。

：彼女なら、きつと悪の自分など躊躇せずに魔王もろとも消し飛ばしてくれるだろう。

情に流されない、素晴らしい勇者だ。是非、仲間に加えたかった。

：だが、彼は、ゆんゆんから全力で友人の紹介を拒絶されてしまった。

彼は困った。せつかく『勇者』を見つけたのに仲間にはできない。

彼の計画の逸材なのにと悔やんだ。

この時はまだ自分では友であると思っていたゆんゆんを利用するのは気が引けたのもあった。

二度目は、もの凄く強い悪魔が攻め込んできたらしい。

どうもアクセル中の冒険者たちは、

噂の新人、美人アークプリーストで対抗しようとしたらしい。

恐らく、美人を自称するあれではない。彼は確信した。

アクシズ教関係者かと思ったが、普通に私服だった。

アクシズ教徒のプリーストなら絶対身につけているであろう正装ではなかった。

単純な破壊僧だろうあれは。彼はそう推測した。

彼に一定の解をくれたのには感謝しているが、彼とアクアの夜食を強奪しようとしたあの破壊僧は酷かった。

アクアがいないときに関わったせいに対処はできた。

だが、デートしてやるから有り金寄越せとか抜かす非常識な存在だった。

正直、あの破壊僧は、彼のステータスで対処できる程度の強さでし

かなかった。

その後は、その破戒僧とも一度も会っていない。恐らくアクセルから去ったのだろうと彼は思った。

あそこまで目立つ存在がいればいくら彼でも気が付くからだ。旅の破戒僧とか迷惑以外の何者でもないと思っただ。

あの破戒僧はどこかアクアに似ていたが、アクアはあそこまで非常識じゃないと彼は信じた。

故に、普通に、アークプリーストとは、本物の女神の方だと彼は思った。

その際、彼は転移初期で、アクアを土木工事で引っぱりまわしていた。

∴故に気が付かなかった。

さらに言えば、彼はその時は、時代と世界の観察に費やしていた。アクセルの防衛上の隙と、この周辺で取引できそうな相手を探していた。

アクセルを俯瞰しようと試行錯誤していた。

∴アクアの世話と同時並行で。かなり大変だった。

現地人との交流がまだできないと確信し、アクアの世話にほぼ全部回していた。

アクセルの皆は、アクアが残念過ぎて、その噂のアークプリーストだと誰も気が付かなかった。

彼に悪評が集中しているにも関わらず、

誰も気が付かないとはこの街の連中はアホなのかと疑った。

同時にその騒動に完全に気が付いていなかった、自分の馬鹿さを悟った。

彼自身も同程度のアホだと思った。

その際も、友人が止めに爆裂魔法を打ち込んだらしい。

やはり、ゆんゆんの友人は素晴らしい『勇者』だと彼が褒めたたえたら、

ゆんゆんからドン引きされた。

「ど、どこにそんな褒める要素がありましたか!?

めぐみんは絶対、勇者じゃないです！寧ろ、魔王候補生です!!」

彼はゆんゆんの友人に対するその偏見をどうにか是正しようと試みた。

異世界に来て初めてできた友のゆんゆんが、その友人に偏見を持っている等、

酷いと思ったからだ。

「ゆんゆん。それはとんでもない偏見だ。

いざとなれば、葛藤せずに非情な決断をできる精神力。

さらには爆裂魔法という一撃必殺技。

そのためには、フォローしてくれる仲間達が必要不可欠だ」

彼は珍しく興奮していた。待ち望んだ勇者だったから。

「話を聞く限り、その友人は、必要であれば仲間もろとも消し炭にするだろう。

俺のパーティに欲しい、逸材だ!

勝てない相手が入れば、躊躇せずに、俺もろとも爆裂魔法を打ち込んでくれる。

どう考えても、まさに、理想の勇者じゃないか！本当に素晴らしい

友人だと思うぞ」

彼は、ゆんゆんとの会話中、頭がパーになりながらも、その友人を全力で褒めたたえた。

：その友人の偏見を是正して欲しくて、勇者の逸材を知って欲しくて彼は本音で語った。

彼の友のゆんゆんに本音でぶちまけた。

思えば、この辺あたりから、ゆんゆんは彼を避け始めた。

彼はゆんゆんが自分のことを友と思っていなかったことを察した。

彼は、かなりショックだった。

彼は、本当は、ゆんゆんからはもつと聞きたい話があった。

紅魔族の里で占い師が言っていたという

「完全なる狂人にして、化け物がゆんゆんとめぐみんの前に現れる。

だけど、『世界』を救う者がアクセルに出現する。

：ゆんゆんは絶対関わってはダメよ。それは完全に、魔王以上に、危険だから。

：私の占いで使わせてもらっている『公爵』の能力すら、これ以上、占うのは危険と出ているの」

彼は、その『予言』について大変、詳しく知りたかった。

そんな魔王以上に危険な狂人など絶対に排除しなければならなかった。

そんな奴がいたら、彼の計画が狂う。

だが、彼は、その狂人と取引できないかと非常に興味があった。

きつと話せばわかりあえると何故か、確信できた。その存在と。

この一連の悪魔騒動から魔王側にも女神光臨の気配は察知されたと彼は考えている。

彼が、魔王ならば、一番偵察任務に向いている『デユラハン』をアクセルに送り込む。

アクセルの強者氷の魔女ウィズと敵対しない範囲で、彼が、知り得る魔王軍幹部を選ぶなら。

そのデユラハンはどうも紳士的な騎士としての心構えがあるらしい。

戦いを挑んだ者だけ殺すらしい。弱者は見逃すこともあるという。

故に、アクセルの住民を皆殺しにする暴挙にはでない。

彼が、魔王ならデユラハンしか使えない。

だが、流水が弱点という魔王軍幹部のデユラハンの討伐等、アクアが入れば容易だった。

拠点ごと洪水にして、剣士或いは騎士が切り付け、爆裂魔法でもぶち込めば詰みだ。

彼はデユラハンと真正面から戦う気などさらさらなかった。

何をしようが、最終的に勝てば良いと考えていた。

.....

∴後に『デユラハン』はこう叫んだという。

「ふざけんなー！馬鹿じゃないのかー！この頭のおかしい変態！策士気どりの大馬鹿者が!!」

彼はそんなデユラハンの戯言を一切無視した。

第五話 『計画』

深夜午前一時頃、彼は、馬小屋を抜け出し、冒険者ギルドに向かっていた。

冒険者ギルドは緊急時に備えて24時間対応可能な施設である。とはいえ、いつも24時間空いているわけではない。

飽くまで、緊急時の対応が可能なだけだ。

緊急時で有名なもの、例えば、『デストロイヤー警報』だ。

通った後は、アクシズ教徒しか残らないというデストロイヤー。

かつて存在した魔導技術大国ノイズ。その発展において最大の貢献をした『研究者』の暴走。

彼は、そのノイズ国の研究者を女神アクアの送り出した転生者として看破した。

魔王討伐のために、この世界の過去の文献を調べていた彼は簡単にそのことに気が付いた。

明らかに技術力が、その時代、その国だけ浮いていた。

：ギルド長からの資料だけでない、

アクセルの住民からの伝聞ですらその異様さが容易に伝わる程に、その時代のノイズ国は『おかしかった』。

.....

彼は、数百年前から、魔王と転生者の戦いは確実に存在したと理解した。

彼はその時に改めて、魔王討伐の無謀さも理解した。

ここまで世界に影響を及ぼしていれば恐らく、いくらアクアでも覚えていられるだろう。

彼はそう思った。明らかにオーバーテクノロジーの勇者候補だった。

恐らく、彼の推察通りなら惜しいところまでいけた勇者だ。彼は確信していた。

だが、彼は、アクアはそのノイズの勇者候補を覚えていないような気がした。

：これまでの付き合いから。二週間とはいえ、何となく、悟った。アクアなら覚えていなくてもおかしくない。

「いや、デストロイヤーや職業冒険者の低評価等は、アクアも知っていた」

彼は、パーになり思考が漏れる。

周囲を警戒するが、誰もいない。誰も気が付かない。

もつとも、聞かれていても何もわからないだろう。

彼はそう確信し、ホツとした。

しかし、覚えていなくても仕方がないような鳥頭なのだ。アクアは。

「この『研究者』は恐らく初期は真面目に魔王討伐しようとしたのだろう」

彼はもう独り言の感覚で思考を漏らす。

聞いていないし、警戒しても意味がない。

彼は、研究者が残されている文献から察するに人生後半から諦めたと推察した。

…致命的な、そして決定的な何かが足りなかったのだろう。

彼は、研究者には、魔王城の結界がどうしても破れなかったせいだろうと推測した。

さらに、そのアプローチ自体の問題もあった。

恐らく、研究者のアプローチは『富国強兵』だ。

ノイズ国の強化方針。人類一丸となった魔王討伐が目標だったと推察した。

だが、それでは、魔王軍の『幹部』には届かない。彼はそう思った。

現代文明、兵器ですら、通用しないほど、魔王軍幹部はチート過ぎた。

…あまりにも格が違う。正攻法で人間では勝てない。

ギルド長の情報からその事実は判明していた。

彼が余裕で討伐可能とした魔王軍幹部、デユラハンのベルディアですら、

『死の宣告』を使って逃げに徹されたら詰む。

アクア以外、正攻法で対処するほかない。

ベルディアに逃げられる前に殺すしかない。

さらに、ベルディアの近接能力は、彼からすれば与えられただけでチート能力を活かしきれていない即席勇者程度なら纏めて容易く屠れるものだった。

記録にある限り糞チートだ。反則だ。

ベルディアの近接戦闘能力及び持久力は。

アンデッド故に、致命的な損傷か、首を取り上げでもしないと行動阻害は、無理だ。

もう一人わかっている、魔王軍幹部のデッドリーポイズンスライムは触れば死ぬ。

さらに、耐久力があり過ぎる。

この世界でスライムはTRPGの元祖1970年代の『D&D』並みの存在だった。

…規格外だ。

デッドリーポイズンスライムは毒や酸で周囲、全てを汚染する。

だが、アクアと、行動不能にできる誰かが入れば対処可能だった。スライムの魔王軍幹部の討伐自体は容易だと彼は分析した。

彼は、出来れば『氷の魔女』ウイズに協力を依頼したかった。

だが、恐らく彼女はアクセルを魔王軍から守る取引をしていると彼は推察した。

彼女の過去を知りたいが、流石にそこまではギルド長は知らなかった。

彼は、ウイズが有名人だけあって、

もつと時間があればわかるだろうとその件は後回しにした。

故に、ウイズを動かすのは、ほぼ無理だろう。彼は確信した。故に計画を立てた。

結論として、『デッドリーポイズンスライム』の討伐は可能だ。

条件さえ整えば、氷漬けなどという手段など必要ない。

そう、アクアが入れば可能なのだ。彼はアクアがチート過ぎることを悟った。

万全の計画、そして、学びの『旅』を整えられた。問題はどこにいるかだ。

計画の都合上、デッドリーポイズンスライムがアルカンレティアにいるなら、最悪だと彼は思った。

魔王軍幹部がわざわざ出向く価値は、言われぬ風評被害の打破ぐらいの価値しかない。

敵対勢力の嫌がらせにわざわざ魔王軍幹部が出向くのは、彼からすれば馬鹿だ。

情報戦や印象操作は彼に取って当たり前の行為だった。

だから、アルカンレティアに魔王軍幹部が出向くこと自体その風評被害を助長しかねないと彼は考えていた。

アクシズ教徒はどこにでも生えてくる雑草並みの生命力がある。

彼は、わざわざアルカンレティアを滅ぼしたら人類全土に変態が汚染される危険性に魔王軍が気が付かないはずはないと思っていた。

さらに言えば、アルカンレティアを滅ぼしたら、今度こそアクシズ教徒は本気になる。

彼は、その恐怖を計算できた。地獄の公爵を魔王軍幹部にできる魔王軍が計算できないはずはないと考えた。

だが、もし、万が一だが、アルカンレティアにデッドリーポイズンスライムがいたのなら確かに水の都を汚染するには最適だ。

源泉に行ければアルカンレティアは詰みだ。

その魔王軍幹部の対策の為には、あのアクシズ教を全面的に洗脳する必要がある。

彼が、アクアが、そんなことすれば、魔王討伐以前に本気で世界が危うい。

彼はそう思っていた。魔王軍がそこまで愚かでないことを祈った。彼からすればアクシズ教徒は異常な存在だ。世に放たれば世界が死ぬ。

彼に言わせればアクシズ教徒のプリースト連中のスペックの高さだけは本物と思っている。

おそらく、エリス教が数ならアクシズ教は質だ。

皮肉なことにアクシズ教徒は魔王討伐に向いている人材だった。カタログスペックだけ見れば、彼は情報分析を通して宗教の恐ろしさを学んでいた。

教会に所属した年数比で見るとアクシズ教徒の方がプリストとして破格の才能を有していた。

才能の無駄遣い集団、変態だらけの宗教。

それが彼にとつてのアクシズ教の見解を纏めたものだ。

アルカンレティアに攻め込むのは彼からすれば愚作だ。

彼からすれば、敵に回すよりも、魔王について言いたいように言わせておけば良いとすら思う。

彼はアクアがご神体と思うとこのスペックだけの高さに納得した。

故に、アルカンレティアに魔王軍幹部が現れれば、アクシズ教徒を洗脳してアルカンレティアに釘付けにするしかない。

彼も魔王も世界もギリギリセーフな結論だった。

だが、それをすれば完全にアクシズ教徒は調子に乗った。彼はそれを本気で恐れた。

魔王軍の情報分析官がアルカンレティアを攻め込むことを提案していたら、彼はそいつを絶対に許さなかった。

彼に取って、情報戦と心理戦の基礎もわかっていない愚か者だからだ。

… なお、彼の想定した最悪の手下人。つまり愚か者はいた。

それは魔王軍幹部、それも人間だった。

彼はそのアホを絶対許さなかった。

策略家気どりだったのが、彼と彼の想定を覗いてその可能性に気づかせた元同僚を完全に怒らせた。

後に、彼ら二人は、アクシズ教徒を懲らしめる為に旅にでた。

だが、アクシズ教徒は強すぎた。どうあがいても勝てなかった。

全ての結論として、女神アクアはチート過ぎた。

だが、彼はそうでもしないと魔王討伐等不可能と確信した。

彼の結論だ。

ノイズの研究者の富国強兵路線では、魔王討伐は不可能。そのような正攻法の手段では無理だ。

富国強兵前に、国を魔王軍幹部に襲撃されればほぼ詰む。

『死の宣告』や触れただけで死ぬ、心を読む魔王軍幹部は倒せない。

圧倒的個人技の前には、いくら、強兵を揃えても、技術を高めても、無力になる可能性が高い。ノイズ国は、実際そうだったのだろう。

証拠に、魔王は未だに健在だ。魔王には娘までいる。

後継者問題も解決していた。

だが、彼は魔王さえ倒せば、カリスマが失われると判断した。

魔王の娘は倒さなくても別に問題ない。

彼の計画なら、魔王軍は空中分解する。

これまでの戦争から潜在能力は、魔王の娘の方が厄介かも知れないので、これは不幸中の幸いだっ
た。

完全に魔王の娘に魔王軍が掌握されたら、詰む。

彼は戦争などできない。現地の表勢力に頼るほかなかった。

だから、魔王の娘の戦争の戦術に対抗できない。

思考だけで上手く行くほど、経験値には勝てない。

まして、魔王の娘は何度となく戦場で戦ってきた猛者だ。

彼は、戦略はともかく、正攻法の戦争、つまりは、戦術では彼女には勝てないと確信した。

だから、フェードアウトしてもらおう。

勝てないなら、その前提の、象徴である魔王そのものを倒せば良い。魔王はチートとは言え、個人。

部下から引き剥がして、本当に、なりふり構わなければいくらでも倒しようがある。

彼は、魔王の娘の命は取らないからどっかに行って欲しかった。

…まともに相手をすれば、魔王の娘は厄介だ。魔王よりも。

分析の結果わかったことは、魔王の娘は、彼にとって相性最悪だと言ったことだった。

…彼に幸運値が足りて、魔王の娘にステイルが使えれば、

身ぐるみ剥いで放置だけで済むのだが。そう思った、彼は『外道』だった。

.....

正直、研究者で魔王討伐など、

それこそ人類自体を進化させでもしない限り不可能だと彼は思った。

…その瞬間、彼は『紅魔族』という種族そのものに疑問を覚えた。

彼らは、明らかに、アークウイザードにだけ特化した種族だった。

高火力で頭がおかしい。魔王軍すら近づかない集団。

ゆんゆんは普通だったから頭がおかしいというのは失礼じゃないかと彼は思っていた。

「…まさか、『研究者』はやったのか？それを」

彼は、冒険者ギルドに入る前にまた頭がパーになった。

またもや、独り言として言葉が出た。出てしまった。

幸い、聞かれても、問題ない。誰もいない時間帯だ。彼は今、一人だ。

約束まで、一時間も時間があつた。

だから、彼は思考した。

…彼に近い発想をした研究者の末路を思いながらも考えた。

彼は、紅魔族が改造人間の場合、研究者の晩年は『壊れていた』と推察した。

初期の研究者のアプローチは、常識的過ぎた。資料が一部現存していた。

それから推察できた。彼は間違いなく最初は常人だった。

まともな人間だった。彼からすれば。

研究者の遺産は、この時代の魔法文化として残ってもいた。

彼から見ても、偉大な研究者だった。

その研究者が、晩年はデストロイヤー等を作っていた。

例え、ノイズ国の指示でも、初期の研究者なら聞かないであろう要求だった。

少なくとも、彼が調べた、研究者の人物像ならば決して作らない。

人類に被害を与えかねない兵器。

彼からすれば、対魔王の戦略兵器としては杜撰も良いところだった。

魔王城に立てこもれば、余裕で対処可能な兵器だ。デストロイヤーは。

魔王討伐が、無理ゲー過ぎて、研究者は壊れた。壊れないと自分を保てなかった。

彼の推測だが、これは恐らく間違いないと思った。

彼に似ている戦略だから。

彼の計画は、最初から、研究者の方針、富国強兵のアプローチを破棄していた。

時間がないから。寿命の間にアクアを返す時間が。

だが、研究者には、感謝した。

彼は、その可能性を、彼の知識、才能を存分にいかした富国強兵路線をどうしても、最後まで、放棄できなかった。

その分野でチート能力者、研究者が失敗したのなら、チートなどアクアの彼では無理と理解した。

彼は、未練がましい思いが完全に消え失せた。元々だが。

研究者のお陰で、彼の計画はより万全になった。
…研究者の失敗で彼は確信した。

彼は、デストロイヤーも始末してみせると誓った。

彼は、結界は恐らくアクアなら解除できると思った。
さらに、デストロイヤーは爆裂魔法で消し飛ばせる。
内部にあるコロナタイトはテレポートさせれば良い。
何もないところに、廃城など望ましい。

彼の計画の時系列さえ合えば、ベルディアごと吹き飛ばしたいくらいだ。無理だが。

彼は、氷の魔女ウイズとの接触理由ができた。

彼女もデストロイヤーならば協力してくれるはずだと思った。

デュラハンが片付いたら、デストロイヤーを始末する。

彼は、それが、魔王討伐が関係なくともしてみせると誓った。

彼のもう一つの可能性が改めて、

不可能と気が付かせてくれた、研究者への感謝として。

アクアの説得を思いつかないといけない、

結界破壊の能力を確認しないといけないと彼は考えた。

ウイズの貧乏店主への接触理由、その他利益の確保。
及び爆裂魔法の使い手の紅魔族の確保が必要だった。

彼は、金などいらぬ。寧ろ、計画には『最低限』で良いと考えた。

あくまで、計画の最低限だ。桁がおかしいかもしれないが、全く問題なかった。

地獄の公爵との取引、及び幸運の女神との取引があれば容易だろう。

地獄の公爵の願いを知りたいが、知ったら彼は地獄の公爵に勝てない。

彼は、地獄の公爵の抱く野望はくだらないもののような気がした。

：地獄の公爵は、基本的に無害とは聞いてはいた。

情報は、心が読めると聞いた段階で、ストップした。

：彼が勝てなくなるから。

「完全に魔王より強そうなのに、心を読めるとかというのはチート過ぎる」

彼はまた、独り言を溢した。

：支配も何もしない悪魔の価値観は恐らく『愉悦』だろう。

彼はそう結論付けた。

彼は思考実験で見たこともない、知りもしない相手のことを考えていた。

時間があるとはいえ、無駄なことを大分した。彼はそう思った。

.....

彼は、できればデストロイヤーを秘密裏に始末したかったが、肝心かなめの、アクアを動かせる材料がなかった。

：絶対、アクアなら参加を拒否する。彼は確信した。

彼は、いつそのことアクセルにデストロイヤーが来てくれれば良いのにと思った。

それが、恐らく、後のフラグだった。

.....

時刻は、午前3時半。

彼は、冒険者ギルド長との『密談』は終わった。

ギルド長には、アクアのことは完全にバレた。

しかし、ギルド長は驚きもしなかった。

彼からそう言う何か別の存在感。

普通ではない規格外の物を感じ取ったらしい。

彼の周囲の評判は、一部を除き、貧弱な冒険者かつ変態の汚名を背負った汚物だが。

彼はもはや気にしないが、こうまで違っていると確信できた。

ギルド長は、やはり彼の狂信者になっていた。神扱いは辞めさせたが、もう修正不可能なレベルに深刻化してしまった。

だが、ギルド長は最後に、彼に、こう言った。

「やはり、私は、あなたの作る世界が見たい。

どうか生きてくださいませ。どれだけ血が流れようとも良いではありませんか！

あなたの才があれば、その後の世界は理想郷です!!
どうか、どうか、計画の見直しを！魔王等、後からどうにでもなります!!」

魔王討伐の、『計画』のためには、彼は死ななければならぬのだ。
そんな懇願をされても、魔王討伐を果たさなければ、しなければ、女神アクアが天界に帰れないのだ。

最短で確実に返す計画はこれしかない。なかった。

アクアを、教育できても、

アクアが帰れない可能性があるのであればそれは、論外だった。

彼は、計画通りに、魔王幹部ベルディア討伐できるまで、
ギルド長とは会わないと伝えた。

彼は、ギルド長の懇願など無視した。

.....

やはり、世界の脅威としての自分は排除しないといけない。

彼はギルド長との会話から察した。

彼が、悪の才能を活かせば、世界を支配できる。恐らく、容易くできると確信した。

だが、血が確実にでる。彼の最適解は危険過ぎた。

神の存在が証明できた以上、それはしてはいけない。
何より、アクアが、恩人が神なのだ。

彼が生前信じていなかった。いないと思っていた存在。

『神罰』ではない。

…自分自身での断罪を彼は望んだ。

彼は、アクアに神罰を行って欲しくなかった。

恩人から裁きを受けなくなかった。

彼は不本意とはいえ、初めて手を差し伸べてくれたアクアからのそれが嫌だった。

彼は何よりも『孤独』は嫌だった。

仮初でも、アクアと入れれば孤独ではないのだ。

だから、ギルド長の懇願は不可能だ。決して受け入れられない。そこまで彼を、高く買ってくれたことに思わないことがないわけではない。

彼は、当然、最後には、孤独の覚悟はしている。

そのためには、幸運の女神と取引をしないとイケなかった。キャベツが飛ぶなどシユール過ぎる世界だが、それしか最短の接触はできないだろう。

彼には幸運が、致命的に欠けているから。

今後、想定される女神エリスとの取引は重要だった。

対価は、彼の存在抹消。

彼はこれなら女神エリスも取引に応じると思った。

女神エリスが望むなら、義賊稼業を手伝っても良い。

それくらい自分が危険な才能なのを彼は理解した。

女神エリスがそう想定するのも計画通り。

彼女が『狂信者』ならきつとそうする。

：善人とは言え、恐らくだが、女神エリスは、
極論すれば悪は死ぬべきと考えている。

：彼は完全に悪の才能を持っていた。自分で嫌になるほど。

女神エリスなら、成功する。彼は確信した。

だから、彼は全て計画通りに進めるだけにした。

彼は、それしか思い付かないから。想定外も恐れない。

それが、彼自身の破滅と知っていても彼は一切気にしない。

彼は、恩人である女神アクアを教育しようとして、
利用しようとした時点で来世や今世での幸せなど許されるわけが
ないと確信していた。

何より、彼はこの世界で気が付いてしまった。

彼は、両親の言う『思いやり』ができない、欠陥品であることを確
信してしまった。

だから、もう、彼は止まらない。

ゆんゆんの件で、友という概念を勘違いしていた時点で彼の未練は
もうなくなつた。

友情も愛も理解できない自分など、そんな異物など、破滅の才能しかない自分など、世界の害悪と彼は悟ってしまった。

…だから、全てを利用する。

せめて、アクアに恩義を返すために彼は考え続けた。

アクアは、彼が望んでいなかったとしても手を差し伸べてくれた初めの存在だった。

…彼に『思いやり』ができないなら、そうするしかない。

彼の全てをかけて、何者も、自分すらも欺いて見せると彼は誓った。

神などではない。

彼は神に祈らない。何よりも、祈れない。

だから、自分自身の全てを懸けて誓った。

.....

だが、彼は気が付いていない。

彼には『客観的視点』がやや欠如していた。

最も、それを気が付くのは無理な話だ。

それは人間では思いつくはずがなかった。彼ですら気が付けるわけがない。

彼に、それをさせないために『転生』という手段を用いようとした。そんな存在など、理解できるわけがなかった。

そんな手段そのものを彼は拒絶していたのだから。

…その女神には、彼の言う通り知性が足りなかった。

それも、致命的に、だ。

…だが、女神は旅をする。

彼と共に魔王討伐の無茶苦茶な旅路を行っていくことになる。

女神にとって彼の拉致に等しい所業が始まりの不本意な形だったが、女神は何も知らずに楽しんでいた。

『旅』を通して世界を学ぶ。

それは彼の計画通りだった。

今は彼以外誰も気が付いていない計画を、

学びの旅で否定する女神の可能性の模索の旅路だ。

それだけが、彼という『箱』をぶちまけて、

最後に残された『希望』だというのは、

今は、まだ誰もそれに気が付かない。

異常なまでの魔王という才能を持った壊れた人間を治せる存在は、
皮肉にもただ一人だった。

第六話 闇黒神エリスへの恐怖

あの密談の二日後の昼下がり、冒険者ギルドに併設された食堂で、彼とアクアはカエルの唐揚げを食べていた。

「ねえ、あなたって、馬鹿なの？」

駄女神に、馬鹿呼ばわりされたのは、別に良い。

彼にとって想定内だ。段々アクアの制御が上手くなってきたと彼は自画自賛した。

「上級職のみ募集とか、

熟女趣味のマゾヒスト、粘液プレイが大好きで、ぼっちの変態が、相手にされるわけないじゃない」

彼はアクアが珍しく正論だと思った。

ここまで正しいことを言うアクアは、女神エリスのことを教えてくれた時以来か。

確かにアクアの言うような『過激思想』の女神だった。

まさか、アクアの言う通りだとは思わなかった。

だが、彼の現状は、ぼっち以外はアクアのせいだが。

「ああ、それに引っかかるのは、初心者か変態しかいないはず」

彼は、もう受け流すのは慣れた。

それに、その張り紙はブラフだ。

…少しの間、二人だけのメンバーを演じ、女神エリスを釣る布石。

「女神アクア様のパーティーにこれ以上、変態が増えるとか困るんですけど」

椅子に座り、足をバタバタと動かし彼に、抗議するアクア。

彼だって、もう嫌だ。

だが、変態が来るのはやや可能性としてある。それは彼に取って想定外の想定内だった。

あの張り紙を見て、ダステイネス家のドMが釣れたら、彼は、即座に女神エリスに抗議しに行く。

そんな幸運は彼にはない。

女神エリスもその可能性を、友人を利用するつもりはないと彼はこの時は思っていた。

実際正しいのだが、彼はもうすぐ致命的な奇跡のすれ違いを引き起こした。

∴だから、ブラフを仕込みまくる。

最短の接触は、キャベツ収穫と想定している。

流星に、計画に入れたくない。あのお嬢様は彼に取って理解不能過ぎた。

能力は、非常に有用なのに非常に惜しい人材だったと彼は過去形で表現した。

∴それはフラグだった。

ふと、彼は気が付く、小さな子がこちらに歩いてくる。

赤い目、紅魔族だ。魔法使いですと言わんばかりのファッション。片目には眼帯をつけている。

その眼帯には何か封印されていないだろうか。

彼はようやく話に聞いていた、『勇者』の可能性を見つけて、支離滅裂な思考に陥っていた。

彼は、ゆんゆんの友人であると確信した。

アクセルには、二人しか紅魔族がいないという。

つまり、彼女が勇者候補筆頭だった。

彼の勇者基準はとんでもないもののだが、今は誰も知る由もない。

…あの馬鹿しか引つかからない募集の張り紙を見たのだろうか。

彼は、今の段階で、引つかかる馬鹿がいますと思っていなかった。

女神エリスが彼の罠にかかるまで、あれは飾りのつもりだった。

ゆんゆんの言うことが正しければ、彼女は、紅魔族随一の天才。

彼の想定した勇者象に最も近い、一撃必殺の持ち主だった。

変態が勇者とか嫌だなと彼は思った。自分で募集しておきながら。

「我が名はめぐみん！アークウイザードを生業とし、最強の攻撃魔法、爆裂魔法を操る者……！」

バサツとマントを翻して、目の前の少女はそう名乗った。

だから、彼もノってみた。勇者が名乗ったから。

「我がこそは、真なる魔王！最弱の冒険者から地の底を這い、計略を練り、数多の怪物を打ち滅ぼす者……！」

彼は、何となく、合わせて見た。

彼には、『魔王』しかピンとこなかった。

めぐみんにあわせられるのが。

「魔王ですつて！ついに、覚醒しちゃったの!!」

アクアが彼の戯言を本気にした。

彼は確信した、アクアの表情でわかった。

嘘に決まっているのに何故、信じるのか、

彼は頭の医者にアクアを連れて行きたくなった。

「なるほど…あなたが予言に現れし、狂人なのですね！」

めぐみんは初対面の彼に失礼なことを言い出した。

どうもゆんゆんが言っていた、紅魔族の占い師の『予言』の狂人を彼と思っっているらしい。

大変失礼極まりないと思っただが、彼はそれを利用することにした。

めぐみんは、目をチカチカ点灯させている。

あれは紅魔族が興奮しているときのサインだ。

ゆんゆんと話しているとよくそうなっていたので、彼は知っていた。

彼が捲し立てて、仲間を引き込もうとしたら、めぐみんの様子が急変した。

「そうではなくて、あなた、ゆんゆんに極悪非道の限りを尽くしたそうですね!!」

めぐみんは突然、彼に食ってかかった。

彼は少し驚いた。変化が、突然過ぎたから。

：まあ、変態が美少女であるゆんゆんに近づけばそう評判になるかもしれない。

「まあ、落ち着きなさい。どう見ても欠食児童の貧乏そうな少女よ」
彼はめぐみんの望む、狂人を演じることにした。

その方が面倒臭くなさそうだから。面倒臭い相手には、面倒臭い手順が有効だ。

そつと、めぐみんの目の前にカエルの唐揚げを目の前に置いてみた。

「：けっしおくくおじとわひふへいな」

めぐみんは即座に食らいついた。… 駄犬だ。

アカアを彷彿とさせる。

何てわかりやすい。

だが、思考を誘導するには、めぐみんは、頭が良すぎるようだ。

カエルの唐揚げを食いつつも、

いざとなれば彼から逃げたり、襲ったりできるように準備している。

彼は、それを察した。

中々、侮れない『勇者』だと彼は思った。

「さて、いつの日か、我が身に爆裂魔法をぶち込む運命にある少女よ」
彼はさらつと計画の一部をバラしつつ、狂人を演じた。

これは確かに真実となった。

彼の計画とはまるで違う形だが、確実な運命であった。

もう、めぐみんへの対処法は思いついた。
すぐに取り込むべく行動をしようとした。

だが、

「ちよつとー私を構いなさいよ!!」

アクアが騒ぎだした。

彼は今良いところだからアクアに黙って欲しかった。

彼は、アクアの口に唐揚げの油がついているのを見つけ、アクアに
布巾を手渡した。

アクアは彼から、素直にそれを受け取ったが、何に使うのかわかっ
ていないようだ。

だが、時間稼ぎにはなった。

「さて、極悪非道は結構、結構。

君の爆裂魔法が見たい。というか、毎日打ち続けて欲しい。

魔王幹部や魔王を爆裂魔法で打ち滅ぼし、『世界』を救う将来の勇者
よ!

∴その可能性を私に見せてくれ!!」

彼は、完璧な狂人を演じて見せた。

彼の演技力は本当にあらゆるものを騙せた。

これは、後に地獄の公爵ですら認めた。

そして、公爵自身の手により否定されることになる。

これで、めぐみんは釣れる。

彼は確信した。

「おおーわかっているではありませんか!?!狂人の癖に!!」

本当に面倒臭いな、この娘。

簡単なようで、面倒臭い『狂人』を演じないといけなくなった彼はそう思った。

めぐみんは、爆裂魔法に愛着があり過ぎて、そこが弱点になっている。

それ以外は、きつと非情な決断も辞さない勇者の鑑だろうに。

彼は、めぐみんを教育し、立派な勇者に育てることを自分自身に誓った。

「ねえ？これ何に使うの？」

アクアが布巾を折り紙のように弄繰り回し、女神エリスそっくりな造形を整えていた。

「口を拭け」

彼は、丁度良いので、敢えて、

アクアの作ったエリス神象を握りつぶしてからアクアの口を拭いた。

こっそり、こちらを伺っているであろうクリスの目に映るように、握りつぶした。

「あああ！せっかく作ったのに!!」

アクアが駄々こね始めるが、それは申し訳ない。

女神エリスを挑発するためには仕方がない犠牲なのだ。

彼は、恐らく、クリスの潜んでいそうな方角を敢えて見た。

潜伏スキル等のせいでわからないが、ギルドの構造は理解している。

いる可能性のある、クリスの位置特定は容易だ。

「では、始めよう！勇者めぐみんよ！この世界を救う旅の始まりだ!!」
大振りに宣言する。

キャベツまで時間がいらないかもしれない。
ある意味、めぐみんのお陰で。

.....

彼は、三人でジャイアントトード五匹討伐依頼を受注した。

彼は、ジャイアントトードを爆裂魔法倒しつつも、その一発で倒れ
ためぐみんを彼は担いだ。

アクアと共に、計五匹退治した。あまりに簡単に行われた。
アクアも素直に指示を今回は聞いてくれたから。

だが、何も想定外が起こらなかった。幸運値最低が二人いるのに。

女神エリスの方から、『取引』を持ちかけていることを彼は悟った。

彼は、カエル輸送の手続きを終えて、めぐみんとアクアを自由時間
として解散した。

.....

裏路地に彼は入る。

危険だが、今回は安全と確信している。
幸運の女神の化身がいるから。

「さて、クリスさん。一昨日ぶりですね。

…早すぎませんか？」

彼の幸運は最低だ。

『想定外』過ぎた。この早期での接触は。

彼が感じた、簡単に『思考』が誘導できる常識ある女神だというのは偽りの姿だった。

女神エリスは、アクアの言う通りの存在だった。

彼は、アクアに内心謝罪した。ここまで、悪辣な女神だとは考えていなかった。

彼は恐怖した。自分の確信が勘違いだった。

これが、神だともいうのか。

…アクアもこれくらいなら連れて行く必要がなかったのだが。

彼はエリス神への恐怖を一時忘れた。…ある意味アクアのお陰だ。

彼は、覚悟を決めた。

彼は、もはや女神エリスに策が通じないのなら、ある程度、正直に打ち明けることを決意した。

彼はエリス神がアレを持ち込んでいると看破した。

そして、それが合っていたために、碌でもない奇跡を引き起こした。

「…初めまして。エリス様から聞いているよ。」

流石に見逃せないよ。君は」
女神エリスはクリスとして振る舞うようだ。

彼は、エリスをクリスともう既に確信しているのにこの行為を行う理由。

…ここまで悪辣な手を打って来た女神が、
まだ自分の正体を、完全にバレていない等と思っている、ポンコツではあるまい。

彼はこれまで備えてきたほぼ全ての対策が、意味のない行為だったと悟っていた。

「私が、転生してから、たった二週間と少ししか経っていない。

しかも、女神エリス様と会った、

その二日後に、私の求めている物を見つけるとは。

天下を賑わす義賊様は、暇ではないと思いましたが」

彼の本音だ。『計画』が完全にズレた。

…女神というのは直球過ぎる気がある。

彼は、おそらく、女神エリスが持ちうる権能全てを使って、彼自身を見たと言信した。

あれだけ思念を撒き散らせば、行動で、全力で表していれば、

不幸を嘆くような振りをしていれば、全能ではなくても気が付くだろう。

しかし、この接触の速さは異常だった。彼女は化け物だ。彼は確信した。

「ええ、君の求める物、幸運に関する神器は、確かにあたしは持っているよ」

素晴らしい。

彼は、キャベツ収穫までの挑発プランが水泡に帰したが、それ以上の展開に胸を躍らせた。

同時に気を引き締めた。

アクアから聞いたエリス像がまさかそのまま、本当だとは彼の想定外だったから。

神器は、彼が背負う、アクアの不幸を取り除き、想定内に収まる効果だと確信した。

今日は、まだ不幸や想定外が起こっていない。

…頭がパーは普段通りだが。

「だから、これを上げる代わりに…」

流星に女神エリスにそんなことを言わせるのはまずい。
だから、彼は先に言っただけだ。

…そうせざる負えなかった。

彼はエリス神の、脅しに屈した。

「ええ、勿論です。対価として、魔王討伐した後、必ず私は消滅することを約束します」

女神エリスは過激主義者だ。

アクア曰く、

『超、超過激よ！エリスは、アクシズ教はエリス教に、迫害されているの!!』

アクシズ教の扱いは自業自得だが、アクアの言うように、『悪』に容赦がない。

彼は、このままでは、女神エリスが自分に死ねと命じにくると確信していた。

故に、この結論は避けられなかった。

幸運の女神エリスの、過激思想がなければ、彼は生存を前提に入れた計画も練れた。

故に、容赦しない。覚悟した。

この『狂信者』に目にももの見せて見せる。

全力でその神器を奪い取って見せる。

「…え？」

クリスは、とぼけるのが上手い。上手すぎる。

知っていなければ、彼は騙されるところだった。

アクアが言うように、

『残忍で狡猾だから気をつけなさい。エリスはあざといわ。だから国教になれたのよ』

ということなのだろう。

流石に『国教』の神だけある。

彼の目には、本当に、きよとんとしていた少女にしか見えない。

だが、騙されない。アクアからたつぷり聞いている。

さらに、彼はこの早すぎる遭遇から確信した。

女神エリスの、その悪辣さをとぼけた顔をした狂信者を彼は見た。

それは、本当に偶然、女神エリスが完全に彼の計画を破壊したから起こった。

第三者視点では、間違いなく幸運の女神とは偽りの名と思う程の規模で、

彼を想定外のレールに女神エリスは乗せてしまった。

「あなたは、悪人には容赦しない。

生前財産を奪い悪人を絶望させる行為も含めていた。

神器回収はそういうあなたの趣味もあった。

… 死後の世界では、天国という牢獄で、言葉で魂を甚振るサディストだと聞きました。

私は、それでも構いませんが。変態と現世で罵られているこの身にはその程度は些事。

…だが、あなたの望みは私の消滅でしょう？

最も、私が苦しむ結末を見たいがために、そうするとたった今、確信しました」

彼は捲し立てる。絶対ここで素を引き出すと決意した。

恐怖や絶望に彼は屈しなかった。

キャベツ収穫までとことん挑発してやるつもりだったが、女神エリスは来てしまった。

彼は、仕方がなく、こうする他なかった。

クリスは震える手で懐から何かを取り出した。

彼はそれを知っていた。間違いない。あれは…

「何で鳴らないの!!」

クリスは叫んだ。

彼は全てを見破られたから、ようやく、

『女神』エリスの化けの皮が？がれたと確信した。

クリスは魔法道具のうそ発見器を持ってきていた。

…やはり、そうだったか。

彼は、完全な邪神を見た。アクアの言う『邪神』エリスを。

彼の脳内の論理は、地獄の公爵すらそうだと確信せざる負えない程までもだった。

彼目線では、邪神としか評価できないほど悪辣な手口だった。

「無論、義賊稼業でも何でも、私のできる範囲で協力します！

どうか、まだ見逃してください！

まだ、アクアのためにも死ぬわけにはいかないのです!!」

アクアの言う邪神には、この全身全霊の頼みは通じないだろう。

だが、彼は可能性に懸けた。

彼女の慈悲の心を。ダステイネス家の問題児のフォローをするという善人の姿を。

「ちよつと、待って、ねえ、あなた、私を何だと思っているんですか!？」

彼は、何でそんなことを聞くのかわからなかった。わかりきっていることを。

だが、聞かれたから答える。

「私の魔王討伐計画を知り、私の『悪』の才能を知り、私の可能性を掴みに来た。

完全なる、純粋な悪意の行使ができる神。…私すら完全に騙して、今日ここに現れた。

ここまで悪辣な手段に出ることができる。
私を追い詰め、苦痛を味合わせる為に、

あの一度目の死後の世界で、純粋な世界を思う女神様を演じきつた。

「まさか国教の女神に相応しい女神だと確信しました。
清濁併せ？む恐ろしい神だ」

彼にとって、賛辞の言葉だ。

彼をここまで絶望させたのは、彼女が初めてだ。

だが、決して、屈しない。この怪物すら利用してみせる。

「何で鳴らないの!!!」

クリスは、彼に全てを見破られて、完全に道具に八つ当たりをし始めた。

彼は、ここまで荒れている存在ならば、容易に『思考』を誘導できた。
た。

例えば、女神エリスでも。

これは後に地獄で女神エリスの脅威を検討されることになる重大案件にまで発展してしまった。

女神エリスは幸運過ぎた。ある意味で酷い誤解を悪魔上層部に認識させた。

……過激主義者の女神エリスの被害者が幸運にも沢山いたせいで、余計に酷いことになった。

女神エリスはある意味自業自得だった。そしてそれに、誰も気が付くことはない。

.....

彼の取引は成功した。

だが、女神エリスは彼を脅迫した。

「いいですか！私をそんな風に言いふらしたら、本当に、天罰を下しますからね！」

女神エリスは、まだ自分を利用する気だった。

今後、自身の認識への矯正という名の義賊稼業の手伝いをさせるという。

：クリスになる気はもはやないようだった。

彼は、魔王や、地獄の公爵以上の脅威をその日知った。

完全に彼を騙せる邪神の存在を。女神エリス。

彼は、その名を魂に刻み込んだ。

閑話 最悪の最終手段の放棄（閲覧注意）

彼は女神エリスから、手に入れた神器を確認した。

それは小さなペンダント。金色の星の形の小さなもの。

これを手にした転生者は贅の限りを尽くし、

魔王との闘いとは全くの無関係で死んだという。

確かに幸運だ。転生者としては。彼はそう思った。

元の所有者は、本当に世界を買える財を持っていたという、恐ろしい神器だ。

勿論、彼は所有者本人ではないので性能が、格段に落ちる。

：だが、ギャンブルで、あの国を破綻させることは可能だろうと彼は推察した。

文字通り、あらゆる手を尽くせば可能だった。

あの怪しい国は、馬鹿が裏から支配しているのだろう。

：宰相を正攻法で、排除できる可能性が見えた。

彼の完全な想定外の副産物だった。

裏から世界を支配しなくても良さそうだ。

彼は裏からの世界征服については、女神エリスにもバレるようになっていた。

彼からすれば世界を裏から支配する危険思想は女神エリスを引き寄せる罠だった。

副なる目的もあるが、幸運を手にしないと魔王討伐は無理だった。

幸運の低さから、彼はその方針を取っていた。

：あの世界を変えた、最大の『危険物』まで考えていた。
幸運が低ステータスの場合の、飽くまで、策の一つだが。

.....

計画の一つとしていくつかの組み合わせがあった。

彼が想定する最悪のシミュレーションの組み合わせがあった。

まず。この国から始まり、世界を裏から支配する。

これがその計画の第一段階。

魔王軍幹部を正攻法以外で倒す計画。

『地獄の公爵』は、残機を減らさないといけなかった。取引するため
に。

これが第二段階。

未知の魔王軍幹部の存在がある以上不明な点もあるが、
確実に仕留める計画は多数用意している。

最後に、裏から世界を操り、人類を魔王軍にぶつけ、戦力を割く。

その隙に彼が、魔王城ごと消滅するプラン。

これが、『旅』の間に行いつつ、最後は花火となる最終段階計画の一
つがあった。

彼はその名を『消滅』と名付けた。

最後の、これは、はっきり言つて、彼すら忌避していた可能性だっ
た。

.....

最後の最終計画『消滅』。

これは、彼の持ちうる知識と技術を最大限悪意に転換すれば可能だった。

前段階の研究、マナタイトの簡易ダイナマイトもギルド長が確認した。

手持ちのマナタイトを爆弾にしてもらっていた。∴爆発魔法級ではあるらしい。

全てのスキルが取得できる、冒険者ならば可能。

爆裂魔法を使えるアークウィザードが入ればさらによかった。

この研究成果を元に彼は思考を飛躍した。

理論上、核爆弾クラスに強化できると彼は確信した。
恐らく知識さえあればさほど時間はいらなかった。

さらに爆裂魔法があれば、それ以上の威力が、
魔王城ごとかき消せる物が作成可能な理論は作成できた。

∴できてしまった。彼の脳内で。

その為に、金がいる。だから、地獄の公爵と彼は取引したかった。

∴ それ以外の可能性でも地獄の公爵との取引は不可避だった。
さらに言えば、アクセルの治安維持を彼はギルド長と約束していた。

もう、彼はどうあがいても地獄の公爵と取引する気でした。

生前、アメリカの高校生がそれを可能にしていたと、彼はネットニュースで知っていた。

彼は興味本位でその方法を調べた。

彼にとってその理論の理解は容易だった。

彼は物理の、教科書の隅にあっただが、
教師が教えない分野『原子核と素粒子』を独学していたから。

：爆裂魔法は、誘発できる。起爆剤になる。彼は確信していた。
爆裂魔法による水素爆弾作成の可能性。

結論として、核爆弾を超える消滅を理論上は引き起こすことができると彼は考えた。

まず、爆裂魔法を知った際に気がついた。
そして、コロナタイトという物質の存在を知った。
さらに、上級魔法の一つ、凍結魔法（カースド・クリスタルプリズン）。

リフレクトという魔法を跳ね返せる光の壁の魔法の存在等々。
ステイルも必要技能だった。物を取り出す、取り換えるのに使える。

：彼は、消滅を、水爆擬きを、形にすることが可能だと気が付いた。
この世界のスキルと科学を組み合わせれば。

確実に魔王城ごと消せた。理論上は可能。

：最低限以上の幸運さえあれば確実に後世に残さない。：隠蔽で

きる。

研究者では、魔王城の結界が突破できなかったからできなかっただろうプラン。

彼も恐らく、この水爆擬きを用いても、魔王城の結界は破れないと推察している。

どこかに、方向性は違えども、類する技術が現存しているかもしれないと彼は思った。

彼は自分でも、時間さえあれば、できる可能性を、壊れた研究者がした可能性はあった。

だが、彼は魔王軍幹部を倒すのに、その技術を、水爆擬きを決して使わない。

いきなり魔王城ごと消す。

最大の奇襲作戦だ。

だが、正攻法で『国』を正面から巻き込んだら、隠蔽不可能だった。

国が絡めば、絶対に後世の脅威になりかねなかった。彼の理論は。

だから、第一計画で、彼は世界を裏から支配し、

技術の知識を残さないように彼もろとも、自爆するつもりだった。

それを一度だけなら、誰も気が付かない。

…大爆発で魔王が死んだとしか記憶に残らない。

彼が、世界を裏から支配すれば全く気が付かない。

アクアにも気が付かれないで、魔王討伐は完了すると思っていた。

.....

…だが、女神エリスから貰った、神器がその『策』を否定する。

幸運過ぎた。水爆等不要で、魔王討伐が可能なレベル。

女神エリスも、それに気が付いて、これを寄越したのは理解できる。

女神エリスも、彼に幸運がないから、裏から世界を支配する。

その手段しか取れないことを察しただろうと彼は確信した。

当初は、彼の危険性を見逃してもらおう計画だった。

『幸運』があれば確実に水爆等、後世に残らない。

それは飽くまで可能性の一つ、方法の一つだったが。

だが、この神器があれば、当初の予定の旅に、

最後の魔王討伐にアクアを連れて行ける可能性が出てきた。

彼にとって、危険な水爆等、元々、嫌だった。

彼は、理詰めで行けるなら放棄したい策であった。

…今の女神エリスは、彼にはよくわからない。

彼の用意していた、技術が、ほぼ全て、不要になる。

この神器に頼り過ぎると、彼は自分の力だと、勘違いしてしまう。

所詮は借り物、いずれ返さないといけない。

…それを忘れかねない。

これは劇物だと彼は思った。

彼の計画を根本から否定する可能性を秘めた存在。

.....

女神エリスは、何を考えていたか彼は気になった。

こんな劇物を彼に与えたら、彼が最大限悪意で活かしたら、恐ろしいことになる。

彼は、二つ思いついた。

まず一つは、幸運漬けの傀儡にする可能性。

彼は、確かに幸運を手に入れられれば、全てを明け渡したかもしれない。

彼は、神器により、上昇した幸運のステータスを確認し、そう思った。

もう一つは……それはない。

女神エリスは完全に怒っていた。故にないと彼は思った。

彼には、女神エリスの考えが本当にわからなかった。それが彼の恐怖を生んだ。

想定外過ぎた。接触の早さと神器の効果が異常過ぎた。

……だが、彼の計画の大筋は変わらない。

女神エリスの目の存在がはっきりした以上、世界を裏から支配するのは諦めた。

核爆弾相当の危険物の計画も放棄だ。

それは飽くまで、手段の一つでしかない。無数に彼は計画していた。

その一つが無くなって、別の計画に修正を加えるだけ。

彼は、本来、この理論を確実に後世から、消せるだけの僅かな幸運

が欲しかった。

言うなれば、書類を燃やせば終わるような形で。たった、それだけの幸運が彼は欲しかった。

：世界に脅威を残さないために。

だが、この神器があれば、水爆擬きなど不要。

魔王討伐プランは、大筋は正攻法になる。RPGの魔王討伐にならざる負えない。

過剰な方法は、水爆擬き等は、彼を慢心させる材料にしなければならない。彼は緩んではいけなかった。

最後の切り札と称して持つと油断する危険性があった。

水爆擬きのプランは消滅だ。

そもそもまだ、誰にも言っていない可能性だ。

恐らく女神エリスも気が付いていないだろうと推測できた。

彼はこの考えを基本的に唾棄していた。

彼は、世界を支配するのではなく、世界を解放する方向へ切り替えた。

だが、彼の計画は狂わない。最悪の方法が無くなっただけで、彼の本質は微塵も変わらなかった。

だが、誰もが後から、笑える『旅』にして見せる。

荒唐無稽な御伽噺にすることを彼は誓った。

第一目標の、アクアを天界に返すことに変化はない。
計画の最大の旅は何も変わらない。

だが、この幸運を合わせても、彼の死には変わりない。

女神エリスも彼の消滅と引き換えだからこの神器を渡すことに応じたのかもしれない。

…女神エリスが義賊稼業以外何も言わずに渡してきたことを彼は思い出した。

後から、更なる要求が来る可能性を感じた。どう考えても対価と釣り合っていない。

彼は改めて女神エリスに恐怖した。

そして、この対価を求めない行為こそ、悪魔からすれば邪神も良いところだった。

女神エリスは気が付かない。

後世に名を遺した、『彼』を騙せたという女神エリスの偉業は悪魔にとって恐ろしかった。

.....

もし、彼のステータスが大幅な変動があつた場合、ルナ女史が彼の過去の情報を改ざんすることになっている。

飽くまで過去の情報なら可能。冒険者カードを改ざんするわけでないから可能な方法。

冒険者ギルド長とグルだからできる荒業。

幸運が上げればほぼ確実に気が付かれないと彼は確信していた。

そもそも彼は、たった二週間足らずの新人。

初期で、想定されていた、女神エリスとの遭遇はキャベツ収穫の時期。

かなり早期に改ざんできる。

計画より簡単に情報を、改ざんできると彼は確信した。

彼は、元々、幸運の女神なら、幸運の神器は持っている可能性を推察していた。

神器回収で自分に近い物はすぐに特定できると思っていた。飽くまでも仮定の話だった。彼からすれば希望的観測に等しかった。

だが、女神エリスの反応から察するに正解だと彼は考えた。

.....

この神器は、近くにないと効力を発揮できない。

さらに、幸運の指定が必要だ。

彼は女神エリスが隠れ潜んでいた程度の距離から、彼を幸運の対象に選んでいたと推測した。

アクアの不幸を被っている彼は神器の効果をただ単に、彼の『想定内』になったと錯覚していた。

だが、純粹に凄い幸運になる神器なだけだった。

彼は、幸運の法則性、及び、神と人間の存在差の法則をほぼ確信していた。

神と人間との存在の格差。

上から下に落ちるような運命の法則。

物理学でいう、位置エネルギーのようなものだ。

彼はそれに気が付いていた。あまりの不幸の連続で気が付いた。

アクアと彼の二人きりの状態なら、不幸は彼に集中する。その法則性故に。

ここまで酷い不幸の連続は、恐らく、彼の転生チートがアクアなのも関係している。

だが、彼には、そこまでは検証不可能だった。

どのみち、彼はその検証を放置した。

法則が発覚して、下手にアクアに不幸になって欲しくはなかったから。

神器の効果は、恐らく、数百メートルは離れていても問題ない。

クリスは彼の感知外にいた。スキルで隠れている可能性もなくなかったが。

どのみち、この神器は必要不可欠となってしまうた。

彼はステイル対策の為にあることを思いついた。

彼は即座にそれを実行した。

.....

彼は、横腹を短剣で深く切り裂き、傷口を作った。

その傷口に小さな神器を押し込んだ。
血がボタボタと地面に滴り落ちるが彼は気にしない。

「人気のない裏路地。…幸運にも誰もいない。」

今の彼は幸運だ。致命傷にはならない程度に深く切り込みを入れられた。

彼は、体内に神器が入ったことを確認し、

ジャイアントトード討伐のために用意していた、

アクア不在時の可能性、彼が一時的にはぐれた場合のポーションで傷を癒した。

他人のテレポートの転移に巻き込まれるという有り得ない不幸も彼は想定していた。

彼は、低レベル帯のため、ポーションだけで、すぐに回復しつつあった。

彼は、一応、傷跡がないか確認した。問題ないと判断した。

アクアに気が付かれないと思った。

彼はこの一連の『手術』を一切の躊躇なく行った。

頭がパーになるのは痛みがかき消した。

故に、自分の意思のみで、悲鳴を押し殺した。

もはや、彼の修正された計画には、この神器がないといけなかったから。

.....

彼は、自分で手術を完了させた。もはや、神器と彼は一心同体だ。ステールで取られる可能性も低くなったはずだと彼は思っている。

自分で自分を改造したマッドサイエンティストが魔王軍幹部にいと彼は聞いていた。

それから類推し、体内に神器を取り込めば、恐らくは取り出せないと彼は推定した。

本当はクリスにステールを試して欲しかった。

だが、女神エリスを完全に怒らせてしまった以上、不可能だった。幸運に差がある場合取り出せる可能性を、試せなかった。

：彼はそこが一番心配だった。

この神器がなくなれば、これからの旅で、仲間被害が出る。

計画の最悪は無くなった。

あの水爆擬きは彼をして、完全に常軌を逸したものだだった。

彼は、女神エリスに感謝した。

彼が、本気で嫌な策だったから、あまりに危険な物をぶちまけるのは彼の世界の脅威をこの世界に残す可能性だけは断じて避けたかった。

ただ、大筋は変わらない。魔王軍幹部討伐までの流れは変わらない。

魔王と対決する方法は別にも考えていた。水爆擬き等なくても問題なかった。

幸運が彼を味方についた以上、最悪は消えた。彼に取ってその手段

はもはや必要なくなった。

だから、彼は『道化』になることを決めた。旅の共として。

彼の本質は変わらない。最悪の可能性が、歴史の闇に消え失せただけだ。

∴ だが、大きな前進であった。彼に、自らの意思で、策を放棄させたのは後の一手になった。

第七話 幸運という名の不幸。変態という想定外

彼は幸運最低値の知力がお察しの駄女神、つまり想定外の馬鹿をまだ舐めていたと悟った。

ことの経緯は簡単だった。

彼はアクアを一人にした。

自由行動ということと事前に裏からフォローできなかった。

彼は最悪めぐみんがいるという期待をややしてしまっていた。

だが、彼はめぐみんが、彼の望む最有力勇者候補なことをその時失念していた。

ゆんゆんのような、変態という汚名をきていた彼と話してくれるような優しい子にはいかなくとも、

ある程度、一般的な優しさのある常識的な子だと、めぐみんを、うっかり勘違いしていた。

さらに言えばまだ、一緒にジャイアントトードの五匹討伐の依頼を達成したとはいえ、

めぐみんはアクアの能力を知らなかった。

彼もゆんゆんから口頭でしか、まだきちんとめぐみんを理解していなかった。

めぐみんもアクセルに来たばかりだった。彼とほぼ同時期にアクセルに来ていた。

彼の情報網には、ほぼめぐみんの情報がなかった。

何より、お互い会ったのが、まだ初日だったから。

お互いの状況をよく知らなかった。

彼はめぐみんの状況を想定していなかった。

だが、めぐみんこそ彼の望む勇者に相応しかった。彼は確信した。

…それくらい彼にとって、女神エリスとの接触はあまりに、想定外だった。

.....

…アクアは自由時間でアクセルの街をめぐみんと共に散策したそう
うだ。

アクアは、途中魚屋の生け簀を見かけたらしい。

アクアは水槽の水を見て、『水の女神』として何か譲れない物を感じたらしい。

…アクアは生け簀の水を、海水から綺麗な真水に変えた。
女神の清めた水だ。確かに相当なものだっただろうと彼は思った。

だが、アクアのその行為は、魚屋の、海で取って来た生け簀の魚達を全滅させた。

まだ、一匹も魚が売れていない生け簀の魚を全滅させた。

なお、その際に、めぐみんはどこかへ逃げたらしい。

アクア曰く、

「助けを呼んできますー！」

と言って帰ってこないそうだ。

誰に助けを呼ぶつもりなのか考えれば、簡単に嘘だとわかった。

彼はやはりめぐみんは、勇者の理想像だと確信した。

勇者ならば、例え、仲間であろうと、この場面では切り捨てる。

それが『勇者』のあるべき姿だと彼は思った。

「わ、私は、狭い生け簀でかわいそうだし、水くらいは綺麗にしてあげようと思って!!」

アクアはそう言つて彼に言い訳をし始めた。

彼は、アクアの思いやりの精神は素晴らしいと思った。

だが、肝心なその対象を全て殺してしまつたら意味がない。

彼は自分の浅はかな行為を恥じた。アクアへの教育が足りてなかつた。

故に、そこまでアクアに怒つてはいなかつた。

だが、全滅させた魚の数を見て、彼は、計画が狂つたことを悟つた。

「弁償代は…?」

彼は恐る恐る尋ねた。魚屋の主人に。

「…25万エリス。これ以上びた一文まけられねえよ。…いや、本当に」

魚屋の主人の、疲れ切つた発言だった。

彼は察した。魚屋の主人は弁償代を吹っ掛けてない。

彼は素直に貯金で支払つた。魚屋の主人に弁償した。

…彼の財産はパーになった。所持金はほぼゼロ。

本来なら今日で、常時、宿屋暮らしになる予定だった。馬小屋からの脱却。

一時ではなく、泊まり込みには、最初に20万エリスは必要だった。敷金みたいなものだ。

：彼は、アクアの浪費に耐えて必死に貯め続けていた。モンスター討伐の合理性を初期で計画し、武装を整え、一気に稼いだ成果が失われた。

：初級魔法を覚えていて良かったと彼は思った。最低でも、魚を冷凍保存できる。フリーズで。

彼とアクアは、しばらく魚生活が確定した。

：彼は『幸運』とは何なのか真剣に悩んだ。女神エリスが渡された神器は数値だけ変わる偽物の可能性まで考えてしまった。

「良かれと思ってやったのにー!!」
アクアは泣いた。

彼は次から気を付けるようにアクアに注意した。思いやりの心は大切だから。

彼にはそれが欠落しているようだから、アクアには是非、それを学んで欲しかった。

.....

その日の夜、彼は冒険者ギルドで酒を飲んでいた駄女神を、アクアを見つけた。

：これには、流石に彼も激怒した。
アクアから小遣いを取り上げなかったのは、教育に悪かった。

彼は、自らが甘すぎたことを悟った。

アクアは、すぐやったことを忘れる鳥頭だった。

さらに、性質の悪いことに、

ダストという経歴詐称疑惑の男が、アクアの被害にあっていた。

ダストはアクアに宴会芸で物を消されたといい、彼に慰謝料請求し始めた。

彼はもはや幸運など関係ないと思ってしまった。

彼にとっては、世界の危機にまで発達する課題だったのにも関わらず匙を投げたくなった。

水爆という気が狂った対策まで用意していた。

… 彼はこの世界観ギャップをここで気が付くべきだった。

こうもたった半日で連続して被害にあうとやってられない。

彼はダストにとんでもない金額を吹っ掛けられそうになった。

彼は仕方なく、慰謝料などは払えないがと前置きし、ダストに耳よりのな情報を教えてやった。

.....

今年はトマトが全国で壊滅的な状況にあった。

所謂、品不足だった。

だが、アクセルにいるとある八百屋だけ直接農家と取引して、

高額とはいえトマトが大量にあることを彼は知っていた。

彼はダストにその八百屋でトマトを購入し、
王都に転移し、トマトを転売すれば必ず儲かるという情報を教え
た。

彼は今、魚屋の件で金がない。この情報は使えない。

本当はトマトの先物取引で最低限の材料費を購入し、日用品を作成
したかった。

全ては氷の魔女ウイズとの交渉のために。

だが、元々幸運が彼にはなかったし、本来女神エリスとの交渉後、
キャベツ以後に使うかと思っていた情報だった。

だが、彼は神器で幸運が働いていない疑惑があった。彼に不幸が続
いている。

手術までしたのに、これでは不味いと彼は思った。

幸運を利用した狙撃スキルを利用するのも計画もあるので、
彼は幸運について要検証になってしまった。
ステータスの幸運だけあれば最悪問題ない。

：アクアを一人きりにすればこうなるというのは、彼には想像が
ついていた。

だから、幸運は普通に機能している可能性が高い。

可能性は高い。

しかし、幸運が高くてこんなのかと彼は頭を抱えそうになった。

彼はまた頭がパーになりそうな自分を殴った。会話中突然の暴挙

を行った。

彼の行動にダストはドン引きした。

ダストにトマトの先物取引を教えても良いと彼は思った。

正直、ダストに絡まれる方が面倒臭かった。

故に教えた。トマトの現状と取引で得られるであろう利益をダスト君に教えてあげた。

それを聞いたダストは、

「金がねえとトマト何ぞ、買えねえじゃねえか」

と彼に言った。

金がない貧乏人のダストに、彼はとある闇金の存在を教えた。

「おい……ちよつと待て、お前何でそんなところを、知ってんだ？」

大声で彼を脅していたと思ったら、急に小声になるダスト。

その反応からダストは、その闇金は知っていることを彼は悟った。

彼は内心舌打ちをした。

最初の一週間、深夜で接触できる情報源は少なかった。

だが、その中でも中々危険度の高い情報だった。

流石にアクセルを取り仕切ると自称するだけある。

彼はダストの評価を一段階上げた。

… あそこは一介の冒険者では見つけられない。

所謂、禁制品を扱っているところだった。

「大丈夫。『私』からの案内と言えば、金利は抑えられる。

そうしなかったら、『惣菜』の件でまた話したいと言っていた、と伝えれば良い。

一回なら金は問題なく借りられるだろう。二度目使ったら消えるが、多分」

何が消えるとはダストには言わない。

そう言つて、彼はこっそりと金利と偽名を書いた紙をダストに握らせた。

バレないように。彼は周囲を警戒していた。

…恐らく、幸運は働いていると彼は思った。

神器入手前までなら、周囲の目を逸らすために、確実にしなければならぬ行為が必要なかったからだ。

変態として、目を逸らさせる、思考を誘導させる、物理的に仕掛けを作る、人を操る。

…ダストとの会話では今回何も必要がなかった。

最も彼は、冒険者ギルド内では安全が確証されている。

…彼は、アクセルを調べ尽くしていた。

表も裏も。彼は、変態や狂人を演じ切り、情報を収集した。

彼の情報網は使えそうな物は勝手に集まるくらいに構築が完了していた。

およそ二週間で。

彼からすれば、不幸を考慮し過ぎた欠陥しかない杜撰なものだが、アクセルでは恐らく最高峰の情報網を構築できた。

それを用いて、情報を危険のない範囲、幸運判定にならない範囲で

集め、分析していた。

だから、アクセルの闇の弱みなど容易に握っていた。不幸を回避するための手段として、あらゆる弱みを握っていた。

幸運に引つかからないように、運命ではなく必然にするかなり手間を要した。

だが、彼は裏路地で何もなかったことから、察するにもうその手間が省けることを察した。

：ギルド長と、サキュバスの件で話し合っていたのもその一環だ。

彼は薄々そういった店があることを最初の数日で察していた。

アクセルは異様に結婚率が低いから容易に想像できた。

なお、結婚率の低さに、出会いのなさにルナ女史が愚痴りたそうにしていたが、彼は完全に無視した。

あのルナ女史のドス黒い感情は、きつと悪魔の手土産になると彼は確信していた。

脅威のないというあの悪魔が、公爵が喜ぶに違いない。

『愉悦』が生き甲斐ならきつと喜ぶだろうと彼は考えていた。

実際、彼のことを覗いたバニルは歓喜した。バニルに取ってルナ女史は極上のご飯そのものだった。

ルナ女史はバニルの定期的なご飯になった。

愚痴を聞いているだけでご飯を垂れ流す逸材だった。

なお、そのことに関してはバニルは、妄信的な部下のサキュバスにすらアレはないと言われる大惨事を巻き起こす。

バニルも計画を相談した人間が、『彼』という畜生極まりない行いを
してしまっていた。

バニルは敢えてそれを狙っているだけに性質が悪すぎた。
彼ら二人は世の女性を敵に回しかねない暴挙にでた。

話は過去の彼に戻る。

彼が、ルナ女史の側にいるだけで、

カップルや寿退社していく他所のギルドの受付女史への怨念がひ
しひしと伝わってくるのだ。

故に、この感情は熟成させた方が吉と彼は考えた。

しれっと、そういう悪魔の思考ができる彼は最低だった。

このように、彼は情報さえあれば容易に活かせるものを見つけられ
た。

だから、もし闇金がダストに低金利で金を貸し出さなければ、

彼が関わった証拠も残さずに闇金を警察に突き出し、

アクセルから追い出すことなど彼には容易だった。

「お、おう。…ただの変態じゃねえなお前」

ダストは警戒を滲ませる目で彼を見た。

彼からすればこれからは道化として振る舞うのに、ダストのこの反
応は不味かった。

ダストは良くも悪くも影響力が強かった。

彼は、遠目からダストを観察していたのでよく知っていた。

あのドM来たら、こいつに投げれないか。

そう口に出しそうになり彼はまた自分を殴った。

ダストは急に自分を殴り出した彼を変態で見る目になった。

だから、彼はこの瞬間、全力で誤魔化すことにした。

「当然だ。我こそは真なる魔王。あらゆる手を使い、弱みを握り、掌握する者である」

彼は、大振りな仕草を行いながら、注意を惹きつけた。

ダストの彼への疑いを全力で誤魔化した。

案外、めぐみんで対処したこの狂人設定は使える。彼はそう思った。

「ああ、頭がおかしいのか、普通に同類で集まっているのか」

ダストも納得してくれたようだ。

ダストは彼を馬鹿を見る目になった。

彼は安心した。とりあえず、この方針で行こうと彼は決めた。

そして、ダストにはいつか同類呼ばわりした件について聞いたただすことにした。

ダストの不幸は全てここから始まった。

駄女神経由で、悪魔以上の悪魔がダストで遊ぶ『愉悦の物語』がもうすぐ幕を開ける。

それは腐女子界に永遠不滅の物語になってしまうことをダストも彼もまだ知らない。

.....

翌日。

深夜の時間帯に彼は幸運がきちんと作用していることを確認できた。

具体的には神器を取り出したり、入れ戻したりしてスキルの効果や深夜に徘徊した際の差を確認した。

実験の結果。彼は血だらけになったが、クリエイトウォーター等で完全に隠蔽した。

血は伝を使い、補給した。

彼は、血液型判別法は確立済みだし、献体とは取引済みだった。

彼は、ダストに情報を教えたことを若干、後悔した。

闇金を正面から脅して、彼が乗っ取る最大のチャンスだった。

…彼は本当に残念に思った。

「…ねえ、昨日何かしていた?」

アクアが珍しく何かに気が付いていた。

なので、彼は凍ったままの魚をアクアの前に出した。

「ちよつと…どういうことこれ。そのまま食べろってことかしら!」

彼はそうだそれを朝食として、それを食えとアクアに言ってやりたかった。

だが、それよりも不味い事実気がついた。アクアは今まで彼の深夜の行動に気が付かなかった。

いや、気がついていたら可能性もなくはないが彼を不信に思う様子はないなかつた。

アクアに彼が何かをしていたと、バレかけたことの方が不安になつ

た。

神器の幸運は、彼の望む幸運と致命的にズレているかもしれない。

彼はそう思った。神器の元の持ち主は思うが儘生きたという話と全く違う。

彼は所有者が違う劣化のせいで、完全に効果が変わっていることに気が付いた。

：彼はアクアの思考誘導案を練らなければならなくなった。

彼は女神エリスが先輩の神であるアクアを監視に使うつもりなのだと推測した。

『残忍で狡猾だから気をつけなさい。エリスはあざといわ。だから国教になれたのよ』

やはり、アクアは正しかった。

このような弊害を誘発する神器は計画にとって危険だ。

：だが、修正された計画にはこの神器は必要不可欠だった。

彼はアクアの語る女神エリスについて、

もつとすっかり聞くべきだったとやや後悔した。

何せアクアとエリス神は先輩後輩の間柄なのだ。彼は自分の愚かさを悔いた。

そのことに関しては、本当にアクアを信用すべきだったと思った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

朝食の魚を炙ってアクアと共に食べた彼は冒険者ギルドに来た。

金がないから。アクアのせいで。

昨日のエリス神との取引後、彼はこの日、氷の魔女ウイズと接触する予定だった。

彼は、アクアは彼女の店で適当にあしらえば魔王軍との密約についての相談等、バレないだろうと思っていた。

彼の作成する商品の情報を提示し、彼はウイズと取引する気満々だった。

鍛冶スキルは取得済み。商品は本来作って持ってこれた。

だが、ウイズと会わないことにはわからない。彼はまず対話を求めている。

事前情報に欠けるところがあるが、ウイズが『善人』なのは確定なので問題ないと判断した。

何より現役時代バリバリの武闘家だったそうだ。

ウイズは話によれば、

あの過激思想のエリス教に被れ、魔王軍と戦いまくった歴戦の強者と聞いていた。

何でも相当な切れ者だったらしい。彼は大雑把な情報からでも読み取れる女傑を想像した。

伝聞のポンコツ店主は何かの間違いか偽りの姿だろうと彼は推測した。

魔王軍と取引している以上、善人で優秀な人材ならば偽りの姿を容易にできると彼は確信していた。

故に、魔王軍との取引も不本意な可能性が高いと彼は判断していた。

少なくともウイズの現状を察するにその可能性が高かった。
彼は一応、幸運のステータスも本当であると確認できたので、ウイズに会っても問題ないと判断していた。

…だが、死活問題で金がない以上、その予定は延期になった。

.....

めぐみんは彼とアクアを待っていた。

めぐみんは昨日の魚屋でのことなど知らないと言わんばかりに、堂々と冒険者ギルドで彼らを待っていた。

流石は勇者候補。一切、罪悪感なしか。

「今日、稼いだら、一緒に泊めてくれませんか？宿代がかかるので」
めぐみんは彼にそう言った。

昨日のことなど微塵も感じさせないこの娘。なんという胆力だろう。

…この太々しきは、彼の求める理想の勇者だった。
彼はますますめぐみんを気に入った。

そんな彼のいい気分が、台無しになる声が届いた。

.....

「………すまない、ちよつといいだろうか……?」

ダメです。ダステイネス家に帰れ。

彼は本気でそう思った。

彼はこの遭遇を女神エリスからの嫌がらせだと確信した。

「ドMはお断りなんです。家に帰りなさい」

彼は頭がパーになって言ってしまった。心の底からの本音を。

…彼は最悪の答え方をしてしまった。

これでは不味いと彼は確信した。してしまった。

「んん…!!?やはり、私は間違えていなかった…」

あつ、ヤベエ。彼はそう思った。

思考の言語が貧弱になるほど焦った。

彼は、目の前の女騎士がある意味、彼の真実にたどり着いたことに悟った。

…彼女が変態であるが故に、

「…あなたは、どうみても噂に聞くマゾヒストではない!…私にはわかっていた」

ああ、言葉だけ聞くと、自分をわかってくれた女性になるな。

彼は遠い目をしながら考えた。

なお、めぐみんとアクアはこの光景には流石に呆然としている。さもありません。

「あなたは、それ以外の行動が、完全なるサディストだ!!畜生だ!!」
そう目の前のダステイネス家の『恥』は周囲を憚らずに叫んだ。

彼の計画していた道化像にひびが入る発言だ。
下手人は何としても見つけ出す。彼は誓った。

：運の良いことに周りに誰もいない。そう幸運なのだ。彼には有り得ない幸運だった。

神器を身に着けてなお、彼には欠如していた幸運だった。
故に、犯人は間違いない。

彼はクリスを血眼で探した。

あの邪神はどこだ!!

彼は激怒した。常に計画を壊しまくるあの邪神をその場から動かない範囲で探しまくった。

すると、クリスが冒険者ギルドの扉から現れた。

こちらを見ると、さらに女騎士を見つけると、全力でこちらへ向かって走ってやってきた。

そして、叫んだ。

：『友人』と、同じく人目を憚らずに。

「ダクネス―その人には近づいちゃダメって言ったでしょう!!」

クリスはかなり切羽詰まった様子で女騎士ダクネスに掴みかかった。

迫真の勢いを感じさせてダクネスを止めようと頑張っているように見える。

だが、彼は知っている。

目の前のクリスの正体が『幸運の女神』であり、このような醜態はありえないことを。

何て白々しい。真に迫っているだけに彼は本気でそう思った。

…彼は女神エリスを、やはり邪神だと確信した。

確かに、このダステイネス家のお嬢様の能力は、彼の計画に合う。今からでも修正は確かにギリギリ可能だった。

…だが、彼は知っているこの女騎士、ダクネスは致命的な変態だということ。

「さて、クリスさん。私は知っている。

このド変…お嬢さんと私を敢えて合わせるように誘導した。

まさに、あなたにこそ、真なるDS。

ダクネスさん。クリスさんの方がきつとあなたのためになります」彼は演技を辞めて『素』で返した。

もう神罰など恐れはしない。彼はそれくらい激怒していた。

「ああ…もう…昨日もアレそのまま渡しちゃうし。どうすれば良いの…」

悲壮感漂わせるクリス。

完全に、女神エリスになっている。

だが、彼は知っていた迫真の演技だ。

ここまで計算済みの行動であるはずなのに、女神エリスは、まるで被害者にしか見えない。

「ぜひ私を…ぜひ、私をこのパーティに入れてくれ!!」

変態、ダクネスは平常運転だ。

.....

彼はこのお嬢様を調べていた。

ダステイネス・フォード・ララティーナ。

貴族の社交界では花形。仲が悪い貴族もたった一人。

だが、それ以外の誰にも優しく振る舞える上に立つ者としての『才』
を持つている。

王家とも親密であり、エリス教の熱心な信仰者。

庶民の盾であろうとするその姿はまさに、理想の女騎士の鑑。その
ように見える。

：客観的評価はそうなっている。だが、彼だけは違った見方ができ
た。

父親が本気になって隠蔽工作をしていたから逆に、容易にわかって
しまった。

この女騎士は冒険者になった動機がR18に該当する目に逢いた
いとかいう変態だ。

彼には本気で理解できなかった。このマゾヒズムの塊は恐ろしい
程完結していた。

彼はダステイネス・フォード・ララティーナを分析していて気が付
いた。

ダクネスという極めた変態の真実を知ってしまった。

だから彼はダクネスを避けに避けまくっていた。

「おお、良かったじゃない！」

あなたが、変態でも受け入れてくれそうな感じがするわこの人!!」
アクアが祝福の言葉が彼を傷つけた。

彼は目の前の、このド変態と一緒にしないで欲しかった。

「……フッフ、前衛がついに来ましたね。さあ、魔王討伐の始まりですよ!!」

昨日、彼が狂人を演じたせいで、テンション上がっている勇者めぐみん。

だが、違う。こいつじゃない。彼はそう言いたかった。叫びたかった。

だが、確かに揃ってしまった。

……彼はいつか人員を交代してやると決意した。

「よし……盾になる騎士がきた。使い倒しても女神エリスが、何とかしてくれる。」

だから、全く問題のない。馬車に引きづって囚にしても良いと『神』が保証してくれた!」

彼はこれから行われる全ての惨劇を、全部『女神』エリスのせいにすることにした。

実際、間違っていない。

「おお、良いこと言うじゃない! そうよ! 全てエリスのせいにしなさい!」

この『女神』アクア様が保証するわ! じゃんじゃんやんなさい!!」
アクアが賛同してくれた。

……しれっと『女神』言うなど彼は思うが、彼の、狂人の仲間だ。

…全く問題がない。悲しいことに。

「……あの私はエリス教徒なのだが……」

変態はこういうところは『素』で真面目だと彼は思った。

その真面目さを何故、性癖にまで反映させないのだろうか。

彼は今まさに地べたに転がってジタバタしているのが、
貴様の信仰する『神』だと言ってやりたかった。

「さあ、いくぞ！… さて、ダクネス。

とりあえず死ぬ一歩手前な囃役と死なないけど苦しい囃役どちら
が良い？」

彼は全ての思考を放棄した。

それがこの場では、最適解だったから。

「…くっ！どちらも甲乙つけがたい！やはり、私の目に、狂いはなかつ
た!!」

ダクネスはその狂いまくっている目で叫んだ。

本当に、何で、今日に限って人がいないのか。

いつもなら、彼の変態疑惑の際には、必ず人がわんさかいるのに。
彼は世の理不尽さに怒った。

彼は、その幸運にイラツときた。

…このお嬢様の本性をアクセル中に、本気でぶちまけてやりたかつ
た。

真面目に塩漬け依頼のグリフォンとマンティコアの同時討伐をし

てやろうかと彼は考えた。

幸運がどうにかなった以上彼にはこれくらいは容易だから。

.....

：受付のルナ女史に止められてしまった。
流石に即席のチームに任せられないという。

だが、彼は言いくるめる自信があった。

ルナ女史等、婚活の場でも彼が適当に設けるなどと嘯けば容易に動かせる。

だが、そう思ったらクリスに邪魔をされた。

彼はクリスから盗賊スキルを教わる条件で諦めた。

幸運値が上がった彼ならば、魔王の娘をステイルで剥けば詰みになる。

その他色々使えた。

少なくともデストロイヤーは詰みだ。デユラハンも容易だった。

彼はできれば、デユラハンのスキルを覚えたかった。

故に、彼はこの提案を受け入れた。

：彼の盗賊の関係者達は、彼に盗賊スキルを教えることを拒否していたから。

だが、彼を含む、パーティの四人全員が、クリスを非難する目で見
た。
もう既に彼の作戦を聞いていたからだ。

誰もが得をする完璧なプランを邪魔された。

約一名は性癖と引き換えに危険に晒されるが、ギリギリセーフなのにと彼は思った。

全員がため息をついた。

「ねえ。待つて！あたしが正しいよね！常識なのはあたしだよね！！

そんな滅茶苦茶な『作戦』認められるわけないでしょう！！」

クリスは常識とやらを叫ぶが、彼からすれば成り立つのであればそれが常識だ。

故に、彼は常識という概念をクリスに語って聞かせることにした。

「非常識というものは、大概未知の場合を言います。

未知を既知として、あるべく姿に戻すこと、常識にすることこそ。

本来、『冒険者』のあるべき姿だ！

滅茶苦茶なのはあなたです！クリスさん！！」

彼は、本気だった。少なくともこの言葉だけは間違いなく彼の本音だ。

「そうよ！そうよ！」

アクアが賛同する。

本当は是非、神として後輩を叱ってやって欲しい。

この不条理で非常識な女神エリスはどうして常識をはき違えているのか彼にはわからなかった。

「ええ、そうです。おかしいのはクリスの方です」

めぐみんも同意する。流石は勇者だと彼は思った。

「そうだ！クリス！止めてくれるな！！

初対面の、私の能力を完全に見極めて、

ここまで限界まで扱き使おうとする『畜生』を止めてくれるな！！」

やはり、変態には彼の言葉が通じない。

それでは言いがかりだと彼は思った。まるで彼が本物の外道のようだ。

「なんでなのよー!!!」

クリスが叫ぶ。これは『素』の叫びだと彼は確信した。

初対面で完璧な偽りの女神様を演じたので、彼には、
どうも目の前の存在を信じ切れないところが多い。

だが、これは間違いなく女神エリスの素だと彼は確信した。
間違いないはずだが、一体どこで気に障ったのか。

彼は常識を説いただけ。つまり、その前にヒントがあるはずだと考えた。

彼は女神エリスの弱点を知りたかった。

彼に、もう、このような『想定外』を起こさせないためにもなるべく知りたかった。

彼は、変態と遭遇してしまった不幸などを嘆きはしない。

…悔しいことに、彼の計画に沿う能力の持ち主ではあるからだ。ダクネスは。

変態でなければ、彼がスカウトに向かうくらいに最適な能力の持ち主だ。

例えば、あの女神エリスを相手にしても、逸材。完全に振り切った能力の持ち主。

世界に二人としないだろう。

あの、もうすぐやって来ると彼がほぼ確信している魔王軍幹部ベルディアの本気すら耐えそうな頭のおかしい防御力だ。

：最も、変態というのは、彼の『想定外』に行く可能性が高いから、本当は嫌だったが。

別の人材を用意していた。本来の計画では、彼に入って貰うつもりだった。

：勇者としてはめぐみんと比べて三流かもしれない。

だが、腕は一流の剣士を騙す計画がパーになった。

条件は全て満たしていた。

：後は時間をかければ、全く問題なかった。

彼はまた女神エリスに計画を邪魔されたことに恐怖より、今度は、怒りを覚えた。

女神エリスに恐怖し過ぎて、反転したのだと彼は冷静に分析した。

アクアの教育もめぐみんの教育は良いと彼は思った。それは最初から計画通り。

だが、致命的な変態のダクネスを教育しろというのは彼の限界を超え始めていた。

段々無理ゲーになってきたことを彼は悟り始めた。

だが、まだ、まだギリギリ許容範囲内だ。彼はそう思いこんだ。

彼は、全てを演じ切って見せることを自分自身に誓った。

最も、彼の限界を超える存在は最初からいたのだが、彼は気が付かなかった。

第八話 死の宣告

興奮するクリスを宥めて、彼はクリスから盗賊スキルを教わった。女神エリスの取り乱しぶりに、彼は彼女の弱点を探すのを途中で完全に辞めた。

この展開は作られた物とはいえ、あそこまで取り乱すクリスは見えて、

彼は罪悪感を覚えてしまった。

そもそも、自分がいなければ、

こういう策略を、女神エリスがしなくても良かったと気が付いたらだ。

『友人』ダクネスまで利用した計画等、流石に、女神エリスと言えども、心から乗り気なわけがないと彼は思った。

彼には『友人』がない……。いなかった。

だが、彼に友人が、もし居たとしたら、文字通り世界を、全てを敵に回してでもなりふり構わずに守っただろう。

生前は、その思いを利用されたと知ったが、

彼はその思いからの行為自体は悔いてはいなかった。

そこまで『同級生』を暴走させた彼自身が一番悪かったと反省していた。

今わの際の死の瞬間も、現在もそう思っている。

彼は、そこだけは確信していた。

彼が、欠陥品なのは、異世界に来て行った行為の、全てが肯定して

いた。

彼は、取引と評して、数々の組織の弱みに付け込み、アクセルをいつでも支配できる体制を整えていた。

さらにはいくら本人の同意があつたとはいえ、科学と魔法の実験体まで用意した彼は完全に外道だった。

少なくとも本人が教科書で学んだ知識と照らし合わせれば、そうだった。

彼は自分が、人とは違う異常者だったと皮肉にも死んでから『気が付いてしまった』。

だから、彼は最短で魔王討伐をする。

アクアを教育し、天界に返し、全てが終わったら、

必ず魂ごと、消滅することを女神エリスに内心で誓っていた。

これだけは、彼自身ではなく、他人に誓った。

.....

女神エリスから、この神器を貰った以上、この結末は変えられないと彼は確信していた。

その証拠に、今まで、彼の発言を一度たりとも、女神エリスは否定していなかった。

彼は、今までの時間があればいくらでも『消滅』を否定できたのに、それをしないというのは、どうしようもないポンコツ。

…彼は、それは、アクアくらいしか有り得ないと思っていた。

故に、女神エリスなら有り得ない。

女神エリスは決してポンコツではなかったから。

彼女は彼を騙せるだけの智謀と計略ができる『神』だから。

…清濁併せ？む恐ろしい神だから。

彼の論理は彼の頭の中の情報だけみれば、ほぼ万人が納得するようなものになっていた。

偶然にも。…ある意味、幸運でもあった。

誰もそのことに気が付くものはいないが。

.....

彼は、クリスを宥めずかせて、帰っていただいた。

その際に、彼は、クリスにダクネスを必ず死なせないことを約束した。

「ねえ！それってダクネスに、死ぬ以外のことはさせる気なんじゃないの!!」

クリスの戯言は無視した。

そのために、ダクネスを寄越した癖に何を言うか。

彼は質問と確認してから、クリスにお帰り頂いた。

本当に彼は、『仲間』を死なせる気など、微塵もなかった。

それは、水爆などという馬鹿げた案を考えていた時ですら、論外だった。

彼が死んでも、仲間の死など考えたことすらない。だから、世界を裏から支配しようとしたのだから。

…幸運がなかったというのも多分にあるが。

彼は、ダクネスのドMは最大限利用させてもらうが。
正直、あんなに都合の良い相手、恐らくこの世に存在しないと彼は
確信していた。

ダクネスは、生まれ持ったステータスも、スキルも性癖も合致して
いる恐ろしい変態だった。

彼は、ダクネスを神が生んだ逸材だとすら思える程評価していた。
：勿論、悪い意味で。

彼は、多少痛い目を見させて、ダクネスの性癖が少しでも矯正して
くれることを願っていた。

正直、無理だろうと彼は思った。

だが、現代日本で学んだ知識を活かせばきっと矯正できるはずと彼
は自分に言い聞かせた。

彼はそう思い込んだ。

だが、正直、匙を投げたかった。

彼は無理難題を押し付けてきた女神エリスを恨んだ。

彼にとって、ダクネスの矯正など、

神器と引き換えとはいえ、ギリシャ神話並みの理不尽だった。

ヘラクレスの12の功業並みのキツさだと彼は思った。

そもそも、彼は精神科の医者ではない。ダクネスに関しては本当に
扱いに困った。

.....

クリスから盗賊スキルを伝授された彼は、もはや、魔王軍幹部ベルディアがいつ来ても勝てる状態になったと確信した。

暇があれば、あのダンジョンにアクアを連れて行くことが可能だと思っただ。

もし、キールがただのアンデッドではなく、リッチーだったなら、あのスキルを教えてもらえるかもしれないと彼は考えていた。

過去の文献を読んで、彼はあの『時代』の魔法使いならば、リッチー化の魔法儀式が確かに存在していたことを知っていた。

今はエリス教がその魔法儀式を完全に滅してしまっていた。故に、存在しない。

いたとしても、恐らく、邪悪な存在しかいないだろうと彼は推測している。

悪魔と取引でもしない限り再生不可能なロストテクノロジーだった。

現代では、ほぼ不可能な、取引可能な善性のリッチーがいる可能性が彼には、それしか見つからなかった。

『キールのダンジョン』

その昔、とある貴族の令嬢に恋をした国一番の魔法使いキールがここを作り、

立て籠ったという伝説があるダンジョンだ。

アクセルの街から半日かけて山を登り、麓の獣道を過ぎた辺りにあるというダンジョン。

攻略がとつくの昔に終わっている練習用ダンジョンと化している
と、

彼の裏で取引している、盗賊関係者から念押しされていた。

盗賊からは、そこへ行っても、意味がないと何度も彼は言われていた。

そもそも、その可能性があれば国が動いていると彼は馬鹿にされた。

だが、ここへ、アクアが入れば、何か反応するかもしれないと彼は考えた。

彼はその可能性に懸けたかった。

希望的観測過ぎるが、彼は、その一手が必要だった。

どうにかして、彼は、欲しかった。

『ドレインタッチ』が。

これさえあれば、彼は常時戦闘が可能だと確信していた。

冒険者の低ステータスでは、必ず限界があった。

魔力などを補うためには、マナタイトの外付けやアクアの回復魔法
よりも、

彼はそのスキルがどうしても、欲しかった。

だが、それは落ち着いてからだ。

まず、ダクネスとめぐみん自身を知らないといけないと彼は思った。
た。

彼は、時間を急ぎ過ぎていた。

そして、彼はそれをわかっていた。

.....

彼は、新たにパーティにダクネスを加え、

四人のパーティで、何の依頼をするか話し合っていた。

彼は『ルーシーゴースト』や『安楽王女』等を提案した。

どちらも、彼の想定する勇者の逸材のめぐみに非情さを学ばせる素晴らしい依頼だったからだ。

何故か、どちらも、ダクネスに難色を示された。

過激なエリス教徒なら、即座にルーシーゴーストに食いつくと思っ
ていた。

.....

彼は、実は、クリスにルーシーゴーストのことを誤魔化して、
返す前にこっそり確認したアンデッドや悪魔についてどう思うか
を尋ねていた。

「アンデッドや悪魔なんて滅ばばいいと思うよ」
即答していた。

彼は、あまりに醜態を晒す女神エリスを見て、
ひよっとして全て自分の勘違いの可能性を思いついた。

中世故に、情報が間違っていたら、アクアの言うエリス像が偶々合
致していた可能性があった。

故にクリスに『過激思想』がないか確認した。

だが、女神エリスは心の底からそう発言していた。

誰から見てもわかる程、彼が何当たり前のことを聞いているのかわからないとキョトンとしていた。

彼はここまでの狂信者は前世でも見たことがなかった。可愛らしい顔をした純粹無垢な狂信者クリスだった。

彼は背筋が一瞬だけ凍った。

彼からしてもこの目の前の存在は恐ろしいくらい狂気に満ちていた。

この内心は、幸いにも女神エリスにはバレていないと彼は悟り、ホツとした。

何があるうとも、本当に仕方がない理由があったとしても、

アンデッドなど、滅ぼしてからあの世で聞き取りを行えば良いと彼に、クリスは断言した。

彼は、自らの思い違いを恥じた。

素直にクリスに謝った。

今のクリスの行動を見て、彼が女神エリスを、物凄い誤解をしてしまったことを心から詫びた。

「そう！良かった！…じゃあ、ダクネスに危険なことはさせないでね？」

クリスから満面の笑みで言われた。何故かとても嬉しそうだ。

この勘違いすら、全て計画済みか。

ここまで喜ぶ人を、否、神を、彼は見たことがなかった。

…彼は怒りよりも恐怖がまた出てきた。

純粹悪だった。

女神エリスは。彼はそう改めて確信した。

が、彼は、それを絶対に表に出さない。

彼は、女神エリスに隙を見せたら、不味いと判断した。それほどまでに、彼女の演技力は凄かった。

彼はそういった内心を億尾も出さずに、答えた。

「それはそれ、これはこれです。

というか誘導しないと寧ろ危ういかと。

：はつきり言つて、ダクネスはもう手遅れでは？」
彼の素直な疑問にクリスは目を逸らした。

あの『女神』エリスですら、彼を完全に騙し、たった今も彼を勘違いさせた、

この女神ですら不可能な難題を押し付けられたのだと、軽く絶望した。

.....

アクアはルーシーゴーストについては、乗り気だった。

だが、アクアは、『安楽王女』に関しては嫌がった。

アクシズ教の教義には、モンスターについては記載されていないことを彼は知っていた。

というか、モンスターを性的に愛でるような記載の文献は全てアクシズ教由来だった。

：何か関係があるかも知れないと彼は保留した。

アクアにはどうもシヨタコンの気があるのは、彼は気が付いていた。

…そこだけ、発言に勢いがあった。
アクアが語る美少年への特に短パンへの魅力に関しては。
故に、もはやアクアが、同性愛のモンスター愛者でも彼は気にしなかった。

性癖ぐらいは、ダクネスクラスじゃない限り問題ないと彼は思っている。

「ちよつと。何か今、物凄い勘違いされた気がするんですけど」
アクアが突然そんなことを言い出した。

「いや、さつき、女神エリスが恐ろしい存在でないと勘違いしていたから多分それかと」

彼は、神違いだろうと思った。

「それは、アクア様の従者としては見過ごせない勘違いね！」
彼は、アクアからどうも従者若しくは、保護者目線で見られていることに気が付いていた。

…そう思うなら自重しろと言いたかったが、放置している。

寧ろ、そのことに気が付いてすぐに、彼の変態化をどう対処するのか、彼自身を教材にした。

だから、アクセル中から、彼は変態扱いされていた。
だが、アクアは彼に対して何もしない。

それどころか、彼の知らない新たな性癖疑惑を毎日撒き散らしていた。

…放任主義も甚だしく、それ以上に酷かった。
アクアには、年単位での意識改革が必要だと彼は悟った。

めぐみんは、この依頼を提示してから沈黙した。
めぐみんの過去に何か関係があるのかもしれないと彼は察した。

ルーシーゴーストが信仰している神、
傀儡と復讐の神『レジーナ』と何か関係があるのかもしれないと彼は考えた。

故に、彼はめぐみんのことを知るまでは依頼を保留することにした。

彼は、流石に、仲間達の嫌がることはしたくなかった。
勿論、必要ならやるが。

仲間の、生死に関わるレベルなら彼は間違いなくやった。

.....

そうやって、グダグダ決まらないで悩んでいる四人。

すると突然、誰かが来た。

「すみません！緊急案件です！……こちらへ」

ルナ女史から彼は声をかけられた。

そして、ギルドの奥へ案内された。

この一連の流れは、あからさまにアクアを始め、皆に怪しまれた。

…段々集まって来た冒険者たちにも見られてしまった。

彼の『計画』外のことが発生した時のみ、こういうことが起こる予

定ではあった。

だが、今回に関しては、彼は容易に推測できた。

これは、彼にとっても計算外に早い緊急案件だった。

キャベツ収穫の後に来ると彼は想定していた。

魔王軍幹部は。移動距離的に考えて。∴進軍速度的に早すぎた。

.....

彼は、冒険者ギルドから、魔王軍幹部ベルディアの接近の報告を受けた。

故に、彼は、策を弄した。計画済みの修正案を。

彼は、最初に、魔王軍幹部ベルディア討伐計画をパーティの四人に話した。

受けて貰えるか彼はまだ信用が足りていないことに焦っていた。

だが、めぐみんとダクネスは何故か協力を約束してくれた。

彼に取っては、ほぼ初対面の畜生に協力してくれることが不思議だった。

だが、その疑問は放置した。

実は既に彼の計画外、三流勇者の引き留め及び仲間に入れることが破綻していた。

あまりにもベルディアは彼に取って早すぎた。

ベルディアの進軍スピードは、これまでの文献に比して早すぎた。

彼の想定外だった。

彼の理論値ギリギリ以上にベルディアは急いでいた。

彼は計画の話が続けた。

無茶苦茶な協力を約束してくれた仲間を疑う真似は彼の信義に反した。

だから、彼は敢えて理由を聞かなかった。

アクアは遠く離れたところからセイクリッド・クリエイト・ウォーターを打ち込んでもらう。

アクアの幸運最低値を、彼は最大限除去したかった。

だから、アクアには、離れたところから魔法を使ってもらおう。

魔法を打ち込んだら、彼の方向へ、こちらへ来てくれるように言った。

アクアはこの作戦に抗議した。

自分が安全なところで、離れていても、

たった『四人』だけで、魔王軍幹部ベルディアとは戦いたくないらしかった。

だから、彼はアクアを、二人だけの空間に連れ込んで説得した。

彼はアクアを捲し立てた。

「魔王軍幹部ベルディアの狙いがアクアな可能性がある。…これは、飽くまで可能性だ。」

時期的に、『女神光臨』で、アクセルに来た可能性がある。」

彼はゆんゆんの話からほぼ確信していたが、疑わしい神聖なオーラなどゆつくりと来ると推測していた。

彼は魔王軍を舐めていたと警戒レベルを最大限に引き上げていた。

「…偵察任務だ。ベルディアの目的は恐らく。」

だから、できる限り、ベルディアは早く倒したい。

そのためには、ベルディアの弱点の流水を、

洪水クラスで起こせるアクアの協力が必要不可欠。

…というかそれ以外無理だ」

彼は最悪の場合の計画として、

最初の頃、アクセルにいる初級魔法使い達のクリエイトウオーターで対処を考えたが、不可能という結論に至っていた。

流水が弱点でも、ベルディアの身体能力的に当たらない。

さらにいえば、駆け出し冒険者の街の冒険者たちでは『死の宣告』の恐怖に耐えられない。

彼は、数多の勇者候補たちを文献から消し去った死の恐怖に駆け出し冒険者達、中には中堅クラスもいても勝てないと悟った。

彼は、この世界に来てから恐怖の活用法を改めて学んだ。

故に、この世界の住民の精神力と元の世界の住民と比較できていた。

だから、アクアの洪水クラスの流水しか手がなかった。

彼には本当にアクアを頼るほかなかった。

彼の計画の初期に来てしまうベルディアに関してはどうあがいても無理だった。

「だが、アクアには安全な場所について貰いたい。

アクアの存在が魔王軍に漏れてしまうのをなるべく避けたい。：少なくともまだ早い」

彼のこの発言でアクアの顔色が若干赤くなった。

彼はアクアが自分を馬鹿にされて怒ったのかと思った。

彼には微妙にアクアが読み切れない。

：アクアはころころ感情が変わり過ぎて彼に取って天敵だった。

だからこそその策もあるが、この初期段階ベルディア戦ではまだ使えなかった。

彼はアクアのことをまだ知らなすぎると確信していた。

「俺が、アクアをアクシズ教と接触させてなかったせいで、アクアの安全が保障できない。

とにかく、時間がない。：俺のせいで本当に申し訳ない」

彼は全力で謝った。：アクアを利用することを。

本当に時間がなかった。ベルディアは彼の想定を上回った。彼は魔王軍の本気がこの段階で出るなど想定外だった。だが、まだ彼の計画の修正範囲内だった。

彼は最悪の進軍速度からの計画の前倒しでギリギリ対処可能だった。

しかし、あらゆる計画上の最大値をベルディアは彼に突きつけていた。

…彼はこれでも、アクアが断るなら、

アクセルを巻き込む形でめぐみに爆裂魔法を廃城に毎日打ち込むつもりだった。

街への言い訳は容易だ。彼は狂人なのだから。想定される街への被害、借金すら飲み込もう。

それは、本当に最悪だが。それはそれで仕方がないと彼は思っていた。

「わ、わかったわ。き、協力しようじゃない！この水の女神アクア様が！」

彼は、女神発言を辞めろと言いたかったが、納得してくれたようなので、心の底からホッとした。

めぐみんとダクネスはベルディアとの本格的な戦闘まで待機するように依頼した。

彼は、最初にベルディアと一人で話をすると、三人に聞かせた。

流石に、これは皆、反対したが、これは彼の最初の計画通り。

最低限以上の幸運、爆裂魔法の使い手、剣士か騎士。それと金。

この四つがあれば、余裕の計画だった。

.....

先ず彼は、なりふり構わず、闇金から金を借りた。

低金利で借りた。取引等容易だった。

というか、彼は途中で面倒臭くなり、支配した。

アクセルの裏社会の住民の、恐怖の対象の一つである闇金を。

神器による幸運により正面から取引できるのでから、

支配した方が楽だと無茶苦茶なことを考えていた。

さらに、計画通り、冒険者ギルドに貯蔵していた金属を買い占めた。

彼の取得済みの鍛冶スキルで最低限、簡単な金属板に加工を施した。

彼は、それをアクセル郊外、平原に作成し始めた。

設計図通りにそれは完成した。

表向き、闇金から借金で購入したマナタイトで、

彼はクリエイトアースを強化して外見を完全に誤魔化した。

適当に雑草を混ぜ込めば、アクセルのことを知らない魔王軍を容易に誤魔化した。

全て、一日かけて、突貫工事で作成した。

流石に、一人では無理なので、他三人、皆にも協力して貰った。

.....

彼にはステータスの『筋力』が足りなかった。情けないことに。

レベルアップしても用意した全て金属板を持ち運べなかった。

故に、四人で運んだ。そうせざる負えなかった。

アクアと彼の、外壁工事の経験が存分に発揮された。
：アクアの権能は、防壁を作るのに最適だった。

築いた外壁の、水分を簡単に蒸発させられるのだ、アクアは。

アクアのこの能力がなければ、彼は人を雇うか、数日かける計画だった。

アークウイザードなのに、結構筋力があるめぐみんにまで協力を要請した結果、

全てが、一日で済んだ。恐らく神器の『幸運』もあつた。

予定通りにことが進んだからだ。

魔法やスキル、道具を準備していたが、それでも予定通り過ぎた。

彼は、流石に、工期は遅れると思っていた。

一日でできるのは、想定内の想定外だった。

アクアが一切ふぎけなかったことが何よりも大きい。

普段ならやらかすことも想定に入れた工期スケジュールだった。

アクアは確実に成長していたのだと、彼は驚いた。本当に。

彼は、この成果から、アクアの能力を、今後の計画に組み込むことを決意した。

学びを活かす経験をアクアに体験して欲しかった。

この作戦の上位互換、彼の想定する二番目の脅威。

アクアクラスの邪神との闘いを彼は想定していた。

アクアに近いチートは魔王軍にいてもおかしくない。

彼は『地獄の公爵』から類推していた。

彼に取って魔王軍幹部は判明している者だけでチート過ぎた。これくらいはいると確信していた。

防衛戦は確実に有り得ると彼は思っていた。

アクアの防壁作成能力は攻める側からすれば反則過ぎた。

彼なら対策が容易だが。マナタイト爆弾の連続投下で破壊できた。彼からすれば水爆でないだけギリギリセーフの破壊力の爆弾に改良できた。

ダイナタイトの比でない。冒険者だからできるスキルの組み合わせがあれば容易だった。

鍛冶スキルでの加工、物理学での破壊力の一点集中、初級魔法ティンダーによる遠距離での着火、潜伏スキルからの隠蔽工作等々だ。

外付けの神器を用いた幸運による狙撃スキルまであれば、精鋭部隊だろうが絶対防げない。

威力だけ見れば爆裂魔法を連発するような行為も可能だと彼は断言できた。

彼に取ってはいかなる存在に対しても、貫通ダメージのある爆裂魔法は本当にチートそのものだった。

彼ですら不可能な魔法だった。彼の破棄した水爆擬きですら起こせなかった。

彼はどうやっても魔法ダメージを含む消滅までしか再現できなかったと確信していた。

いくらでも運用可能な貫通ダメージの爆裂魔法は彼には再現できないし、これからも求め続ける理想の魔法だった。

爆裂魔法を極めたためぐみんは彼にとって偉大な勇者そのものだった。

故に、爆裂魔法を馬鹿にする風潮は無くしてやると彼は決意した。仲間のためならば、彼は神ですら喧嘩を売る決意をした。

成長する勇者めぐみんならば、彼からすれば悪意の最低ラインも良いところな技術でしかないマナタイト爆弾を遥かに上回る規模の爆

裂魔法を起こせるようになると彼は確信していた。

なお、この彼の脳内にあるマナタイト爆弾は、彼が秘匿すれば全く問題なかった。

：彼も大概チートだった。彼からすれば想定する敵がチート過ぎるのが悪いと断言した。

そして、彼のこの想定は魔王軍幹部ベルディアの早過ぎる対応で確信へと変わった。

.....

翌日の早朝。彼は、魔王軍幹部ベルディアに一人で会いに行った。

魔王軍幹部ベルディアは、進軍中だった。

アクセルからやや離れた辺りにいた。

当初の計画では、確実に拠点にするであろうアクセル郊外にある廃城ごと洪水にする計画だったが、

ここならば、何をしてでも全く問題のない平原だった。

最短で魔王軍討伐できるならそれに越したことはないとは彼は判断した。

故に、彼は一切、躊躇わなかった。

例え、腕を振るうだけで彼を殺せる存在を前にしても、彼は恐れなかった。

：自分でも不思議なほどに。

「初めまして、魔王軍幹部ベルディア様とその御一行様！

私はあなたが向かっているアクセルの名もなき、たかが一冒険者！

直接、魔王軍幹部ベルディア様とお話がしたい!!」

彼は、騎士ベルディアの進軍中に用意していた拡声器を使い、声をかけた。

ベルディアの周りには、

手下のアンデッドナイトが大量にいるが、彼は一切それを恐れなかった。

ベルディアは『騎士』だから、一人で来た彼を無碍に扱ったりはしない。

彼が、魔王軍幹部ベルディアの性格を分析した結果、そう結論付けられた。

…このような真似は、半分賭けだが、彼には神器による幸運があった。

故に、彼の、修正された計画の範疇にあった。

.....

ベルディアは正々堂々と首なし馬に乗って一人で、彼の下へと来た。

アンデッドナイトや首なし馬は、アクアの洪水で押し流す。

ベルディアを倒した後で、アクアがターンアンデッドで消滅させる予定の首なし馬。

はつきり言って、彼にとっては、ベルディアよりも首なし馬の方が恐ろしかった。

…本当に。

アンデッド達が、

洪水で流されない場合の策もあるにはあるから問題ないと言えなくもないが。

「さて、ベルディア殿。あなたに耳よりの情報がある。あなたが偵察任務に来た目的を、私は知っている」
彼はベルディアの目的をゆんゆんの話から確信している。

「ほう、あのような予言など、占い師の戯言の可能性もあったが、急がされて来てみれば…何かあったのか」
ベルディアは何やら、相当急がされたらしい。
言葉の節々から不満が言葉から彼には感じられとれた。

「…それは私の仲間が持っている。故に、あなたを通して、取引がしたい」
彼は、完全にその予言が、アクアのことだと確信した。
ゆんゆんからの話は、飽くまで彼の仮説だった。

魔王軍幹部ベルディアが、ここまで来た以上、間違いなかったが。本人の口から確認できた。

故に、彼は、ベルディアの思考を少しズラす。
者ではなく物であると誤認させる。

ベルディアが、彼の想定外の手段で、彼が万が一、失敗した場合に備えて。

だから、彼からすれば、ベルディアに取引を提案する。

一方的な。

「……………」

ベルディアは彼の発言を聞いて沈黙していた。

そして、殺気が空間を支配した。

…ベルディアは、彼の想定通りの人物像だった。
故に、彼は一切怯えない。

「…仲間を売るのか？」

ベルディアの声は恐ろしく冷たい物だった。

彼の立場でも同じことを言われたら、ベルディアと同じことを思う。

不思議なことに、ベルディアのその騎士道精神と彼の思考はその点だけは一致していた。

彼は、理解できたのが、不思議なほど、ベルディアの憤怒がわかってしまう。

「ええ、そうなるかもしれませんがね」

だから、敢えて、肯定するようにベルディアに言う。

そうかもしれない。

というのは、彼にとっては、アクアを利用している以上間違っていない。

「…俺は生前貴様のような奴に裏切られ、殺された。

…俺は、騎士から、魔道に落ちた。故に、これはただの俺の私怨だ。
身の丈に合わぬ取引を持ちかけた愚か者よ」

ベルディアの殺気がさらに濃厚になる。

彼はこのような気配を感じたことがなかった。

だが、彼はどこまでも冷静だった。自分でも不思議なほどに。

「貴様は、アクセルを、街を守ろうとしたのだろう。」

…その決断力には敬意を評する。

たかが、一冒険者が街を救おうと死を覚悟してきたと理解できる。

…今の俺には。

だが、それは、俺にとっては、決して、そう決して許せない。

…故に、絶望して死ぬが良い」

ベルディアは本気で彼を絶望させようとしていた。

ベルディアから見て、ただのどう見ても完全な弱者に、

本気で絶望を与えようとしていた。

それは、彼の計画通りでは、あった。

だが、魔王軍幹部ともあろうものが、たかが冒険者風情に完全に憤怒していた。

…彼はベルディアを生前、誰も救えなかった場合、

異世界転生などすればベルディアのようになったかもしれないと思っただ。

故に、彼は、生前であつた亡き老人に感謝した。

欠けた自分でも、人が救えたと。

この事実だけは彼の最後の救いだったから。

それがなければ、最悪、アクアが居ても、彼は世界を滅ぼしたかも知れなかったから。

『汝に死の宣告を』

ベルディアは、彼に絶望を与えに来た、死の宣告だ。

彼はこの脅威を知っていた。

あらゆる勇者の、可能性が文献から消え去った。

『死の宣告』。これは、アクアという反則がなければ解呪できない呪いだっただ。

：飽くまで、彼の調べられた範囲では、だが。

悪魔などいれば違うかも知れないと彼は思った。『地獄の公爵』など。

彼は、ベルディアからの宣告、わきあがる恐怖を感じた。

恐らく、これは死の恐怖というものなのだろうと彼は思った。

だが、彼の思考は死を前にしても、一瞬でもブレなかった。

寧ろ想定されていた、頭がパーになりそうな感覚が掻き消えた。

生存本能から、脳が活性化したのだと彼は推察した。

彼は、恐怖こそすれ、怯えなかった。

自分に『死の宣告』をかけて日々を送ろうかと思うくらい、平然としていた。

頭がパーになって自分を殴るのはかなり痛かったから。

神器前、どれくらいでパーが治るのか、

慣れるまで彼は、アクアに魔法で癒してもらっていた。

彼はそれが、内心かなり屈辱だった。

『変態プレイで、治して欲しいとか馬鹿じゃないの!!』

彼はガチでキレかけた。アクアの嘲笑に。

魔王軍幹部ベルディアの『死の宣告』を受けながら、

そんなバカげた日常を思い出しつつも計画とのズレを彼は修正し

ていた。

だが、ベルディアは彼のその異常さに気づいていなかった。

「貴様とは取引せん。その情報だけで特定できるだろう。」

…精々残り三日の寿命を残してやる。

この俺、魔王軍幹部ベルディアと知って、たった一人で取引にきた
蛮勇だけは…」

ベルディアは、何か言おうとしていた。

だが、彼はそれを全く聞いていなかった。

「…フハハッハハハハハハ!!…計画通りだ!!!」

彼は、ここまで、計画通りにことが運んだことを、

欲しかった手段の一つすら手に入ったことに歓喜していた。

そして、ついでにアクアに馬鹿にされない方法も。

「な、なんだ貴様!」

ベルディアは、彼の異常さに漸く気が付いたようだ。

彼も、ベルディアが『死の宣告』を使用する思考に導くためにあらゆる口上を考えていた。

魔王軍幹部ベルディアが、彼に死の宣告を使ってくれればと計画の可能性が増えるから。

「…私はね、ベルディアさん。あなたと大体同じ経歴の持ち主なんですよ。」

恐らくは。規模こそ違えどもね。

だから、決して、私は、何があるうとも『仲間』を裏切ることはない」

彼の本音だ。

ダクネスは正直早めに配置換えをしたかったが、女神エリスの存在がある以上、彼は彼女と共に『旅』をする。

これは、もう確定事項になった。

彼は、ベルディアと話を続ける。

時間を稼ぐために。計画の内にある時間稼ぎ。

洪水への警戒。待機、発信準備。彼は秒単位で計算していた。勿論、想定外もあるので、知らせる方法は複数用意していた。

彼の計画の、想定内の最善に持ってきた以上、ベルディアとはもう少し会話する必要があった。

「例え、裏切られようが、死の絶望にあらうが一切関係ありません。

私は、必要ならば、仲間のために、命など簡単に捨ててご覧に入れますしょう。

：いや、最悪、消滅しようが、絶対に有り得ない」

彼なりの礼を述べる。ベルディアは、本当に想定通りに動いてくれたから。

『死の宣告』は頭がパーになる対策で使えることが判明した。

元々、なくても良い手段だが、この発見は彼にとって大きかった。

「そんな馬鹿な！貴様は本気だった!!俺にはわかる!!」

ベルディアは確信していた。

彼の想定通りに。勘違いをしてくれた。

だから、彼は、ベルディアに『答え合わせ』をしてあげる。

計画通りに。決して、冥土の土産などという戯言ではなく必要な行為だから。

「いや、何、嘘は言っていないだけですよ。

これまでの流れは、私目線での取引でした。

仲間を売るとかではない、一方的なあなたへの、私なりの『死の取引』だ。

さらに言えば、私の行為は、あなたからすれば裏切りに感じるかもしれないと思っていた。

だから、本気で言えるのですよ。敢えて、言ってあげましょう。

：あなたは完全に詰みです」

彼は最後の一言は言わないつもりだった。

彼自身、慢心しつつあった。

だから、気を引き締める。

ベルディアと首なし馬との連携は解いた。

彼は、恐らく、剣に手をかける。単騎で。

その緩んだ瞬間でベルディアは終わる。

もうすぐ、アクアへの合図の時間だ。

「…貴様は、危険だ。占い師の予言より遥かに優先される脅威だ。

俺の勘違いでお前を見誤った。お前は本気で俺を倒すつもりでいる。

この、魔王軍幹部ベルディアを。
本当にどう見ても雑魚の冒険者なのに、だ。

全ては、『仲間』を守るために。

：魔王軍幹部として、俺を最後に救ってくださった、
魔王様に仕えるが故に、謝罪などしない。いや、できない。
故に、お前はここで、俺の全てを懸けて殺す」

ベルディアはそう言つて、彼の想定通りに、剣を抜いた。

いや、寧ろ、ベルディアは馬から降りた。

：彼を確実に殺すために、首なし馬から降りた。
完全に、ベルディアは詰みだ。彼は確信した。

よりにもよつて、ベルディアは自分から最後の、逆転の可能性を手
放した。

故に、彼はこれ以上、ベルディアと会話しない。必要ないから。

「だから、詰みなんですよ。もう遅い」

彼は発煙筒を空高く打ち上げた。

アクアへの合図だ。少し遅れてもセーフという合図。

首なし馬から完全に切り離れたから。

「…それで終いか？」

ベルディアは拍子抜けしたようだ。

まあ、彼もまさか洪水を引き起こせるなんて普通思わないだろうと
思った。

「だが、何があろうとも貴様だけは、確実に殺すことに変わりはない!!」

ベルディアは本気で殺すために剣を構える。
だが、遅かった。全ては計画通り。

「さて、デユラハン。『流水』が弱点なら『洪水』はいかがでしょうか？」

彼は、ここまでの一連の流れを計画済みだった。

彼はもつと安全策で行くつもりだった。

女神エリスに感謝した。

本当にこの神器がなければ、幸運がなければ、

『死の宣告』という可能性に気が付けなかったから。

「へ？」

間拔けな声を上げるベルディア。

その瞬間、天空から恐ろしい量の水が降り注いだ。

.....

彼は予め、浮き輪になり得る物を服の内側に仕込んでいた。

本当に、これまでの一連の流れは、何もかも計算済みだった。

クリエイトアースを使い、軽く雑草を生やした防波堤を作成した。

最も一日で作ったから、よく見れば、近くで見ればバレる偽装工作。

アクアの洪水も耐えきれぬ設計。

彼は、幸運だったから、理論値だけで行けると確信していた。

そこには、めぐみんとダクネスが潜んでいる。
彼は、洪水から、早期に脱した。

防波堤の位置、飛び出す二人を確認した。

まもなく、二人は到着する。

もう、ベルディアはチェックメイトだ。

「ふざけんな！馬鹿じゃないのか！この頭のおかしい変態！策士気どりの大馬鹿者が!!」

ベルディアは叫んだ。

ベルディアは彼から見ても、完全に弱っていた。

アンデッドナイトも首なし馬も見えない程流されていた。

彼とベルディアだけに等しい状態だった。

彼は、改めて冒険者カードを確認した。

冒険者カードのスキル取得可能欄に『死の宣告』が更新されていた。

もはや、彼にとって、ベルディアは不要だった。

「策士ではないな。俺は奇策士だ。強いて言うなれば。

…本当は、正攻法で戦いたいが、力がない。

故に、騎士殿には、これから行う非道を詫びさせてもらう」

彼はそう言いつつも、この口上はただの時間稼ぎだった。

めぐみんとダクネスが駆けつけてくるまでの。

彼はベルディアを本当に、一切無視していた。

「ステイール」

彼は発動した。

『手術』により外付けされた幸運を利用した彼自身どうかと思う反則技を。

「!!武器を狙うか!...着眼点は、見事だ。俺を、弱らせてからの武器強奪か。

だが、この魔王軍幹部の、

俺に駆け出し冒険者の街にいる者のステイールなど効くかあ!!」

ベルディアは彼のステイールに、全力で耐えようとしているが、

彼が狙っているものは違った。彼は空気など読まない。

確実な弱点があればそれを突く。

彼の本質は『外道』だ。

「.....え?」

ベルディアが間抜けな声を上げる。

ベルディアの頭部は彼の手の中に納まった。

「さて、チェックメイト。...クリエイトアース、クリエイトアース、クリエイトウオーター」

彼は、ベルディアに目つぶしを行った。

そして、全力で、めぐみんとダクネスの方向へ蛇行しつつ駆けつけた。

.....

「エクスプロージョン!!」

めぐみんは、ダクネスに何度となく、切り付けられ、彼に魔力の限り嫌がらせに等しい攻撃を受けまくったベルディアに止めを刺した。

確実にベルディアの魔王の加護の鎧を破壊するためには、騎士か剣士が必要不可欠だった。

筋力のステータスが高く、ただ目の前にある者を斬る程度ならダクネスでも問題なかった。

故に、めぐみんの爆裂魔法という反則技は、弱体化したベルディアには十分過ぎる威力だった。

「ぎゃああああああ!!」

ベルディアは最後には頭部と共に爆裂魔法で消し飛んだ。

「ふう…」

めぐみんはその場で倒れた。大変、満足そうだ。

やはり勇者の鑑だと彼は思った。

おいしいところを持っていく才能。

それを開き直る才能がめぐみんは、非常に強かった。

「…本当にこれで良かったのだろうか？」

ダクネスは、ベルディアの散り様に思うところがあるようだ。

彼は、一切、ベルディアのことなど気にしていない。

十分に話せた相手だ。

だが、魔王のカリスマは恐ろしい。彼はそう思った。

ベルディアが魔王へ心から忠誠を誓っていないければ、恐らく、首な

し馬から降りなかった。

彼の方が殺されていただろう。

無論、対策もあったが、不要だった。

「ダクネス。パーティを抜きたいとか、魔王討伐を辞めたいなら俺はいつでも構わない。

騎士道に反する行いを平然とするぞ俺は。

：必要ならば君のいう『畜生』にだってなる」

彼は『素』で話した。

彼からすれば一時的とはいえ、仲間となったダクネスに最後の、確認だ。

ベルディアに言ったように、途中で彼を見捨てるなら、それはそれで構わなかった。

彼は、自らが『悪』の才能を有しているのは完全に理解していた。

アクアに最後に見捨てられる『孤独』すら覚悟している。

でなければ、消滅など女神エリスに言い出さない。

女神エリスと言えども、計画に反しない以上、

ダクネスを連れて行かないという選択肢は存在した。

だったら、神意に逆らおうとも、『仲間』の意思を尊重したかった。

彼は、ダクネスを皮肉にも、敵であるベルディアを通して、多少理解した。

騎士には荷が重いと彼は悟った。彼の『旅』は。

「い、いや、そんなことはないぞ！あなたが私の望む『鬼畜』だ!!」

寧ろ、私が、勝手についていくつもりだ」
彼は変態に、失望した。

ダクネスは興奮していた。彼からすれば碌でもない答えだった。
少なくとも、この発言。本気で言っているダクネスは。

彼にもはや躊躇しない計画を決意させたダクネスは無視した。

だが、あの声が彼に届いた。早口言葉みたいな繰り言が聞こえてきた。

「ターンアンデッド！ターンアンデッド！ターンアンデッド！花鳥風月！

ターンアンデッド！ターンアンデッド！……」

アクアが来た。やたら生き生きとアンデッド達を滅している。

彼は、それを見て、アンデッド討伐とかしていなかったななどという、

どうでも良いことを考えていた。

.....

彼は気が付かなかった。

ベルディアは確かに、女神光臨を、

何か来たことを察した占い師に言われて偵察しに来たことがあった。

だが、ここまで急いだのには、もう一つ別な『予言』があったからだ。

……だが、占い師の予言は途中で突然掻き消えた。

だから、それを定期報告で、予言の消滅を知らされたベルディアは、アクセルへ向かうというほぼ意味のない行為に感じていた。

ベルディアは言いようのない、徒労感でウンザリしていた。

彼は、ベルディアと話していて『不満』を感じ取ってはいた。しかし、そのことに気が付けなかった。

.....

『地獄の公爵』はそれを興味深く聞いていた。

公爵は、占い師とはそれなりに長い付き合い。

公爵は、占い師の『予言』が消滅するというのは聞いたことがなかった。

占いが、外れることはあっても消えることはなかった。

「ふむ…中々どうして面白い。」

あの首無し中年が死んだりしたら、我輩が自ら行くのも良しか…」彼は、『地獄の公爵』に目をつけられた。

…彼の想定外の速さで。

…彼と言う存在は間違いなく、『世界』を動かしつつあった。

そんな彼は、アクアが三億エリス手に入ることを思い出したら、余計な事をし始めないかと恐れていた。

…ベルディアからの、死の恐怖より、そんなアホなことを彼は恐れていた。

閑話 人としての欠けるサプライズ

彼は、魔王軍幹部ベルディアが想定外の速さで現れたために、功績の押し付けの時間が足りなかった。

正直、まだ、彼とその仲間達には早すぎる功績だった。要らぬ警戒を彼はまだ避けたかった。

魔王軍の暗殺者などあれば最悪だと彼は考えていたからだ。

というか、彼が魔王なら暗殺者を育成した。

彼が魔王の立場なら情報網の構築の次に暗殺者育成をした。魔王軍幹部とは別に育成する。

この世界の盗賊スキル潜伏等とアーチャーのスキル暗視を組み合わせた冒険者ならば最適な暗殺者の誕生だった。

寧ろ、何故人類は魔王軍関係者の暗殺者育成手段として、冒険者を育成しないのか彼は疑問だった。

彼が国のトップなら冒険者の暗殺者を多数用意し、魔王軍への毒殺等を敢行した。

だが、追い詰められているはずの人類は騎士道など掲げていた。

中世らしいといえはらしいが、汚い手がこの世界の住民には足りないと思つた。

これが彼の致命的な世界認識齟齬なのを今は誰も指摘できない。彼は本当にこの世界をまだ誤認していた。

魔王軍の暗殺者は恐らくいる。

彼は現在入手可能な文献から少なくとも、ありそうな気配は感じ取つた。

アクセルの情報だけでは足りなかった。
彼は本当は国家規模での諜報機関が欲しかった。

魔王が暗殺者、つまり魔王側の『勇者』を作っても彼は問題ないと考えていた。

だが、彼が今の段階では探してもそのような存在は見つけられなかった。

恐らく、魔王軍に所属する人間はいるだろうと思った。

『転生者』だ。勿論、現地の邪教徒もこれに含まれる。

なりふり構わぬ落ちた勇者候補などいたら、人間側の戦意が失われる。

歴史にもそのような存在が確かに実在した。

だから、人間が魔王軍幹部だったとしても彼はこれっぽっちも驚かない。

…あの物語の今は亡き魔王は、確実に転生直前の彼の推察通りだ。彼は確信していた。

だが、彼はそれをアクアに確認するつもりはない。

彼は過去は過去と切り捨てた。

…アクアが知らないならそれで良いとさえ思った。

それに彼はその『魔王』に同情していない。

その話の通りなら、魔王を最後に愛してくれた存在はいたし、

魔王は最初から仲間を自分から切り離している。

彼にはその機会が生前なかった。

魔王は転生後、幸せを手に入れられる可能性に満ちていた。少なくとも

とも彼から見れば。

彼は、『愛』も『友情』もわからない。

だから、その魔王が堪らなく羨ましかった。

魔王は少なくとも愛はあった。自分の子どもへの愛は。

それは、魔王が、第三者から見て悲惨な結末でも、彼にとっては幸福に見えた。

彼が魔王なら最後は満足だと思っている。

物語で魔王がどう扱われようとも。

彼は何か欠けていた。

.....

まだ、魔王軍の暗殺者等の存在に勝てる自信は彼にはなかった。

せめて、アクアが与えたチート能力を覚えていれば話は違った。

だが、アクアは覚えていない。与えた能力も与えた神器の存在もほとんどをだ。

∴こうしてみると、神器を回収している『女神』エリスは完全に苦労人だ。

いや、苦労人だからこそ、彼に神器を与えることで、

先輩の神アクアを利用した監視網を彼に仕掛けたのだと推測した。

彼はもしそうなら、心労の原因の自分は早めに滅ぼすから、アクアだけは見逃してあげて欲しかった。

女神エリスに慈悲の心はきつとある。彼はそう信じた。

彼には恐らく欠けるものだが、エリス神は少なくとも友情を知っていた。

故に、そこまで無慈悲でないはず。彼はそう思った。

では、何故ダクネスを彼に押し付けたのかわからなかった。

ダクネスを押し付けた理由が彼には本当に謎だった。
まるで、女神エリスがただ単にダクネスの暴走を止められなかった
だけに思えた。

.....

彼は、本来であれば、ベルディア討伐において、彼とそのパーティ
以外も作戦に参加させた。

まだ危険だった。彼とその仲間達はレベルが足りなかった。
なお、アクアはもうステータスがカンストしている。

だが、彼にはそんなこと関係なかった。経験値から学べる。何も問
題ない。

実際、アクアは少しだが、確実に成長している。彼はそれは確信し
ていた。

：とにかく、時間が足りない以上、

彼は功績の押し付け相手を用意するつもりだった。

彼はそれにうってつけの人材を知っていた。

ミツルギキョウヤだ。

彼は、ミツルギなら不自然でない形で功績を押し付けられた。

実力もミツルギにはあった。功績も既にある。

まるで物語の主人公だと彼は思った。

彼が羨ましい程の善人かつ、善性の持ち主だった。

ミツルギキョウヤという男は。

彼には、それくらいの善性が欲しかった。

正直、悪の才能など彼には欲しくなかった。

僅かな幸運と欠けていない人間性を彼は何よりも欲していた。

幸運は外付けで手に入ったが、人間性は彼にはどうしても無理だった。

正直、彼の人間性は、アクアの教育に悪いと、彼は思っていた。

だから、彼にはミツルギの善性が堪らなく羨ましかった。

彼の恐れる魔王軍幹部の連携にも、ミツルギに策を授ければ、

奇襲でなければほぼ確実にミツルギなら逃げられると計算していた。

故に、本来ならば功績を押し付けたかった。

だから、仕方がなく、

冒険者ギルドそのものと彼を除くパーティーの三名に功績を押し付けた。

彼は、アクアに関しては、情報を制限した。

彼に関しての評価は『外道』な作戦で、

魔王軍幹部ベルディアを罠に嵌めたというレッテルが張られてしまった。

彼は当然な評価だと思っただけ、

今回使った計画がほぼバレていないからギリギリ許容範囲内の評価だった。

彼の癖がバレたら、彼と同等程度に情報分析ができれば、負ける可能性があった。

『地獄の公爵』が彼に取ってその筆頭だった。

今の段階で彼に興味を抱かれたら、彼には勝つ手段が二つしかないかった。

どちらの手段も、思考が読めても初見では、ほぼ防げない。だが、確実に誰かを傷つけると彼は確信していた。故に、彼は願った。地獄の公爵がまだ勘付きませんように、と。

：結果は、言うまでもない。

祈りこそしないが信仰しない者が願うことは不味かったのかと後に彼は思った。

.....

後日、魔王軍幹部ベルディア討伐の、

祝いの席で、彼の評価についてめぐみんとダクネスが怒っていたのが、彼は不思議だった。

アクアなんて、私の活躍がどうこうと大変喜んでいた。

彼としては、二人とも、アレくらい喜んでくれると思っていた。

だから、彼は聞いた。純粹な疑問を。

「じゃあ、あの作戦まともだったと思うか？」

彼は聞いた。

どう考えても周囲からの評判は当然だ。

彼から見てもアレを褒めたたえろと言われたら、中々厳しいと思った。

「.....」

二人は沈黙した。

「どう考えても、アレを褒めたら、おかしいと思うのだが。」

辛気臭い顔してないで、祝いの席に戻るが良い。幸い二人とも美人

だ。

：功績だつて、讃えられてしかるべきものだろう？」

彼にはどうやら欠ける物のせいで、二人を不快にさせたことを悟つた。

それしか、わからなかった。：彼には本当にわかっていなかった。

.....

その後、何やかんやでめぐみんとダクネスが楽しんでいると察した彼は、

踵を返して、ダストのところへ向かった。

以外と話がわかる男だったダストは。

欲望に忠実過ぎるきらいはあるが、彼としては中々面白い男だった。

ダストは悪魔以上の悪魔に目をつけられた。ダストは、普段の行いが悪すぎた。

.....

今回の功績、魔王軍幹部ベルディア討伐は、

幸運があつても、必然は変えられない。今回は、彼が必然に負けた。

魔王軍幹部討伐の影響力という必然の波だ。

今まで、運命を必然に変えて抗ってきた彼に取っては、策士策に溺れるという状況だった。

結果論的には、さほど目立たずに大活躍をしたという印象になつ

た。アクセルでは何とか誤魔化せた。

だが、理詰め of 作戦で、完全にベルディアの、
虚を突いた魔王軍幹部討伐の報は世界に広まった。

その印象操作を、彼及び彼が支配するアクセルの裏の関係者たちは、滅茶苦茶頑張った。

広報目的で、功績を各国の上層部に押し付けられるダステイネス家の、

ダクネスの看板がなければ些か厄介な羽目になった。

：ダクネスは気が付いていないが、
彼とこっさりやり取りをしたダクネスの父は乗り気だった。

娘の功績を本当に、素直に喜んでいた。

ダクネスに冒険者を辞めさせたかったのではなかったのかと、
彼が思わず確認してしまう程だった。

何か、面倒臭い親子だと彼は思った。

彼は親馬鹿というのは、ダクネスの父のためにあるのだと間接的な
やり取りで確信した。

『娘を教育してください。お願いします。本当にもう限界なんです』

後日、彼と割と親しくなってきたダクネスの父からこんな内容の手
紙が彼に届いた。

彼は、その手紙を即座に燃やした。

娘を甘やかすからそうなるんだ。：多分、ダクネスを矯正するのは

無理だろうと彼は考え直した。

彼は深く、ダクネスの父親に同情した。

最も、彼は、自分がアクアに対して行っている甘やかしを完全に棚にあげていた。

.....

彼は想定外の速さで世界の表舞台にでなければならぬところだった。

彼に取って、目立つという行為は、まだダメだった。

彼にも仲間にもまだ力が足りない。レベルを上げないと詰んだ。

もはや、魔王の娘なら剥けば良いが、

魔王軍幹部の連携とかあったら死ぬと彼は思っていた。

彼は仮初の幸運を手に入れ、相性最悪のはずの魔王の娘が全然脅威でなくなっていた。

彼は『外道』だった。幸運など手に入ればそうだった。

例えば、把握しているマッドサイエンティストの魔王軍幹部が出て来られたら、

その魔王軍幹部のゴリ押し戦法で彼は負ける可能性がまだあった。

その魔王軍幹部は聞く限り、

今のめぐみんの爆裂魔法すら耐えるであろう防御性能があった。

…一応、わかっている全魔王軍幹部に攻め込まれても対応できる策はあるが、

完全に賭けになる手を彼はあまり好まなかった。

総力戦になれば、まだ人類が敗北すると彼は考えていた。

彼の計画は最早この世界にない概念すら取り入れた戦略を考えさせていた。

彼はチート過ぎた。第二次世界対戦の戦略概要を魔王討伐に組み込むくらいに頭がおかしかった。

彼は、総力戦を、彼が望まなくても、何もしなくても、発生する可能性に気が付いた。

魔王軍幹部ベルディアとの接触で気が付いてしまった。

魔王のカリスマから、魔王軍が早期で追い詰められた場合、

魔王軍が勝手に動き出す可能性に気が付いた。

魔王が魔王軍の幹部候補生を育てているなら、不味いと彼は思った。

人類が知らない未知の戦力の大量投入は彼でも凌ぎきれないと思った。

その場合、本当に悟られる前に魔王討伐しなくてはならなかった。

.....

魔王軍幹部ベルディア討伐。

冒険者ギルド全体を巻き込んだ祝いの席で、彼は気づいた。

彼の、この風評だと、ミツルギが彼に食って掛かってくる可能性が高いと。

ミツルギは、今はアクセルを離れているが、直ぐに戻る予定だと聞いていた。

：何かを探して、アクセル近郊を彷徨っているらしい。
その何か、アクアのことなら最悪だった。ミツルギは転生者だった。

ミツルギはアクアのことを覚えているだろう。だが、肝心のアクアはほぼ覚えていない。

それどころか彼がミツルギについて聞いても、

「そんな人、いたかしら？」

：私、この世界に何人も送っているから覚えていないのよね」
酷すぎた。彼はミツルギの為に涙しそうになった。

彼は、全く表情に表さないが。涙というのも比喻だ。彼はこれくらいで泣かない。

だが、もし、ミツルギがアクアのことを探しているならこれほど酷い真実はなかった。

彼の想定通りなら、恐らく、

魔王討伐の方針を変更してまでアクアの救助のために、ミツルギは頑張っていた。

だから、彼はできるなら仲間にするつもりだった。

本来なら、何とかして彼はミツルギのポリシーに合わせた計画を練っていた。

だが、『幸運の女神』エリスに完全にミツルギが特定され、嫌われていると彼が考えるほど、

本気で、その可能性すらあるほど、ミツルギとの彼のすれ違いは酷すぎた。

.....

彼が調べた、ミツルギキョウヤはどう見てもチート能力者だ。何でも斬れる魔剣グラムの持ち主のミツルギ。これが転生特典だと彼はわかった。

なお、アクアはギリギリこの神器を覚えていなかった。与えられた神器すら覚えられていないミツルギを彼は本気で哀れんだ。

なお、ミツルギの職業はソードマスター。現在、レベル37。近接戦では、もう少しすれば、恐らく準魔王幹部クラスだと彼は考えている。

ミツルギという男は、彼は嫌いではない。

寧ろ、恐らくアクアを保護しようと懸命に努力している姿を知って、

彼はミツルギとの接触を計画していた。

だが、ミツルギキョウヤは、彼の求める『勇者』足り得ない。致命的に、非情さに欠ける。

…三流なのだ勇者としては。彼は惜しんでいた。

なお、これは、飽くまで彼目線の勇者像。第三者からすれば決して勇者ではない。

これは完全にゆんゆんが正しかった。彼は全く気がついていないが。

ミツルギでは、『地獄の公爵』で詰む。彼はそう確信している。このまま鍛えていても、魔王軍幹部ベルディアにも恐らく勝てない。

ミツルギは、必ず正攻法で挑みかかるから。

ベルディアは騎士道に則りつつも、

魔王軍幹部として非情な決断も汚い手段も使うことが稀にあった。

その証拠に、魔王の脅威足り得る冒険者などは、過去に何人も『死の宣告』で殺されていた。

今のミツルギには、ダーティな手が使えない。

故に、勝てない。彼はそう冷徹に判断していた。

教えようにも、接触しようにも、

何故か、ミツルギの仲間の取り巻き二名は仲間を増やさないように彼の周りを牽制していた。

彼は、ミツルギを、その仲間二名を何とか引き込もうと色々騙すために、策を色々仕込んでいたが、

今回の件でミツルギへの印象操作が不可能になってしまった。

無理だ。あの仲間二人の警戒心の強さは異常過ぎた。彼には理解できない程だった。

まるで、ミツルギに『異性』を近づけたくないようだと彼は思った。

故に、彼は、もし万が一、ミツルギがアクアを解放しろと言って来たら、

正々堂々返り討ちにする方針に切り替えた。

彼の普段の方針とは逆だ。

ミツルギは敵ではない。寧ろ、できれば友好関係を築きたい善人だ。

だが、あの仲間二人の性格からして、彼に敵意を持つことはほぼ確定だ。

あの二人は、彼の話を聞いて、ミツルギに色々悪印象を与えてくる。

彼には容易に想像できた。そして、彼女達は普通に優秀なのだ。

戦士と盗賊の組み合わせで後衛こそ不足しているが、補佐としては有り余るくらいには優秀だった。

だから、ミツルギに搦め手の経験を不足させていた。

彼はミツルギが仲間頼り過ぎている現状とその不味さに気がついていた。

：故に、ミツルギに『敗北』を死のない形で知ってもらおう。

彼なり善意だった。赤の他人しかできない教育だと彼は悟った。

同時にこの世界では死に直結した問題だった。

このままでは、ミツルギはいずれ敗北すると確信した。

少なくとも、彼の想定している魔王軍には勝てない。

なお、彼の想定している魔王軍に勝てる存在等、この世界にいない
と思考を読める悪魔は後に思った。

だが、ミツルギが万が一アクアを恩人などではなく、女神としてしか見ていない場合、

彼はミツルギとの接触は最低限にするつもりだった。

何故なら今、アクアは彼の教育の真つ最中だ。

そうなると女神扱いするミツルギは本当に邪魔だ。

彼は変な感情も含んでいるような気がしたが、わからなかった。

：何よりアクア自身を見ていないと、アクアは不快になると彼は何か確信していた。

その場合に想定されるミツルギの姿勢はどう考えても、アクアが景品のような扱いだと彼は考えていた。

どちらにせよ、ミツルギには、致命的な搦手に対する弱点がある。ミツルギの今までの大よその冒険を聞いて彼はそう確信していた。

ミツルギは王都で王女様に気に入られている有名過ぎる冒険者だから、彼は簡単に知れた。

彼を慕う仲間二人には申し訳ないが、ミツルギには自分の『弱点』を知ってもらおう。

彼なりの有り得た可能性の仲間へのせめてもの手向けだ。

彼の手向けは、極めて悪辣極まりない。

どう考えてもお人よしにしか伝わらない。

ただ、俯瞰して見れば、ミツルギには伝わりそうだった。

彼は全くそのことに気が付かない、彼はそんなもしもを振り替える程余裕がなかった。

だが、彼なりに他人のことを考えている余裕はあった。

だから、最後の分岐点で彼の計画は徐々に崩壊していくことになる。

皮肉にも、敵が彼を気がつかせる一助となった。

女神の学びまでの時間を稼いだ。彼の可能性の対価としては安かった。

.....

魔王幹部討伐の、冒険者ギルド内での宴を終えた彼とアクアは、は

しやいでいた。

なお、めぐみんとダクネスは先に帰った。

：めぐみんが酒を隠れて飲み、ダクネスが介抱していた。

彼は、めぐみんの介抱を手伝おうとしたが、

彼がいなくなるとアクアの収集がつかなくなるとダクネスと合意した。

ダクネスが自分の実家に一時めぐみんを、連れ帰るとのことなので頼んだ。

故に、色んな意味で空気を読めない彼とアクアの、二人だけが最後まで残っていた。

宴はもう解散していた。

二人して、予約した宿へ行く途中だった。

「楽しいわ！楽しいわ！皆、私達の活躍を褒めたたえてくれるわ！！」

彼は、宴の余韻を喜ぶアクアが子どもに見えた。

彼は嬉しそうに喜ぶアクアを見て、かなり『素』になっていた。

彼にしては、極めて珍しく、何も取繕っていない。

アクセルの裏の関係者などの、

彼の一部の側面しか知らない第三者が見たら驚くほどに、彼は笑っていた。

「それは、それは何よりで。

：今回の活躍は、『女神』様の活躍あつてこそ。

故に、今回限りは、全力で祝いましよう!!フハハハハハ!!」
彼も前世含めて、これほど楽しい思いはしたことがなかった。

彼に取って、最初から、自分の評価などどうでも良かった。

誰かに心から喜んで貰いたかった。

彼の前世の善意はたった一人にしか届かなかったからだ。

それも今わの際に知った事実だった。彼はそれで人生を満足できていた。

だが、彼は心から喜んでくれたアクアを見て、大変愉快だった。

直接接している『仲間』だからだろうと彼は推測した。

この瞬間だけは、彼は全てを忘れていた。

「そうよー私は『水の女神』アクア様その人なのよ!!」

もっと私を敬いなさい、そして、褒めたたえなさい!!」

アクアは調子に乗っているが、ここには誰も見ていない。

さらに言えば、聞かれても、狂人のたわごととして処理される。

ダストの反応から彼は確信していた。

ダストが居なければ、彼はここまで気を抜けなかっただろう。

彼は出会いに感謝した。

ダストの借金も多めに見てあげようと彼は思った。

ダストは王都への移送中に、アクセルで事故に会い儲けがパーになっただけらしい。

何と突然、洪水の被害にあったらしい。彼はとても不思議だった。しかし、彼は不幸で借金をしたダストに金を渡すという選択肢を選ばなかった。

寧ろ、弱みに付け込み、ダストに恩を売った。

：彼はえげつなかった。

ダストに全く気取られていないのが最悪だった。

「ええ、実に惜しい。後は『知性』だけ。

それ以外は、女神として見ても一見問題ない」

彼としては本気でアクアを褒めたつもりだった。

だが、全然褒めていない。

彼は第三者から見れば、どう見てもアクアを貶していた。

「ちよつと！褒めるなら、もう少し褒め方という物があるでしょ!!」

「これだからボツチなのよ!!」

アクアの戯言も彼は全然気にしていない。

だが、ボツチいうな。彼はイラッとした。

「ハハハハ！そうですとも、俺は褒め方など知らない。

これでも最大限褒めているつもりなのだから見逃せと言いたい!!」
故に、彼は軽く、アクアを挑発した。

「何ですって!!調子に乗らないでよね!!」

その貧弱ステータスでこのアクア様に勝てるんでも!？」

アクアは彼の『策』に嵌った。彼はもう勝ち筋が確定した。

今日こそ、

「目にももの見せてくれるわ!!この駄女神め!!」
彼はパーになった。

…彼の策が完全に狂った。

時間をかけて、アクアの勝ち目を無くす彼の作戦が台無しになった。

アクアの目つきが変わった。

「…一回、エリスのところに行つて懺悔なさい!!」

彼は、アクアが本気になったことを悟り、敗北が決定したと悟った。

「何故だ!…何故勝てない!!策は完全に嵌っていたのに!!」

彼は本気でどういふことかわからずに叫んだ。

最初から全力の、本気のアクアには彼は、まだ勝てない。

彼が、どうやっても詰みだった。

アクアが、ジャイアントトードを殴った時の衝撃波から彼はその拳の威力を知っている。

アクアの身体能力を彼は知っていた。

…脳筋のゴリ押しで負ける。

ベルディアを嵌め殺した彼にとってそれは、本気でショックだった。

「頭でつかちな童貞には、私に勝つことなど不可能よ!!」

彼は、それは事実なので、受け止めた。

だが、駄女神には言われなくなかった。

「…地獄で後悔しながら懺悔なさい!!ゴッドブローツ!!!」

アクアは酔っぱらった勢いで、彼の腹部を全力で殴った。

それは見事なフックだった。彼には避けられないパンチ。彼には、アクアの拳の軌道すら見えない。

だが、彼はアクア対策に、腹部に鉄板を仕込んでいた。

…彼も酔っぱらっていた。

冒険者ギルドにて、計画で余った鉄板を仕込む彼を見た冒険者から、

理由を聞かれて正直に答えるほどには彼は酔っていた。

…なお、この話はアクセル中に知れ渡ることになる。

仲間との、アクアとの喧嘩を前提に、腹部に鉄板まで仕込んで負けた男と彼は評される。

アクアが、最初から本気でなければ、これが彼の勝因となるはずだった。

だが、この仕込みのお陰で、彼は『地獄』には落ちなかった。

彼に取つての地獄、幸運の女神エリスの下へは旅立たなかった。

彼は気絶しそうになる。

アクアのパンチは平然と鉄板を歪めるほどの威力だった。

「俺の計画が…」

彼は完全に敗北したことを確信した。
彼は、目の前が暗くなるのを感じ取る。

馬鹿な、何故負けたのか。『幸運』があつたはずなのに…

彼は幸運とは何か薄れゆく意識の中で、考えた。

「あり…」

アクアが何か言おうとしているのを感じ取るが、

アクアが本気で殴ったから彼には聞き取れなかった。

.....

翌日。

見知らぬ床に転がっていた彼はどうも、
アクアに宿まで放り込まれたと確信した。

彼の神器による外付けの幸運程度では、女神の幸運最低値には勝て
なかった。

これは、彼が導きだした結論だった。

次は、必ず勝つと彼は自分自身に誓った。

…彼は端的に言つてアホだった。

この一連の計画においての彼のサプライズは不器用過ぎた。

彼には、『友人』がいたことがないから、こういった場で、
仲間はどう振る舞うべきか、全くわかっていなかった。

…だから、アクアにしか伝わらなかった。

めぐみんにもダクネスにもきちんと伝わらなかった。

彼なりの『思いやり』はなっていないかった。

その点だけは、彼と同じ程度に知性がなかったから、アクアにだけはきちんと伝わった。

皮肉なことに。

彼も『旅』をする。皆と一緒に。

それは、彼に取っても学びの旅だということに、彼はまだ気が付いていない。

だが、彼の計画通りの旅ではない。修正していく暗中模索。

皮肉にも彼が切り捨てたその可能性の旅をせざる負えなくさせる悪魔がこのとき彼に気がついていた。

第九話 道化の日常

宴から翌日。

冒険者ギルドで、緊急クエスト。キャベツ収穫が発生した。

：キャベツが空を飛ぶ光景は、彼からしたらシユールだ。

最も、園芸用野菜の一覧表にサンマを発見した時点で彼のその辺りの常識ははじけ飛んだ。

だが、彼は前世で空飛ぶカエルを目撃していた。

あれは科学的にはただ単に嵐で飛ばされただけだと彼は推測していた。

キャベツが人間に襲い掛かることなど、非常識さで言えば彼からしたらギリギリ許容範囲内だった。

前世も大概おかしかったことを彼は悟った。

今更ながら。科学で完全には、証明できないことを彼は何度か経験していた。そういった文献などもあった。

彼にとって前世は、中々教科書通りいかない世界だった。

しかし、やはり彼からしたら空飛ぶキャベツなど非常識極まりない。

冒険者が総出でかからないといけないくらいには、キャベツは脅威だった。

ボーリング並みの大きさのキャベツがその生ける全てを懸けて襲い掛かってくる。

馬鹿らしい文字列だが、事実だ。彼は知らなければアクアに馬鹿にされたと思った。

アクアは知っていることとやっていることのギャップがやや大きい。

神の才能を活かしきれないと彼は感じていた。

それは兎も角としてキャベツは、冒険者じゃないと収穫は難しい。

彼は手慰みで例年のキャベツ被害とかいう、

頭のおかしい冒険者負傷率の統計比較表を作成した彼は確信した。

それは、本来、彼が女神エリスに接触するつもり新时期だった。

：キャベツ収穫の際、女神エリスは彼を誘いにやってきた。

「キャベツの収穫が終わったら、約束していたアレお願いね」

彼は、この日のために用意していた。『土産』をそのまま渡すことにした。

今は忙しいから、クリスに関わる時間があまりなかったからだ。

.....

魔王軍幹部ベルディア討伐からキャベツ収穫前の間の期間。

彼は、『仲間』をアクセルに溶け込めるようにあらゆる印象操作を行っていた。

例えば、狩猟組合などからめぐみんの爆裂魔法のクレームが来ていた。

狩りができない。騒音被害というごもつともな意見もあった。

爆裂魔法を打ち込んだ後、めぐみんを狙うロリコン三名への処罰等。

彼は、めぐみんの行動予測や思考誘導などを行い、クレーム処理を熟していた。

ついでに犯罪者はダストに押し付けた。何か知り合いらしかった。

ダスト曰く、

「ギリギリ犯罪を犯さない変態だから見逃してやってくれ」
だそうだ。

彼は、変態は理解できない。

故に、ダストに任せた。

：変態三人は、普通に警察に突き出されていた。

ダストと同様に、彼でも普通にそうした。

ダストが変態共を庇うから何事かと思った。

何か変態共にやるのかと彼は思っていた。

変態を、何かに活かす手口を彼はダストから学ぶつもりだった。

彼は変態を理解しきれないから。

彼はこの一連の流れから、

彼はどうもダストから『誤解』されていると察した。

故に、とある男色貴族のダストへの愛を唆してやった。

これは、完全に彼の悪意だ。

その貴族を、アクシズ教徒にしてやった。

彼はこの世界の宗教の『経典』を暗記していた。

その貴族をアクシズ教徒にするのは容易だった。

彼の話術をもってすれば、他人の欲望を引き出すなど容易だ。

彼はあの自称美人プリーストの語り口を思い出し、

アクシズ教徒の男性信者を演じ切った。

あの自称美人は彼の宗教観をぶち壊す程度には印象に残っていた。アクシズ教徒では恐らくないが、極めて近い精神性の持ち主だった。

彼はあの乞食、アクアと彼の晩御飯を奪い取った挙句に、有り金全部奪おうとした自称美人に感謝した。

アクアがいたらきつと全部奪われていたくらいに不幸な日を思い出した。

その日、彼はアクシズ教の『闇』に一人の誠実な貴族を落とし込んだ。

このダストへの嫌がらせ行為を行った理由はただ一つ。彼がイラツと来たからだ。

彼はかなり個人的なことで手の込んだことをした。

なお、ダストにこれは気づかれない。

彼は完全にダストをおもちゃにしていた。

性質の悪いことにこの件でも彼はダストに恩を売る気だった。

というかダストの仲間のリーンが応援し始めた。その男色貴族を。

ダストを積極的に売り始めた。

：リーンは気が付いていないが彼からすれば腐女子だ。

リーンはダストをどう思っているのか不明だ。

リーンは本当にわからない。ダストが気にかけるのもわかる。

彼はリーンについて本気でわからない。

無邪気な子どもに近いがダストにやっていることは彼からすれば外道だった。

彼は完全に自分を柵にあげていた。彼はリーンに謝罪すべきこと

を考えていた。

どうやら、新しく来ることになる予定のセナとかいう女検事も腐女子らしい。

彼は警察の内部資料を入手済みだった。

彼は警察機関を支配するための行動を、ダストを罫にかける作業と並行にしていた。

日々馬鹿を演じつつ、彼はいずれ国を支配する気だった。

彼からすれば世界征服しないからセーフだ。

クリスが封印せずにこの神器を渡してきたからセーフだと彼は考えていた。

彼が女神エリスの立場で策を練るなら、この凄まじい神器を取引に使うなら、

性能をまず見せて勘違いさせる。

アクアとめぐみんのジャイアントトード討伐からその推察に彼は至っていた。

ただ単に想定内に収まるように不幸を除去する神器だと彼は誤認していた。

次に、自分にある程度これを餌に協力させる。

この神器を封印処理しグレードを落とすか別の神器を彼に渡す。

…この神器はチート過ぎる。

彼の知っている神器でありながら、持ち主を失ってもなお、絶大な効果を残していた。

幸福の権能を最大限に利用した常識的な取引。

彼が最初に思い描いたエリス像を元にした女神エリスが行うであろう策だった。

だが、どう考えても時期が早すぎた。

エリス神がポンコツやお人よしでなければ、彼にもう少し絶望の期間を設けると推測していた。

故に、キャベツ収穫まで彼は徹底的にクリスを煽るつもりだった。その時期を早めさせて神器を手に入れるのが彼の計画だった。最低限の幸福を彼は手に入れたかった。

ベルディアも、当初は最低限の幸運で最悪を無くすことを計画していた。

廃城で押し流し、有力な冒険者たちでタコ殴りにする計画だった。

この神器の幸運のお陰で彼は『死の宣告』という手段まで手に入れた。手に入れてしまった。

…だが、完全に彼は騙され、この神器と引き換えにあらゆる行為を制限させられてしまった。

世界征服や水爆等の最大限悪意を活かしたあらゆる手段だ。

さらにアクアからの監視網まで女神エリスは作成した。

現に彼は、行動をこれでも制限されていた。

国を裏から数か月かけて支配しないといけなくなった。

水爆はともかく、裏からの世界征服が彼に取っては、

一番魔王討伐に手っ取り早く、さらに言えばある意味で理想だった。

彼が死んだ後に仲間を、世界の悪意から守るための最大の手段だった。

魔王討伐した勇者を拒絶しないか。彼が最も恐れていた事態だった。

だから、世界に彼の遺志をばら撒くつもりだった。

死した後も、後世に悪影響の出ない範囲で。

女神エリスは彼の最大の利点を、行動を、

劣化しても凄まじい幸福を持つことができる恐ろしい神器で、彼の最大の才能を活かした手段を封じ、脅しに来た。

…世界征服路線を放棄してもこの神器なら可能だった。

魔王討伐も死した後の仲間のフォローも。

彼の才能ではなく、頭脳だけで。

見事な作戦だと彼は思った。

彼の幸運の誤認を、女神エリスの権能で察したであろう見事な悪辣な手口だった。

…彼はそう思っていた。

これはほぼ全部彼の勘違いだ。女神エリスは邪悪ではない。善人だ。

アクアの言う事を、残忍で狡猾な女神エリス像を、真に受ける時点で彼は馬鹿だった。

最も、彼の推測は途中まではあっていた。

…これが彼と女神エリスの、最大のすれ違いであり幸運であり『奇跡』だった。

.....

どうも彼の調べた限り、セナは、アクシズ教最高司祭ゼスタに喧嘩売って負けたらしい。

流星にアルカンレティアで何があつたかまでは彼には掴めなかった。

彼は、アクシズ教に関わること自体には敬意を抱いた。

完全に出世コースから外れる行為だ。セナは真面目過ぎる女性な

のだろうと思った。

だが、そのセナとかいう検察官は、もういつそアクシズ教の信者になった方が良いと思った。

検察官セナは、お見合い等をその腐女子趣味で何度もぶち壊していた。

彼はセナの個人情報に完全に把握していた。

アクセルにいずれ赴任する検察官というだけで。

彼は、他人の弱みを握るため、珍しく善人の弱みまで握り始めていた。

セナが知ったら、文字通り、矯正逮捕間違いなしの情報を彼は持っていた。

アクセルは彼がいなくとも変態都市だった。彼はそう結論に至りかけていた。

：変態を探せば、段々アクセルに善人の変態が何人もいた。彼は気が付いた。

アクセルでは、悪人の方がまともだった。彼は気が付いた。

：女神エリスの神器のお陰で。

彼は悪のアプローチでほぼ二週間使っていたため、

裏からの世界征服の為に気が付かなかった。

彼はようやく悟った。

正直、彼のやった仲間のために、アクセル中で戯言を吐く行為は、完全に無駄かもしれなかった。

だから、彼はダストに八つ当たりしていた。それは、彼も気が付いていないが。

.....

彼は変態を裏で始末するような人間だとダストに思われていた。それが彼に取ってイラツときた。

彼は、その気があるならダストにすら察せないように、女神エリスにすら足が付かないようにやる。

仲間が死に瀕するような状況にあれば、だ。それ以外では、彼はそんなことはやらない。

ダストの『誤解』は彼に取って極めて不服だった。

だから、借金返済のために全力でキャベツ収穫に臨もうとするダストはその日、

絶対にキャベツ収穫に参加できないようにした。してやった。

彼はその日に、ダストを嵌める気だった。

男色貴族と鉢合わせにしてやる策を練った。

貴族とダストを互いに誤解させて、両方に恩を売る計画を立てた。

貴族やダストに勘付かれるようなハマを彼はしない。

∴女神エリスの神器のお陰だ。

彼は、ダストの借金返済は、三流勇者を嵌める作戦でさせるつもりだった。

彼は、魔剣グラムをダストに売る気満々だった。手向けと評した計画の一環で。

この魔剣グラムを売るという発想。ダストとミツルギへの彼なりの善意だった。

彼は『外道』だった。悪魔以上の悪魔だった。

.....

なお、ダクネス関係は、ダスト等を通して印象操作を行っている。いずれ、ララティーナお嬢様としてアクセルに受け入れられるように仕向けた。

ドMなんぞ、彼の、正確に言えばアクアが広めた変態性からすれば隠蔽等はできた。

だが、ダクネスは多分彼の想定を超えている。既に、庇えないくらいダクネスは、マゾヒストっぷりを発揮している。

故に、彼は、ダクネスの性癖の隠蔽は諦めていた。彼がアクセルで放置していても広がると察した。

彼は、アクセルの中心地でクリスに石を投げられたり、めぐみんに殴り殺されそうになったり、

時には、ダストがダクネスにぶつ殺されそうになりながらも日々演説していた。

：アクアに関してはアクセルに受け入れられていた。もう評価が確定していたからある意味、全く問題なかった。

彼としては、ここからアクアを、

宴会芸の神様から慈愛溢れる女神様への評価を上げることが不可能と確信した。

故に、アクアに関しては買い物という名の散財を止めたり、付き合ったり、

エリス神の弱点を聞き出したりしていた。キャベツ収穫における

『手土産』のために。

アクアが、平然と彼が乗っ取った闇金を脅していたのには驚いた。アクアは他人への嫌がらせに関しては、彼以上の才能があると思っ

た。

彼視点のアクアの行動は彼以上に躊躇がなかった。

アクシズ教徒に金を貸し出さないと、

アクアは帰らないという脅しは完全に闇金で対処できない。

闇金ではどうあがいてもアクアに勝てないからだ。

女神がアークプリーストをやっている。アクアには呪いなど効かない。

呪いなど使った瞬間バレるアクアがゴッドブローを食らわし、闇金は捕まる。

彼の手間隙懸けて支配した闇金はアクア一人に屈していた。彼が出

るまでもなく。

彼はアクアがこれを計算してやっているなら、

女神エリスを超えられる逸材と判断したかもしれない。彼はアクアをよく知っている。そんな馬鹿な勘違いをしなかつた。

そう、アクアに関しては。

.....

彼はここ数日、魔王軍幹部ベルディア討伐からずっと

変態と勇者を、つまり仲間達をアクセルに受け入れさせるために全

力で戯言をほざいていた。

昼間は全力でふざけているようにしか第三者には見えない。

モンスター討伐も平行していたが、彼はアクセルに爆裂魔法を馴染ませたり、ドMを馴染ませようと必死だった。

夜は、魔王軍幹部ベルディア討伐印象操作及び隠蔽工作の二重生活だ。

彼は、ダスト『で』遊ばないとやっていられないストレスを感じていた。

.....

彼の昼間、例えばこんな感じだ。

アクセルの中心街。一日で最も人が集まる時間帯及び場所に彼は陣取っていた。

「爆裂魔法は体に有益な波動を放つ!!」

それは、女神エリスすら認めるヒーリング効果だ!!」

彼は全力でクリスに石を投げられた。

だが、彼はあの邪神エリスすらも恐れない。

仲間をアクセルに受け入れさせるために彼なりに本当に必死だった。

彼は演説の邪魔をされたくないの、善意の第三者、つまり他人のダストを喉けて、

彼はさりげなく、クリスを追い払おうとした。

「やい、ドM騎士を押し付けた銀髪盗賊!!」

俺の金のために大人しくお縄につきやがれ!!」
ダストもクリスから、石を投げられた。
さらに、ダクネスは何故かダストを全力で殴り飛ばした。

彼は、何故ダストが『真実』を公言してダクネスが怒るのか不思議だった。

彼が何か言うと、ダクネスは、

「いいぞー！寧ろ、もつと罵れ!!」

と言ってくるのだから、セーフだと彼は考えていた。

なお、これは日常会話だ。

彼にダクネスを罵っている自覚はない。

彼は素でダクネスを罵倒し出すような感性の持ち主だった。

自覚はないが、彼はアクア以外に対して、

正確には、子供や『まともな女性』などを除いて、

ダクネスが言うように彼は完全にDSだった。

ルナ女史も彼と関わる機会が多いので、

ルナ女史の婚期が迫っていようが、

その対象から彼を除外する程度には、彼はサディストだった。

ルナ女史曰く、

「普段は紳士的だが、一定を超えるとサディストに急変する。

躁鬱の気が激しく、気難しい。

同年代より下或いは年配に対しては非常に優しいが、

それ以外は大概サディストそのもの」

彼のおおよそを知る第三者視点の感想である。

彼はルナ女史に関して悪魔への手土産でもあるので、

敢えて自分を除外するように思考を誘導しているのも大きい。

つまり、ルナ女史は準変態枠扱い。

彼は少なくともルナ女史を『まともな女性』に含めていない。どうやら、ダクネスには羞恥心があるらしい。彼は発見した。ダクネスは、ダストを襪雑巾にしていた。

彼は、仲間の、意外な新しい一面を知った。彼は嬉しかった。襪雑巾と化すダストを彼は完全に無視して喜んでいた。

彼は、ダストにさらなる恩を売るためダクネスを止めようやく入った。

そして、彼が何をしても喜ぶダクネスへの、彼がアクアと同等に手を焼かせる存在への、復讐の手段を数十パターン彼は、その瞬間の数秒で、思いついた。

ダクネスの父親にも教えてやろうかと彼は一瞬だけ思った。その程度には、彼はダクネスの父親と親しくなっていた。

だが、彼はそれをやったら、ダクネスが彼を殺しにかかる可能性を思いつき辞めた。

流石に、羞恥心が常人の感性ならダクネスが普通に傷つくと彼は察した。

彼は仲間の性癖を、ギリギリ許容範囲内に教育できればそれで済むのならば、それに超したことはないと思っていた。

…だが、彼個人ではいつかやろうと決意した。

制御できない、理解できないダクネスの、つまり変態の弱点を知った彼の本質は『外道』だ。

ダクネスの羞恥心を利用しないわけがなかった。

.....

またある日、彼は、こんなことをほざいてみた。

「そうだ！爆裂魔法による癒し効果だ!!」

毎日聞いていれば、いずれないと一日のリズムが狂う程に癒しの効果がある!!」

彼はマイナスイオン論法で、アクセルの住民を洗脳しかけていた。

何となく効きそうな気がする。

そう思考を誘導できるほどアクセルの住民は彼に取って、馬：純粹だった。

彼は大よそアクセル住民を洗脳していった。馬鹿な振りを通して彼にとって、これを利用しない手はなかった。

計画の一手段、アクセルの最後の『防衛手段』として組み込んだ。

.....

なお、彼の最大の戯言は、何と後一步でクリスを洗脳できるところだった。

彼が真剣にクリスの脳内を心配する程、クリスは容易く引つかかった。

彼は、想定外の成果に思わず笑みがこぼれそうになった。

だが、彼はめぐみんに爆裂魔法を撃ち込まれそうになり、クリス洗脳は頓挫した。

めぐみんは本気だった。彼に全力で爆裂魔法を撃ち込む気だった。

彼は、流石にそれ以上その手口を使うのを辞めた。
仲間が、めぐみんが、嫌がる以上彼は控えた。

だが、

「13歳なのだから、気にするのはおかしいのでは？」

彼の本心からの言葉だった。

そんなこと気にしなくとも彼からしたら美人だから。めぐみんは。

だが、めぐみんは彼に、にっこり笑った後に完全にキレた。

「おう、もう一度言ってみろ。」

：ゆんゆんを誑かしたあなたが行った、邪悪なる手口を私は知って
いるのですよ？

：やはり、一回死んでください。ゆんゆんの仇!!」

彼はめぐみんの新調した杖でぶん殴られた。

彼は、ゆんゆんは死んでいないだろうとめぐみんにぶん殴られなが
ら思った。

彼にはそもそも、その邪悪なる手口等知らない。心当たりがなかつ
た。

.....

何度も言うが、彼は神罰等最早恐れはしない。

致命的な弱点があるなら、それを利用してしようとする悪魔以上の悪
魔。『外道』だ。

：その手口の発想は、アクアから提供された女神エリスの情報の応
用だった。

彼もあの世に行った際に察した。流石にあからさま過ぎた。

あの狡猾な女神エリスだが、普通にダストがあのだ世に行ったなら指摘しそうなほどそれはウイークポイントだった。

だが、成長しないはずの女神エリスが食いつくとは、相当気にしていたのだろうと彼は思った。

彼は流石に女性の身体的特徴をあげつらうのは酷いと認識した。彼の普段の行いを見ている者からすれば、何故そこだけ治すのかわ明なレベルで彼はサディストだった。

：めぐみんは世界を救った。

めぐみんは、間違いなく功績だけみれば、世界を救った勇者になった。

：物凄く下らないことで。誰も知らないし、気が付かない。だが、偉大な功績だった。

.....

話は、キャベツ収穫に戻る。

めぐみんが爆裂魔法でキャベツと冒険者に引き寄せられたモンスターを一網打尽にしたり、

アクアが花鳥風月で皆を癒しの水で癒したり、

ドMがキャベツの体当たりを一心に受け止めているのを彼は確認した。

彼は、仕方がなく、潜伏スキルでキャベツに気取られないように、敵感知スキルでダクネスの周囲のキャベツを把握、

ステイールでダクネスを襲うキャベツたちを収穫した。

彼は、本来の幸運値ならこれくらいの収穫は、
頑張れば可能だと判断する位の量は確保できた。

ダクネスを守った分のキャベツでその量の確保は容易だった。

彼は、見た限りレタスしか取れていないのに喜ぶアクアを後でどう
慰めるか考えつつも、

クリスへの接触を決意した。女神エリスへの接触を彼は決意した。

クリスに完全にアドバンテージを譲った場だった。

彼に勝ち目はほぼない。彼は覚悟した。

この『手土産』。悪徳貴族のエリス教狂信者計画。
恐らく、あの女神エリスなら喜んでくれると彼は確信していた。

…なお、何故か計画の詳細を聞いた女神エリスから彼は激怒され
た。

彼は、これ以上を求めるのかと恐怖した。

流石に、彼も悪徳貴族に劇場型犯罪を誘発させて女神エリスを讃え
る行為はしたくなかったから。

第十話 欠けた愛

内々の秘密の隠れ家。彼がクリスに案内された場所はそのような部屋だった。

：彼自身、知らない場所だった。驚くほどの幸運にこの部屋は満ちていると彼は推察した。

少なくとも、彼の目から逃れるくらいの幸運があった。

彼は、そつと『手土産』をクリスに渡した。

「ご機嫌取り兼、これでしばらく我慢してくださいというものだった。」

彼は今、本気で忙しかった。

キャベツ収穫からのクリスと仕事の打ち合わせの前に、彼の手土産を渡した。

.....

『悪徳貴族のエリス教狂信者計画』。

彼が女神エリスのためだけに、選んだベストセレクション。

今の、彼の伝手だけで破滅させられる悪徳貴族一覧表だ。

タイトルをつけるならば、『絶望と破滅からの救いの手』。

クリスが義賊などせずとも、彼が数か所弄るだけで、勝手に破滅する悪徳貴族達を厳選していた。

この世界の悪人は彼からしてみれば実にわかりやすかった。

常識的な悪人だらけだった。

：前世で悪意という悪意を経験した彼からすればだ。
彼の目線での世界は完全に悪魔ですらドン引き待ったなしの世界
だった。

そんな彼が夜なべして書いた『作品』達は、後世への影響も考えら
れたシリーズものだった。

悪事が露呈し、庶民へ身を落とす悪徳貴族達。

そんな中、女神エリスの使徒クリスが救いの手を差し伸べる。

元悪徳貴族たちが悪を自覚し、更生していくその姿勢は、
エリス教こそ救いの道だと世界中に伝播する。

：そんな感動のお話を、彼は何パターンか用意していた。
企画していくつもりだった。女神エリスが喜ぶと思って。

一覧表にそれぞれの話の『テーマ』まで添えていた。

悪徳貴族の欲望を分析し、どうすれば心が折れるのか、
その後の救済までのプランまで設計済みだった。

彼は会心の出来だという自負があった。

女神エリスが、悪徳貴族の破滅を特等席で見られるように手配して
いた。

女神エリスの義賊稼業の神意を、彼なりに汲み取って頑張ったの
だ。

だが、彼は女神エリスに怒られた。

全否定された。彼は、かなりショックだった。

ある意味、女性に初めて送ったプレゼントを全否定されたのだから

仕方がないかもしれない。

それが『悪意』を前提に作られた物でなければ、誰もが慰めたであろう手間暇を彼はかけていた。

「クリスさんが赴かなくても、勝手に破滅して神器を手放し、救いを求めてエリス教に改宗するプランを用意したというのに……」彼のそれは、完全に悪徳貴族に対するマッチポンプだった。

女神エリスが怒るのも当然だ。

自分からこのような悪意に塗れたマッチポンプなど彼女に取って『論外』だった。

だが、アクアなら確実に喜ぶ。彼は確信していた。

実際、これをアクアに聞かせたら、ノリノリでやり出す。

彼の分析は正しい。アクアなら喜んだ。

さらに言えば、彼のアクアから聞いた『女神エリス』ならば、確かに喜んでいた。

だが、彼は女神エリスを致命的に誤解していた。

これ以上を求めるならば、女神エリスと言えども、

悲劇は何も生み出さないと説得しようかなどと考えるほどに。

彼には悪徳貴族の劇場型犯罪誘発プランもあったが、

余計な被害を彼は好まなかったから破棄していた。

彼は、女神エリスを誤解していた。

女神エリスは、どちらも望んでいない。

だが、その誤解は一部正しく、それを補強したのは女神エリスその

人だった。

本当に碌でもない『幸運』だった。

だが、彼の努力は一部だけ認められた。

「作戦計画の資料の情報を流用すれば、今日にでも行けるくらいの内
部情報があるね。」

「というか、今日襲撃する予定のところもあるんだけど…」

クリスは彼の用意した『資料』だけは認めた。

マッチポンプはともかく、彼の女神エリスのために用意した情報の
正確さは凄まじかった。

彼からすれば鍵のない金庫を開ける程度感覚だった。

何せこの時代、この世界の情報に対する警戒はザル過ぎた。

：彼からすればだ、普通に悪事を働いている以上、悪徳貴族達は警
戒していた。

ただし、魔法や占い対策だった。

彼からすればチートな捜査能力も情報捜査がない警察組織など隙
だらけだった。

その隙を悪徳貴族達は確かに対策していた。

貴族という立ち位置で警察そのものを立ち入らせないことが大き
かった。

現にこの国の税金関係の法律は、貴族が逃げるために有るような抜
け道が存在した。

：そうしたこの世界の警察組織の実情を知る彼は、クリスが資料を
褒めたのを見て悟った。

女神エリスは『神器』を本当に、舐潰しに探している。

彼はそれを、今までの義賊の行動から推測はしていたが、確信に変

わった。

女神エリスはたった一人で盗賊スキル『宝感知』を用いて正攻法で神器を回収していた。

それは、とても『孤独』だっただろう。

…彼は不敬にも女神エリスに同情していた。

彼に取っては、個人である義賊をやったのは凄いと思う反面、

他人を頼る彼の情報網があれば、無敵の義賊の誕生だと確信できた。

二人でやれば、隙がなかった。彼はそう確信した。

.....

彼の、アクセルの街中で戯言をほざく演説は、

クリスの活動範囲と活動時間を調べる意味も含めていた。

彼は計算づくの行動だった。

彼の中では、一つの行動に複数の意味を持たせるのは基本だった。

故に、もう一つの推測が確信に変わる。変わってしまった。

「…もう、冒険者たちの活動が本格化しますよね？」

そのうち、女神の仕事が急増する。

あまりキャベツ収穫で、稼げなかった冒険者達が冬を越すために急いで稼ぎ始める。

モンスター討伐での死亡率が、所謂稼げるイベントの後に急増している。

キャベツ収穫後は、今日を除いて暇があまりない。

…私を警戒するのは当然です。

しかし、今後は、なるべく女神としての本業を優先させるべきかと存じます」

彼は、完全に確信した。

女神エリスは自分を警戒し過ぎている。

：恐らくこれ以上の警戒は、女神エリスの業務に支障が出るレベルで。

彼がしばらくアクセルに滞在する以上、

女神エリスは今回を除けば恐らく、あまりアクセルには来られない。

王都や他の神器候補もあるからだ。

優先すべきは寧ろそちらだと彼は考えていた。

現段階で、彼の調べられたアクセル近郊にありそうな神器は小粒の物ばかりだった。

：『宝感知』で彼はそれらを確認したわけではないし、資料だけの類推でしかないが。

流石に、彼にとってザルな警備でも、警戒が激しい貴族はまだ探れない。

だが、いずれ必ず探らないといけなかった。貴族が魔王軍のスパイであることを彼は警戒していた。

必ずいる。というか、怪しいペンギンの貴族がいた。あからさま過ぎるので彼は現在放置している。

彼に取って、そんな確実に相手をしないといけない悪徳貴族は、アルダープ領主が筆頭だった。

：アルダープ領主は『悪魔』を確実に飼っていた。

彼はもう完全に確信していた。

彼と相性最悪な思考を捻じ曲げる悪魔だと彼は考えていた。

心を読む公爵より彼に取っては脅威だった。

もし仮に、自分が自分でなくなるくらい思考を捻じ曲げられたら、彼は負けると推察している。

悪魔への飽和攻撃か、アルダープ領主本人を捕らえるしかない。それをやったら、『王国』が崩壊する。

アルダープ領主の悪魔支配の報は国の存続を脅かし兼ねない。平時ならともかく、今は戦争中だ。魔王軍との。

彼が正攻法で悪魔退治しようものなら必ず明るみになってしまった。彼に取ってその悪魔は、致命的に弱点過ぎた。

：貴族の時代から庶民主体のパラダイムシフトが発生する。彼はそう結論付けた。

彼はそれが起きてしまったら、魔王討伐どころでないと確信した。

ノイズの『研究者』のようなチート能力者等がいればまだ富国強兵の範囲内だが、

そんな都合の良い存在の情報は、彼は知らなかったし、恐らくいいんと思っっている。

幸いなことは、

アルダープ領主は悪魔をどう考えても使いこなせていなかったことだけだった。

：彼に、情報が『捻じ曲がっている』ことを悟らせていたから。

悪魔を活かしきれなければ彼に勘付かれることはなかった。さらに言えば、見張りにダステイネス家をつけられたりはしない。

彼が調べなくても『王家の懐刀』といえ、ダステイネス家と言われるほどの名家が、

アルダープ領主を常に監視していた。

彼はアルダープ領主をいずれ、

仲間のダクネスのためにも秘密裏に、安全に排除するつもりだった。

そのためには、何としてでも『地獄の公爵』との取引が必要不可欠だった。

公爵が居なければ、彼は、人類滅亡の可能性すら考えていた。

神では無理だと彼は確信している。

まともな神では、パラダイムシフトの波から魔王軍に耐えきれなかった。

：皮肉なことに、彼の想定する『最悪』にも適応できる唯一の宗教があった。

アクシズ教だった。アクアを祀り上げ、彼が洗脳すれば解決できた。彼の計算上は。

この刹那主義と快樂主義を詰め込んだ宗教ならば、

彼の想定するパラダイムシフトすら乗り越えられた。

彼は、変態が世界を支配するなど断じて認めなかった。

…だが、変態なら対応可能なのだ。理不尽な改革すら平然と耐えのけられた。

彼の計算上、アクシズ教徒なら本当に地獄だろうが耐えられた。恐

ろしい。

だが、彼に信仰などできないし、しない。

その不誠実には彼には決して許せないから。

悪魔を唾棄する『神』は彼の行動を阻害した。

：故に、信仰などできない。不可能だった。

最も、彼は神意を自己解釈して、焚きつけたり、利用したりするのは一切躊躇しない。

彼は、悪魔も神も利用できるものは利用する気満々だった。

彼のこの姿勢が、地獄の公爵が彼に目をつける最大の原因なのに彼はまだ気が付かない。

.....

魔王城の一部屋に『地獄の公爵』は籠っていた。

珍しいことに魔王城の誰もガツカリさせたり、

血涙流させたりしない平和がそこにはあった。

だが、魔王からいい加減働いてくれと言われた『地獄の公爵』は、

「今、興味のある『者』がいるから後にしろ！」

と魔王の依頼を一蹴していた。

流石に魔王と言えども、引き下がらざる負えなかった。

『地獄の公爵』が、本気を出せば魔王軍を本当に壊滅できたから。

：長い付き合いから、魔王城の結界維持にだけ勤めて貰っていたよ
うなものだった。

本来、地獄の『公爵』が魔王軍幹部等、本来は有り得ない。他の平行宇宙でもそんな事例はない。

この世界だけ、異常なのだ。

：神と世界の命運を争う頂点の一人が魔王軍幹部などしていることが。

そんな、公爵は本気で自分の残機を確実に消せた可能性を見つけて、驚いていた。

占い師の『予言』がなければ、どうあがいても公爵は詰んでいた。思考が読めても、全ての可能性を破壊する気なら、公爵でも回避不可能だった。

彼は、全ての可能性で公爵の残機を減らしていた。

観測できた可能性全てで確実に減らしていた。

：これは神であつても有り得ない偉業だった。

少なくとも公爵に取っては偉業だった。

公爵に人間が勝てる可能性等、今まで、たった一人しかいなかったから。

「神も悪魔も恐れない。：それどころか利用する気しかない。

いやはや、我輩ここまで悪魔より悪魔が相応しい人間など早々見たことがないわ!!」

地獄の公爵は歓喜していた。

人間は公爵にとって、ご飯製造機である。

だが、公爵すら想像を絶する程美味であろう極上のご飯を用意して、

公爵を利用する気満々の人間など初めてだった。

『地獄の公爵』 バニルは、彼を占ったりするのは苦勞した。

何故か、いつもピカピカ光るウザったい何かがあったからだ。

だが、その甲斐があるほど面白い人間を見つけたことを喜んで
いた。

「素晴らしい!!我輩との偶発的遭遇という僅かな勝ち筋。

：そんな普通なら有り得ない可能性をこの者は、『意図的』に起こし
ている。

その最初に全てを懸けてその偶然で葬ることしか考えていない!!
しかし：ピカピカしたウザったいのがなければ全ての可能性を覗
けるのに…

本当に邪魔だこのピカピカ。完全に空気を読んでいない。

我輩の楽しみを邪魔しおつてからに…」

地獄の公爵であるバニルはそこだけが不満だった。

何故か、ピカピカしたのが、可能性に大体いて大変邪魔なのだ。

だが、ピカピカが、いないときもありその時の可能性は見えた。

ある可能性で彼は、公爵にとっての極悪非道の行為。

作成中のダンジョン毎爆破する非道過ぎる行いをしていた。

ある可能性では、敢えて公爵に心を読ませて、彼にだけ意図的な情
報の空白を作り、

その隙を、虚を完全についでいた。

ある可能性では、別の勇者候補を囿に使い、公爵がそれをおちよ
くっている間に、

行動不能の状況に追い詰めたりもしていた。

ある可能性では

…何と、彼単独で、公爵に真正面から挑み勝つ可能性もあった。

観測した公爵自身も信じられないが、確かに存在していた。

『地獄の公爵』バニルに取って、この長い生の中で初めての偉業が一つ存在していた。

公爵は過去も未来も覗けた。彼自身を見つけることなど容易だった。

…だが、彼の未来は中々読めない。

大体、ピカピカ光るウザったい何かが邪魔をする。

「ある意味、我輩に勝てる可能性を奪ってしまったわけだが…」

公爵はある意味、彼に対して、反則を意図せず行ってしまったと思っただ。

彼の策は完璧だった。予言さえなければ、彼は確実に公爵に勝った。

そう認めるほど。認めざる負えない程に、完璧な策だった。

本当にどういう状況でも公爵を完全に嵌めていた。

街でも、草原でも、山でも、ダンジョンでも、湖でも。

本当に、全てを揃えていた。

「しかし、困った。恐らく、我輩の『利益』になることを多数用意している。

…直接倒したわけでもない。飽くまでも我輩が観た可能性」
公爵としても、彼の用意しているであろう『取引』は非常に魅力的
だった。

彼を悪魔として転生させて、引き抜きたい程の魅力ある取引をピカ
ピカ光るのが、

いないときに何度もしていた。会ったことすらない存在の本質を
完全に把握していた。

策に支障がない範囲で完全に。

「しかし、どう考えても、我輩の『契約者』としては足りない。

…ただの『冒険者』では、七大悪魔の第一席とは釣り合わない。
本当に、実に惜しい。あの占い師め、余計なことを…」

公爵は本気で占い師に八つ当たりをするほど、
彼の可能性に心踊らされるものを感じていた。

彼の想定していた魔王軍幹部『地獄の公爵』バニルの偶発的遭遇が
完全に消えた。

彼の想定していた唯一の勝ち筋が、完全に失われた。

そして、それは、彼も公爵も望んでいなかった『戦い』を引き起こ
すことになる。

…だが、公爵も興奮し過ぎて、気が付かなかった。

未来予知を多用した際にほぼ確実に発生する不幸の存在を忘れて
いた。

観測できる全ての可能性で地獄の公爵バニルを倒して見せた。

彼が、それを、その隙を、見逃すはずがないことに気が付かなかつ

た。

彼は、その可能性も、公爵が、現在過去未来全てが覗ける能力であったとしても最初から、

想定済みだったことを、まだ地獄の公爵は知らない。

それを公爵が言う、あの忌々しいピカピカが覆い隠していたから。…本当に、偶然にも。

.....

女神エリスと彼の話は一旦区切りがついた。

どの道、女神エリスは、冒険者の死者が急増するこの時期は忙しいはずだった。

彼はそう結論付けし、女神エリスもそうであった。

「…そうですね。本当はあなたに色々言いたいことがあります。私をどう思っているかとか。

…私のことを心の底から『邪神』と思っていることくらい察しました」

女神エリスが彼にそう言った。

彼としては、女神エリスに『えっ、違うの?』と聞きそうになるのをぐっとこらえた。

幸い、頭がパーにならなかつた。

彼としてはそれが、少し怖かつた。

「…でも、それよりも聞きたいことがあります」

彼は、『女神』エリスをそこに見た。

彼は、クリスからいつの間にか『女神』エリスになっていることに気が付かなかつた。

彼は、本当にこのときだけは、女神エリスに負けていた。

女神エリスはこの時、この空間で、完全に本気だったから。

エリス教の経典にある『女神』を、彼は確かに見た。

.....

神聖なオーラが部屋を充満していた。

人間の彼にすら視認できるほどの、言わば幸運のオーラで満ちていた。

彼は、確実に天界規定ギリギリの行為を女神エリスが行っているのを察した。

彼には、何故、そこまでする必要があるのかわからなかつた。

：彼としては、大変不本意だが、彼自身を抹殺した方が早いと確信していた。

そんな中、女神エリスが彼に問いかけた。

「あなたはこの世界を愛していますか？」

女神エリスは彼にそう尋ねた。

彼は、思考が空虚になるのを実感した。それは、愛とは彼にとって禁句だったから。

「：愛とは何ですか？ 私には愛がありません」

だが、彼は『女神』に正直に答える。

絶望の禁句も、まだ、彼は耐えられた。何故かは彼にはわからなかつた。

女神エリスの間については、そんなこと言われても彼が知りたい。

「私は愛や友情など知りません。知りたくとも人間性が欠落していません。」

：「だけど、今、『仲間』といっているのは、何故か、とても楽しい」
彼は黙って聞いてくれる女神に今の本音を話す。

最もその先に裁きがあれば、
彼はまだアクアのことがあるから、消滅のその瞬間まで抗うが。

「この世界の人々も何だかんだ言いつつ、私を受け入れてくれている。
：「大いなる誤解はあれど」

彼は何だかんだでダストやらギルド長やら色んな人々の弱みを握りこそすれ、

人間自体は、嫌ってはいなかった。

彼は嬉々として、弱みに付け込む外道だと自覚している。

自分自身を嫌いこそすれ、心から『他人』を嫌うことはできなかった。

前世でも、この世界でも。

「この楽しさが、愛なのならば、私は世界を愛していると言えるかも知れません」

彼はこの言葉自体は本音であるが、戯言をほざいた。

彼自身、この意味のない空虚な発言だと思った。

「ですが、それは、愛ではない。違いますよね？……女神エリス様」
彼は、これが『愛』ではないと確信していた。

彼は、致命的に何か欠落していた。自覚があった。

彼は、この一連の発言だけ、真摯に告白した。

例え、彼には禁句だろうが関係なかった。

目の前の存在に、神を感じたからだ。

彼は決して神には祈らない。だが、敬意は持っていた。

彼には、神罰不可避の狼藉に躊躇等ないが、それでも一定の敬意はあった。

女神エリスが沈黙する。彼にはそれを不思議と恐怖しなかった。

彼には、それが何故かわからなかった。

「…いいえ。それは愛です」

沈黙の末、『女神』エリスは彼にそう告げた。

女神エリスが本気で言っている。だが、沈黙が否定している。

「嘘ではない。…ですが、違いますね？」

彼は『女神』エリスの言いたいことが、壊滅的にわからない。

思考回路が違う。

神と人との差なのか…欠落した自分だけの差なのか。

彼には、女神エリスの言う事が、全くわからなかった。

「…ええ、あなたはとても賢い。」

もうここ数日で私の仕事に支障がでている程度には、私疲れていたんですよ?」

目の前の『聖女』が悪戯っぽく笑う。

女神エリスが、光臨していた。

彼は今更ながら現実だとはつきり確信していた。

「……冗談を。アクアであるまいし、あなたの智謀には私はついていきません。

私はあなたが、弱点のようです。純粹悪かと思えば、今は善しか感じない」

彼は、思わず頭がパーになる。

だが、全部本音だ。彼には女神エリスがわからない。

「…その辺り、物凄く、ええ物凄く神罰を与えたいのですが。

どうして、そんなに勘違いしているんですか!!」

女神エリスがキレた。

だから、彼も開き直った。

「…神罰覚悟で言いますが、私は心がとても捻じ曲がっています」

彼は、そこまで感情を露わにした女神エリスに思わず『本音』をぶつけてみたくなった。

「だから、目の前に美しい女神がいたとしても、それを信じることができません」

彼は、転生前、初対面のアクアの本性を一瞬で察した。

だが、それは『女神』として、彼が一瞬でもアクアを見ていなかったからだ。

今、女神エリスは敢えて、彼に光臨までした。

故に、女神を相手に初めて内心を漏らす。

彼に最初の計算などない。

全て、そのままを話す。打ち明ける。

「女神エリス様。あなたは大変お美しい。

…ですが、私にはそうと表現しかできないのです。申し訳ありません。私は致命的に愚かなのです。

例え目の前に、神々しい光があろうとも、私は正面から見る事ができません。

私は影しか見られないでしょう。この愚か者を何卒、どうかお許しください」

彼は、真摯に謝罪する。

左手を腹に、右手を背中へ回し、深々と頭を下げる。彼の知る限り、最上級の礼を示す。

彼は女神エリスのことがわからないからだ。せめて、彼の謝罪を全身で表現した。

自分より遥かに智謀や計略を練れる存在だと思っているし、『狂信者』に見える。

…この間のアンデッド論を聞いて恐ろしいまでの狂信者なのは確定だ。

その一面は確実に女神エリスにはあった。

だが、彼は女神エリスが、全能ではないと知っていた。

だから、彼は策を張り巡らせた。女神エリスに気取られずに。

今はそのような無粋は一切ない。彼の『素』を女神エリスに見せた。

彼は、女神エリスが本当に、何を言いたいのかさっぱりわからない。

…恐らく女神エリスに、愛を説かれたところで、きつと彼にはわからないと確信していた。

何故か、わからない。彼には、愛せる者がいないからだと推測はした。

それは、国語のテストの応用だった。

飽くまでも国語のテストならそう書くのが正解だから彼はそう推測しただけだ。

彼は気が付いた。女神エリスが何も喋らない。

何かあつたのかと、我に返った。謝罪の姿勢を元に戻した。

「な、な、な…」

何故か女神エリスは顔を真っ赤にしている。

何か言おうとしているが彼には聞き取れない。

彼は女神でも風邪を引くのかもしれないと思った。

女神エリスからは、怒りは感じないから。

ベルディア討伐計画説明の時のアクアに近いような気がするが、彼にはわからない。

：アクアは風邪を引かないような気がする。

何だろう。馬鹿は風邪を引かないという典型がアレなんだろうか。

何れにせよ、アクアが風邪を引かないように今のうちに防寒対策を整えよう。

彼は場違いなことを考えていた。

「中止…そう中止です!!また、今度会いましょう!

そうしましょう!…さようなら!!」

女神エリスが彼に捲し立てて、そのまま外へ飛び出した。

：彼は女神エリスが、クリスに戻らないとアクセルで騒ぎになると確信した。

彼には本気の『神』など決して、止められはしなかったが。

.....

彼は愛が欠けているから気が付けない。

第三者目線で、彼は女神エリスを完全に口説いていた。

彼はわからない。彼は非常に不味いことをした。

彼の言う有り得ない感情というものを神は持っていた。

彼はそれを『神話』などと片づけていた。

彼は知らない。

あの空間で、女神エリスが本気を出した時だけ誰であろうが、

本音しか話せなくなることに気が付けない。

女神エリスはこの空間を使うに当たって彼女なりに必死の覚悟していた。

だから、彼の言葉は彼女の心に響いてしまう。

彼の本音は確実に、女神エリスを動揺させた。

もう一度言う、彼は第三者から見て女神エリスを完全に口説いていた。

：純粹過ぎる女神に、彼は非常に不味いことをした。

第十一話 理不尽な商才なき店主（シリアスブレイカー）

彼は駆け出し冒険者の街「アクセル」の可能性に気が付いた。

それは、彼が万が一地獄の公爵と単騎で遭遇した場合、戦う想定での計画の遂行中にわかった。

.....

簡単に説明すると四つだった。

地獄の公爵バニル討伐。単騎遭遇時での、計画は四段階となっていた。

∴彼に取ってはこれで全ての対策になった。

たった、四つで地獄の公爵討伐が彼には可能だった。

一つ、リッチーである可能性があるキールから『ドレインタッチ』を貰う。

これは、彼の賭けだった。

無くても、魔王討伐の計画自体は可能だが、一部賭けになってしまった。

彼は、外付けの幸運では、どうしてもここぞというところで勝てないと彼は、薄々感じていた。

一人の神以外は知らないが、彼の推測は正しかった。

神器でもどうしようもない運命は確かに存在していた。

それは生まれ持ったものだ。彼にはそれがまるでなかった。

運命を必然に変える才能を持たなければ、彼は転生後数日で死んでいた。

常人なら、本当に一週間持たなかった。彼の幸運の低さはそれほどまでに低かった。

ステータスに表せないほどに低かった。

彼だからこそ不幸で済んだ。

前世であらゆる不幸を乗り越え、高校生まで生き延びた彼だから可能だった。

最も、前世のままでは、生きることが可能でも、魔王討伐は無理だった。

だが、彼は『奇跡』を得ていた。

既に二つの奇跡が彼にはあった。

彼はまだ二つとも知らない。

最初の奇跡はずっと彼の隣にいたことを。

…次の奇跡は彼以外の不幸を招きかねない危険性を。

そして、これから奇跡を超える偉業を成すことを彼はまだ知らない。

二つ、ドレインタッチを用いて安楽王女の体力を削りまくり、『死の宣告』で抹消する。

彼は、裏の検証で死の宣告を自分では、使い熟せないと悟った。

…高レベルモンスターなら弱らせないと不可能だった。

除草剤からの死の宣告でもできた。

だから、一つ目は運命を必然に変える手段でしかなかった。

ドレインタッチはここでは本来は不要だった。

だが、彼は除草剤で弱らせられるか疑問があった。

全部へのダメージは間違いなくドレインタッチが有効だった。

安楽少女の上位互換なら根が森全体にあると彼は確信していた。

安楽王女は、高経験値モンスター安楽少女の上位版だ。

彼にその高経験値があれば、相当なレベルアップができた。

彼はあらゆるスキルを取得できた。

彼の頭脳があれば容易に全て使い熟せた。

魔王討伐だけであれば確実に彼の計画では可能だった。

…彼は確信していた。

彼の計画の全容を知れば、『地獄の公爵』バニルも可能だと断言した。

彼は、地獄の公爵すら、完封できた存在だった。

計画の遂行自体は余裕と断言できた。

だが、公爵なら、彼を確実に止めていた。

その計画を遂行しようとするのをだから女神は学ぶことになった。

公爵が計画の詳細を知れば、彼の可能性をドブに捨てるような行いだ。

公爵からすればだが、彼に取ってはそれが全てだった。

少なくとも、現段階ではそれしかなかった。

なお、地獄の公爵は二つ目の可能性を、安楽王女討伐を、絶対に起こさせない。

…何故なら、自分を倒せる可能性だからだ。

敬意を持って全力で潰すことこそ、公爵なりの謝罪だった。

だから、彼に最後の方法が残されていた。シリアスブレイカーが。

その段階なら、時間軸なら、まだ彼は捨てていなかった。

アクアの『散財』の品を彼は持っていた。

故に、ここから先は無意味となったが、方法論だけ続ける。

三つ、爆裂魔法を取得する。

めぐみんが爆裂魔法を使用する場面を彼は何度も見ていた。

めぐみんを通して爆裂魔法の理論を知った彼なら可能だった。

安楽王女討伐で取得したスキルポイントで余裕で爆裂魔法が取得できた。

紅魔族随一の天才がその全てを懸けた理論の集大成を彼は、めぐみんの次にそれを理解していた。

紅魔族のような改造人間ではない彼は、自分で人体を改造を施していた。

故に、紅魔族随一の天才に知力と発想だけは追い付けた。強引な努力で可能とした。

彼は計画のために持てる才を使っていた。

有り余る才能を全て消費したから可能だった。

女神エリスの横やりで修正した今も彼は、ただ変更しただけだった。

彼の根本は、まだ変わっていないかった。

彼を気づかせるのは、『他人』では無理だった。

だが、余裕ができれば、時間を稼げた。

地獄の公爵という彼最大の脅威を早期に倒せれば。

この時の彼は、それは不可能だと思っていた。

…それは、理不尽な商才なき店主（シリアスブレイカー）がいたから可能だった。

四つ、禁制の禁術の詰まった結晶体を用意する。

寿命を削り、やがて死に至る禁術だ。対価として膨大な力が手に入る。

この四つだけで可能だった。

そして、彼は四つ目を手に入れる過程で自分と同じ思考のできた人間の存在を知った。

…『氷の魔女』ウイズだった。

.....

四つ目の真実で、ウイズの正体を悟ったので、彼の大概の行為が無駄に終わった。

だが、当初の計画はこうだった。

キールから『ドレイインタッチ』を貰う。

彼に取って、キールがリッチーであり、今もダンジョン奥深くにいるかは本当に賭けだった。

本来であれば、彼はその可能性がなければ、単独で地獄の公爵と戦闘した場合、負けると確信していた。

戦闘手段の『多様性』の確保。経験値が彼には足りなかった。実戦経験を休みなしに積むためには、どうしてもドレインタッチが必要だった。

彼は自らに人体実験の成果を施し、既に寿命の半分以上を減らして時間は確保していた。

要はほぼ眠らないで、連続行動していた。一日中ずっと彼は考え続けていた。

彼は、計画を遂行するためだけの存在に成りかけていた。仲間が居なければ完全にそうなっていたと彼は確信していた。

まだ、アクセルの人々や世界を気にする余裕は彼にはあつた。

：アクアに気が付かれないギリギリの範囲で彼は自己改造していた。

チート等ない彼は、確実に死に向かっていた。

ノイズの『研究者』でない以上、紅魔族のような改造人間化は彼には無理だった。

彼は自己改造で紅魔族がチートで改造された人間だと確信していた。

そして、ノイズの研究者が最初から壊れていたら魔王討伐できたかもしれないと思った。

それくらい紅魔族は、理想の改造人間だった。彼からすれば、完成品だった。

めぐみんやゆんゆんに失礼だが、

彼は紅魔族化の手段が失われているだろうことにショックだった。

彼の人為的な改造は、チート等ない。ましてや、彼は医者ではな

かった。

これ以上の改造は、彼の思考どころか生命活動に影響が出るほどの危険水域だった。

彼は、思いつく限りの自己改造を行ってしまった。

彼には地獄の公爵討伐の時間がないから強引に行った。

これを治すには、彼が瀕死の重傷でアクアが全力で癒すなどしない限り不可能だった。

彼にそんな計画はなかった。少なくとも地獄の公爵まで持ちこたえる必要があった。

彼は本気で消滅を覚悟しているが故の狂気の選択だった。

彼は壊れていた。彼は、『愛』があればまだそこまでいかなかった。

そのことを、まだ誰も知らない。

彼は、ふと、ゆんゆんが本当に友達になっていたらと考えた。

：彼は、恐らく、この手段は取らなかったと確信していた。

前世で手に入れられなかった『友情』を、

彼は絶対に手放せなかっただろうと確信できた。

それこそ本来の寿命まで、その最後まで彼は大切にしたらだろうと思った。

そのために、計画すら捻じ曲げたと彼は確信していた。

だが、もう後戻りは彼にはできなかった。

彼はもう完全に修復不可能な自己改造を施していた。

普通の回復魔法すら無意味だった。

解呪でも不可能。彼は科学と魔法を組み合わせていた。

実験体との取引は、あちらから持ちかけられたものだった。

彼の撒き餌に釣られて来た者達だった。

：実験体たちの要望は、彼の逆、寿命を延ばすためにだった。故に、あらゆる人員をあちらが用意していた。

彼は知識や発想を与え、一定の成果らしきものを提供できた。

だが、彼は本来の取引とは逆、寿命を減らす『副産物』を彼は欲していた。

これまでの実験体たちの成果を対価に取引していた。

彼は、アクアに内密で全て行った。

だが、強引なまでの計画の進め方には、無理が出ていた。

ベルディアが想定外に早く来たから彼は、加速度的に自己改造を早めていた。

彼に取っては、公爵対策のために。必要な計画のために。

皮肉にも、公爵は計画を知ってしまった。

全容は観測していないが、公爵を倒せる可能性を観測していた。

彼の全容を把握していないのは、

好奇心で彼の可能性を摘んでしまった公爵なりの謝罪だった。

彼に取っては何の意味もないが。

女神エリスは恐らく気が付いていると彼は推測していた。

彼の隠蔽工作もそこまで完璧でなかった。

自己改造の件は、確実に足はついている。彼は確信していた。

エリス神は確実に気が付いていた。

故に、危険がないか世界への『愛』とやらを確かめに来た。

これしか、天界規定ギリギリまでやる意味がなかった。

ただ、彼のことを知るなら時間をかければ良いだけだから。

彼の推察は当たっていた。この女神エリスの推察に関しては。故に、もう既に半分寿命を減らしていた彼の状況は彼女に取って不味かった。

最悪なことを彼はしてしまったことに彼はまだ気が付かない。

彼は、純粹な女神がどう出るか知らない。女神エリス自身もまだわかっていない。

彼は知れば、全力で拒否する。

：故に、女神エリスは気づかせないだろう。このままでは。

女神エリスが愛を知らぬなら知らない方が都合の良いこともあるという発想に至るまで、

残された時間はない。……ないはずだった。

彼は愛に欠ける。故に、女神エリスを蝕んでしまうはずだった。

このままでは彼も女神エリスも互いに、

彼の言う神話の『悲劇』が襲い掛かることは明確だった。そうだったのだ。

彼は、女神エリスの概念を変える一歩手前の行為を行ってしまった。

まだ、誰もそれに気が付いていない。

そして、これからもいなくなった。

彼が加速度的に計画を早めたとしてもまだ魔王軍幹部ベルディア討伐だけだ。

まだ、彼の言う修復不可能はまだ修復可能だった。

女神アクアさえ気が付けば彼を説得できた。
彼がその可能性に気が付けば直ぐに修正した。
だが、彼らに取ってはまだ理解できない。
修正できる最後の分岐点はもう目の前にあった。

…学んだことを活かす時間のリミットは刻々と迫っていた。

皮肉にも、彼の想定している計画での学びとテーマと被っていた。
アクアの知性が試されていた。

なお、彼の用意していたテーマは、『できなければ、誰かに頼る』だった。

材料は既に揃っていた。彼の問は、そして宿敵が皮肉にもアクアの学びとなった。

…公爵はもうまもなく到着する。

そのタイミングで来たからこそ公爵は詰んでいた。

公爵の不幸は大概その貧乏神店主のせいだから。

.....

『未来』の話。

ある日、公爵は意図せずとはいえ、

あの駄女神の『教材』に使われたことに気が付き、怒り狂った。

彼に取って思考を読もうが未来を見通そうが全て想定内だから問題ない。

だが、突然、怒り狂ったバニルは想定外だった。

『地獄の公爵』バニルは思考を読み、更に過去・現在・未来を見通す能

力だ。

どう考えても、チート過ぎるが、彼はその天敵だった。

まともに思考する者全ての敵が彼だったから。

：アクアくらいの馬鹿でないと彼には勝てない。

彼の知るもう一人の公爵くらいパーでないと勝てない。

若しくは、変態だ。アクシズ教徒の扱いには二人揃って匙を投げた。

アクアの醜態をばら撒いても、エリス教の対立感情を煽っても、アクシズ教徒は喜ぶだけだった。

アクアの醜態に至っては、

「さすが、アクア様だ！」

アクシズ教徒は、これしか言わない。

本当に彼らは正気を疑った。

寧ろ、彼らからすればアクアの醜態を感謝されそうになるくらいだ。

アクシズ教徒は本当に頭がおかしかった。

彼は教義を暗記してはいた。

だが、真面目にあの教義を実践する者の行動原理が理解できなかった。

過去も現在もアルカンレティアは彼にとって魔境だった。

彼とバニルはダストを玩具にして、

ある意味、単純なアクシズ教徒を揶揄って、罠にかけて騙し、金を巻き上げるだけが精一杯の抵抗だった。

アクシズ教徒は基本金がない。大体散財するから本当にその瞬間で生きている。

彼からすれば狂気の沙汰だった。完全に頭おかしい。ところでんスライムが主食の自称美人プリーストが典型だ。

… それ以外食べないから彼はこっそり餌を与えた。故に、自称美人が家に来るようになっていた。

彼は、アクアの教育に悪いからこの自称美人を追い出したくて仕方がなかった。

めぐみんの『友人』でなければ、追い出していた。

真面目に彼はあの破壊僧に転生初期の段階でも、それ以降会った時も餌を与えるべきでなかったと反省していた。

本当に調子に乗るのだセシリーとかいうアクシズ教プリーストは彼にとってアクア以上に扱いが困った。

アクアが甘やかされ、教育の成果が失われ欠ける可能性を彼は危惧していた。

アクシズ教徒に唯一ダメージを与えられる手段が『金』しかないとバニルと彼は、今回の休暇の旅で漸く気が付いた。

彼ら二人に取って、最も恐ろしい邪神エリスがアルカンレティアに光臨したときは、

ダストに責任を押し付けて全力で回避していた。

あんな劇物を、休暇の旅に連れてきたダストにはキチンと復讐した。

…ダストは二人の玩具と化していた。

ダストは日頃の行いが悪すぎたレベルを超えていた。

そんな、お茶目な休暇の、後始末を終えた彼はリフレッシュどころか疲れていた。

彼の計画は遂行中だ。もう面倒臭いことこの上ないが。

彼の家は、もう変態の宝物庫になりつつあった。

バニルは不愉快な店の理不尽な店主に振り回されていた。彼は未だに氷の魔女とあの残念店主が同一人物と認めていない。彼とバニルの二人は、ストレス発散のためにダスト『で』遊んで、毎日調子に乗っているアクシズ教徒を懲らしめようと、二人して全力で悪意を振り回していた。

確かに色々面白かったが、

劇物の存在やらアクシズ教徒の想定外の変態さに彼らは疲れていた。

…バニルが意図せずに、教材になっていたことを彼もそのタイミングで察した。

彼は突然のバニルの発狂で、アクシズ教徒の振舞いで気が付いた。過去の行いを思い返していた。

「そちらが先にズルしたのが、全てが悪い。勝てば官軍負ければ賊軍。世界の命運を懸けた最終決戦とやらで、果たせば良い。

そこまで私は知らないし、興味がない。私からすれば、悪魔も神も似たようなものだ」

彼なりにバニルに、悪魔と神に、喧嘩を売った。

バニルに取ってそれは屈辱以外の何者でもない答えだった。

「言わせておれば…いい気になりおつてからに…

…いいか！敢えて聞かせてやる。

貴様の思考や真意などお見通しの我輩には無意味と知っているが敢えて言わせろ!!」

『地獄の公爵』バニルは、今までかつてこれほどまで自分の能力を悔いたことがない。

彼の真意が裏に隠された複数の意味が容易にくみ取れた。

彼は、悪魔にも神にも喧嘩を売っていた。

だが、この目の前の存在は、可能性に満ちている。

だが、彼は、それ以上に神と悪魔の天敵だった。

バニルだけがそのことに真つ先に気が付いた。

その能力が故に。

「神という連中は日ごろ何もしてくれないくせに、

信じれば救われると嘯き寄付をすれば天国に行けると言っ
て金を
筆り、

人に害しか与えることしかしない連中ではないか!!」

バニルは人間風情に激怒した。

これの『答え』が見通せる自分に腹ただしかった。

だが、彼の可能性の面白さを楽しむ自分がいた。

バニルは、彼に勝てなくはない。寧ろ余裕だ。

地獄の公爵が、人間風情に全力で大人げなく行けばだ。

だが、それは無粋だと公爵は思っている。

彼もそれをわかってやっていることがバニルに取っては大変腹た
だしかった。

彼は言った。

「だから、私からすればどちらも同じなんだ…

どちらも人に害にしかならないなら、地獄や天界何て、正直、征服
してやりたい。

何、簡単だ。互いに争っているなら利用しない手はない。

…条件は全て満たされている」

彼の才能は、空前絶後の『魔王』だった。

神も悪魔も決して恐れはしない。
神や悪魔など、支配すれば良いと平然と宣う狂人だった。

.....
そんな誰も知らない未来は、今は存在しない。

今の彼は、愛も友情もない自分には計画しか依るべきところがなかった。

だからせめて、仲間と笑える『旅』がしたかった。

彼がいなくとも、楽しかったと思ってもらえるような旅を彼は計画していた。

魔王討伐は、彼の初心。故に臆さない。死も消滅も彼の前には恐怖にならなかった。

『孤独』になってしまおうのが、彼は覚悟していても辛かった。

だから、仲間は守ると彼は決めた。

さらに言えば、アクアを天界に返し、教育するのは大前提だった。

彼の思いは完全にアクアの逆を行っているのに気が付くものは誰もいなかった。

彼は、本当に全てを懸けていた。

：それ以外何もできることを思いつかなかったから。

.....

彼の最大の武器、思考を失わない手段として『ドレインタッチ』が必要だった。

：アクアは女神エリスより過激な姿勢ではないと彼は確信していた。

彼は本当にどうしようもない理由があるアンデッドの扱いについて聞いた。

「んなもん滅ぼすに決まっているじゃない！」

アクアも即答した。

だが、それでは不味い可能性に気が付いた彼がどうしても無理か尋ねると、

「…場合にもよるわ。流石にそんなアンデッドなんていないと思うけど」

彼の必死の懇願を聞いてくれた。まだ、ギリギリセーフだった。

この時、彼は計画を変更できる重要な『ターニングポイント』を発見していた。

これが最後の分岐点だった。この扱いで彼の運命が決まった。

彼も誰も、公爵ですら気が付けない。

バニル曰く、忌々しいピカピカと、

貧乏神店主の存在のせいで意図せぬ空白が生まれようとしていた。

バニルの弱点、同格や神は読めない。正確には読みにくい。

二人もいれば完全に読めないに等しかった。

…端的に言って、ウィズのせいで地獄の公爵バニルは負けた。

彼からしても大変不本意ながら、アクアの無駄遣いのせいでバニルに勝つことになった。

.....

…彼は、寿命を減らし、潜在能力を高める禁術の詰まった結晶体を

手に入れる過程で、

『氷の魔女』の真実を彼は確信した。

だが、アクアがウイズを許すかがわからない以上、

キールのダンジョンに地獄の公爵が潜む可能性がある以上、

まだ、彼は一つ目を変える気はなかった。キールとの接触は変えない。

キールとの取引の後に、恐らく、キールの望む願望は『死亡』だ。

彼はキールの願望を何故か完全に理解していた。

彼が愛を手に入れたら、リッチー化できたらキールと同じことをすると確信していたから。

彼は、キールの亡き後に、

爆弾を設置し、誘爆でダンジョン諸共いつでも消滅可能な状態にする気でいた。

これが彼の、未来を覗いた公爵の逆鱗に触れた。

故に、公爵はこのタイミングで彼に奇襲してやることを決意していた。

∴彼に取つての幸運は、本当にアクアの無駄遣いだった。

公爵の不幸は、ウイズという商売人にあらゆる意味で向かない逸材のせいだった。

.....

彼は、ウイズの真実を知った。

ウイズの経歴の、ほぼ全容を彼は把握した。

ウイズは仲間をベルディアの『死の宣告』から救うために、禁制の禁術を用いていた。

それで地獄の公爵と取引をしたと彼は確信した。

リッチーになった経緯や思考は流石に、彼には理解できなかった。彼と違い、根から『善人』のウイズの思考はわからなかった。

だが、彼と同じ思考ができる存在の天才だった。氷の魔女ウイズは。

彼は、同じ思考で有りながら、善性のウイズが羨ましかった。

だから、本来、キールの存在は不要かも知れなかった。

だが、彼はダンジョンを崩壊させる罫を仕掛けるためにも行く必要性を思いついた。

ここが彼の知らない最後の分岐点だった。アクアの知性が試された最初でもあった。

悪魔と女神、彼の知らないやり取りが存在した。

彼はアクアに詳細は伏せつつも、

善性のリッチーの存在と、そのリッチーがいないとアクセルが滅ぶと断言した。

アクアは言った。

「一応、話させなさい。：場合によっては見逃すわ」

彼はアクアを確かに成長させていた。

本来の計画ではまだ先だった。

お題は、『できなければ、誰かに頼る』。

彼もアクアの教育、その計画が前倒しになっていたことに気が付いていなかった。

善人のリッチーは世界を救った。

皮肉にも、リッチーになったせいで捨てざる負えなかった女神エリスの危機すら救った。

女神エリスはそれを知らないし、彼もアクアも公爵も知らない。

完全なシリアスブレイカーの存在。

かつての氷の魔女という名の過激派。

今や、貧乏神のポンコツ店主が、全ての可能性を収束させた。

それは、最後の分岐点。本当に偶然に偶然が重なっていた。

条件は満たされていた。

彼からすれば、全ての努力がパーになるほど、ウイズの商才は壊滅的だった。

…だが、彼の悪意を活かせる最高の商品たちだった。

しかし、彼は絶対認めない。こんな反則を。

アクアが買った以上、返品は不可能。彼は教育のために敢えてしばらく様子見にした。

彼の財布を勝手に使ったアクアを叱るために。

「お買い上げありがとうございます！やはり私にはちゃんと審美眼が…」

彼は、ウイズにアクアお手製の聖水をぶちまけたくなった。

割と本気で。

バニルも全力で賛同したこと間違いなしだった。

.....

後で彼の話聞いたバニルは、

「…何故、その時にやらなかった!!我輩が許した!そこでやれ!!」
本気で彼の胸倉に掴みかかった。

ウイズは、そのときの体験から、
調子に乗って彼すらも活用法を思いつかない『ゴミ』を大量に仕入
れてきたからだ。

例えば、ステイールを使えるようになるが、盗賊専用装備。
しかも、かなり重くて、盗賊の装備にならない。

こんなものを一体どこから仕入れたのか、
どこで大量に仕入れてきたのか彼すら不明だった。

大体、盗賊ならステイールを使えて当たり前だった。
消費スキルポイントはたった1。

…ステイールを使えない方が馬鹿だった。
彼は、公爵との心理戦を楽しみにしていた。

実は、地獄の公爵バニルは、彼に取って一番、正攻法で挑める魔王
軍幹部だったから。

バニルもそう思っていた。未来まで対策する彼の策謀を最後まで
見たかった。

だが、完全に可能性は収束し、気が付けば、もう負けが確定してい
た。

彼に取っても、バニルにとっても不幸だった。

…だが、ウイズは世界を救った。本当に偶然だった。
それを知る者は、誰もいないが。

第十二話 悪魔との取引

数日かけて、彼はアクアにウイズについて念入りに説得したり、ミツルギキョウヤから魔剣グラムを取り上げダストに売り飛ばした。

裏では策謀が入り乱れているが大筋関係ない。

彼は、『計画』の第二段階へ移行できる体制が整いつつあった。

なお、ミツルギはアクアを『もの』扱いした。

「アクア様を、持ってこられる『者』として指定したんだらう？」

「僕が勝ったらアクア様を譲ってくれ。君が勝ったら、何でも一つ…。」

ミツルギはこう彼に言った。言ってしまった。

彼は策も関係なくキレた。

なので、ミツルギは彼に何度もズタボロにされた。

まず、ミツルギの上記の戯れ言の最中からの潜伏による奇襲を行った。

これは短剣を突き付けたただけだ。アクアへの『もの』扱いに彼はキレてしまった。

彼への悪評は想定内だった。

故にアクア達が何言おうが気にしないように道化を演じていた。

しかし、彼は完全に『素』になった。

ミツルギから言われたこの瞬間だけは彼はキレてしまった。

次に、彼とミツルギの、彼からすれば適当な口上からの目つぶしを行った。

彼からすればあまりに単純な初級魔法の組み合わせだ。

だが、初見では対応不可能な目潰しだった。

クリエイトアースで砂を作成、クリエイトブレスで砂を飛ばすだけ、ミツルギは簡単に引つ掛かった。

彼からすれば、魔剣グラムに頼るような三流勇者なら通用するかもしれない程度だったが、ミツルギには通じた。

なお、この時、彼はアクアとの取引に応じると言っていない。

さらには、ミツルギの言う決闘に関して、

ミツルギの仲間が襲ってきても、彼が逆のこともしても良いような穴を敢えて作ってみた。

だが、ミツルギは正攻法で襲ってきた。

彼は悪魔対策がなっていないと、ミツルギに決闘の、その『穴』だけ指摘した。

取引に応じるとは言っていない。

彼は、ミツルギが魔法や潜伏を警戒していることを察した。

彼の想定通りだった。最初の短剣で彼はミツルギに潜伏の脅威を教えたつもりだった。

二度目の目潰しで魔法の組み合わせによつては格上殺しになりうるとミツルギに気がつかせた。

故に、彼は潜伏でワイヤートラップによる行動阻害を行った。

ミツルギが警戒しているのは精々剣の間合いだった。

彼はミツルギの視線を観察し、余裕で気が付けた。

だから、柵を作った。魔剣グラムが何でも斬れるとはいえ、ワイヤートラップは邪魔だった。

取り除くのに数秒はかかった。魔剣の勇者ミツルギキョウヤといえども。

さらに彼は行動阻害からの折り畳み式弓矢による狙撃により、ワイヤートラップを解除しようとするミツルギをボコボコにした。

最終的に、ステイルで魔剣グラムを強奪した。

彼に取って、これ以上ないくらい正攻法で攻めてくる三流の勇者だった。

だから、言ってやった。

「あまりに弱い。確かに君の言う通り私は雑魚の冒険者で、だ。

仲間に苦勞を掛けている狂人と抜かしたが、まあ正しい。

だが、ミツルギキョウヤ。君は呆けている墮落している。

：何より才能に依存し過ぎていて。そんな弱者に何か言われる筋合いはない」

彼は口上で何かを言いたげなミツルギキョウヤを無視した。

用意していたミスリル製のワイヤーを取り出してからのバインドでミツルギを縛り上げた。

「彼はやりたい放題だった。

搦め手で、完全に悪辣な手法とはいえ、魔劍の勇者ミツルギに彼は一方的に、勝ってしまった。

想定外の策すら放棄してしまうほど、圧倒的な勝利だった。

魔劍の勇者ミツルギキョウヤをミツルギの仲間と彼の仲間しかいない路地裏でボコボコにした。

最低限の隠蔽は完璧だった。

彼の行為は第三者に目撃されなかった。

彼の想定する冒険者の持つ可能性の一端を、

ミツルギが軽視していた『搦手』を彼は内心怒りつつも叩き込んだ。

彼の計画通り、路地裏の騒ぎに気が付いた。

彼が手に入れた『魔劍グラム』を、

数日前から譲ることを、約束していた借金塗れの、善意の第三者ダスト君に売り飛ばした。

この彼の行為は、彼の仲間も、アクアすらも引かれたような気がし

た。

アクアも『もの』扱いで、ミツルギに激怒していたし、セーフだと彼は思いなおした。

彼はミツルギキョウヤに言った。

「さて、魔剣グラムは、何も知らない善意の第三者ダスト君が買い取った。

彼とは数日前から取引をしていた。これは警察に駆け込んでも無駄だ。

嘘発見器の探知すら不可能。

何も知らないはずのダスト君を犯罪者扱いしても無駄だし、そもそもそちらから言い出した決闘。：誤りはないな？」

彼はミツルギを完全に無視していた。

彼には、抑えられない激情があつてそれどころではなかった。

彼は悪魔以上の悪魔。『外道』だった。

彼はミツルギからすれば、偶然のコンタクトだが、ミツルギが接触したがっているのを彼は知っていた。

アークプリストでアクア。ミツルギが興味を持たないはずはない。

彼は、アクセルでは『アクア』の名が広まるのを抑えられなかった。だから、この形しかなかった。彼単独での接触は危険だった。

ミツルギが彼の調べた人物像でない可能性も彼は含んで行動していた。

アクアを探しているのは、善性なのはわかったが、彼は闇討ちを警戒していた。

有り得ない僅かな可能性すら、彼は忌避していた。彼はまだ死ねないから。

だが、ミツルギキョウヤは、意図せずに、彼の逆鱗に触れた。触れ

てしまった。

ミツルギの指摘は彼が最も後悔していたことだったから。勝手に同意も得ずに、アクアを連れてきた。

アクアは喜んでくれたと魔王軍幹部ベルディア討伐で知った彼はホツとしていた。

だが、彼に取って、アクアを天界から連れ去った行為は、許されがたい大罪だった。

そんなことミツルギに言われなくとも彼が一番気にしていた。

だから、彼を卑怯者呼ばわりするミツルギの仲間も、何故か、何も言わないアクア達も置いて彼は去った。

：彼は『素』が出かけていた。

最初の転生前に、アクアを『もの』扱いたしたのは、確かに自分だったのに、だ。

彼は、自分の計画にズレが生じかねない『激情』を押し殺すために必死だった。

.....

翌日、彼はウイズと面会した。

アクアは昨日のことを覚えてすらいらないようだ。彼はホツとした。機嫌を損ねて、ウイズとの接触をズラしたくなかった。

今回は、めぐみんもダクネスもおやすみだ。

ダクネスにはめぐみんの爆裂魔法にだけは気を付けるように警告はした。

彼は昨日の影響で、めぐみんの行動を予測できなかった。

彼は、ミツルギに激怒してしまった。

だから、半分逃げた。皆に、軽蔑されないか不安で。

アクアは魔王討伐がある以上いてくれると彼は、確信できた。故に、あらゆる意味で、今日が、一番都合が良かった。

ウイズとの接触には。

.....

∴アクアはウイズをとのやり取りを通して、

ウイズを今後、女神として定期的に監視すると言いつつ、その『善性』を認めた。

ウイズはアクアを女神と確信した。

最も、彼自身アクアに関して、偽るのは不可能と判断していた。

∴彼はウイズが魔王軍幹部ではないかと推測した。

彼に取って、『善人』が魔王軍幹部でも何もおかしくなかった。故に、放置することにした。

何故わかったか。

それはウイズが間抜けだからだ。彼はそう結論付けた。

ウイズはアクアならば、

二、三人分程度の魔王城の結界なら余裕で壊せるとウイズ自身がさらつと言い切った。

さらに、『魔王さん』とかウイズは隠す気ないような発言を連発していた。

幸い、アクアは気が付いていない。

だが、彼にとつては、こんなにわかりやすい魔王軍幹部ウイズの正体を察した。

彼に取つては、不器用ながら、彼の計画を、思考を真似られた偉人だったのだが。

もう見る影もなかった。『地獄の公爵』は本当に取引したのか少しだけ不安になった。

ウイズのプライベートだから彼は、聞きはしないが。

最も、ウイズの存在は、彼に『人間』の魔王軍幹部の存在を、ほぼ確証させた。

…させてしまった。

アクアが商品を探しに奥の方を探索していた。

彼は人間の魔王軍幹部とかいそうですねと呟いただけだ。

彼は、本当にそれ以外何もしていない。

だが、ウイズは言った。

「そうですね。セレスディナさんは魔王城にいた頃、策略を考えるのが大好きな方でした」

彼はウイズが完全に誤魔化す気がない危うさを感じた。

彼は曖昧に返事をして誤魔化した。アクアはギリギリ聞いていなかった。

馬鹿でも今の発言はアウトだった。彼は予想外の情報に感謝した。

故に、裏工作が得意な人間の、魔王軍幹部セレスディナはここで詰んだ。

彼におもちゃにされる『運命』が確定した。彼は本当にサディストだった。

彼女は完全に『道化』として、最後の最後まで玩具にされた。

彼と元同僚からセレスデイナは、全力で玩具にされた。

セレスデイナは魔王軍幹部として、彼と一番相性最悪だった。

策略で彼の土壌に立つなら、バニルぐらいでないと無理だった。

セレスデイナは彼からすれば、ただの愚か者だった。

彼の得意分野で攻めてくる非常に読みやすい『馬鹿』だった。

.....

そんな悲惨な運命が確定した魔王軍幹部セレスデイナのことは未
来の話だ。

ウイズは、シリアスのようなコメディ展開を終え、何と商談し始め
た。

完全に空気を読んでいない。彼以上に。

彼からすればこの状況下での、ウイズと『取引』とかまな板の鯛だっ
た。

だが、彼は今回、ぐっと堪えた。

彼からすれば、善人で『まともな女性』だったからウイズは。

「この錠剤はですね。モンスターに食べさせると、何と数時間は動け
なくなるんです！」

ただ、食べたモンスターの少し耐久が上がってしまうのが欠点なん
ですが、凄いですよね!!」

彼も凄い商品だと思った。

だが、彼はそんな凄い商品なら何かあると思った。売れないわけ
が。

「へえ、いいじゃない！あのカエルも拳で倒せるわね」

アクアが乗り気だ。彼は不味いと思った。

彼は、何度もジャイアントトードに拳が、

効かないと言っても注意しないとアクアはやり出そうとしていた。

「お次はこれ！何と何でもくつつけられる瞬間接着剤です。液状タイプで使いやすい。

色んなことに使えるものです！ただ、少しだけ粘着力が強すぎるのが欠点ですね」

彼は察した。

こんな性能の良い道具が売れない理由を、伝聞が彼の確信に変わった。

彼は『氷の魔女』がこんなポンコツに成り果てたことに些かショックだった。

.....

だが、この場にバニルが居合わせたらこう言った。

「我輩を討伐しようと躍起になっていた時期から、

魔法の道具に関するセンスはこんな感じであった。

何故、あの面白魔導士からポンコツ店主になることを予期しなかったのか。

我輩、自分でも不思議なくらいの判断ミスだった。

：いや、ダンジョンが我輩一人で作れない以上、どの道取引していたが」

ウイズは、バニルすら匙を投げるほど最初からポンコツだった。

.....

そんな事情など知らない彼は、推測した。

この商品という名の『ゴミ』の正体を。

まず、最初の錠剤は恐ろしいくらい耐久力が上がって、モンスターが倒せなくなるパターンであること。

二つ目は、粘着力が強すぎて、使った瞬間に本気で取れなくなるパターンだと。

どちらも危険すぎて、売れない。『魔法』のある世界の道具とかヤバすぎた。

：アクセルの住民はウイズの言う『少し』が、致命的欠陥だと経験則でわかっているから買わない。

「いいじゃないのー！こういうの、前にあなた欲しがっていたわよね？ちよっと財布貸しなさい！：結構入っているわね。」

私へのお金もう少し上げたら、加護が手にはいるかもしれないわよね？

宵越しの金は持たないとか風情のあることを言えないケチらしいわ。

財布の中身だけで性格が見えるわね。

：この『水の女神』アクア様のプレゼントよ。感謝してむせび泣きなさい！！」

彼は、勝手に財布を取られた挙句に、

アクアの浪費を普段止めていた八つ当たりで罵倒され、

『ゴミ』をプレゼントとして自分の金で寄越された。

彼はアクシズ教の加護など断じてごめんだった。

「：あのちなみに何ですが、この錠剤の耐久力の上がり具合、及び粘着

剤の粘着力は？」

彼はアクアを意図的に無視した。

もし、彼は商品が有益ならアクアをギリギリ怒らないで注意に止める気でいた。

「ジャイアントトードに私が音を抑えた改良型の爆裂魔法を撃ち込んだ後に、

ライトオブセイバーを使えば余裕でした！

接着剤は一度くつつけたら私でも決して取れません、
そんな欠点を補って余りある凄い品々でしょう!!」

彼は察した。

この錠剤を使えば、数時間ダクネスはほぼ無敵だ。

∴爆裂魔法に耐えるジャイアントトードとか無理ゲーだ。動けなくとも。

アクアなら恐らく粘着剤を水に戻せるから使える。

できなくてもアクアの所有する魔法にそういうものがあつた。

アクアの能力は改めて、チートだと彼は思った。確信した。

彼はアクアをギリギリ許した。

今度、使用ミスを取らせてさせてアクアを叱ろうと決意した。

このやり取りは『地獄の公爵』バニルは絶対に観測できない。
同程度の力と女神が存在している空間の観測は不可能だった。

彼もゴミの処分しか考えていない。公爵で使うことを想定していない。

思考を読んでも、彼の想定外だった。活用法を最後の最後で気が付いた。

だからこそ、彼の何重にも及ぶ未来対策とその条件を満たすまでもなく、バニルは詰んだ。

たった一度の致命的なミス。

バニルがアクアを狙わないために、彼はアクア不在時のパターンを完全に対策していた。

さらに言えば、仲間に爆裂魔法を撃ち込むのは、彼にとって論外だったから。

ダクネスを実験台に使うわけにも彼はできなかった。

流石にめぐみんの爆裂魔法は強すぎた。

めぐみんレベル6の時点で、弱らせたとはいえ魔王軍幹部ベルディアを討伐可能だった。

彼からすれば、チート過ぎた。

一応、公爵が、ダクネスを乗っ取っても、詰む策を彼は用意していた。

正確には、彼はバニルの情報を意図的に遮断しているから、ダクネスを操る可能性といった方が正しい表現だった。

これは、彼の想定していた偶発的遭遇がなくなったから、起こりかけた。

彼は偶発的遭遇時に、

彼の多数用意していたアイデアを『その場』で引き出し、バニルの虚を突くつもりだった。

バニルを知らなければ、対峙した瞬間に閃きで彼は対処する。

彼は未来予知ができて飽くまで彼の閃きでの対応、つまり可能性ならば、

即興ならコンマ一秒の隙が『地獄の公爵』に生まれると確信していた。

愉悦故の、悔りが初対面の偶発的遭遇。

しかも、冒険者の彼ならば確実に数秒稼げると確信していた。

本当は一秒に満たないかもしれないが、彼に取っては十分だった。

これこそ、『地獄の公爵』バニルすら驚愕した、致命的な隙だった。

彼の推測は全て正しかった。

勇者の奇襲すら回避可能な公爵ですら、冒険者では侮ったから。

最初から、殺す気でも、彼の一瞬での可能性の閃きはバニルではかわしきれなかった。

『地獄の公爵』を知らないからできる奇襲。

彼は完全に『道化』を演じ切りバニルを仕留めていた。バニルの観測した可能性全てで。

バニルは全ての観測で、

彼が完全に残機を減らしていた最大の策、『心理戦』を心の底から称賛していた。

さらに、彼は公爵すら観測できていない対策を用意していた。

未来が読めるなら、情報の『空白』を作り出す。

∴彼は禁制の薬品、『記憶消去薬』を用意するつもりだった。

『死の宣告』を使った感触から、

彼はアクアの未来は読めない可能性を推察した。飽くまで推測だった。

神なら悪魔でも読めない可能性だった。アクアなら彼ですら読めなかった。

策をアクアに託して、彼自身はその時の記憶消去する予定だった。最も、この時間軸では、まだ彼は禁制の薬品を手に入れていなかった。

さらに言えば、アクアがいる前提の策なので、地獄の公爵は偶然にも観測できていなかった。

それ以外のアクア不在時の偶発的遭遇で、禁制の薬品からの情報欠落、

及び思考を読むタイムラグを彼が突きバニル討伐を果たす可能性を観測していた。

故に、この時間軸が一番公爵に取って、全力を出せた…はずだった。

彼はアクアの存在がバレるのを本当は嫌がっていた。

故に、アクア不在時での彼の活躍がバニルにはとても印象に残っていた。

彼は、未来予知対策として、自分が単騎で勝つ可能性すら用意していた。

完全なブラフだ。彼は自分の命を懸けたブラフを用意していた。

自己改造及び高レベルに最短でなる手段、寿命を捧げる禁術まで用意した。

たった一つの可能性でバニルを釘付けにするために。

彼の未来対策だった。

地獄の『公爵』というプライドを最大限彼は想定していた。

過去を覗く無粋は、未来を覗ける以上、彼が公爵ならしない。

愉悅の存在ならなおのことだと彼は思った。

過去を読み、アクアが女神だと事前に知ることが無理かもしれないと彼は考えていた。

これは飽くまで彼の仮説だったが、あっていた。

彼を直接見でもしないと、転生前の死後の天界の諸事情はバニルには観測できない。

ピカピカ光るの正体は、

せいぜい転生者仲間か喋る神器の可能性くらいまでしか気が付けない。

喋る神器は存在する。所有者がいなくてもなお、チート能力を発揮する鎧が存在した。

まさか宿敵の『女神』が人間界に降りてくるなど、公爵からすれば有り得なかつたから。

…公爵も自分自身を鏡で見るべきだった。その可能性はあった。長く生きた経験則がその発想を阻害していた。

…彼の計画どおりの思考誘導を成し遂げていた。

公爵が長く生きているなら引つかかるブラフを彼は計算していた。

経験則からあるバイアスは必ず存在しているはずだと、彼は確信していた。

公爵は、彼と対峙した際、この偉業を褒めたかつた。

まだ、勝つ方法を彼は、この、公爵からすれば詰みの段階で残していた。

…最も、そうした思いは、忌々しい女神が目の前に現れて一瞬で消し飛んだ。

彼の計画は公爵に取って悪辣な手段でもあった。

どうしても、公爵にとつての楽しみが女神に邪魔されたような気分になつてしまう。

また、公爵と同じく彼も出来ればアクアと対面させたくはなかつ

た。

…このように、一部の情報ロストから、全てを読み解くのは難しい。彼は、神が全能でないように、悪魔も全能でないと読み切っていた。

故に、何も知らないお菓子たち、

つまり『愉悦』の部分のある冒険者を巻き込む計画すら立てていた。

彼から一時的に目を逸らさせるためだけだった。

その可能性がこのとき、彼の策を僅かに緩めていた。

彼の策は数日あれば、『地獄の公爵』すら対応不可な状況を作り出せていた。

…彼は少し慢心していた。

だが、彼の策は全て無意味な程に、ウイズからアクアが買った2つの商品という名のゴミが運命を確定させた。
必然という一つの可能性に収束させた。

.....

ウイズの商店から帰宅した翌日の朝。

冒険者ギルドで四人してだべっていた。

彼はこの時、そろそろ拠点をこの国、ベルゼルグ王国中に作成するつもりでいた。

アクセル支配は終わった。

支配済みの貴族の協力があれば王国中にアンダーカバーを作成可能な計画を立てていた。

ベルゼルグ王国支配計画の序章を彼は始めるつもりだった。

彼の才能『魔王』の真骨頂、侵略と支配が始まろうとしていた。

彼の関係者以外の誰にも気取られずに。

そんな裏での攻防は地道な計略と策謀だ。

彼の『旅』とは無関係な、最終手段を整えるための添え物だ。

彼に取って国盗りは添え物扱いだった。無いと自分が死した後に困るからの添え物。

彼は知らないが、彼は魔王を警戒し過ぎていた。

魔王軍幹部ベルディアが彼に取って余りに高潔に見えたためでもあった。

事前資料も、実際彼が会話したからこそその過剰過ぎる計画だった。

だが、彼は知らない。

デユラハンのベルディアはウイズのスカートに頭を投げ込むような変態であったことを。

彼からすれば過去に複雑な経緯があった相手でかつ善良な女性に對して騎士がやることではなかった。

ベルディアは真実を彼が知るに連れて、どんどんベルディアは失望されていくことになる。

ベルディアはあそこで死んで幸せだった。

彼はベルディアを騎士として扱って、魔王軍幹部ベルディアと戦うことを無意識に選択していたからだ。

あの計画は彼に取ってはまだベルディアへの敬意を払ったものだった。

バニルからすれば、彼の想定している脅威なぞ存在しないと云ってやりたい程、彼の計画は完璧過ぎた。

彼は敵を過大評価し過ぎていた。

実は、彼の計画は二段階ぐらいグレードを落としても、余裕で魔王討伐は可能だった。

初手で本気を出して進軍してきた魔王軍幹部ベルディアの存在は彼に危機感のハードルをかなり上げさせてしまった。

さらに彼は『地獄の公爵』を魔王軍幹部扱いする魔王軍を過大評価し過ぎていた。

それがおかしいのは事実だった。

客観的に見てもバニルだけチート過ぎた。他にもチートだが、バニルは逸脱し過ぎていた。

彼は、敵を過大評価し過ぎていた。

何せ、これまで誰も倒せなかつた歴史が彼の過大評価にもつながっていた。

ノイズの『研究者』の最後の狂気は確かにあつたが、彼の想定しているようなシリアスはない。

この世界の住民と彼とでは、認識している世界観がややズレていることに彼は気が付けない。

客観的に考えると、彼はどう考えても『ダークファンタジー』の世界の住民だった。

同じ中世ファンタジーでもジャンルが違い過ぎた。彼は思考はどう考えても世界の異物というか劇物だった。

計略、策謀、魔王の才能。この世界を彼はまだ誤解していた。

最初に日本の若者を担当していた女神アクアが、この世界にチート能力者を送る時点で気が付くべきだった。

だが、彼は『ぼっち』だった。そんな周囲の空気なぞ読めなかった。

彼の前世の経験則というバイアスは中々取れなかった。

彼の前世のルナティックさが、誤解に拍車をかけていた。

彼は、旅を通して学ぶ。

この世界のいい加減な人間たちを、彼の言う『変態』を。

彼の言うまともな人間は、この世界では悪人ばかりだという事実を。

彼の認識している世界は、悪魔すらドン引きの世界だという事実にはまだ気が付かない。

.....

彼は、アクセルの拠点は、仲間達皆で使える物が良かった。

アンダーカバーなどではなく、彼にはきちんとした『家』が欲しかった。

生前、家には彼しかなかった。

彼の両親との思い出は思いやりの教えしかなかった。

彼は利用されただけの人生を送っていた。

だから、彼は無意識に家を求めていた。『孤独』は彼に取っでもう嫌だった。

だが、彼は魔王討伐の旅路を楽しみつつも、その最後の瞬間だけはどうかあがいても孤独であることを覚悟していた。

そうでもしないと魔王討伐は不可能と彼は計算していた。

：めぐみんとアクアは家にいてくれると彼は確信していた。

めぐみんは苦学生だ。彼は前世で小学生でもできるバイトを探していた自分を思い出した。

どうも実家の父親が碌でもない作品を生み出す狂人らしい。

彼は、身内に狂人がいることを憐れんだ。

：それよりめぐみんが家族について語る姿を、

羨ましい、妬ましいと思う自分の感情を押し殺した。

めぐみんは家族から愛されていた。彼とは違ってまともなところが多いと確信した。

ダクネスもどうやら実家に帰りたくないらしい。

ダクネスは秘密主義ぶっているが、彼はもはやダステイネス家とツーカーの仲だった。

故に、内心いつもダクネスの常識染みたところを大爆笑していた。

：彼は初期にダクネスの父にダクネスのお見合いを勧めていた。仲間とは言え、まともに矯正できる男性が入れば良いと願った。

彼は自分がまともじゃないと自覚していたし、教育は、ほぼアキラで精一杯だった。

だが、ダクネスの父からこんな手紙が届いていた。

『恥ずかしながら、娘が見合いの邪魔ばかりします。』

最近ではどこで知恵をつけたのか、

「ダステイネス家の『恥』を晒したくなくければ、私の好きにさせろ!!」など言って私を脅してくるのです。最近の娘は策略を覚えてきました。

真面目過ぎたので、親としては嬉しい成長なの…』

彼は途中で読むのを辞めた。

彼はダクネスの父からの手紙を即座に燃やした。

ダクネスの語る『恥』云々は恐らく彼のせいだと思った。

ダステイネス家の御令嬢だと彼は知っていることは話していないが、

類する罵声を浴びせた記憶があった。

最も、彼に取っては日常会話だが。彼は罵声と認識していない。

彼に取って、変態ダクネスの扱いは挨拶みたいなものだった。

だが、それ以上に、ダクネスの父は親馬鹿過ぎた。

彼は確信した。自分の仲間への甘やかしは完全に棚にあげていた。彼はほぼ何も知らない客観的に見ても仲間のためにしか行動していなかった。

彼の狂気染みた爆裂魔法に関する一連の演説で、大体のアクセルの

住民は彼の変態さと共に、仲間への不器用な思いやりを察していた。そして、同時に洗脳されていた。

彼は、演説の天才だった。

.....

アクセルでの拠点は、彼の条件を満たす家は、確保済みだった。金も足りた。魔王軍幹部ベルディア討伐資金と後の税金関係を考えれば冬も越せた。

：彼はアクアの散財だけを警戒していた。

魔王軍幹部など来てしまえば最悪だと思った。

アクアが調子に乗ると確信した。教育に悪いことこの上なかった。

彼には、『地獄の公爵』以外の対策は何とか間に合った。

少なくともわかつている範囲での対策は終えた。

真の邪神を彼はエリス神しか知らないの、対策は難航している。

邪神が魔王軍幹部にいれば、彼もまだ詰む可能性を想定していた。

だが、まだ完璧ではないとは言え、ギリギリ間に合った。

だから、アクセルの拠点については、今日が終わったら話すつもりだった。

彼は今度こそ、サプライズを成功させるために、今回は第三者の意見も聞いていた。

彼は、裏がないことなので、普通に相談できた。

それを聞いたダストは、

「ハーレムっすか？」

などと戯言をほざいたので無実の罪で留置所に放り込んだ。

ダストはあの三人の残念さを知っているのに、彼の苦勞を知っているのに戯言をほざいたことを誠心誠意詫びていた。

だから彼は、留置所で偶々ダストを愛する男性貴族と会うという滅茶苦茶な行爲をした。

貴族は喜んだ。ダストは確実に二度と戯言をほざかない。完璧な計画だった。

彼は、ロリコン三人がまだ警察署にいることもついでに確認していた。

何だかんだで最後の一線から『恩人』のダストを止めてくれるだろうと思っていた。

：彼は、『変態』を理解しきれていなかった。変態の方向性が変わることもあることを彼は数日後知ることになった。

彼はダクネスの矯正法の可能性を見つけて歓喜した。

ダストの被害など助かったのだから問題ないと思った。

ダストは本当にギリギリで助かった。

検察官セナが趣味から『それ』を唆していた。彼はセナの弱みを完全に握った。

職権乱用で、彼はセナを変態枠に入れた。

彼の『まともな女性』からセナは完全に外れてしまった。我慾に溺れたために。

彼の警察組織征服の始まりの合図は、ダストの悲鳴だった。

なお、この件から、彼はまたダストに『誤解』されたと悟った。

今度は『地獄の公爵』バニルと一緒にダストで遊ぶことになる。

ダストのこれまでの不幸はまだ、ただの序章に過ぎなかった。

.....

彼は、アクア、めぐみんとダクネスを連れてキールのダンジョンに連れて行こうとした。

彼に今回に限っては深い意味はなかった。彼に取っては、ピクニツク感覚だった。

ダンジョンを爆破する爆弾は既に用意していた。

もし、仲間たちが、一緒に来るならば、彼は、次回以降盗賊たちに爆弾を設置させた。

『計画』をバレることを恐れたが、彼は仲間と冒険がしたかったのだ。その予行演習を兼ねていた。

ダクネスは、

「確かに、二人だけでは危険だが…

喧しい音を立てる全身鎧の私がついていっても邪魔にしかならぬいか？」

めぐみんは、

「爆裂魔法しか使えないので、ダンジョン攻略では邪魔になるだけだと思います」

と二人して難色を示した。

彼は仲間達とダンジョン探索というものをしてみたかった。

「問題ない。このダンジョンにはほぼ間違いないリッチーがいる！

断言しよう。…最悪、爆裂魔法でリッチーごと吹き飛ばす。

ダクネスはデコイでカバーすればアクアが治してくれる。

いや、何、問題ない」

彼は極めて珍しく彼なりの我が儘を言った。彼は全力で狂人を演じ切った。

彼は何デレなのかジャンルが特定できない。このときの彼は狂デレと言うべきかもしれない馬鹿だった。

「問題しかありませんよ!!」

：というかりッチャーっていきなりそんな伝説の存在がいるはずないじゃないですか!!」

めぐみんは全力で拒否した。

彼は勇者なんだからめぐみんに、それくらいのご都合主義を飲み込んで欲しかった。

紅魔族からしたら彼の方が正しい反応だった。めぐみんは世間に被れてきていた。

彼という存在はめぐみんのアイデンティティを変えつつあった。彼はめぐみんからしてもかなり非常識過ぎた。

「…私が言うのも何だが、それは有り得ない。それなら国が動く」

ダクネスは常識人だった。

彼としては実に面白くなかった。何故、こういうことだけ真剣なのか、彼にはわからなかった。

性癖や欲望に忠実かと思えば、たまにまともなことを言うので彼はダクネスを理解しきれていなかった。

彼が狂人過ぎて、我に返らないと危ないとダクネスは考えているからだ。

彼からすれば計算済みの行動なので、ダクネスの内心を知れば彼は全力でまともな人間を演じてやった。

彼が知ればこのダクネスの考えは変態の矯正とも取れるが、ダクネスの方がまともなのは許せなかった。

彼は自分が一番マシだと思っていた。

そのアイデンティティを覆されるのは彼のサディストの感性が許さなかった。彼は大変面倒臭かった。

どう考えても第三者目線では裏でも表でも彼が一番ヤバかった。

「何ですって！また、リッチー!!!今度こそ滅ぼしてやるわ!!」

アクアはさらっと問題発言をした。

だが、彼としてはこういう反応が欲しかった。この時の彼はアクア並の馬鹿だった。

なお、彼がそれに気がついたら、二、三分くらいは素で凹んだ。

彼の精神強度からすれば異常なくらいのダメージを与えられた。

最も、彼の気の緩んだ平時になれば効果があるだけだ。

彼の気が緩むことはほぼ仲間しかいないような状況でかつ安全が確実な状況のみだった。

この事を魔王軍幹部の地獄の公爵が言っても彼は完全に割りきって対処するので何のダメージもない。彼は本当に面倒臭かった。

彼は全力でいつも道化を演じつつも、杞憂も良いところな対策を練っていた。彼は端的に狂っていた。

今のところ、彼に致命的なダメージを与えられたのはアクアしかない。

彼は策謀の神の暗黒神エリスですら、絶望しかけただけで済んでいた。

彼の幸運の女神エリスへの認識は酷すぎた。

彼はそろそろ普通に全うで純粋な女神エリスに土下座すべきだった。

「おお、そうとも。またリッチーだ。アクセルはそんなリッチーの原産地なのだ。

きつとアクアが滅ぼしがいのあるリッチーだろう」

彼はアクアの反応に乗った。完全に狂人モードだ。

ダクネスとめぐみんは馬鹿を見るような目で彼をみた。

彼はダクネスに憐れまれた。

彼は、夕食はダクネスだけドックフードと決意した。

まもなく、公爵との『戦い』が始まろうとしていた。

…結末は見えていた。

だが、語ろう。

その引き延ばしてこれかよと彼ががっかりして思わず、バニルが喜ぶ結末とも取れた。

彼的には反則勝ちだった。策略を否定する道具を偶然手に入れたようなものだから彼は納得しなかった。

だが、それを含めても偉業なことを彼は正確に理解していなかった。

.....

彼ら四人はキールが本当にリッチーで善人なことに驚いて帰還した。

彼の用意は完璧だった。

彼はアクアの『女神』としての一面を知った。

ただ、「不自然に胸の膨らんだ」は余計な一言だったと彼は思った。

あの女神エリスはきつと、アクアに復讐を企むに違いない。

彼はあれだけされても、まだ女神エリスを誤解していた。

最も彼は今の女神エリスの状況を見ていたら、流石に認識を戻して謝罪していた。

女神エリスにそんな思い切りの良さを求めるのは無理だった。彼女は純粹過ぎた。

そんな彼の女神エリスの謂われぬ風評被害は直ぐに吹き飛んだ。

キールのダンジョン入口から少しだけ離れたところに、

仮面のタキシードを着た男性が佇んでいた。

「さて、初めまして！可能性の塊よ!!」

我が名は…」

彼は一瞬で『地獄の公爵』と確信した。

だが、

「セイクリッド・ハynes・エクソシズム!!」

彼の秘策が公爵に飛んだ。

悪魔を消し去る青い炎を放つアクアの退魔魔法。

「華麗に脱皮!!」

公爵は仮面を取り外して回避した。

彼は仮面が本体だと気が付いた。

そして、アクアがバレているのかと思った。

ここままで完璧に避けられた。想定していないと避けられない。

「…アクア？もしや!!ああ、そういうことか

これすら貴様の『計画』通りというわけか!!」

公爵は彼の思考を読んだ。

バレていなかった。彼の推測は正しかった。

故に、これから回避不可能な計画を実行する。

だが、

「済まぬ。我が名はバニル。貴様の計画は、この女神含めても想定内よ!!!」

『地獄の公爵』バニルは名乗った。

彼は詰んだと一瞬だけ絶望しかけるが、バニルの発言はブラフであ

ることを確信した。

アクアを知っていなかった。

故に、彼は『閃き』で戦う。

「セイクリッド・ハynes・エクソシズム!!」

悪魔が寄生虫風情が無視するんじゃないわよ!!」

アクアは完全に空気を読んでいない。

めぐみんとダクネスは呆然としている。構えてはいるが、だが、隙だらけだった。

「くそ！一々面倒な。…だが、我輩、切り札がある」

アクアの退魔魔法に体を崩しながら、バニルは計算済みのようだ。

彼は気が付いた。ダクネスを支配できれば、彼の計画は崩壊する。

「素晴らしい!!その可能性を事前に我輩のことを知らずに用意していた!!」

やはり、貴様は可能性に満ちている!!!」

バニルは全力で彼の想定を認めた。

そして、仮面を投げた。ダクネスに向かって。

だから、彼は、

「それは不許可だ!!」

バニルの思考を読み切った彼はギリギリ仮面とダクネスの間に割り込めた。

そう認識した瞬間、彼は言うなれば支配の感覚を受けた。

それは一瞬なのか数時間なのか彼にはわからない虚無の感覚だっ

た。

虚無感が彼を襲い、何も感じられない…はずだった。

彼は、断じてその支配を受け付けなかった。完全に気合いだけで振じ伏せた。

何よりアクアに危害が及ぶ可能性を彼は絶対に認めなかった。

「この結末は想定外だが、これで詰みだ。

奴は完全に、我輩を読み切っていた…このタイミングでなけれ!?!」彼の口でない言葉を感じた。

『地獄の公爵』の公爵の支配を彼は打ち破った。

これも公爵ですら想定外の偉業だった。

公爵が観測した中では彼を乗っ取ったパターンはなかった。

ダクネスを乗っ取ったことはあった。その際の碌でもない結末を公爵は知っていた。

それ故に、公爵が警戒しないわけがなかった。

「さて、数瞬とは言え、無様を晒した。

アクア、た『させん!!』ダメか。一部しか奪い返せない」

彼はバニルから右手と片足しか支配を完全に取り戻せていなかった。

抗いがたい激痛を彼は完全に無視していた。彼は今それどころでなかった。

自分の死よりも認めたくない可能性があるから、絶対認めなかった。

「いいか。女神。奴は瀬戸際だ。

ここが最後の分岐点だ。だから、取引だ『させないと言っている!!』

彼は、気を失っている間にアクアが躊躇う言葉をバニルが発したと悟った。

故に、ここからの逆転を思いついた。

彼に取っては転生前から最初に組み込まれていた手段だった。

『やはり、我輩が言った通り、自爆を思いついたぞ！

凄まじい精神力』褒めてもらわなくてもいらんわ!!』

彼はかなり不味い状況だと認識した。

完全に皆の動きが止まった。自爆は適当な魔法でも衝撃を加えれば可能。

左手を動かせれば彼の勝ちだった。

ダンジョンを爆破するとまではいかずとも、彼の死体が蘇生可能な範囲で爆破できた。

しかし、悪魔の話術は、神をも騙すか。彼は不快ながらも公爵様であると思った。

『チンパンジー並みの知性でも、神を騙すとは流石ですね公爵様！

…とこやつは思っている。だが、褒めただけの時間稼ぎ。

貴様の観測上こうなるのは想定内。故に万全に支配できるように力を…』

彼はようやく悟った。

ここまで彼の体の動かないのは、対策されていたことを悟った。

アクアはこめかみに青筋を浮かべているが、動かない。

彼には何があつたかわからない。いつものアクアなら悪魔なぞ即座に抹殺していた。

アクシズ教の教えに『悪魔殺すべし』というのがある。

それくらいはアクアは過激だった。だから、彼は地獄の公爵との取引だけは隠そうとしていた。

本当にどういう状況かわからない。

だが、公爵は完全にアクアを口上のみで抑え込んでいるとしたら、彼ですら不可能な偉業をなしていた。

だから、彼は確実な一手による状況打破を必死で考えた過去を思い出していた。

彼にとって、今の状況打破できるなら手段は何でも良かった。

どうでも良い下らないものでも…？

『正解だ！こうやって我輩が口上を垂れる時間すらある。』

だが、どうやっても不可能なまでに支配力を強化した。

この思いの源泉はどこにあ』あつ、あつた。すまん公爵これで詰みだ』

彼の支配している状況を認めて、何か口上を述べる公爵を彼は無視した。

だが、彼は詫びた。

彼に取っては敵であり、仲間の危機的状況ではあった。

しかし、ここまで用意して彼を待っていていた公爵に本気で申し訳ない一手だった。

彼は備えていた全ての策略を放棄した。

この時、彼の言う運命の法則が発動した。

全ての可能性は必然へと強制的に収束された。

それは公爵も観測できない。この世全ての法則だった。

経験則で公爵は気づき、彼は異世界でアクアの不幸を背負ったために気がつけた法則だった。

有り得ない『運命』が完全に切り替わった奇跡が起きていた。

未来を読む公爵と、公爵が未来を観測できない女神の行為が有り得ない運命へと変わった。

誰も観測できない未知の時間軸が誕生し、運命が新たな可能性に移行した。

彼の未来対策は決して無駄ではなかった。だが、それを観測できる者も認識できる者もいなかった。

彼は偶然とはいえ偉業を成し遂げた。

それは、たった一つの世界の小さな規模とはいえ『全知全能』の存在ですら不可能な行為だった。

彼はそんなことを知る方法などない。

神の中ではやや古参の部類に入る女神アクアですらその価値を知るわけがない。

この事実の意味を七大悪魔の第一席、地獄の公爵バニルですら知らないのだから。

彼はウイズの店でアクアが買った粘着剤と錠剤を思い出して、即座に使用した。

右手で、粘着剤を仮面にぶちまけ、錠剤の瓶をかみ砕いた。

幸い、まだ口まで、しびれが回っていない。

チエツクメイトだった。

…彼は今更、これ以外の対策を思いついた。

『や、やめろ！我輩、こんな結末は認めんぞ！！今、思いついた方の策をしろ！！』

…無理？絶対に、無理？なるほど、もうやってしまったか…』

さて、アクア。この錠剤は爆裂魔法にも耐えられると言っていたよな？」

彼は完全にかっかりした。

ここから逆転も可能だった。

ミスリルのワイヤーがあった。

彼を行動不能にすれば良いだけだった。

口上でなら論戦でバニルに彼なら勝てる可能性がまだあった。

「ちよつと待ちなさい！」

アクアが言うが待たない。彼は無視する。

「アクアの退魔魔法。これは恐らく防ぎきれぬくらいに今の俺の防御力は強化された。

貫通ダメージの爆裂魔法しか、手がない。

謂わば、ダクネスを乗っ取っているようなものだ。

『フハハ！その通り。もはや、その手しか残されておらん。こやつ
の言う通り。』

…我輩とて、このような結末を認めたくはない』
バニルは彼の内心の取引に応じた。

女神に消されたくなければ、

彼の提示する条件での『取引』を認め、爆裂魔法を受け入れろとい
う脅し。

彼は、このような反則で、『地獄の公爵』バニルに勝ってしまうこと
をガツカリした。

『その感情、大変美味である。そこのネタ… いや、失敬、紅魔族よ。
こやつは貴様には』

そこは言わせん。めぐみん、俺との最初の約束だ。爆裂魔法を撃ち
込め。

これは、計画通りだ。…大分不本意だが」

彼は勇者にこの段階で、非情な決断を求めることになってしまっ
た。

だが、

「本当に大丈夫なのですか？」

めぐみんは何故か顔を真っ青にして彼を見つめる。聞き返す。ダクネスも沈黙したまま、動いていない。

「貴様が何を考えているか一部話しただけ。

：貴様の『計画』のどこを話したかは、自分で聞き出すが良い」
公爵は丁寧に教えてくれた。

彼の計画の破綻を。どこか致命的な情報漏洩を彼は確信した。

だが、彼は諦めない。絶望などしない。

何、どこを喋られたとしても、

「見捨てられても大丈夫？ どうせいつものことだった？

フハハ！親切にも我輩、貴様に警告してやろう。

：その先に何があるかももう一度考え直せ」

彼は悪魔に同情された。屈辱だった。

だから、これ以上は話させない。

痺れも回って来た。

「はやく、うってくれよ…たのむ」

これだけ言って彼は完全に動けなくなった。

彼の思考のみ高速で回転する。

計画がどこまでバレたのか、何故、公爵はこんなことを言ったのか、思考する。全てを『計画』に戻すために。

：でも、計画自体が間違っていたら？

いや、魔王討伐の観点では、これより最適解はない。

自らの死等想定内。最弱の冒険者でかつ、幸運最低値では、この策
しか

『だから、その考え自体が誤って居るのだ』

確かに、彼は公爵の声を聴いた。

「エクスプロージョン!!!」

その意味を考える間もなく、全てが彼から消え失せた。

.....

その後、彼は『計画』にないことをさせられた。

身を挺して仲間を庇って魔王軍幹部を倒したという名誉を得てしまった。

瀕死の状況で治癒されたために自分の人体を弄くった自己強化が完全に失われていた。

恐らくもう一度やれば彼は死ぬ。

彼は寿命は回復していても魂という概念をこの世界に来て学んでいた。

治癒したアクアには間違いなくバレた。

恐らくだが、アクアは何も言わない。

彼の計画は、変更を余儀なくされた。

彼にとってかなり非常事態になっていた。

バニル戦後、アクアが不機嫌だった。

色々構っていたら割りと簡単に元に戻ったが、

バニルが何言いふらしたか理由を知らないと彼は計画が遂行できない。

めぐみんとダクネスも似たような状況だった。

彼に取って困惑しかない。彼の想定外過ぎた。彼は計算できないし、この状況等知らない。

彼に取っては精神攻撃よりもわからない状況だった。公爵を倒し

たから、時間は稼げたのは確信した。

計画を早めた最大の脅威がいなくなった。彼に取っては心を読む悪魔は最大の脅威だった。

彼からすれば、公爵と同程度の脅威との遭遇の可能性がある以上は、時間を割きすぎるのも不味いが計画はギリギリ延期できた。

『地獄の公爵』バニルは彼の、分岐点のレバーを強引に動かした。

彼は、仲間を知る必要ができた。

どこまで、バニルが彼の内心を話したかを知るために。

『道化』の皮を強制的にバニルは剥がした。

心と未来を読む程度では、彼に勝てないと彼の仲間達が完全に詰まらせていた。

どうあがいても、バニルに勝ち目がなかった。

最弱の冒険者の体では。

何より、女神アクアが居る以上、これ以上の乗っ取りは不可能だった。

ダクネスの乗っ取りも不可。

ピカピカ光る何かを退魔魔法の強力な使い手とまで推測はできたが、

公爵の常識が『女神』という発想を潰してしまった。

皮肉にも彼がいなくとも、

魔王軍幹部『地獄の公爵』バニルは完全に彼の計画によって自分が完全に詰んでいたことを悟った。

バニルはほぼ彼しか観測していなかった

彼が認識できない第三者目線でも、バニルは詰んでいた。

この早すぎる時期に来て、どうあがいても、事前の準備をしてい

ても、

彼の計画で成長した仲間たちにはどうあがいても勝てなかった。最後までバニルは彼に踊らされていた。

：ウイズの商品等なくとも、彼の尋常でない精神力からの復帰がなくとも彼はバニルに勝っていた。

彼は壊れた超人だった。人間という種の可能性そのものだった。だが、それでもバニルは、彼単体なら勝てたと推測した。

この絶望的な状況下でも諦めない彼だろうが、バニルは計算していた。

バニルは一騎打ちで勝てた可能性で『彼』に注目してしまった。

これは彼の計画通りと察したが、含まれる意味合いが違った。

彼のいう計画とやらは仲間がいないと成り立たない。

だから、『旅』と評して、

友情を知らなくても無理やりにも人と関わっていたことを、

バニルは彼を乗っ取った結果わかった。

もうどうやっても勝てないなら、彼に八つ当たりするしかなかった。

「こやつに『道化』は無理だ。

：完全に『狂人』の方が似合っている」

バニルは、倒されたその日、平然とアクセルの街を歩き、ウイズの下へ向かった。

彼の取引で、『友』の危機を知った。

「アレクセイ・バーネス・アルダープ。こやつは完全に対価を払う気がない。

ああ、そうだ。貴様の取引に応じよう。ご飯製造機の危機でもあ

る。

：人類滅亡など、悪魔がやっていいことではない。

ここまでは我輩乗ってやろう。だが、その手段までは指定しなかったのが運の尽きよ」

彼は勝つためとはいえ、バニルを正確に理解しきれていなかった。

アルダープ領主の排除についても、彼は完全に困っていた。

故に、バニルに大概任せる他なかった。

だから、彼は『愉悦』に嵌る。

バニルはここだけは、彼に勝てたと確信した。

ニヤリと『地獄の公爵』バニルは笑った。

その感情が二重の意味で楽しみだった。

.....

彼はどう見ても、アクアに甘すぎた。仲間にも甘かった。

だから、彼の計画はバニルによってバラされた結果一時中断になる。

なお、彼はバニルを通して、ウィズに伝言を頼んでいた。

なので、彼不在時にデストロイヤーがアクセルに来ようともし完全に対策が完了していた。

それは、今は関係ない。

彼は、仲間に甘すぎたが、アクアにはさらに甘かった。

めぐみんやダクネスから見ても、

アクアを甘やかし過ぎと評する程度には甘かった。

最も、あまり関わりのない第三者からすると、彼は素でアクアを罵倒し始める辺りどの辺が甘いのかわかりはしないが。

アクアにも彼が甘やかしていることを伝わっていない。寧ろ、アクアはもっと甘やかして敬えと彼に文句を言う。

その文句の度に、彼は意図的にアクアの食事だけ一段階下げた物を出したり、

凍った魚等をそつとアクアに差し出したりしていた。

彼はアクアに対しては、やや陰湿程度の仕返しに抑えていた。

なお、ダクネスがアクアと同程度のことをやらかせば、彼はダクネスに犬の餌を食事にだした。

ダステイネス家の権威等彼は最初から知っている。

故に、ダクネスに取っては、屈辱だろうと思つての彼なりの最大級の仕返しだった。

だが、ダクネスは興奮した。身震いしていた。

彼はドン引きした。

めぐみんは以外とやらかさない。彼目線では。

彼は13歳の子どもが我儘を言わないことを心配した。

なお、彼目線では我儘を言わない子だが、

アクセル市民からすれば爆裂魔法を毎日撃つ時点で相当我儘放題だった。

さらに、めぐみんは喧嘩を売られれば必ず買った。
彼はそれを煽りまくり、めぐみんを全力で援護していた。

…彼の姿勢は、めぐみんに『自重』という物を学ばせていた。
これは紅魔族が聞いたら仰天する程の偉業だった。

…少なくともめぐみんの母親ゆいゆいは驚く。ゆんゆんもだ。
隣の家の靴屋のせがれ、ニートのぶっころりーですらも確実に驚く。

後、彼は本気でめぐみんを子ども扱いしているので、良くキレていた。

「私はもうすぐ、14歳！つまり成人なんですよ!!」

めぐみんは子ども扱いされる度に常識を彼に詰め寄った。

だが、彼は『狂人』だ。

そんなこと一切無視して、めぐみんに提案を試してみた。

「勇者候補足る者、他人の家に押し入るとかしないのか？」

…そうだな。俺の把握している悪徳貴族の情報をプレゼントしよう。

ドネリー家のカレンとかいうお嬢様は違法なモンスターを密売しているな…」

彼は、戸棚からドネリー家滅亡シナリオの一部。

違法モンスター密売の情報のみ取り出して、めぐみんにプレゼントしようとした。

恐らく、神器ではないので、女神エリスにプレゼントできなかったもの。

悪徳貴族ドネリー家破滅シナリオだった。

「ちよつと、それを永遠に貸してくれ!!」

彼は、その『情報』をめぐみに渡す前にダクネスに奪われた。ドネリー家のカレンはダクネスが唯一、忌み嫌う貴族令嬢だった。彼はめぐみんへの心配からそのことを失念していた。

「ダクネス、ひよつとして…」

めぐみんは魔王軍幹部ベルディア討伐の宴で、酔っ払いダクネスの『実家』に行つたことがあつた。

故に、彼とアクアには内緒にしようと二人で相談していた。

ダステイネス家の御令嬢を受け入れてもらえるか、まだダクネスは心配していたから。

最も、彼はダクネス接触前からそんなことを知っていたが。

めぐみんはダクネスに犬の餌を平然と与え、

嬉々として罵倒する彼の有り様からその真実に気が付いていない。

ダクネスの素性を知っていて、

彼がやっていたら平民等処刑されるのがめぐみんですら常識だから。

なお、彼は王様だろうが平然と普段通り『素』で罵倒できる。

彼は、王だろうが、貴族だろうがお構いなしに罵倒できる。

それが、小さな王女様だろうが、だ。

この精神性は、後にクレアとか言うアクシズ教徒一步手前の変態に目をつけられ、

アイリス王女に興味を持たれることになる。

彼からすれば、他人の評価はあまり気にしない。神にすら喧嘩を売り、悪魔を利用する気満々の彼に貴族等今更だった。

めぐみんやダクネスの要らぬ心配など彼にとっては鼻で笑えた。

『仲間』である以上は過去に、

素性に何があるうが、彼に取っては意味のないことだった。

寧ろ、ダスティネス家の当主その人からこんな内容の手紙が届いていた。

『ダクネスを罵倒するのは、一向に構いません。』

：：というか、婿としていつそのこと家に来ませんか？』

彼は、

『変態を嫁にしろとかふざけるな。後、娘の将来考えた婚姻相手を用意しろ』

という内容を非常に丁寧かつ上品に書いてダクネスの父に即座に送り返した。

：彼は気が付いていないが、彼は計画の副産物として、貴族社会のマナーや振舞いを完全に熟知していた。

先ず、庶民では有り得ない気品を出そうと思えば彼はいくらでも出せた。演じられた。

身元不明の彼はどこぞの身分を偽った元『貴族』と一部界限から推測される程だった。

彼の『変態』が故に、追い出されたかなり上位の貴族。

：彼の知らないところで、こんな誤解が生まれていた。

だから、ダクネスの父としても全く問題ないどころか、完全に任せられる都合の良すぎる立場にあったことを彼は気が付

かない。

彼が貴族じゃなくても、清濁併せ持った『手腕』をダクネスの父は知っていた。

ダクネスの父は、もう完全に彼を婿にする気満々だった。

彼にバレないように内心に止めていたが、ダクネスの父に取って理想過ぎた。

彼はダクネスの父には、

好青年かつ完全にダクネスの性癖を理解している貴族社会に精通した教養ある人物だった。

彼がその事実を知れば、処刑一步手前の狂人を演じてやるくらいには、最悪の状況だった。

彼は仲間であつても変態は論外だ。

そもそも最初から死ぬ気なのだから不誠実だと確信していた。

だが、バニルのせいで計画は崩れかけた。

アクアが女神として何故この世界に彼を送ろうと教えることができる程の『知性』があれば、

彼の計画を変更できた。

もはや、彼は神と悪魔両方を敵に回していた。

だが、彼の才能は空前絶後『魔王』。

単純な答えでは、神であろうが悪魔であろうが、完全に論破される。

故に、学びの『旅』は必ず避けられない運命にあった。

神ですら、悪魔ですら、魔王の才能を持つ彼すらまだ、その先にあるもの知らない。

.....

「王女だろうが、乞食だろうが彼に取っては等しく平等だった。彼は『時代』に喧嘩を売る気満々だった。」

魔王軍幹部ベルディア討伐で、王家のアイリス姫から案内状が来ようとも、

『私は、下賤な冒険者故に会えません。というか、会いたくありません。』

私の計画の邪魔だから、適当な勇者っぽいもの。

例えばそう、善人のミツルギキョウヤ等と仲良くやってください。私にとって本気でいい迷惑です。

大体私は目立ちたくないのです。好意でやっているなら本気で嫌なんですけど』

彼は、こんな内容の手紙を丁寧かつ気品あふれる文体で送り返していた。

彼の意識は完璧過ぎて馬鹿には気が付けない。

だが、王女の護衛、シンフォニア家のクレアにだけは気が付けた。

クレアは確信した『彼』は噂に聞く変態等ではない。

かなり教養ある人物だとは確信できた。

彼の手紙での言い回しが巧妙過ぎて、

貴族間の策謀の嵐に身を置くクレアしか気が付けないほどの返事だった。

だが、彼は王家を遠回しに罵倒していた。

故に、クレアは気が付いてしまった。

無理やり連れてこないと王家の威信に関わって来るレベルで、彼は全力で拒否していることを悟った。

なので、無理やり権力のゴリ押しを決意した。

王家の威信に関わること、

それすなわち、

『ベルゼルグ・スタイリツシュ・ソード・アイリス』王女を侮辱しているほかならないとクレアは確信した。

実は彼はそういう意図で手紙を送っていた。

正直、クレアのような思い込みの激しい忠誠心を持つ輩など彼の想定外だった。

まともな忠義者や彼の真意に気が付いたら、彼を無視すると判断していた。

暗殺者などくれば、即座にベルゼルグ王国を乗っ取る口実にもなった。

彼は変態並みの忠誠心を持つクレアの思い込みを舐めていた。

この彼が王女の要請を完全に拒絶している事実は、ダクネスも気が付かなかった。

彼が勝手に、ダクネスから、王家の手紙を横取りして拒否していた事実を。

彼は、ダクネスからすれば一介の冒険者だ。

異常な面こそあれども、普通に平民だった。

彼はダクネスの前ではそう演じていた。

それくらい、彼は本気で王城になど行きたくなかった。

王女様だって彼に会ったら教育に悪い。彼は確信していた。

：アクアが望むなら渋々行ってやるくらい感覚だった。

彼は完全に上から目線で貴族や王族を見ていた。

彼は生粋のサディストだった。

謙っているように見えても、全然そんなことはなかった。

彼は、魔王軍幹部バニル討伐の後、本当に嫌々、王都に引きづられていった。

ダクネスは彼の変態さを口実に断ろうとしたが、王家から、正確にはクレアからなのだが、直接、彼を連れてこいと命じられた以上は、

断れなかった。『王家の懐刀』ダスティネス家の者として。

ダクネスはこの世の終わりを感じていた。
ダクネスからすれば、変態や狂人の集まりだから彼女の仲間たちは。

そんなダクネスの内心を汲み取った彼は、ダクネスを煽り味方につけて断る気満々だった。

だが、王家が、『表』の全力で来られたら、
アクアや仲間はまだ被害が出る可能性がある以上、

彼は断れなかった。彼は変態並みの洞察力のある背後にいる馬鹿を察した。

その洞察力があるなら、
彼を呼ばないという発想にならないのが、彼の馬鹿扱いのポイントだった。

アクアもめぐみんも喜んでいた。
仲間が望む以上、『道化』を演じて、とつと帰る気にした。

彼なりに堂々と王女様に仕返しする決意をした。

彼は、『まともな女性』に対しては紳士だ。子どもや老人にも優しい。

だが、幼くても一国の立場のある『王女』なら彼は容赦しなかった。

無礼討ちされようが、彼には策があった。

それを受け入れる度量がない王家なら彼は、征服する気満々だった。

だが、後日、実際会ってみた、お姫様の『孤独』は彼の興味を引くことになる。

彼は、全力で『国』に喧嘩を売る決意をした。

売られた喧嘩は買おうと彼は思った。

さらに王都という、彼が全力で遊べる『玩具』を見つけて喜んだ。

バニルも連れて来たらさらに面白かった。彼は後にそう思った。

…彼は『外道』だった。幼女だろうが、彼に取って正当な理由があれば容赦しなかった。

彼は愛が欠けるから気が付かない。それこそ最も王女様が望んでいたことだった。

クレアは彼に復讐された。

クレアは善人ではあったので、彼に取っては、許容範囲内の『お茶目』。

だが、クレアに取っては致命的ダメージを負うこととなる。

閑話 悪夢（閲覧注意）

彼に取って、前世は裏切られたことしかない世界だった。

友人と自称して近づいて来た同級生は、彼に欠けるものである友情を与えてくれたかに見えた。

だが、実際には、彼は同級生である彼女に取って都合の良い責任の押し付ける『もの』だった。

彼女に取って最大のピンチのとき、つまりは死に直結するほどの危機の時、彼は自分の身を犠牲にする覚悟で無茶苦茶を行った。

彼は持てる伝手と才能を存分に使い、彼女の置かれた絶望から救おうとした。

彼女は両親から捨てられ、その身をそのままの意味で売り飛ばされる寸前だった。

：現代日本でも裏では、人身売買があった。

彼はアルバイトでその存在を知ってはいた。

唾棄して関わりに等合わなかったがこの時だけは例外だった。

普通、貧困国から拉致や臓器のみを輸入した人間の密売だった。

ある大富豪の子どもを治すそれだけの為に、彼の友人であった彼女は売り飛ばされそうになっていた。

大富豪曰く、日本人の臓器の方を一刻も早く欲しかったという話だった。

彼は、あらゆる手を使い、非合法の臓器密売に手を染めた。

富豪の子どもでの臓器移植手術は、合法で成立した。

表向きは、だ。

これは、彼の最大限の努力の成果だった。

だが、彼の行動は彼女の最大の捨て札として利用された。責任を押し付けられた。

彼は彼女のその後の人生と引き換えに全てを要求されそうになった。

彼女にとっては救った行為よりもここまでやってしまった彼を恐れている行為だと彼は推測している。

だが、彼はまだ死ねなかった。

正確には彼は途中で自らの思い違い。

：友情が偽りと知り、死ねなくなってしまうた。

彼の最大の切り札であり、最大の収入源である『探偵』のアンダーカバーを切り捨てた。

状況を確実に打破するには、彼の探偵擬きを捨てるのが最適解だった。

その日、彼の身代わりに、彼の望まぬ自分は死んだ。

警察組織、裏家業全てが驚愕した。

彼以外からは凄まじい影響力を持っていた存在が “下らないこと” で死んだからだ。

信頼の無くなった裏稼業等、非合法すれすれだった彼の人生設計を放棄したのは、彼に取っては痛手ではあったが、絶望までは行かなかった。

彼は、彼女との友情は偽りの関係性だったことの方が絶望した。

彼は彼女に行った行動自体をそれほど後悔してはいない。

彼からすればギリギリまだ犯罪じゃなかった。

臓器移植提供が遅れることになったドナーには申し訳ないが、彼がやらずとも非合法で売られていた物を彼は買ったただけだった。

彼は、自分にあらゆるアルバイトに設けた最低ラインは守り切った。

他人を不幸にしないことただそれだけだった。

これがどれだけ滅茶苦茶か彼には分っていない。

彼の頭脳と才能が成し得た異常な行為だった。

普通は犯罪になった。どう考えても彼は犯罪者を免れなかった。

彼の構築した情報網は、シャーロックホームズも真つ青な出来だった。

彼はモリアーティ教授を嫌悪する。

悪人だからという単純な理由だ。

だが、彼を、正確にはアンダーカバーの彼なのだが、第三者が評価した中には『教授』というものがあつた。

彼は魂からそれを否定した。そいつだけは辞めろと思った。

何故かわからないが彼にとってその評価は物凄く腹立たしかった。

前世か来世に関係しているかも知れない。

そんな馬鹿げたことを考えるくらいに彼は激怒した。

：だが、彼をモリアーティ教授を連想させる程、21世紀の個人が持つ情報網としては異常過ぎた。

現代の、インターネット全盛期でなお、彼は逸脱していた。

彼は前世から、悪意がなくとも頭がおかしかった。

彼は、才能を活かさずとも恐ろしい頭脳はあつた。

彼にそのことを指摘できる者は誰もいなかった。

彼はあまりに賢過ぎた。

なお、彼が生前、犯罪と言えなくもない行為に手を染めたのはこの一度きりだった。

彼が過去に再び戻れたら、あの偽りの友情関係であろうとも、続けられるのであれば続けたかもしれないと薄々思っている。

彼女に取って彼は捨て札でも、地獄のような孤独の中で彼に近づいて来た初めての存在だった。

.....

例え、彼の死の原因となった事故を避けられなかった最大の原因が、彼女が行った老人の遺族に対する情報提供であろうとも彼は友としてあり続けただろうと推測していた。

彼は彼女に『捨て札』にされた上に、老人の遺族が望む情報として売られていた。

最後まで、彼女は彼を利用し尽くした。

彼の絶望や怒りの感情が反転して感心する程に、彼女の才能はあの時、完全に悪意で完成していた。

彼女のその後の人生に、不要な程の報酬と引き換えに彼の死は必然となった。

老人は本当に凄まじい資産家だった。

彼はそんな老人を薄々知っていたが、そういった事情を無視していた。

老人に取って、彼のこの打算が一切ない行為がどんな意味を持っていたのかを、彼は死してなお理解し切っていない。

彼は本当の富豪という牢獄に苦しむ老人を救っていた。

老人は最盛期幸せ過ぎた。∴彼とは真逆の人生だった。

老人は幸福過ぎたが故に、晩年は孤独の苦しみを味あわされた。

彼とは違い、愛も友情も知っているからこそその絶望だった。

老人は孤独の牢獄から、彼の見返りを求めない行為に確実に救われていた。

故に、老人は彼に最大限の感謝を示そうとしてしまった。

老人の、死の間際という判断ミスが、彼の可能性を摘んだことに気が付かなかった。

…『善意』が彼を殺した。

.....

それは、彼は死ぬ直前、何度となくどうやっても彼に死が襲い掛かる事実気が付いた。

彼は流石に気が付いた。

何回も事故死しそうになれば容易に特定できた。

彼には果たさなければならぬ老人の遺言を聞きに行くという行為がまだ残っていた。

彼の推測が正しければ、彼の人生が報われる全てが老人の遺言にある可能性があった。

だが、彼からしてみても、不幸にも限度があった。

老人の遺言を聞きたいだけなのに、彼は中々聞きに行けなかった。それを回避した彼の警戒度はそれ以上に凄まじかった。

老人の遺族が何故、高校生一人殺せないのか苛つかせた。

関わった第三者が彼が老人の遺言を諦めれば手を引くことを提案し出すくらいには彼の暗殺、ではなく事故死は難しかった。

彼が探偵と同一人物だと知っていれば、第三者は手を引いていた。第三者に取っては探偵など会ったことない。

…だが、他人ではなかったからだ。

彼が老人の遺言を聞きに行くことを諦めれば、彼のその後もまた違ったことを誰も指摘できない。

彼も知らなかった。

最後の逆転の目を、同級生で切り捨てていた。

だが、彼に取っては老人の遺言の確認は、存在意義そのものだった。だから、その『邪魔』を彼は許せなかった。

彼の才能がその時、生前最後に最大限に活躍した。

生まれて初めて悪意でのみ彼は行動できた。

自らの死は、まだ彼には受け入れられなかった。

彼は前世での幸福を望んでいた。

他者からすれば、些細過ぎるものを、理解不能なレベルで、愛を彼は求めていた。

彼が最も知りたい知識が、愛だった。

愛を理解できるならば即座に自害できるレベルで彼は欲していた。

彼の前世の行動原理そのものだった。

自害できるというのはおかしいと彼に指摘できる者はいなかった。

両親からの愛であると推測予測していた『思いやり』の教えを彼の中で昇華できれば、

彼の人生は満たされていた。

彼以外には理解不能なまでに、彼は愛を求めていた。

人生の全てを捧げ、愛を手にするために『少年』は『彼』になったのだから。

その追及は、彼の生きる意味そのものだった。

その方法自体が間違っていると生前指摘できる者は本当に誰もいなかった。

.....

死後に彼の異常を、可能性を指摘しようとした女神にそれを求めるのは無理だった。

彼は賢過ぎた。

死後の世界を冷静に分析し、女神が言う魔王討伐の計画の大枠を1時間にも満たない間に結論できるぐらいには賢過ぎた。

何より彼は、不器用過ぎた。愛が欠落した超人だった。

彼を納得させるには、その女神には荷が重すぎた。

.....

転生前、生前の彼に話は戻る。

彼は悪意を元に、あるコンピュータを特定した。

それをクラッキングして彼は漸く真実に気が付いた。

自分の死の可能性を、老人の善意が引き起こしていた。

彼の才能があれば、コンピュータのクラッキング自体は容易だった。

だが、その行為は、自らの確実な死の運命と引き換えだった。

：彼に取って最後の救いを知れた。

彼にはこれが生前、最大の幸運だった。

この時に彼はどうかあがいても孤独な『事故死』の運命が確定した。

彼はそのとき、完全に詰んでいた。

彼はそれをわかっていても、老人の意思を知りたかった。

かつて、友人を自称した彼女が彼のことを売ったせいで彼の死は抗えぬ必然になっていた。

何より、全ての真実に気が付いた彼はどうあがいても死ぬべき対象になってしまった。

老人の遺族にとつても、関わった第三者にとつても彼は邪魔になつた。

しかし、彼はこの死に関して、関わった全て者たちに感謝していた。

老人の遺族が彼に対して、そこまでの価値があるほど、

老人は彼に感謝してくれたことを知れたからだ。

彼の思いやりの心はこの時、確信に変わった。

少なくとも一人は彼自身の手で確実に救えた。

：彼は本当に心から気が付けた。だが、この気づきは遅すぎた。自らの運命はもう数秒持たずに迫っていた。

背後からの屋内での事故死等と言う訳の分からない事故死だった。

ネットニュースで不自然な事故死と笑われて終わる死でしかなかった。

インターネット社会は彼の死を完全に隠蔽できた。

皮肉にも、彼の取った行動が事故死の隠蔽をさらに容易にできた。彼は隠蔽工作が上手すぎた。だから、事故死で簡単に処理できた。

彼の死は、老人の遺族や関わった人々から頭の良い馬鹿と嘲笑された。

だが、彼はその死の間際に、全てを満足して終わりを迎えられた。

彼に取って友人が偽りであり、死の原因であろうとも、彼の幸福の全ての可能性が奪われようとも、あの終わりで彼は十分だった。

死ぬ瞬間まで孤独で、友情を知らず、愛に欠けていたとしても、彼に取って十分過ぎる対価だった。

思いやりは確実に一人には届いた事実だけで、彼には十分過ぎた。

彼は本当にあの人生で満足していた。

.....

彼の情報提供で多額の財産を手に入れた彼女は、日本で幸せに暮らせるだろうと彼は確信していた。

彼には最早、同級生の友人と想っていた彼女に興味がなかった。

自身の友情の欠落も死の間際に不可能と悟った。

だから、真実を知るための対価として諦めた。

彼はこれくらいには、いつも誰かに見捨てられたし、裏切られ続けた。

流石に死というのは、初めての経験だった。

しかし、全体として見れば、同級生から恩を仇で返されるのは、些事と言いつつ切れるほどに彼の前世は狂っていた。

彼の人生は客観的に見て、才能がなければ、三歳で死んでいた。

彼は三歳にも満たない程度で文字を取得し、本を読んで世界を学んだ。

知識を利用し、あらゆる手段を学んだ。

めぐみんが彼と共に話していたザリガニの調理法等彼に取っては
当たり前前の知識だった。

だから、めぐみんはザリガニのことで話せる彼のことをただの庶民
で、

同じく貧乏人だったと推測している。

その推測は合っていたが、彼は世界が違った。

現代日本で、飢え死にが五歳になるまで常に脳裏に余儀っていた。

…親戚は彼の餓死を狙っていた。

彼が他人に頼れなくする方法を親戚はいくらでも思いつけた。

親戚は彼が餓死にすれば、彼に残された財産を使い果たしても誰か
らも文句を言われないと確信していた。

親戚に取って、身寄りが無い彼の死の隠蔽等いくらでもできた。

彼の親族とは、それくらい価値のある地位にいた。

それくらいは当たり前前のようにできる経験と知識が親戚にはあつ
た。

親戚は金遣いの計画性はない。

しかし、彼に血筋等と言う関係性を仄めかして、気を逸らすくらい
の知性があった。

彼が生き残れたのは、本当に才能のお陰だ。

彼が、悪に走らなかつたのは両親の教えのお陰であり、そのせいで
もあつた。

彼は親戚の行いをほぼ察していたが、親戚は彼に取って唯一の親族

だった。

親戚の思惑通りとはいえ、彼には親戚を捨てられなかった。

彼は『孤独』を何よりも恐怖していた。

何より、親戚しか愛に近いものを彼は感じられなかった。

それを捨てるのは、彼に取って両親の最後の思いを裏切る行為も同然だった。

：彼の両親がそれを見ていたら、間違いなくその教えを彼に捨てろと言った。

誰も訂正できる者などいなかった。指摘してくれるはずの友は偽りだった。

.....

彼が少年の時に、死を選ばなかったのは、何度も言うようにたった一つだ。

彼は『愛』が欲しかった。

物語や教科書にある愛は、彼に取って理解不能だった。

家族愛等彼は知らない。恋愛感情等ない。

異性への関心は彼に取って個人に対する侮辱だった。彼に取っては全て平等だった。

美人だろうが、不細工だろうが、彼は一個人としての側面を見た。

彼の有り様は、思春期の同年代からすれば不気味でしかなく、彼が助けたはずの相手すら彼を異物として扱っていた。

彼は教科書しか知らなかった。

彼に取っては、物語は所詮物語だった。

だから、まともな友情を育むことはできなかった。

孤児院等へ行った方が、確実に彼にとって幸せだった。

：彼の最大の不幸は家柄が良すぎたことだった。

生前にそう行つた施設を匂わせるだけで、即座に他からの邪魔が入った。

何よりも、彼が親戚を見捨てられなかった。

少年だった彼から見てもいつまでも親戚の繁栄は不可能だったからだ。

だから、彼はなりふり構わずそういった『居場所』へ駆け込めなかった。

彼は賢過ぎた。もう少し愚かなら彼の運命は、真逆になっていた。

彼は籠の中の鳥だった。

だが、餌を与える飼い主はいない。

死の運命しかない鳥だった。

しかし、彼は死の運命に抗った。

自分の鳥籠を無理やり破壊し、外で餌を調達した。

さらに、今後の人生設計を考え出すくらいに滅茶苦茶な元『籠の中の鳥』だった。

親戚は彼の死を常に願っていたし、破産の運命から彼に助けられた後は、彼の復讐を何より恐れた。

親戚は彼の死をより一層願っていた。

親戚から見れば何もできない状況に追い込んだはずである彼が、アルバイト等と評して、有り得ない程の財産を貯めこんでいたのは

恐怖だった。

彼は将来設計等と評して、親戚から見ればとんでもないアルバイトをしていた。

彼の滅茶苦茶を止められなかった親戚が一番悪いのだが、その事実を彼の死後も親戚は認めなかった。

.....

彼は前世で探偵紛いのことにまで手を染めていた。

最大の理由は、彼の人生設計である愛を知るための元手の資金の調達だった。

どう考えても、彼が馬鹿にしか見えないが、彼は本気だった。

彼は人生を懸けて両親の最後の教えである思いやりを知ろうとしていた。

誰も教えてくれる人がいないから、彼は盛大に空振りをしていた。

彼曰く、

「アルバイト代の確保と、自分以外の他人を知りたかった」

ただこれだけの為に元資産家の親戚が驚くほどの金額を貯めこんでいた。

彼は他人を観察することで愛を知りたかった。

だが、彼は最後の死の瞬間に至ってなお、愛を知れなかった。

：探偵紛いの行為は彼に取って、寧ろその逆だった。

不倫、痴情の纏れ、不祥事の隠蔽やアリバイ工作等々。世界は悪意に満ちていた。

善であるはずの警察すら彼からすれば汚れていた。

彼は生前善人と出会えなかった。彼には運命が欠如していた。幸運という誰しも持っている物を彼は才能と引き換えに失ったように見えるほど持っていなかった。

少なくとも、彼は探偵擬きの活動で、悪意しか感じ取れなかった。恐怖を活用してくる組織も知った。本だけでなく、現実で知った。彼に取って、何故かそういう相手は極めて容易かった。

転生した彼は、悪の才能が無意識に発揮していたのだと今では確信していた。

彼に善の才能はなかった。
彼に取って高校生探偵等、漫画でしか許されない。

彼の基本形は所謂、車椅子探偵だった。
漫画のように一々危険な事件現場には彼は絶対行かなかった。
ありとあらゆる情報が勝手に集まってきて、それを活かせば簡単に作れる作業でしかなかった。

彼は、自らも知らぬところで正体不明の怪物として裏世界での名誉を手にした。

しかし、彼の探偵という手段は金を稼ぐ意味しかないことを悟っていた。

更に不幸なのは、これでもなお彼は人間の善性を信じていたことだ。

彼は教科書と物語で強引に自己解釈を行っていた。
宗教の聖書とはまるで違うが、彼なりの人間像を確固として確立していた。

彼に取っての勇者などそれに当たる。
めぐみんは彼にとって勇者だが、第三者からすれば褒めていない。

彼には最大の賛辞なのだが、彼はぼっちだった。

悪人に彼はなれなかった。

どうしてもなれなかった。

彼は生前、最後まで善人だった。

彼自身はその事実が気が付いていない。

彼は客観視が欠けていた。

…これらの探偵擬きで彼は演技を学んでいた。

第三者から見て警戒されないような男子高校生を演じられた。

彼に取って、彼どころか彼以外にも救わない神への信仰など論外だった。

彼がどうやっても救えなかった相手は宗教に逃げ、死んだ。

その相手は死に満足していたというが、彼には異常にしか見えなかった。

自らの手で自らを救う行為こそ、彼に取っては意味があった。

彼はカルヴァンのような予定説を認めなかった。

救いは神から与えられるでなく、運命に人は抗えると信じていた。

彼は神がいたとすれば、スピノザの言うような、神は存在するため他の何ものも必要としない唯一の実体だと思っていた。

自然を神として定義し、神への知的愛という観点から生涯を捧げたスピノザは彼にとってある意味宗教に理性的に向き合った偉人だった。

彼はスピノザだけは宗教家として認めていた。

孤独と清貧に屋根裏部屋でレンズを磨いて生きた自由主義者を彼はある意味模範とした。

スピノザは無神論者として、ユダヤ協会から破門されているが、彼

の知ったことではなかった。

理性で考えた神に対しての彼なりの結論は、神はいても人を救わな
いだった。

最も、彼はそれ以外を知らなかった。宗教は彼の人生の否定そのも
のだった。

：皮肉にも、そんな彼の唾棄する宗教の、それも神が彼を救った。
彼に取って本来この行為自体が屈辱だが、彼に取って確かな救い
だった。

だが、その女神は、自由奔放過ぎた。

彼は樽の中で日陰になるから退けと王に言いたくなくなってしまった。
要は、彼はアクアの馬鹿が移りつつあった。

転生した異世界で、彼の生前のシリアスさが抜けるアクアは救いで
はあった。

彼はアクアにそんなことを溢さないが、絶対に調子に乗るからだ。

だが、彼は死のその瞬間まで、ずっと孤独だった。

本当に彼は狂っていた。

だが、彼の理性が両親への愛らしきものが、最後の一步手前で彼が
『壊れる』のを防いでいた。

.....

彼の両親はそんなつもりで彼に思いやりを教えたのではないと、異
世界に来て漸く彼は気が付いた。

遅すぎる気づきだが、彼の他者からすれば当たり前前の結論にまで至
る過程が不味かった。

アクアを、神を教育する等と言う前世の彼からすれば有り得ない行為を通して、やっと両親の目線で彼は自分を見ることができた。

だが、同時に彼は自分の才能を自覚してしまった。

自分は生まれつき悪人だったと彼は悟った。

彼は悪の才能を持ちながら善人になろうとした愚か者だったと思っ
い込んだ。

異常な前世の自分を、死という最大限の客観視を通して把握でき
た。

前世の自分では気が付けるわけがなかった。

死後というものの存在は彼の想定外過ぎた。

異世界転生等、彼にとっては、男子高校生を演じるための知識でし
かなかつた。

厨二病に沸き立つ心は、彼に生前になかった感情だった。

何度も言うように彼は生前、何よりも愛を欲していた。

だから、前世で誰に利用されても気にせずの前だけを見続けた。

彼は、絶望の人生や悲劇の運命等と自分自身を決して悲観しなかつ
た。

絶望を乗り越え、因果を断ち切り、自らの手で切り開く行為こそ彼
に取っての『人生』だった。

女神エリスが、正確にはクリスガだが、常識を彼に説いた際に猛反
発した最大の原因がこれだ。

人の可能性で切り開く意思こそが彼の人生そのものだった。

彼にとって、一見どんなに滅茶苦茶でも可能ならば、それが常識と
なった。

その思想が彼の根に染みついていたので起きたシニール過ぎる反
論だった。

彼にそれは常識でないと指摘する者はいなかった。彼はぼっちだった。

自分のことは自分ですするというのは当たり前だった。

：言葉だけ見れば確かにそうなのだが、彼の場合は明らかに非常識だった。

彼の生涯は決して報われなかったなど言われるかもしれないが、彼に取っては報われていた。

彼は思いやりが確実に一人には届いたこと。この救いを彼は最後に知れた。

だから、転生等と言う非常識なことでも彼は対応できた。

アクアへの学びの教育と魔王討伐という無謀な計画を立てることができた。

彼が幸運値最悪、知力以外ほぼ平均かそれ以下の最弱職業冒険者でも計画通りなら問題なかった。

彼はゲーム等の知識で応用できた。

その手の話題は、前世での彼の情報収集の手段だった。

男子高校生なら知っているから知っているだけの知識が大変異世界で役立っていた。

漫画やアニメすら彼は何台ものテレビやパソコンによる同時観測による情報収集の一環でしかなかった。

現代日本で、数千もの書物を暗記し、サブカルチャーまで網羅した彼の知識は、異世界で大いに役立っていた。

だから、前世で有り得ないような振舞いができた。

アクアの撒き散らす変態像へ、彼を近づけることは可能だった。

彼の頭脳や才能の活かし方は、前世も異世界転生後も全力で斜め上か下だった。

彼を指摘できる者は、知性が足りなかった。

幸運の女神は彼の前世は、所謂担当違いのために観測できなかった。

地獄の公爵では、彼の欲する答え等言われても、悪魔である以上は知らないし知れないから指摘は不可能だった。

それでも、公爵は彼に対してサキユバスを用意しても通じるわけないことぐらいはわかった。

：水の女神よりバニルは彼について把握できていた。

：女神はアホだった。そういう計算を異世界転生という手段に彼女なりに含ませてはいた。

悪魔であるサキユバスは論外だが。

彼がそういう相手を見つけられれば全て解決、私って頭良いとまで思っていた。

だから、彼に全力で拒否されたことに怒った。

：彼からすれば、女神の提案は彼自身の人生の否定以外の何者でもなかった。

女神は彼を見ていなかった。女神はギリシヤ神話並みの理不尽さを彼に与えた。

彼も女神の在り方を察したから異世界で教育しようなどという馬鹿な結論に至っていた。

故に、公爵は意図せずに、女神の『教材』になってしまったのを知るのはまだまだ先の話だ。

.....

彼が異世界に来て、人をまともに疑うことができる最大の原因。友人でなかった同級生、つまり彼女に対して彼が思うところは、今は一切なかった。

寧ろ、彼女をつけ上がらせた最大の原因である彼自身を呪った。

彼女の才能は善性に活かされるべきものだったと彼は思っていた。彼女の行為は、最初から打算込みでも、確実に誰かのための行動だった。

彼は、彼女の才能を善から悪に変えてしまったと確信していた。

彼でなければきっと彼女を善へ導けたと推測した。

だからこそ、彼は孤独を癒してくれた老人には今でも感謝しても仕切れなかった。

愛や友情等に欠けている自分でも、彼の計画を遂行できれば、

彼の理解外の存在、女神であるアクアですらも教育できると彼は確信できた。

彼の望まぬとはいえ救いの手を差し伸べた恩人のアクアに報いる手段はそれしかなかった。

少なくとも彼に取っては、だ。

老人に思いやりが届かなかったら、彼はアクアに対して『悪』しか提供できないと絶望に屈するところだった。

その感謝している老人の墓参りに行けなかったことと孤独だったこと、

この二つしか彼には前世に興味関心がなかった。

彼は本当に壊れていた。彼はわかっているようでわかっていないかった。

アクアもそのことに気が付いていない。

アクアが彼自身を見ていたならば、そのまま転生させていた。

.....

夢は覚めるものだ。永遠の夢という名の死はこの世界に存在しない。

消滅という形では夢すら見ない。だが、彼は最後にそれを望んでいた。

：彼は悪夢を見たくない。

彼が自己改造をしていた理由はそういう面もあった。

彼は目が覚めた。前世の長い夢を見ていた気がする。

彼は、即座に最後の記憶を無理やり引き出した。

地獄の公爵バニル戦で、彼のその計画が崩れかけていることを彼は確信した。

だが、彼の最後に残されたはずの手段を、彼の『計画』を阻害したバニルを恨み切れなかった。

それが何故かはまだ今の彼には、わからない。

彼はまた意識が遠のきかけるのを無視した。

今は、それどころではない。

彼は自分の自己改造が全くなっていることを認識した。
眠っていたから、夢を見ていた気がしていた。

彼はどうやっても夢の内容など思い出せないが。

幸い、彼の自己改造は思考のみに特化した改造だ。

眠らないで考え続けること、ただ一点に等しい改造だった。

ミツルギキョウヤが万が一彼に復讐しに来ても、まだまだ隙の多い二流勇者なら容易く返り討ちにできると彼は確信した。

彼はミツルギとは何れ王都等で会ったりすると確信していた。

彼は王都に行きたくないが、既に王女の護衛達の醜態は知っている。

彼は、バニル討伐からまた手紙が届いたら、ノリノリで脅すつもりでいた。

生前の彼からはあり得ないほど、気分転換が即座にできていた。

なので、債権者である彼は新しいおもち：知り合いのレイン君に王都で色々仕込ませるところを決意した。

五千万エリスの大金を肩代わりして、金利をなくした彼は恩人だ。

お家が誰かに差し押さえられる悲劇は防ぎたい。

ああ、何たることだ！

そんな悲劇は許せないと彼は考えた。

レイン君にはそういう悲劇が起こる可能性に気を付けるように手紙を送ることを考えた。

生前、銀髪の怪しい女性が言っていたバレなきや犯罪じゃないとは実に良い言葉だと彼は思った。

なお、彼は銀髪美少女を即座に警察に突き出した。

彼の目の前で犯罪をすればバレればアウトだった。

自称邪神の、頭のおかしい存在だった。

重犯罪者でブタ箱確定と思ったら直ぐに出てきた当たりこの女の正体が異世界とかいう滅茶苦茶で何となくわかった。

：自称邪神から渡された怪しい宝石は側にいたカエルの口に強引に入れてみた。

空飛ぶカエルが何か喋った気がするが彼はなにも聞いていない。見ている。

それは、ただの鳴き声だった。断末魔の叫びだった。

彼は非常識を認めない。少なくとも生前はそうだった。

滅茶苦茶なままで彼の常識になれない存在だった。

今にして思えば、無意識に何度も自称邪神の野望を何度となく踏み潰してきた。

あの銀髪は、世界消滅等という戯れ言をほざいていたこともあった。

彼からすれば爆破したり、人材を派遣したりで中々心理戦の勉強になった。

あの自称邪神は、悪意の塊なのに前世の彼のおもちやだった。

彼はあの時、自分の才能に気がつくべきだった。

そして、異世界の、策謀と絶望の神である女神エリスも銀髪だ。

彼は銀髪という存在は、きつと悪意を持った存在なのだろうと思っ

た。
…恐らく前世の夢をみたせい、色々前世の下らない思考が出ていた。彼はそう思った。

女神エリスはこの時、彼を瀕死になるまで殴っても良いくらいには酷い誤解を受けていた。

だが、彼は改めて自分の状況を観測し、その事実のみでホツとした。まだ、計画に戻すことが可能だと彼は計算していた。

しかし、彼は改めて周囲を認識し、この世界に来て魔王軍幹部ベルディア討伐の宴以来、二度目に計算を辞めた。

彼に取って思考し続けること、計算し続けることが魔王討伐の最大の武器だ。

それを辞めるといふのは、彼に取ってそれ以上の事態に気が付いたからだ。

…どうやら、彼は自宅予定地だったはずの、家の寝室にいるようだった。

彼の寝ていた側でアクアが涎垂らして、彼の衣服をべちやべちやにしていた。

彼は駄犬を彷彿とさせるアクアをどかせようとして、漸く事態に気が付いた。

…彼は確信した。

自分はまたしても、アクアに助けられたのだ。

アクアに散々迷惑をかけられているという自負があつた。

だが、実際は迷惑をかけていたのは自分だったかと、思い彼は苦笑した。

彼は、計画がどこまでバレているか調べる必要性を再認識した。

彼は計画を一時破棄した。彼の悪夢は一時止んだ。

彼は気が付いていない。

彼は『素』でアクアの惰眠を貪る姿を見つめていた。

これは、転生後初のことだった。

彼は完全に自らの意思で思考を放棄していた。

第十三話 宣戦布告

地球換算 12月3日14時頃 王都クレア宅手紙到着

彼は、楽しみの邪魔をされてキレた。

彼を王都へ招いた者へ、必ず下手人に仕返ししてやると決意した。

幸い、レインが下手人の名を簡単に教えてくれた。

彼は自分の日頃の行いの良さに歓喜した。

なので、こんなお手紙を書いて王都のクレアに送ってやった。

『拝啓、シンフォニア家のクレア様へ。

いきなりのお手紙で失礼致します。

初冬の候、肌寒い季節となりましたが、いかがお過ごしでしょうか？

私は、もうすぐあなたに王都へ無理やり連れてこられる予定の一介の冒険者でございます。

アイリス姫に劣情を抱いていらっしやるあなたのことです。

肌寒いくらいは無意味。きつと頭の中は年中暖かいことだとは存じます。

ですが、季節の変わり目は体調を大変崩しやすいものです。

栄あるベルゼルグ王国の騎士たる者、どうぞお体をご自愛くださいませ。

ベルゼルグ・スタイリツシュ・ソード・アイリス第一王女様の直属の護衛という大任を担っている事実は、下賤な身の上の私ですら存じ上げております。

私は日々、他人のために身を粉にして魔王討伐を目論んでおります。

大丈夫、私の計画は万全です。安心してクレア様がお休み頂けるように手配しました。

どうか、安心してお休みくださいませ。

私が必ず、あなたの代わりにアイリス王女をお守りします故。
末筆ではございますが、シンフォニア家に恥の無いようにお過ごし
ください』

日本語でわかりやすく訳すと彼の手紙は上記の内容だ。

『アイリス姫に劣情している変態へ。覚悟しとけ、お前の仕事を奪つてやる』

彼の長々しい手紙を略すところなる。

「…殺す！何だ、この男!!ふざけるな!!」

当然、クレアは激怒した。

この手紙の送り主は確定だった。

態々名前まで達筆な字で書かれている。

ダステイネス家のララティーナの仲間だから、文章等から類推した人物像から逸脱し過ぎていた。

彼は狂人だった。彼は人の感情を逆なでする才能に関して人一倍長けていた。

この冒険者に身の程を教えしてくれるとクレアは決意した。

だが、この時、クレアはもう手遅れだった。

クレアは完全に彼の策に嵌ってしまっていた。

この時、クレアは彼を理由をつけて始末する気満々だった。

彼の思い通りにことは進んでいた。

大貴族のお嬢様なら、世間知らずのプライドの高い騎士のクレアなら確実に彼を殺しに来てくれると思っていた。

.....

話は過去に戻る。

彼はバニル戦後、彼の想定する最低限の計画だけ備えて、色々仲間との交流を楽しんでいた。

だが、彼最大の復讐が邪魔されたので、彼はキレた。

彼が何しても喜ぶ変態ダクネスへの復讐だ。

ララティーナお嬢様アクセル中羞恥プレイは彼の個人的な最大の計画だった。

彼は、王都から来いと命じられた。王家の命令でだ

ダステイネス家のお嬢様だということをとつくの昔に知っている。

ダクネスの権威何ぞ怖くない。王都へ行きたくないとは彼はぶちまけてしまった。

結局、無駄な抵抗だった。嫌がる彼をダクネスに縛られそうになった。

彼はダクネスに縛られるのは嫌なので、自分で歩き出した。

彼は、下手人を把握した。

彼はダクネスに抵抗している間に沢山の『お手紙』を王都へ堂々と送った。

彼なりのクレア個人への宣戦布告とその布石だ。

王都でお姫様に見世物の道化を演じて彼は帰るつもりだった。

彼は完全に空気を読まなかった。

地球換算12月1日10時頃。

アクセルと王都を繋ぐ転移所のレポートにより彼は王都へ到着した。

彼の計画が始動した。

.....

11月20日17時頃（ウイズ魔道具店）

彼の計画は無茶苦茶だ。最低限でも、論外だった。

万が一アクセルに魔王軍やデストロイヤーが来た場合の迎撃用の最高品質のマナタイトを備蓄させていた。

デストロイヤーに関してはウイズに理論上破壊可能か話し合っていた。

情報漏洩の無いウイズの店で内密に計画を話した。

：彼をしてウイズの頭脳は凄まじかった。

確かにその瞬間だけ氷の魔女がそこにいた。

彼は何故この頭脳を商売に活かせないのか不思議で仕方がなかった。

つい彼がバニルの方を見たら、何か嘆いてそうな雰囲気だった。

彼と同じことを考えているようだった。

彼が用意していた不在時でのデストロイヤー討伐計画だ。

あるわけないが、備えないというのは彼にとって愚策だった。

彼の『最低限』の計画遂行の為の、金はもうあらゆる取引で満たされていた。

ベルディア討伐で3億エリス、バニル討伐で2億エリス。

その他モンスター討伐費用及び彼の裏取引での違法なお金もある。

違法なお金は税金対策だ。万が一筆り取られてもアクアや仲間を助ける非常事態の金だ。

なお、彼の怪しいお金を追及した瞬間、この国の貴族何人かが破滅するトラップ付きだ。

貴族は最早彼を守るしかない。彼は助け合いの精神を学んでくれた元悪徳貴族の成長を喜んだ。

悪徳貴族達はもう二度としないと彼に誓った。

彼を庶民と処刑しようとした愚かものにはお茶目をくれてやった。

心から謝ってくれたので彼は許した。彼は寛大な心の持ち主だと自画自賛した。

彼は悪徳貴族等には容赦なく悪意に満ちた教育法を実践していた。

彼に取って、この国の悪徳貴族数は物凄い。

ベルゼルグ王国は簡単に征服できると確信した。

国教の女神エリスを恐れているため大々的にはしない方針だが、彼は容易過ぎて困った。

いずれあの策謀の神のこと、このペースでは勘付かれると思った彼は自身の悪意に制限を設けた。

だが、表向きおよそ計5億エリスの元手と彼の頭脳とその情報網さえあれば計画の必要資金以上の金が揃っていた。

最も、彼の完全な成果が出るのは少し未来だ。

今はおよそ2.5億エリスが税金対策として保管、及び緊急時に使用可能な金としてストックしていた。

.....

11月18日7時半頃（自宅）バニル戦後、復帰後二日目

バニル討伐後、気まずい状況で、彼はめぐみんとダクネスにお金を

いらなにか聞いてみた。

…彼が保管しておいてと言われてしまった。

ダスティネス家は清廉潔白な彼に対処不能な数少ないまともな貴族だ。

…まともな貴族の中に悪魔が堂々という辺りベルゼルグ王国は詰んでいると彼は思った。

めぐみんに関しては、

「父がお金持てば全額魔法道具の開発に充ててしまいます」

とはつきり断言されてしまった。

彼は不覚にも憐みを感じた。

聞けば幼い妹のためにも本当はもつと実家に仕送りしたいが、まともな金を送ると父親が使い果たすという話だ。

「狂人が父とは…少々気の毒に」

彼は頭がパーになって心の声が出る。

めぐみんは一拍間を置いて彼の言葉に反応した。

「…あなたにだけは言われたくないです！」

めぐみんは彼を杖で殴った。

彼はめぐみんの家族を馬鹿にしていると思ったし、この反応は当然だと思った。

ダクネスに止められて、アクアに魔法で治してもらった。

思春期だから仕方がないと彼は寛大の姿勢を貫いた。

めぐみんはさらにキレた。

…当たり前だが、彼の予想とめぐみんの反応は微妙にズレていた。

めぐみんと時間をかけて話せば、本当に全てがわかった。
この時、王都に呼び出されていなければ、彼はもう敵がなかった。

魔王軍から紅魔族、邪神、悪魔：何より予言だ。

彼の知りたいこの世界のあらゆることがめぐみんの『旅』で詰まっていた。

初対面時、レベル6の13歳のめぐみんを彼は勇者と讃えながら、まだ過小評価していた。

いや、めぐみんの能力や性格でいえば、彼の過大評価というのが正しい。

彼は親馬鹿に等しいくらいめぐみんを評価していた。

だが、めぐみんの旅路は彼からすれば、有り得ない可能性が詰まっていた。

彼が生前の経験則から推定邪神と思っているめぐみんのペット『ちよむすけ』は、本当に邪神の片割れであることがわかる。

なお、彼は毎日この小動物に恐れられている。彼はショックだった。

彼は、魔王軍幹部に爆裂魔法を使える邪神がいることにまで気が付ける。

めぐみんの恩人と戦わないといけない運命にこの段階で気が付けた。

彼が最初から狂人と思われていなかったら、彼に最低限以上の幸運があれば、

彼は邪神ウォルバクを魔王軍から切り離すことも可能だった。

彼に幸運が最初から最低限あれば、バニルとの心理戦がメインになった。

彼の頭脳戦で魔王軍を丸裸にして対処可能だった。彼は正攻法で魔王軍と対峙し出した。

更にめぐみんとゆんゆんの関係性と彼のすれ違いであった。

ゆんゆんが彼を見捨てたわけではないと確信できた。

めぐみんの友人セシリーの存在とその騒動。

彼は一瞬でアルカンレティアにデッドドリーポイズンスライムが来ることを察せてしまう。

彼がその事実気が付いた時、アクシズ教は永遠の繁栄が約束されてしまう。

彼は演説の天才だ。神でも悪魔でも利用する外道だ。

アクシズ教最高司祭ゼスタはアクアが彼の仲間にいる以上、彼の言うことを聞いてしまう。

なお、いなくても聞いてしまう。ゼスタは人間ならセーフだ。

彼は悪魔以上の悪魔だが、悪魔ではない。

彼は、アクアも偶に疑うレベルで悪魔だ。

彼の前世は、アクアですら読めない空白が点在しているのも拍車をかけていた。

ゼスタは、オークでもオーガでも愛でられるタイプの変態だ。

皮肉なことに、彼はゼスタなら理解可能だった。

全部守備範囲の変態なら彼には頭脳で理解できてしまう。

そう、『全部』なら可能なのだ。

彼はこの世界の異端児ゼスタを理解してしまうことができる。

最も、普通の変態なら彼の想定外に行く。故に、ゼスタ以外のアクシズ教徒は制御不能だ。

そして、ゼスタは魔王関係者と疑われた際に、別にいらなくても良くない？

等と全アクシズ教徒が思い込み、次期最高司祭選挙をやり出すくらいには影響力がない。

勿論能力はある。ゼスタは、人間ではこの世界で二番目にプリーストとしての実力がある。

変態は強かった。アクアの神託を聞ける時点で人間の限界値を突破していた。

ゼスタは彼の世界の、時代にはもういない純粹無垢な『聖人』だった。

彼は聖人を完全に理解できてしまう。彼は聖人を理解することが本当に可能だった。

：アクシズ教徒は彼の戯言を間違いなく鵜呑みにする運命にあった。

彼はまだこの事実には気が付いていない。

後に、この恐ろしい事実気が付いた彼はバニルとの旅を敢行した。休暇というのもあったが、アクシズ教徒の弱点を探る旅だった。アルカンレティアに攻め込む最初の提案者、魔王軍幹部セレスディナを彼は絶対許さなかった。

なお、アクアには有り金を全額寄越せと言われた。

彼は異世界転生初期に出会った乞食を思い出した。

アレはもうアクシズ教の破壊僧だと思い始めた。

実際合っている。セシリーはアクアを探しにアクセルに来ていた。だが、彼はまだこの不味すぎる事実には気が付けない。

アクアが金を欲する理由は、隣国のエルロードまで行ってカジノで数倍にする。

そして、アクシズ教の教会を再築したいそうだ。

彼は流石に激怒した。

アクアの幸運値なら有り金使い果たすどころか逆に借金になると確信していた。

しかし、アクシズ教会を再建したい程度なら…と彼は考えてしまった。

彼はアクアの『些細な願い』を叶えてしまった。

.....

??? 8月17日9時〜未来（異世界転生時）

彼どころかアクシズ教の上層部しか知らない事実があった。

めぐみんはさらつと聞いたが、もう覚えていないくらい馬鹿げた荒唐無稽のお告げだった。

アクシズ教団の最高司祭ゼスタは、アクセルの街に女神アクアが光臨したと神託を受けていた。

『お金を貸してくれると助かります』

ゼスタ、つまりこの世界の聖人がこう断言していた。

女神アクアはアクセルにおいて、今金がないと言っていた。

彼のこのアクアの些細な我儘を聞いた行為は、完全にアクシズ教に勘付かれてしまう。

：アクシズ教徒の弱点は金だ。アクシズ教徒のほとんどは散財するから金がない。

アクセルのアクシズ教会はボロボロも良い上に、今の管理者も杜撰だった。

雑草以上の生命力を誇るアクシズ教徒には、教会が檻樓でも新築でも祈りに差はない。

絶望を乗り越え気楽に生きる。アクシズ教徒の本質はそれだと彼は思っていた。

奇しくも、前世での彼の信義に似ていた。

なお、その方向性は全然違う。彼が指摘されたら誰であろうがキレる。

故に、教会に関しては、アクアが気にする以外の価値はないと彼は推測していた。

だが、彼はこっさり恩人のアクアの為に協会を少しずつ治していた。

…これならアクアにすらバレなかった。彼の印象操作は完璧だった。

毎日ほんの少し治していた。誰にも気取られずに少しずつだ。

彼のこの行為がバレれば、アクアが調子に乗るから彼は絶対このことを秘密にしていた。

だが、アクアは丁度二度にわたる魔王軍幹部討伐及び彼の看病をしてきていた。

彼の中で、アクシズ教会アクセル支部の再建の口実ができてしまっ

た。

アクアの願い通りにアクセルのアクシズ教会を再建などしたら、アクシズ教団は気づく。

あの時の、最高司祭ゼスタの世迷いごとは正しかった。

アクセルに派遣したセシリーは偶々遭遇できなかっただけだ。

この時点で教会関係者は確信してしまう。

彼はこの脅威をわかっていない。

最悪なのは、アクセルより帰還した彼の言う破戒僧、自称美人プリーストのセシリーの修行は一部を除き終わっていた。

彼の知らないアクセルでの経験でセシリーは努力していた。

ゆんゆんもセシリーと関わりが薄いのであまり知らなかった。

彼の言う勇者めぐみんとのやり取りで成長したいと願った。

めぐみんの姉を自称する聖職者は本気で取り組んでいた。

セシリーが習熟したのはまだ座学のみだ。

実習はいうまでもない。女神アクアその人がアクセルにはいた。

戦闘訓練は彼が面倒みることになる。その理由は簡単だった。

アクシズ教団的にはアクアはこの世界に遊びに来ていると思われるている。

これだけが、彼に取って唯一の救いだった。

しかし、彼は確実に幸運が欠如していた。

神器による補正は飽くまで外付けだ。運命を持つ者の幸運には断じて届かなかった。

彼の前世での『救済者』。

この世界にかつて存在した勇者と同じ姓を持つ老人の幸運値には彼は決して届かない。

何よりセシリーはめぐみんの友人だった。

少なくとも彼はそう判断してしまう。彼からすれば完全にめぐみんの友人だ。

勇者めぐみんの姉を名乗るのは断じて許さないが、友人だ。

アクシズ教団のセシリーは、彼が思っているただの破壊僧ではない。

彼に取って仲間の友人がどれほどの価値を持つのか。

：彼は少なくとも国に喧嘩は売れた。

何より恩人のアクアへの使徒を彼は無碍にできない。

：この真実にいち早く気づいたバニルの嘆きぶりは凄まじかった。

よりにもよって、またあの女神がやらかした。

最も、バニルは彼と同等の精神力の持ち主だ。

だから、バニルもこの面倒臭い事実に関して表には断じて出さない。

下手に言ったら、悪化することが容易にバニルには計算できた。

バニルの不幸はその明晰な頭脳にあった。

彼と同様に丁度良いおもちゃのダストに八つ当たりするのもやむ

負えない。

ダストの不幸はまだ序章だ。

.....

11月18日10時頃（自宅）

そんな衝撃の裏話を知らない彼は、アクアの願いは聞き届けると約束した。

だが、エルロード行きはダメと言いつつ切った。

アクアは大変喜んでくれた。

彼としてもアクシズ教会を治す丁度良い口実になったと思った。

彼はアクシズ教を認めないが、散々利用していた。エリス教よりも利用していた。

多分、彼のこの行為から波及した変態の繁栄という名の絶望は彼への神罰だ。

なお、アクアは狂人である彼の仲間なので、女神アクアと名乗っても一切信じられていない。

彼はバニル戦で仲間内には、勘付かれたと思った。

だから、正直に話そうかなとも思った。

だが、どうもバニルはただアクアに合わせて言ってます的な感じだったらしい。

めぐみんとダクネスが行っていたアクアの対応で彼は確信した。

完全に女神に対する扱いではない。

このとき、彼は自分の行為を完全に棚に上げていた。

彼もアクアに甘いが、女神に対する扱いではない。

割とアクアに対して口頭では容赦ない。

最も、彼の貶すときは、大概アクアが悪い。

アクアにエルロード行を拒絶した最大の原因は破産とかアクシズ教が嫌いだからとかそういう次元ではなかった。

彼は、まだカジノノ大国エルロードの宰相ラググラフィトの分析が終わっていないかった。

彼の当初の想定通りなら頭の良い馬鹿だった。だが、エルロードを調べていて気が付いた。

宰相が彼の想定通りならエルロードを、滅びの運命にあつた国を救つた救世主だった。

宰相ラグクラフトを改めて調べた彼は自分自身を疑つた。

この『偉業』をなしていたら、彼の想定通りの人物ならアホの極み過ぎた。

彼の計画の想定外を警戒していた。

これは罠だと思つた。彼は魔王軍の情報戦ではないかと警戒した。

：彼は自らの思い込みで危うく、人類の貴重な人材を失うところかもしれないと考え直した。

当初の異世界転生後の二週間程度であつた彼の推察通りなら、エルロードを再建した宰相は魔法軍の手先だった。

だが、彼の初期とは想像が違う程に、宰相はエルロードを再建し過ぎていた。

二週間では気が付けないレベルの偉業だった。

彼が敬意を抱くレベルの財政再建を成していた。

更に、最大の赤字の原因であるカジノを逆に利用して、巨万の富をエルロードに齎していた。

：彼からすると余りにアホ過ぎた。有り得ない偉業を宰相ラグクラフトは成していた。

これは完全に高度な罠だと彼は確信した。彼はエルロード侵略計画を先延ばしにした。

寧ろ、婚姻外交を進めるべきかと考えた。

ベルゼルグ王国とエルロード国の外交方針は彼も知っていた。

要は金と武力の関係構築だ。彼からしてもまともな婚姻外交だった。

彼からすれば理想の外交方針だ。

これに大反対しているクレアとかいう護衛は恐らく変態だ。

.....

10月21日〜現在。23時以降（ペーパーカンパニーからレイン間）

レインの手紙からでも察せた。バニル討伐前のお手紙だ。

『債権者が私になりましたこれまでのような暴利、金利はいらさないですよ』

という優しい彼の言葉を書き連ねた。

レインは大変恐縮した内容の手紙を送り返してきた。

レインの反応から推察するにどうも何か要求されると警戒していたようだった。

彼は利害関係なら洞察力の化け物だ。直ぐに察した。

だから、彼はレインの、普段のお仕事だけ聞いた。

彼は優しかった。∴彼は悪魔以上の悪魔だった。

この行為は極々一般的な内容だ。

普通に善意の債権者がレインの仕事ぶりを通して債権の返済可能か見極めているような感じだ。

現代の税務関係者やローン会社が良くやる行為だ。

収入や現状の財産を確認する当たり前の聞き取り調査だ。

だが、レインは彼という劇物に与えてはならない情報を提供してしまっていた。

彼はレインからの聞き取り調査の結果、この世界での経験則からクレア変態説を半ば確信した。

アイリス姫に変態並みの忠誠心を持つ優秀な人材だ。

彼はこの世界に来てから変態ばかりでウンザリしていた。

前世には決して戻りたくない。

だが、彼からすればまともな人物がゆんゆんと他数名を除けば、悪人しかいなかった。

どこかしら、皆変態性を持っているように彼には思えてならない。

前世は狂人に満ちていた。そして今世では変態に満ちている。

：今世の方が遥かにマシだった。何より仲間がいた。

彼は思考を戻した。

仲間との思い出は恐らく消滅のその時まで彼の宝に変わりはない。

だが、婚姻外交だ。これをどう乗り切るかで彼の計画も代わって来た。

別に放置するのも構わないし、今は仲間達との関わりが重要だと思う。

だが、最低限必要限の方針はないと行けなかった。

エルロード国のレヴィ王子は、ベルゼルグ王国のアイリス姫の婚約相手だ。

彼は前世の経験則で不穏な動きの始まりを察していた。

当初は宰相ラグクラフトを疑った。彼に取って、一番分かりやすい国の中枢にいた。

というか、宰相で国が回っていた。ほぼ全部、宰相が支配していた。宰相の許可がないと、王族の強権しかそれに歯向かう方法がなかった。

彼が考えた魔王軍の戦略は、魔王軍との仲介だった。

エルロードを魔王の中立ないし共存共栄を謳う大戦略だ。

これが成功すれば、ベルゼルグ王国は孤立無援だ。

彼でもそうしたが、この路線はあまりに露骨過ぎた。

宰相がいないと話にならないくらい支配されていた。

ブラフが一つもない。彼なら数十のブラフを用意し反対勢力すら作る。

寧ろ、半ば、公然の事実にして、隠蔽不可能で人類を裏切る選択肢しかなくした。

こうすれば、国が亡ぶから王族だろうが魔王軍に編入することを認める他なくなる。

だから、最低限以上の幸運が手に入った以上は、さっさと宰相を排除しようとしていた。

彼からすれば、この一手を成されれば、人類戦力は著しい弱体化を免れない。

彼ですらも勝てなくなると思っていた。

しかし、宰相ラグクラフトが魔王軍に本当に騙されている可能性を彼は考え始めた。

後、二年もあればエルロードは魔王軍の手に落ちてしまう。

彼には最低限方針を固めないといけないかった。

侵略か婚姻か、それとも第三の道か。

彼はアイリス姫とベルゼルグ王国を直接行って見極めた方が早い気がしてきた。

彼は断じて王都のお誘いなど拒否するつもりだった。

名誉は彼の行動を阻害した。バニル討伐でもう狂いに狂いまくっていった。

王国全体がかかってこない限り、彼は無視するつもりだ。

返事のお手紙だって頑張って書いたのだ。

あれをそのまま受け取らないのはできる人材がいる証拠だ。

バニル討伐の功績で招かれたら、エルロードの不味い状況を相談する人材がない可能性すらあった。

一介の冒険者風情への対応で彼は王国を見極めようとしていた。

最も、クレアという変態は彼の想定外を引き起こした。

.....

11月23日12時頃（自宅）

彼はレイン君にしっかりお手紙を書いた。

王都に強制的に招かれるとかあったら、下手人に宣戦布告するから教えてねというお手紙だ。

このタイミングで手紙の入れ違いでも起こらない限り、

きつと恩人の彼を王国の魔の手から防いでくれると彼は思った。

レインがしなかった若しくはできなかつた場合は、全力で仕返する。

王女様を見極めてとつとと帰るが、下手人は断じて許さない。

彼は、ベルゼルグ王国の王都等よりも、宰相が人間かドツペルゲンガーか何か迷っていた。

彼は人狼というゲームは知っていたし、そういう茶番を前世で演じられたこともあった。

だが、これは悩んだ。余りにあからさま過ぎて、彼の手を止めた。

彼の知る魔王軍は、地獄の公爵バニルすら魔王軍幹部の超絶軍隊だからだ。

彼の想定では、隠し玉に潜在能力バニルクラスの化け物の魔王軍幹部候補生が最低数十人はいる。

パワーレベリングをして緊急時には人類に攻め込むと半ば確信していた。

こんなことをされたら、彼の計算上ベルゼルグ王国の王族は時間稼ぎにしかない。

ただの魔王軍幹部候補生なら余裕だ。ベルゼルグ王国の王族は戦闘民族だ。

エルロードがベルゼルグ王国を『野蛮』と評するのもわかる。それくらいベルゼルグ王国の王族は、逸脱した戦闘能力だった。

最も王族は、彼が行う搦手に弱すぎる戦術しかとっていない。

彼はアイリス姫を誑かせば正直、将来的に正攻法で勝てるような気がしていた。

だが、それは断じて有り得ない。彼の変態の名はアクセルで知らぬ者はいない。

普通に考えてこんな馬鹿を一国の姫が呼ぶこと自体おかしいと彼は思っていた。

アイリス姫は、まだ幼い。戦場に兄も父もいつも元気で攻め込む野

蛮人だ。

姫ならば、護衛も使用人も多数いるが…それが寂しくないかと言われると彼には疑問だった。

少なくとも、恵まれてはいる。レインやクレアなど忠義に満ちていた。

しかし、彼などを呼ぶというのは、ひよっとしたら『孤独』なのかもしれない。

彼は、ふと思った。籠の中の鳥は辛かった。流石にレインも姫のことはシークレットだ。

彼に中々書いて寄越さない程度には良識があった。

だが、彼はそれを確かめる術はないし、今は忙しい。

彼は本気で予備戦力、魔王軍幹部候補生を警戒していた。

アイリス姫に確認する時間などない。彼は仲間の確認で精一杯だ。知らない姫を優先する機会がない。だが、彼は気になった。

どうやっても、現状、バニルクラスの魔王軍幹部候補生が数十人来たら詰みだ。

これに対応できるのは、彼の計画のみだった。アイリス姫の確認などしている余裕はない。

自己改造がなくなった以上、彼には数か月か長くて一年しか準備期間がなかった。

彼は人類の追い詰められ具合を嘆いた。彼には余裕ができてもまだ時間がなかった。

彼は魔王軍を絶望的な脅威と確信していた。

彼に取って魔王軍は、人類を追い詰めてなお侮らない確実に攻めてくる軍隊だ。

魔王軍幹部ベルディアは女神の光臨という不確実過ぎる対処に凄まじい進軍スピードで派遣していた。

彼ならあれ程まで急がない。

急ぐ理由がなかったし、じつくりとアクセルを調べれば良かったはずだ。

ベルディアがアンデッドとはいえ精神的疲弊はある。

だから、あそこまで急がせる必要がなかった。

彼は、魔王軍があの高潔な騎士の鑑であるベルディアを使い捨てできる軍隊だと推測していた。

魔王に絶対の忠節を誓う。

いざとなれば物語同様の、魔王と勇者の決闘である一対一の大原則すら破棄する超越者だ。

…魔王の為に、即座に自害できるレベルで、捨て駒にすらなるほどの忠誠を誓う圧倒的な軍隊だ。

彼はそんなものに正攻法で勝てる自信はなかった。

彼は対抗するために、計画を立てた。

心理戦、情報戦、技術、奇襲、搦手等。

…前世のあらゆる経験の下に作成した。全てに対応できる計画だった。

彼の計画上、そのバニルクラス数十人を暴く必要があった。

情報戦だ。彼はバニルをこの段階で排除できた事実感激していた。

同時に、計画外のことをさせられる今の実情に少し焦っていた。

彼は楽しんではいたが、焦ってもいた。

だから、彼は計画を最低限確認した。

彼に取って思考の放棄にも等しい。

：対国家レベルの情報工作員地獄の公爵バニルを排除できたから可能だった。

彼の想定外が発生した時のみ発動可能な最低限にした。

彼の想定する魔王軍幹部デッドリーポイズンスライムをアルカンレティアに攻め込ませる。

アクシズ教徒を世界に撒き散らすような愚を犯さない。

彼がアルカンレティアを落とすなら、もっと確実な手を使うからだ。

アクシズ教徒を世界に撒き散らさない。究極の一手が、彼が魔王軍の立場なら存在した。

それは費用対効果が合わない。彼が魔王ならしない。

何よりマッドサイエンティストの魔王軍幹部がアルカンレティア対策のため、開発に専念しなければならなくなる。

彼は究極の改造人間である新人類、紅魔族対策にマッドサイエンティストは現在取り掛かっていると警戒していた。

魔法さえ、どうにかなればあの偉大なる研究者の遺産、『紅魔族』は詰む。

彼でも思いつくことを強大過ぎる魔王軍の専門職の頭脳が思いつかないはずがない。

だから、彼はアルカンレティア攻めをほぼ有り得ないと思っていた。

勿論、彼は、対策はしている。

アクアがいるからアルカンレティアに等くれば魔王軍幹部は秒殺可能だった。

彼は魔王軍幹部のマッドサイエンティストを警戒した。

恐らく、魔王軍開発部門の責任者だ。排除可能なら即座に実行したい。

彼の技術漏洩はこの時代の存在では絶対有り得ないと断言できた。

女神エリスやバニルですら彼の情報防壁の最後のラインは勘付かなかった。

彼は断言できた。心が読めて、現在・過去・未来を読めるチートを誤魔化せた彼に、この世界に情報戦で勝てる者は存在しない。

だが、彼の計画上推定するの魔王軍幹部なら容易に技術を再現できってしまうだろう。

彼は専門家ではない。彼は飽くまで高校生だ。

例え前世で少しおかしかったとはいえ、その道のエキスパートには勝てない。

現に、彼は常に専門家に任せていた。オカルトとか知らん。

：頭の良い馬鹿を思い出した。どの道アクア以下の神だろう。忘れるに限った。

彼の計算外でアルカンレティア攻めが敢行された場合は、彼の予測不可能な変態すら制御可能な人材が必要だ。

彼以上に精神分析に長ける人材が魔王軍にいるということになる。

彼は専門家ではない。自らは悪意しか感知できない異物だと確信

していた。

善意の変態を分析できる魔王軍幹部が入れば彼はもう完全に詰んだ。

現代でも不可能な所業を、この時代のこの世界にいないことを彼は否定しきれない。

彼の想定外でバニルは来ていた。

彼の予測を上回る計画外で現に来ていた。

ベルディアも来た。彼の想定よりずっと早く来た。

魔王軍が転生前の空間で想定したよりも遥かに強大なのは確実に、と彼は認識していた。

彼が魔王なら、魔王軍幹部ベルディアやバニルをここで投入しない。

やるなら魔王軍幹部による複数の不意打ちで確実に仕留めた。

最も、バニルは想定内だ。魔王軍に忠節があまりないのは計画通りだからだ。

彼は心を読む、精神分析のプロであるバニルを倒した。

だから、今から最低数か月程度の時間は稼げたと彼は確信している。

魔王軍ですら、バニル程の絶大な能力を持つ情報工作員及び精神分析官を無くした以上、侵略計画が一時中断すると彼は推測していた。

少なくとも、現段階の作戦以外は中止するのが定石だ。

彼は魔王軍が理性的な軍隊でかつ人類に勝っている段階での隙を捕らえた気でいた。

彼の推測は正しいが、間違ってもいた。

先ず、潜在能力がバニルクラス数十人の魔王軍幹部候補生は断じて有り得ない。

確かに魔王軍幹部候補生はいることはいるが、今の彼でも対処可能だ。

効率的なレベルアップをした彼は、その才能と神器による幸運補正込みの搦手なら魔王軍幹部候補生の奇襲にも対応できた。

彼の想定は断じて有り得ない。あつていいはずがない。

バニルは一応、魔王と親しかったが故に、堂々と彼に語って聞かせることができない。

悪魔のプライドがその想定を否定できない。

：だから、女神とその仲間達にヒントはくれてやった。

ネタ種族の小娘は、彼の知りたい情報で満ちていた。

すれ違いがなければ、彼の知りたい全てがわかった。

魔王軍を再計算可能だ。彼の才能ならほぼ魔王軍を見極められた。

バニルからすれば、彼に目をつけられた魔王軍はどうあがいても完全に詰みだった。

寧ろ、誘導しないと魔王軍は壊滅どころか消滅しかねない程に彼の計画は完璧過ぎた。

バニルの計算上、彼の計画に魔王軍が対応するためには、最低三倍の戦力が必要だった。

バニルからすれば、エルロードの件等あつてもなくても変わらな
い。

バニルは彼のおかしさを指摘できない。既に女神と取引してし

まっていた。

脅威を想定しながらも、彼の計画は一時中止だった。バニル討伐と仲間の疑義は彼に取って利と不利両方が存在した。時間をかけて『素』で対応しないと不味かった。

魔王軍は奥の手を数十枚持つ、理性的な軍隊だと彼は考えていた。

なお、彼の想定している魔王軍とは、第二次大戦状況で日本がアメリカに勝つくらいは無茶ぶりだ。

しかも最初から本気のアメリカを想定していた。勝てるわけがない。

1920年代後半に奇襲すれば、その時代のアメリカ陸軍が壊滅的だ。

理論上は勝てなくはない。戦前日本でも理論上は勝利可能だ。

：有り得ない仮定だが、備えていない軍隊なら確実に勝てた。アメリカと言えども、備えるためには数年はかかった。

だから、彼は急いでいた。

魔王軍の再編が行われる前に勝つための方法を求めていた。

彼は滅茶苦茶な想定をして、しかもそれで勝っていた。

軍事・経済・政治の全てを計画に組み込んでいる彼の計画はこの時代の世界では、対処不可能なレベルで極まっている。

彼に勝つためには、彼自身を暗殺するしかない。

だが、魔王軍でも、人類でもアクアがいる限りそれは不可能だった。アクアはチート過ぎた。彼の無限蘇生ができれば、魔王軍に人類は確実に勝てた。

彼もそれをわかっていて、計画の大前提として無限蘇生を組み込んだ。

彼はだからこそ、女神エリスに神罰不可避の狼藉を敢行した。

彼に取っては、それ以外で勝てないからだ。

何度も言うが、彼は魔王軍を警戒し過ぎていた。

彼は完全に『ダークファンタジー』の世界観で生きていた。

中世故に情報が不確実な上に不足していた。

彼は敵がわからないために、自分ならこうするだろうと計算していた。

彼は軍事の専門家ではない。

心理戦は極めていたが、対個人や狂人団体のみだ。

流石に、魔王軍と人類の、世界規模の大戦は彼の経験値が不足していた。

彼は、その想定は有り得ないと断言できなかった。

軍事の専門家なら気が付く。彼の想定通りの魔王軍なら人類に降伏勧告を出した。

理性的な軍隊なら、確実にそれをまず行う。

次に、それに逆らった人類を大義名分の下滅ぼし始めた。

さらに、大義名分を元に確実に内通者とその事実を宣伝した。

こうすれば、人類を滅ぼしたりせず完全に世界征服が可能だと軍事関係者なら彼に言った。

彼は前世の軍事家の伝手を探偵消失時に捨て去っているし、専門家でない。

彼の素性は独学した優秀な高校生止まりだ。異常なレベルだが、許

容範囲内だ。

彼は皮肉にも第二次大戦で地政学を独学したが故に、戦略を誤ったヒトラーの状況にあった。

最も、彼の場合は警戒し過ぎで、逆のパターンだ。

彼は自身が専門家じゃないが為に、必死で計画を立てた。

彼は、軍事の大前提をはき違えていた。戦わずして勝つことこそ王道だ。

彼は、『兵は詭道なり』という孫子の言葉を完全に理解しきつていなかった。

未来技術のあらゆることが可能なゲームを体験し、軍事に詳しい友達でも入れば彼は無敵だった。

常道からの搦手が戦争の基本だ。これは西暦が始まる前からの基本原則だ。

彼は『搦手』だけで今まで勝てた。

魔王軍という彼の才能だけで勝ってしまうが故に、正確な戦力を見誤っていた。

彼の戦略は正しい。だが、間違っていた。

現代日本で軍事教育を受けないが為に彼なりに独学の成果を引き出すしかなかった。

：そんなことを知らない彼は魔王軍対策として裏工作と金稼ぎを行う。

転移初期から彼以外の第三者を使い、徹底的に行っていた。

女神エリスから貰った幸運等なくても両方可可能な程の大金が手に入ってしまった。

彼はもはやこの世界の経済活動に干渉できた。

5億エリスもあれば余裕でこの時代の技術革新のきっかけぐらいは作れた。

問題はどの産業を重視して発展させるかだと彼は考えていた。

彼は傾斜生産方式での人類の軍事技術増強を考えたが、専門家でないので困っていた。

何より、彼はこの世界の貴金属、鉱物の知識がまだ不足していた。何が可能で不可能か、この世界基準ではまだ不明な点が多かった。

彼の技術が使えることだけは確信していた。

ライターやマナタイト爆弾、地雷他多数は作成可能だった。

大金をさらに増やす手法は、第三者を挟めば彼の幸運はほぼ関係なかった。

念入りの調査結果は支配した警察組織と冒険者ギルドで簡単に手に入った。

勿論、予想外の儲けは神器による補正と理解していた。

事実、幸運等関係なく計画通りに儲かった。

彼は仲間にいつでも元手以上に返せる手配を整えた。これも計画通りだ。

大金を利用した計画を彼は敢行できた。

.....

11月20日18時頃（ウイズ魔道具店）

ウイズに彼は尋ねた。

「この計画で理論上は、デストロイヤー討伐は可能かと思えます。

：最も、デストロイヤーがアクセルに出来ない限りは使わない杞憂に等しい計画だが可能か否か。

ウイズさんに確認したい。私には少々時間が足りない」

彼は専門家に尋ねた。魔王軍幹部とはいえ、絶対この会話の内容は漏らせない。

バニルとの取引もあるが、もう一段彼は囁ませていた。

ウイズは、彼のバニルすら利用した地雷作戦計画を完全に理解していた。

バニルからは苦情が来たが、デストロイヤー何て来ないだろうから別に良いじゃないかと彼は笑った。

バニルは何かを言い淀んでいた。

彼は気になったが、聞かない方がお互いのためだからバニルが言えないと確信した。

「そうなのだが…我輩の能力をこれほどまでに悔いたことはない」

彼はもの凄く気になったが、それ以上の思考を辞めた。

「…貴様、本当に悪魔ではないだろうか？」

バニルから突然、こんなことを言われた。

彼の多分記憶か心を読んでいったと推測できたが、突拍子がなさ過ぎた。

彼はキレた。余りにもバニルの発言は酷い侮辱だと思った。

「何て失礼な！アクア。俺の前世を知っているのならはつきり言っ
やってくれ！」

彼はアクアに援護を頼んだ。

彼は何かバニルと知らぬ間に取引したと思われるアクアを平然と連れ歩いていった。

もう、彼は悪魔だろうが、神だろうがセーフなら使わない手はないと判断した。

アクアも嫌々だった。ウイズはともかくバニルを嫌悪していた。

だが、彼がデストロイヤー対策の件を全て正直に話したら、何故かアクアは喜んでいた。

彼には不明だ。全くわからないが、良いなら良いと割り切った。

「…そうね。人間であることには間違いないわ!」

彼は、アクアの沈黙が気になった。

何故、今、言い淀んだ。彼は物凄く落ち込んだ。

「ほう…女神なのに、担当している地域の人間の魂の記憶を覗ききれぬとは。

いやはや失敬! 貴様は人間の、それも駆け出し冒険者の街のプリーストだったな。

フハハハハハ!!」

バニルの煽りは彼も真似したいくらいのもがある。

だが、彼は完全に戦闘態勢に入ったアクアを止めた。

ウイズが死んだら彼に取って、人類滅亡のお知らせだ。

さらに、アクアが天界に帰れる可能性の消滅だ。

転生者等いなくても駆け出し冒険者の街アクセルが滅ぼされれば、魔王討伐の可能性が生まれなくなる。

想定外の手段で、爆裂魔法を連打する暗殺法などを敢行された場合、最悪の奥の手としてアクセルは必要だった。

可能性に懸ける最終手段、アクセルの住民達の意識改革は日頃の演説で進みつつある。

彼が塵一つ残らずに滅ぼされた場合、アクアを天界に返すためには、将来の可能性に懸ける他なかった。

彼のデストロイヤー対策は、現代知識の悪意に転換した作戦だ。

ウイズはこの計画書通りなら、ウイズ単独でデストロイヤー破壊可能になると彼に断言した。

なので、彼は緊急用に最高品質のマナタイトをウイズからの購入という形で行った。

地雷も作成して渡した。作成法は極秘扱いだ。

ウイズには魔王軍幹部でも魔王軍に漏れないように魔法の契約まで用いた。

彼の計画の最低限は出し尽くした。

後は仲間との交流のみだ。彼は急ぎ過ぎていた。

魔王軍がチート過ぎるとはいえ、バニル討伐できた今なら完全に時間の余裕ができた。

アクアはあからさまにホツとした様子だった。

…この分だとバニルは近日の予定くらいはバラしたと確信した。

バニルの印象操作が上手すぎて、彼にはまだ全容がわからない。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
11月21日〜26日（アクセル内外）

彼はめぐみんと二人して爆裂魔法の運用法について語り合ってみ

た。

ダクネスと露店を巡ったりしてみた。貴族令嬢だから、微妙に常識に欠けた。

まだ世間知らずのお嬢様だった。

彼はダクネスを変態と改めて確信していたが、まともな面を見られた。

彼なりに全力だった。

彼にはめぐみんやダクネスと行ったこの年頃の女性の関心はわからない。

何より、前世ではぼつちだった。そんなこと言われても知らない。

彼に取って真面目にめぐみんと関わろうとすると学問という形ではできない。

ダクネスは秘密主義ぶっていたが、彼はとつくに知っていた。

アクセルの冒険者も皆知っていた。彼の計画はもう少しで最高の形で完成だった。

彼はこの楽しみを邪魔されたのは、許せなかった。

堂々と宣戦布告してやるし、仕返ししてやると決意した。

なお、クリスにだけは彼の計画を話していない。

ダクネスの正体を知っていることは女神エリスとの対面時に話していた。

というかキャベツ収穫後、クリスを見かけない。

彼はダクネスの友人ということで、クリスの為にバニルと遭遇しないような特等席を準備して待っていた。

彼に取って、女神エリスは生粋のサディストだ。

なので、この計画は喜んでくれると思っていた。

彼は女神がサディストとか酷い。

きつとあの世で幻想をぶち壊した反応を楽しんでいるのだろうかと思っただ。

彼は自分をサディストと認識していない。

この考えは、自分ならそうすると喜ぶと思っていた彼は気が付けない。

彼は自分が悪意で構成されているが、まともだと思っていた。

彼のアイデンティティは強固だ。論破できる者がいたらそれはまさしく神だ。

クリスに会えないのは、忙しいからだと彼は推測した。

ダクネスから確認したが、忙しいからしばらく来れないと言っていたらしい。

彼はアルダープ領主の屋敷に義賊が行っていたら最悪だなと思っただ。

最悪、女神と悪魔が対面する。そうすれば国が滅んだ。

：国教の神が国を裁くのなら意外と良いかもしれないと彼は少し思っただ。

アクアの為にもダクネスの為にも許さないが、飽くまで神としてなら正しいと彼は思っただ。

それ以外という思い付きで、彼はゆんゆん同様に異世界チエスをやってみただ。

：彼は計画のことで頭が一杯だった。

仲間内でいつもチエスをやっているのに気が付かなかった。

正確には見ていただけだ。彼はぼんやり眺めていた。決して混ざろうとしなかった。

バニル戦復回復後、アクアに挑発されてチェスを本格的にやってみた。

「あんた勝てないからやらないんでしょ？」

彼はこの一言でキレた。彼はアクアの単純な挑発に乗った。

彼はアクアに手加減などしなかった。彼がポーンだけで勝ったとき、アクアは泣いた。

アクアは彼に1勝もできていない。無謀な攻めばかりだ。

先手と同じ手を打てば勝てるとか戯言をほざいた。

彼はアクアでは勝負にならないと確信した。

彼は元の世界で言うところのポーン、冒険者だけで勝てた。話にならなかった。

ダクネスは守ってばかりいた。∴一応攻めもできるが、守りが固い。

攻めの一手は恐らくダステイネス家の教育の成果と彼は推測した。

だが、彼からすれば守りしかできないに等しい。

彼はこの世界に来て生粋のサディストと変貌していた。

守りで彼には勝てない。ダクネスも勝負にならなかった。

実に性格が読みやすい。チェスと言う題材は彼の精神分析の一助となった。

めぐみんとの異世界チェスは割と癖があるので読みやすい。

めぐみんの爆裂魔法を防ぎ、よそ見さえしなければ勝てた。

異世界チェスのエクスペリジョンは盤面破壊の一手だ。

めぐみんは追い詰められると多用する傾向にある。

彼としては、心を読むバニルと一度打つてみたかった。
バニルならばきつと凄まじい手を打つてくると彼は確信していた。
彼は頭がパーになりその胸中をめぐみに言ってみたところ、

「あなたは、本当に狂人なんですね…」

何か凄く哀れな者を見る目で見られた。

彼は自分が変なことを言っていないはずだと思つた。

だから、何故こういう反応が返つて来るのかわからない。

彼は客観視に欠けていた。バニルとチエスがしたいくらいならめぐみに憐れられない。

この時言つた胸中に問題があつた。だが、まだ気が付けない。

ここまでの憐みの感情を含む瞳は前世含めても二度目だ。

だが、めぐみんはアレと違い邪悪な巫女じゃないし、子どもだ。

彼は寛大にめぐみんを許した。

なのに、めぐみんは彼を杖で殴つた。

「シリアス返してください!!」

どうしてめぐみんに殴られたのかは、彼には理解不能だ。

なお、あの邪悪はどうやったのかわからないが彼の腹に風穴開けてきた。

杖で殴られる程度、彼の前世と比べたら遥かにマシだった。

何より、前世ではそういう相手がいなかった。

だから、今のめぐみんが彼には本当にわからない。

彼の知る中で、ホムンクルスを除く、史上最高の改造人間紅魔族の子孫、紅魔族の随一の天才めぐみんは凄まじい可能性に満ちている。

だが、まだまだ勇者めぐみんは成長する余地があると彼はホツとした。

まだ既存の人類である彼が、異世界最高峰の可能性の塊であるめぐみんに異世界チェスとはいえ勝てた。

彼はまだめぐみんに取って「いらぬ」存在ではなかった。

：なお、彼との露店巡りの際、竜の彫刻の入った木刀等にめぐみんは反応していた。

中学生くらいの女の子のセンスなのだろうかと彼は純粹に疑問だった。

何か違うような気がした。：ゆんゆんに会えたら聞いてみたい。

彼は前世で異性への興味関心が薄かったことを嘆いた。

しかし、めぐみんが欲しがりそうなものの特定は極めて容易だった。

めぐみんに最高品質のマナタイトを与えてみた。

めぐみんは大変喜んでくれた。彼も嬉しかった。

これを使えば、彼がドレインタッチでアクアを経由せずとも爆裂魔法が一日に数発撃てた。

彼はもはやこれくらいの財を惜しまなかった。時間があつた。

稼ぐ手段など先物取引から相談や金貸し、ベルゼルグ王国の悪徳貴族を脅せばいくらでもできた。

ドネリー家のカレンは彼がダクネスの行った滅亡寸前の一手から助けた。

そしたら、カレンは色々話を聞いてくれるようになった。

彼としては意図せぬマッチポンプだった。

勇者であるめぐみんのプレゼントに反応した凡ミスも良いところのマッチポンプだった。

女神エリスも認めない程に、不完全な拙い手段で貴族を滅ぼしたくなかった。

ダクネスは真つ当過ぎた。彼なら最高の演出とそこからの救いを用意できた。

彼としては物凄く不満な悪徳貴族ドネリー家滅亡だったからカレンを助けた。

その辺り事実を説明した。彼としては罪悪感があった。

この程度でドネリー家を滅ぼそうとしてごめんねと謝罪した。

この諸事情をカレンに確認したら何故か面倒臭くなった。

彼は邪神ではない。だが、カレンの中で彼はどう見ても邪神のようだった。

めぐみんはマナタイトを大変喜んでくれた。

しかし、彼の想定と違い中々マナタイトを使わなかった。

彼は聞いた。

「それはプレゼントだ。高価には違いないが使っても構わないのだが…」

彼にしては珍しく言い切れない。

彼は女神エリスでの失敗を心から恐れていた。

何気に女神エリスは彼の心からのプレゼントを完全に否定したから彼は怖かった。

「…デストロイヤーがアクセルに來たり、魔王軍幹部が居たりしない

限り使いません」

めぐみんへのプレゼントは、彼の計画の使い道になってしまった。

彼は自分の機微のなさを悔やんだ。

年頃の少女が喜びそうなもの等彼には分らなかった。

…だが、どうも紅魔族全体の感性が、彼の前世で見た狂人共と同じようなものを欲するのが薄々わかってきた。

紅魔族は、恐らくだが、厨二病の合理主義者だ。

彼の前世、爆破シリーズの対象になった話の通じない意味わからぬ自称邪教徒共と感性が似ていた。

…紅魔族は悪ではないので彼の爆破の対象外、つまりセーフだ。彼は凄くホツとした。

めぐみんは彼がこのことを考えていたら、何か悟ったのか警戒していた。

別に紅魔族を滅ぼそうだななんて思っていないから安心して欲しいと彼はめぐみんに笑いかけた。

…彼はめぐみんに杖でぶん殴られた。

紅魔族は『養殖』という効率的レベルアップ法だけでない。

トルネードとクリエイト・ウォーターを使用した洗濯法等、生活に魔法を取り入れていた。

ここは彼と似ている思考形態だった。

彼も紅魔族の立場なら同じようなことをした。

…だが、安楽少女の人工栽培等はやっていないようだった。

彼は紅魔族が何故それをしないのかわからなかった。

アレは完全にただの邪悪なのに利用しないなんて勿体ないと言ったら、めぐみんはドン引きした。

彼からしても、安楽少女の正体を知らないなら知らないで良いかとその反応を否定はしなかった。

.....

???(バニル戦三日前)

「この邪悪な存在を私に近づけるな！馬鹿じゃねえのお前!!」

言葉が通じないどころか、ただの外道じゃねえかこいつ!!」

彼が安楽王女討伐に悩んでいた際に、ドネリー家にて聞き取り調査を行った安楽少女の言葉だ。

安楽少女は中々鋭い。狡猾な生き物だった。

彼が言葉を発する毎にあれこれ言い方を変えて儂げな美少女を演じるのだ。

だが、彼ではなくカレンを罵倒し始めた。

彼はモンスター討伐欄に安楽少女を残すわけにいかなかった。

アクアは安楽少女に性癖を持っているようだったからだ。

意味もない殺生を彼は望まない。

彼は実に優しいだろうと安楽少女に笑みを浮かべ、カレンに処分して貰った。

彼は悪魔以上の悪魔、外道だ。彼に意図せず逆鱗に触れた安楽少女は即死した。

彼に心無い魅了を行うことは死を意味する。彼は洞察力の化け物だ。

本当に、バニルぐらいでないと誤魔化せない。

資料そのものの捏造からの専門家不在の状況を生み出さないと彼に心理戦で勝てない。

…幸運の女神エリスは本当に奇跡を連発していた。

.....

11月27日13時頃（自宅）

彼は、ダクネスの正体は知っていた。

だが、彼を強制的に連れられる際に、ダステイネス家の名前が使用された。

彼は激怒した。ダクネスが望まぬタイミングで名前を出された。

彼としては全力でダクネスを揶揄う手段だった。

しかし、本当に気まずい雰囲気でダステイネス家の名前を彼に出して来た。

彼はクレアに対して宣戦布告を本気で行った。

これで善人でなかったらお茶目で済まさないと決意した。

第十四話 人類最強戦力との決闘と魔王軍最前基地 爆破

12月5日13時 ベルゼルグ王城内待機室

彼は蛮族国家ベルゼルグ王国の王都に招かれてご満悦だ。

3日前に警察のお偉いさんと取引できたし、その他諸々ともお話済みだった。

だから、安心してこれから行われる彼のパーティーを純粋に楽しみにしていた。

前世のように密室からの水責めでない。彼を殺すための罠がない。彼がコンクリートに酸をぶちまけて炭酸カルシウムと反応させて水素爆発を起こさなくて良い。

部分的な破壊からの水圧差による密室破壊をしなくて良かった。

しかし、彼はクレアに正直ガツカリさせられた。

毒感知をくぐり抜ける禁制の毒薬を剣に仕込んだり、嘘発見器を警察から拝借したり、暗殺を貴族に根回ししたりする程度だった。

二日もあれば彼を誘い込み連日テロくらい前世の連中は平然とやった。

彼一人を殺すために街諸共滅ぼそうとしたことなど数えきれない。

やはり、この世界の人々は汚い手が足りないと思った。

彼はクレアに喧嘩を売りに来たのだ。

：別に国に喧嘩を売るつもりはまだこの時はなかった。

彼は悪魔以上の悪魔。外道だった。

クレアが何しようとしても彼は詰みに持っていった。

毒対策はアクアが居れば十分だ。どんな劇薬でもリザレクションあれば良い。

それ以外も対策済みだ。

アクアが居ないところで切られたら懐から薬で中和する。

クレアから冥土の土産を聞き出して逮捕だ。

これから行われるかもしれないシンフォニア家の御令嬢逮捕も魔王軍の陰謀らしい。

何と、ドツペルゲンガーが王都に潜入しているかもしれないという話になった。

こんなか弱い民衆が入る中での野蛮な潜入工作、魔王軍は断じて許せない。彼は激怒した。

善意ある彼がシンフォニア家の恥の仇を討とうと断言した。

取引先の警察のお偉いさんも冷や汗と引き攣った笑みで彼のこの意見に心から同意してくれた。

嘘発見器で不敬罪に持っていこうとしても無駄だ。

彼は普段から基本的に本当のことしか話さない。

嘘ではなく心から言うことが信頼関係構築の基本だと知っていた。

クレアは遠回しに貴族に根回ししたが、無駄だ。

この世界で見てきた貴族の中では根回しの速度が速いが、クレアはご丁寧過ぎた。

もう既にそいつら全員彼が脅：協力者になった。

女神エリスもお認めになるだろうくらい丁寧な内容でそれぞれの弱みをチラつかせている。

彼は善人の貴族も支配できたことをクレアに感謝した。

例えその貴族たちが禁制の劇薬を政争に使おうが、彼が善人と判断したら善人だ。

彼は無敵のおもちやを手に入れていた。彼を止められる者はこの国に不在だった。

クレアのお陰で彼は覚悟が決まったので滅茶苦茶を敢行できた。

彼は自分を始末する気満々のクレアに感謝した。

なので、許してやらなくもないと彼は完全に上から目線でクレアを許した。

彼は奥の手を手に入れていた。

手に入れるのに前線で戦うこの国の王子との決闘を行う羽目になったのが些か危なかった。

.....

対魔王軍最前線（11月29日22時〜）

彼は王都でいたずらに使う許可書が欲しかった。：クレア対策だ。手に入れられないなら『道化』を演じて即座に前線から彼は撤退した。

彼はいたずらを受け入れられない王族ならば、裏からの王国支配に切り替えるつもりだった。

彼の手紙の真意を掴んだ洞察力の持ち主クレア。

王都を存分に活かした戦法を取るかも知れない。ないと思っただが念のためだ。

彼は自分の我儘から、仲間を守るための許可書が欲しかった。

彼はこれでも自重していた。仲間に迷惑かける行為は慎みたかった。

だが、宣戦布告してきたのはクレアだ。

彼は空気を読まない変態に割と真面目に激怒していた。

冬は休戦の時期があることを知っていた。
その前に魔王軍で実験してみたいことがあった。

それは乾燥した冬だからさらに可能な外道戦法だった。
魔王軍の前線基地が小さな城くらいの大きさがあること、大よその外観等を知れた。

彼は前世で自分を殺そうとした暗殺計画の一部をこの時、再現しようとしていた。

彼を殺したのは中々独創的な暗殺者だった。

この計画は事前に潰したが、一度会ってみたかった。

彼は自分を殺した暗殺者を高く評価していた。

彼のことを調べ尽くして、何度失敗しても諦めなかったことに敬意を評していた。

彼の知っている暗殺者を辞めたがっていた者が、その才能を存分に活かしたような暗殺計画だった。

彼の最低限の礼節は前線にいる人類にも届いていた。

彼はアポイントメント無しに行くわけだから王族の気に障られても仕方がないが最低限の人員は送り込んでいた。

だから最悪、彼個人の無礼討ちで済むと確信できた。

死体も丁重にアクアに送り返してくれると断言できた。

最も、それでベルゼルグ王国は甘いとも判断できたし、度量があるとも判断できた。

クレアは本当に余計な真似をしてくれたと彼は内心複雑だった。
姫様を見た方が早いし、確実だった。

だが、彼に宣戦布告してきた以上、その手が使えなくなった。

彼の言う安いプライドは凄まじく高い。必要なければ命懸ける程

度にはあつた。

彼はダクネスが望んだら、公開羞恥プレイを敢行した。

アクセル中にララティーナお嬢様と呼ばせる計画だった。

どうせ、彼がいなくてもあれではバレた。彼は断言できた。

ダクネスは世間知らずのお嬢様も良いところだった。性癖も絶対バレた。

だから、演説などという遠回しなやり方でめぐみやダクネスを受け入れる土壌を彼なりに作った。

：クリスは頑張っていたが、無理だ。幸運にも限度があつた。

それに女神の仕事がある以上光臨できないのを彼はアクアの情報から察していた。

転生後、数日で彼は神が全知全能ではないことを改めて悟つた。

彼が敬意を評するレベルの策謀の神、女神エリスすら不可能なくらいにはダクネスの被虐趣味は凄まじかつた。

だから、安全な方向へ着陸させようと彼は頑張っていた。

：あのタイミングのネタバレは彼もダクネスも望んでいなかった。

.....

彼がクレアに書いた手紙は嘘ではなかつた。

彼は基本的に人のためにしか動いていない。彼はそれに気が付かない。

ダストへの扱いはかなり酷かつたが、それ以上に見返りを用意する程度には彼は甘かつた。

：ダストの不幸は、彼の見返りをきちんと受け取れていないことだった。

ダストも流石に彼へ報酬をもう一度寄越せとは言えない。

大体、ダストの自業自得の結果だった。

彼が関係ないところでダストは更に儲けようとして失敗しまくっていた。

だから、いつも彼の言う小悪党を引き連れて金目の物を漁ってい

た。

：…こう見えても、元ドラゴンナイトのライン・シェイカー。

今はダストと名乗っているが、貴族や女性が噂するような騎士の鑑的な側面も無くはなかった。

ダスト的に見てアウトなら非常識の塊である彼に意見したし、逆らう程度には良識があった。

彼もダストのその側面を知っているからダストにあれこれ相談していた。

彼は自分が人間性に欠けることを知っていた。

ダストの意見を聞いて自分の計画を微訂正するくらいには信頼していた。

彼はダストの過去を大よそ把握しているし、ダストも彼の闇の深さを何となく察していた。

彼もダストも気が付いていないが、二人とも根は似ていた。

なお、この事実を指摘したら、彼もダストもお互いに全力で拒否する。

めぐみんやダクネスが不思議がるくらいには客観的に見て彼とダ

ストは仲が良かった。

そして、アクアは気が付いていない。

前世の彼を知っていたらこの驚愕の事実にあくアはまだ気が付かない。

彼の教育の成果でアクアの人間観はやや変わった。

だが、まだ彼という規格外を把握するにはアクアは知性が足りなかった。

何より彼は神に祈らない。

：だから、女神であるアクアではまだ彼を知れなかった。

自身の信者ならまだアクアの対応は違った。

地獄の公爵バニルはその辺りをきちんと指摘してあげた。

理解せずに送った駄女神と遠回しに罵倒した。

仲間に察せない程度、アクアにのみ伝わる言い方をバニルは彼の記憶を読み解き把握した。

この発言には、アクアは悪魔であるバニルに激怒した。

しかし、宿敵であるはずの悪魔との取引にアクアは応じた。

：そこにある感情を言葉にできれば、彼は壊れた超人ではなく人間になれた。

もう少しで彼は救われた。彼には幸運が足りなかった。

しかし、彼には運命に抗う意思と凄まじい才能があった。

何よりこの世界でアクアの世話という理不尽から学んだ切り替えの早さがあった。

彼の前世と今世での学びは決して無駄ではなかった。

：この時の彼はまだ気が付けない。

女神は彼の思うような単純な存在ではなく、複雑な存在でもない。

：規格外の才能を持つ人間に似ている存在だった。

アクアは彼が生前まともな形で出会えなかった『善』だ。

彼の不幸は前世では善人にすら諸事情で裏切られて来たし、出会えなかったことであつた。

.....

対魔王軍最前線 (11月29日22時10分)

彼は『ヴァーサスタイル・エンターテイナー』により、変装がいくらでも可能だった。

：アクアも使える芸達者になれる魔法だ。

彼の持っていた前世の変装技術と遜色なく使えた。

この世界の魔法、技術は彼の悪意を活かせば現代技術を余裕で上

回った。

ジャティス王子の話はアクセルにいても容易に手に入った。
ギリセーフと彼は判断した。

ジャティス王子は魔王軍の前線で活躍する勇者候補すら余裕で撃退するチートだ。

どうみても名前が日本名の者達が多数いる前線で大活躍し、チート能力を存分に活かしていた。

彼はもう少し隠せとチート能力者に言いたかったが、目立ちたくないと言わなかった。

彼はこのいたずら一つで最悪、国に喧嘩売っても良いと思っていた。

仲間に被害が出なければセーフだ。ダステイネス家に迷惑は彼的には懸けない。

：ここまでやりつつも、別に許可書を使うことはないこの時点では思っていた。

ベルゼルグ王国の能力を見極めたかったが、別に姫と会うという選択肢でなくとも良かった。

彼は王様か王子に取引を持ち掛けに来た。彼の発想の斜め上具合は前世から変わらない。

彼は空気を読まないことに懸けて天才だった。だから、彼の自称宿敵は何度も彼に負けた。

彼は魔術師でもない戦士でもなければマッドサイエンティストでも宇宙人の子孫でもなかった。

彼は言い方を悪くすればただの頭でっかちだ。

：彼の発想力に宇宙世界最強の邪神は負け続けた。

話は人類の最前線近くに戻る。

彼の部下にはテレポト持ちが数人いた。その者を現在待機させていた。

彼はいつでも逃げるだけなら容易かった。

部下達には魔王軍にあらゆる破壊工作や情報戦のため、様々な任務に従事して貰っていた。

彼の部下に紅魔族はいない。そして、日本人チート能力者もいない。

彼は引きこもり過ぎる紅魔族の現状を嘆いた。

そして、彼の想定する最大の切り札に成り得る隠れ潜む日本人がいないことを嘆いた。

チート能力者達は彼からすれば簡単にわかってしまった。

異世界に来て忍者する連中はいた。

忍者達に協力体制を彼は求めたかったが無理だった。

そもそも忍者達は彼に勘付かれる時点で、魔王軍との戦いをややりで楽しんでいた。

バトルジャンキーだった。彼の求める本物の忍ではなかった。

彼は生前そういう狂人共を相手にしてきた。

彼は大体軍人に依頼し、空爆や爆弾で対処した。

彼は空気を読めないと敵味方から非難された。

：彼と同じ思考をする日本人は本気で隠れ潜む可能性が高かった。

彼は敵にそういう戦力がいないかと内心少しだけ恐怖した。

暗殺の魔の手を警戒した。：どうやら、彼の想定していた暗殺者がいないようだった。

いくら彼の幸運値が神器による補正があったとしてもエンカウントしないのはおかしいと彼は思った。

彼はこの時、魔王軍が自分の想定より遥かに弱いのではないかと考

えてしまった。

慢心してはいけないと彼は自分に言い聞かせた。

最低数百年間チート勇者たちと互角以上に渡り合い、ノイズの研究者等偉人もいた。

何より、地獄の公爵バニルが魔王軍幹部なのだ。

デッドリーポイズンスライムも彼からすれば討伐容易だが、アクアが居なければ脅威だ。

：魔王軍が前世の敵以下だという想定を彼は断じて認めなかった。アクアのチートさに彼は感謝した。

彼はまだ教育に悪いが、我儘一つくらいは聞くべきかと考えた。

彼は大概、アクアに甘かった。

彼の内心を読み取ったバニルが、アクアへの取引というよりも途中から愚痴になってきた程度には甘かった。

あの戦いで大体彼のことをバニルは察した。

彼の抵抗が強く彼の全て読み取れたわけではないが、十分過ぎた。乗っ取ったバニルからしても、彼は大変面倒臭かった。

：バニルは彼を狂人と評した。彼が悪魔に近い感性なのは共感を覚えた。

だが、彼は人間過ぎた。悪魔にはなれないとバニルは理解した。

アクアの件がなければバニルは真面目に彼の悪魔化を考えていた。

この考えは彼が悪魔と神の天敵だと理解し、放棄した。頼まれたとしてもやりたくない。

彼は部下から報告を聞いた。

そして、ジャティス王子との面会前に彼の質問に答えて貰った。

部下曰く、紅魔族は魔王軍前線にはピクニック気分に参加するといふ話だ。

紅魔族は嫌がらせに魔王城の結界に魔法を連発して帰ったりする

らしい。

紅魔族は王命で呼び出さない限り出てこない。普段は、紅魔族の村で生活しているらしい。

彼的にめぐみんやゆんゆんのことがあるので利用したくない。

しかし、人類最高峰の改造人間について彼は知りたかった。

報告を受けた紅魔族の合理的思考は、大体彼の思考と似ていた。

魔王軍への嫌がらせに特化し、攻めてくるときはホームグラウンドで迎え撃つ。

彼は紅魔族というのは中々話がわかると連中だと喜んだ。

部下は苦虫潰したような顔で彼を見たが無視した。

どうもこの部下は生真面目過ぎた。

彼的には別に部下じゃなくて協力者や最悪下っ端扱いでも良かった。

何故か、彼は下っ端も協力者も断られた。

彼は忠誠を誓われた以上は彼ら部下達を無下にしなかった。

魔王討伐迄は裏からの侵略を行ってもらうつもりだった。

最大限彼なりのやり方に従うことになる部下という在り方を好まなかった。

支配や従属は、前世でもやらなかったやり方だ。だから、彼はやや困っていた。

彼は表向き高名な部下達を引き連れ、ジャティス王子の目の前に潜伏から現れてみた。

「初めましてこんばんは。私は魔王軍幹部二名を滅ぼしてきた一介の冒険者です。

…さて、今人類が冬を越すためにお困りの魔王軍。

それを私、個人で魔王軍を追っ払ったら、

王都に無理やり連れて行かれる私の仲間を守るために色々できる許可書頂けないでしょうか？」

彼は、初対面のジャティス王子に全力で戯言をほざいてみた。

最も近くに何うかも知れませんが、対魔王軍の、人類の最前線に報告していた。

最前線にはベルゼルグ王国の王族が常に控えていた。

彼は正直、戦争という場でベルゼルグ王国を陥りたくなかった。

大体、報告に関しても、こんなに早いのは彼も想定外だ。

当たり前だが、彼なりの社交辞令だった。

彼は流石に王様には会えなかった。警戒が激しかった。

潜伏対策もキチンとしていた。

突然、現れた彼による暗殺を警戒していた。彼からすれば当然過ぎた。

そして、ベルゼルグ王国に正面から喧嘩売ったら彼個人では勝てないという悟った。

やはり、前世の自称神より魔王軍は脅威だと彼は再認識した。

彼が、というよりも仲間達が魔王軍幹部二人を討伐していることを

ジャティス王子は知っていた。

戯言をほざく彼の話を聞いてくれた。

彼は事前情報通りの脳筋に感謝した。

強者と書いて友と呼ぶ連中だと彼は予測していた。

だが、彼の話を聞いていたジャティス王子は突然、彼を見極めると決闘を申し込んできた。

彼の想定外が起きてしまった。

冒険者である自分と戦っても名が廃るだけと思った。

しかし、彼は王子に決闘を申し込まれたから承った。

彼なりの王子への謝罪だった。

彼はこの話を聞いてくれただけでも王子に感謝したかった。

流石に無理やり過ぎたと彼はかなり反省していた。

結論だけ先に言えば、彼は魔王軍用の奇襲道具を活用し、ギリギリでジャティス王子に勝った。

奥の手は数枚切ったが彼はまだ余裕だった。

ジャティス王子曰く、彼が勝たなくても別に良いらしかった。

この王子の行為は意図せず彼の安いプライドを刺激した。

彼は人類最高峰の実力者を見極めるために、計画遂行のためにある程度全力で戦ってみた。

日本人のチート持ちが回復役に待機していた。

彼も知らない消音というチート能力を持つ盗賊だった。

彼に似た発想をするチート能力者だった。

彼もチート一覧表にそれがあれば選んだかもしれない程度には糞チートだった。

彼が用いれば暗殺し放題だ。彼はその能力をそう活かしているのか聞いてみた。

彼は転生者に決闘に集中しろと窘められた。その通りなので、彼は聞くことを辞めた。

顔をバラしたくないという彼の我儘を王子は聞いてくれた。

だから、彼は素性を隠して決闘を行えた。

ジャティス王子は世界のスキル外の技まで使ってきた。

数々の勇者の血を取り込んできたベルゼルグ王国の王族は、伊達で

なかった。

彼の戦闘経験値と搦手、トラップすら平然と突破した。

ジャティス王子に死なない程度は、無理ゲーだと彼は悟った。

彼は距離を取り、アクセルに住む仕立て屋に依頼した手袋を装着した。

耐火加工した手袋の甲に鍛冶スキルで加工した極小のManaタイトを拳の頭に4か所仕込んである。

拳が当たれば爆発とともに肉が抉れる。あつという間に痛みで気絶だ。

彼はヴァーサタイル・エンターテイナーを用いたマジックによる視線誘導からの潜伏で軽く拳を当ててみた。

彼の拳は殺気がないので、ジャティス王子はかわせなかった。

きちんと彼の想定通りに爆発したが、ジャティス王子の肉体は固すぎた。

彼はジャティス王子が前世の暗器が効かないチートだと呟いた。

彼は、今度はまたも距離を取った。

ジャティス王子は初めて見る暗器に一瞬怯んだからできた。

魔法使い御用達の吸魔石とManaタイトで加工した杭を使用した。

鍛冶スキルやその他のスキルにより杭を作った。

吸魔石を先端に取り付け、魔力を通す杭だ。

魔法をぶち込めば、杭の加速力にパワーが加わる。

彼は中級魔法によって一部地面を崩壊させた。

日本人チート能力者の消音はチート過ぎた。

彼はこれがなければこの一手を打てなかった。

この杭の致命的な欠点は音が大きすぎることだった。

吸魔石は限界以上に魔力を吸うと爆発する。

彼の杭はManaタイトで連鎖反応を起こし、二段階の衝撃を可能にし

ていた。

連続していた爆音は普通の魔法や奇襲で使えなかった。

彼は追い詰められた時の奥の手、足止めの手段として小さい杭しか持ち歩けていない。

これが魔王軍幹部のマッドサイエンティストにバレると戦争の概念が変わりかねない。

地盤沈下や地形変化、山や洞窟を利用した土木工事により拠点が簡単に出来てしまう。

ダイナマイトより広範囲の爆破は無理だが、貫通力が彼からすれば不味かった。

何よりこの杭の衝撃音は小さい杭でも、爆裂魔法でないと音を誤魔化せなかった。

：本来はアクセル南方に生息するクローンズヒュドラをめぐみん単騎で討伐させるための道具だった。

彼の計算上、めぐみんの魔法扱いの威力になる。

爆裂魔法を湖の水を含む緩んだ地盤の一点にぶち込めば、湖毎クローンズヒュドラを始末できた。

杭の完成品は精々十メートルだ。今回持ってきたのは数十センチ。それだけでも、一人足止めできるくらいの破壊力を彼の計算通りに

発揮した。

本来の完成品に、めぐみんの爆裂魔法があれば、全長30m以上の巨大な杭を凄まじいパワーで打ち込む巨大なハンマーを振り下ろす並みの暴挙が可能だった。

彼の計算上、東京の湾岸地帯を理論上は沈められた。

彼はこの世界の道具の脅威とそれを活かせる自分の才能が怖かった。

自身の消滅を計画に組み込むくらいには怖かった。

完全にジャティス王子の足を止めたので、詰みなはずだった。

だが、思わぬ攻撃がジャティス王子から来た。

彼が知っている忌々しき技だ。

スキルが存在するこの世界でお目にかかると思っていなかった技だった。

姿勢を崩した状態から、ジャティス王子は諦めずに剣の刃を握った。

ロングソードは日本刀などと違い刃に切れ味はなく握ることができきる。

最も、いくらロングソードの刃にあまり切れ味がなくとも、少し誤れば衝撃で自分の手に刃が食い込む可能性もある。

この技を実戦で使えるのは、ロングソードの扱いに長けていてかつ頭のおかしい者だけだと彼は知っている。

彼はその状態からの必殺技を知っていた。

前世で出会った味方から敵になった自称姫君の得意技『殺撃』だった。

完全武装、全身鎧すら無慈悲に殺戮できる頭のおかしい技だ。

ベルゼルグ王国の王族はスーパー蛮族だった。完全に彼を殺しにかかっていた。

どこぞの二流勇者も見習ってほしいと彼は敬意を言葉にした。

剣は打撃武器、一撃必殺と抜かす先制至上主義者の野蛮な姫君に感謝した。

彼はこの技の弱点を知っていた。

アクセル街の平均的な冒険者でさえ理論上はアダマタイトの鎧を砕きかねないこの技を彼は対策済みだった。

剣の重心が移動し、重量的に斧の打撃力になる。強力無比な技だ。先ず現在の彼の状態、素手では勝てない。

だが、彼は対策済みだった。

この殺撃の弱点、まず動作が遅い。
不慣れだと、カウンター技をもろに食らう。

…そして、洗練されれば無慈悲な殺戮兵器と化す。
彼はその凄まじさを目撃していた。

圧倒的力の嵐だ。正攻法では絶対勝てない。

足場を爆破しても、遠心力を利用して剣の勢いで宙を舞う。

彼は空気の渦を肌で感じ取った。

殺戮の嵐の中で彼は不覚にも美しく舞う戦姫に魅了されかけた。

彼女は例え、銃弾の嵐だろうが有効射程圏内にまで余裕で接近してきた。

ロングソードは固いし、厚いので防弾として機能する。

理論武装が凄すぎて、戦士でも剣士でもない彼は反論できなかつた。

姫君は頭の良い美人だと彼が皮肉ったらそのまま受け止めて大変喜んでいた。

彼は気持ちを切り替えた。もうコンマ一秒も時間がなかった。

現状だと、彼がジャティス王子に接近したので遅さは致命的ではない。

今のジャティス王子の状態はロングソード殺撃術のすくい上げだ。
ロングソードの切り上げに近い技だ。

現状の王子が使う、ロングソードの用法として最適解だった。

あの自称姫君を知らなければ、一方的に彼は死んだ。

彼は戦士などではないが、ロングソードの危険性は知っていた。

ジャティス王子の問題は、足元が不安定な状況にあることだった。

彼は身をできるだけ低くし、殺撃を掻い潜った。

凄まじい轟音と風が彼の上を通過した。

だが、当たらなければ無意味だった。

彼はその体勢から、右手を通して、ジャティス王子の首の辺りをつかんだ。

左手は王子の右足を外側から抱え込んだ。

彼は、右手で体を前に引き下ろしつつ、左手で足を持ち上げて、遠心力で投げ飛ばした。

盛大にカラぶった、足に力がないジャティス王子の隙を完璧に彼は捉えた。

彼とジャティス王子、一人の転生者と誰かが見守る決闘は終わった。

彼の小細工はほぼジャティス王子に通用しなかったが、隙は作れた。

彼の転生前の経験が、戦闘で生きた。彼からすれば有り得ない事態だった。

彼がロングソードで何ができるのか知らないとジャティス王子に勝てなかった。

彼もベルゼルグ王国の王族がロングソード使いという情報がなければ無理ゲーも良いところだった。

彼は勝利を無邪気に喜んで、ジャティス王子は快活に笑いだした。

彼はバトルジャンキーじゃない。慌てて謝罪したが、ジャティス王子は許してくれた。

彼はこの戦闘狂は嫌いではなかった。

彼は国を乗っ取るのは辞めようかとも思った。

しかし、ベルゼルグ王国は悪徳貴族に蝕まれている。

国教の神である女神エリスが義賊稼業をする程度には彼から見ても酷かった。

ベルゼルグ王国で控えているアイリス王女と首脳陣を見極めないと彼は行けなくなった。

ジャティス王子は騎士の鑑だった。

彼が二度目に戦ったら、今度は番外戦術でしか勝てない。

今回は割と正攻法で勝てたが、この王子の単体の戦闘センスはヤバい。

彼は戦士ではない。ただの冒険者だ。

単純にベルゼルグ王国の王族にステータスが追い付かない。

彼は悔いた。そして謝罪した。二度目は恐らくないと彼は敢えて断言した。

まだ、流石に死ねないと彼は敢えて口に出した。

この謝罪は彼から見て、戦争で先陣を切る王族を侮辱していたと思っただ。

騎士ならば再戦を望むと思っただし、何より彼からすれば偶然勝てたようなものだった。

彼は戦略兵器を多数用意していたが、それは個人には使えなかった。

だから、本当に負けるかも知れない決闘だった。

彼の現代知識を総動員しても、対個人ではベルゼルグ王国の王族には届かなかった。

なお、彼は魔王には容赦しない。個人に対して戦略兵器も平然と使う。

それくらいしないと魔王に勝てないと彼は思っていた。

だが、ジャティス王子は彼の突然の無礼に対して、一瞬戸惑ったかと思うとまた笑い始めた。

彼には、意味がわからない。彼の謝罪は戦闘狂の琴線に響いたらしくかった。

彼にノリノリでジャティス王子はお手紙を書いてくれた。

これでベルゼルグ王国のジャティス王子の名の下に彼の行いは全て正当化される。

：ベルゼルグ王国は良い蛮族国家だと彼は認識した。少なくともトップは、だ。

肝心の内政面の見極めが必要不可欠となった。

彼は全力で煽ることを決意した。何、お姫様ならセーフだ。

ジャティス王子が許可した。彼はやる。

王子は善人で気前の良い性格だったが、彼の取引に応じないこともあり得た。

決闘で取引成立とは、流石野蛮な国の王子だった。

彼はジャティス王子に野蛮人と平然と宣って、直ぐ近くにいた転生者を戦々恐々させた。

転生者はジャティス王子は寛大なのは知っている。

同胞である日本人はお世辞にも礼儀に長けていると言えない。

それでも気さくに王子は対応してくれていた。

：どうみてもこの世界の礼儀作法が完璧な彼の場合は別だと転生者は思った。

転生者は外見と見合わないが、意外とこの世界に滞在して長かった。

その能力を駆使して彼に悟られなくらいにはチートだった。

転生者は様々な戦場や世界を見てきていた。

その転生者をして目の前の存在は常識を破壊した。

冒険者でジャティス王子には絶対勝てないはずだった。

彼は死の嵐にすら笑みや称賛の言葉を述べる余裕があり、非常識に

立ち向かう転生者の理解外の存在だった。

更に、王都でテロって良いか等と彼は平然と王子に言い出したので、転生者は本気で自分の耳を疑った。

彼から見て、ジャティス王子の身体能力とそれを用いた技の数々は魔王軍幹部とほぼ変わらなかった。

ジャティス王子はチート過ぎた。

流石、ベルゼルグ王国の王族はエルロード国に『野蛮』と罵られるだけあると彼は褒めたたえた。

ジャティス王子は彼に何か言いたげだった。

彼は、野蛮は不味かったと漸く我に返って謝罪した。

遅すぎると隣の転生者に彼は突っ込まれた。

しかし、ジャティス王子曰く、それは気にしなくて良いらしい。

彼はホツとした。

：彼はホツとしてはいけなかった。

この時、彼はベルゼルグ王国への罵倒、『野蛮』というフレーズをエルロード国で知ったと暴露していた。

戦いもしない後方で金を出す国と正々堂々戦って力を示した彼ではかなり印象が違った。

勿論、ベルゼルグ王国としては感謝していたが、内心は別だった。

エルロード国の宰相ラグクラフトは彼の最初の想定通り魔王軍のスパイだ。

：宰相は彼の知らないところで、かなりベルゼルグ王国を罵倒していた。

彼は気が付けない。彼は客観視が欠けていた。

ジャティス王子と見ていた誰かからすれば、彼は自分で言うように戦士でない。

だが、策を弄しつつも、人類の最高戦力のジャティス王子に正面から挑みかかった『勇者』だった。

彼がこのことに気が付いていれば、エルロード国を全力で持ち上げ始めた。

金エルロードとカベルゼルグの同盟は彼に取ってももう固まっていた。

そういうものだと思っていた。

彼は魔王を倒した勇者には、褒美として王女を妻とする権利が与えられる古代の決まりを知ってはいたが、興味がなかった。

ただの昔の戦意向上のプロパガンダだと彼は思ったからそれ以降を調べていない。

この決まりは現在も有効だった。彼は本気で知らなかった。

彼はこのことを知っていたら、そのいたずらは避けた。

条約と国内法のどちらを優先するかは、現代ですら憲法で決められていた。

外と内どちらを優先させるかは現代でも国際法及び憲法学の討論のテーマだった。

古来よりの伝統が生きていたら、エルロードの同盟どころでなかった。

彼は第三の道を模索し始めないと行けなくなる運命がこの決闘で確定した。

彼のもう少し後に仕出かす、国への宣戦布告は、彼のいたずらに留まらなかった。

.....

対魔王軍最前線（11月30日0時頃）

ジャティス王子と別れた彼は、決闘を見ていた日本人転生者にチート持ちでないことを指摘された。

転生者であることは王子との決闘での会話でバレバレだった。

彼は暗器だの、チートだの発言を連発していた。

このままだといずれ類推でこの転生者に自分の正体がバレると彼は思った。

だが、前線で情報が不足している以上は彼的にギリギリセーフだった。

口止めもキチンと行った。彼の計画に狂いはない。

だから、見届け人に彼は言った。

「チート能力何てもものや超能力等に頼るのは、本来俺の在り方ではない。

全て、小細工だ。この世界の魔法とかスキルを応用と現代の経験を活かしたものでしかない。

人間の可能性の追求こそが前世の俺の全てだった」

彼なりに、知りたがりの転生者に本音をぶちまけた。

彼にはアクアがいる時点でこの主張は間違っていると思ったが、ギリセーフだ。

アクアは『もの』ではない。断じてあってはならない。

彼の転生チート扱いは、彼のスタンス的に本当はあつてはならない。

彼は非常識を認めない。前世では運命など抗ってきた。あるものだけでいくらでも死の状況を打開してきた。

だが、全て抗って最後はわかっていて受け入れた。

彼からしてもほぼ何も手に入れられない生だった。彼は全力で空振りし過ぎていた。

彼の手に入れた物はほとんど偽りだった。友情も愛も偽りだった。彼のそれは愛ではなかった。だが、彼はあの時、裏切り者に魅了されかけた。

そして、最後の希望だったはずの友情も偽りだった。

彼には愛も友情もどちらもないと絶望しかけた。

しかし、生きていたから立ち上がった。

何もかも偽りで失ったからこそ、彼の全ての原点を思い出したからもう一度抗うことを決意できた。

彼は、本当は自分が死にたかったのかも知れないと思った。

家族を失った時点で、親戚から餓死の運命という鳥籠に入れられかけた時点で、彼は正直詰んでいた。

だけど、知りたいから運命に抗ってみた。少年は彼に変貌したのだ。

彼は死への渴望よりも愛を知りたかった。

両親から愛を彼の中で納得できればそれで良かった。

遍く知的生命体は脳が欲する何かを満たすために生きていると自称邪神は言っていた。

欲望と資質はどこまでも人間を進化させると確かに神が言った。

足掻く姿こそ、人のあるべき姿だと断言した。

そのために悲劇を起こすと、かの自称邪神は宣った。

悲劇云々は戯言として扱いつつも彼はそれに同意した。

脳を満たすために、彼は愛を手に入れたいと邪神に言ってみた。

彼は本気で笑われたので、肥溜めに自称邪神をぶち込んだ。そして、いつもの如くブタ箱へ直送した。

お巡りさんがまたこいつかよと呆れていた。

彼的には何故このアホをいつまでもしまっておけないのか疑問でしかなかった。

どう考えても死刑連発ものをアレは何度も犯していた。

自称邪神と対峙する時だけは悪意が全力で活用できた。

あの銀髪は多分人間ではないから転生後と同様に悪意が行使できたと彼は類推していた。

彼の本当に欲しかった物は生前手に入った。…老人のお陰だ。

思いやりは遠回りながらも、両親の彼への『愛』の教えは最初からできていた。

彼は転生後歪みに歪んだ自分を認識したが、その事実で絶望に屈しなかった。

…本来にあの人生を満足してできたし、客観的に見て理不尽な死の運命を受け入れられた。

だから、本来二度目の生は彼の生き方に反する行いだった。

転生等論外、蘇生も彼からすれば邪道だった。

ふと、彼は転生前の空間で何故か転生するその前に嬉しさを感じたことを思い出した。

…彼には未だにその心がわからなかった。

彼の有り様に反してまでの物をアクアは伝えたかったのかもしれないと一瞬、思った。

アクアの日頃の行いからそれはないと判断した。

大体アクアにそこまで知性があれば彼の心配は最初から要らな

かった。

.....

対魔王軍最前線（11月30日22時頃）

昨日に続き、今日も彼は戦場に舞い戻る決意をした。

彼はリテイクと称してまた前線にレポートした。

彼は、まだ魔王軍の前線基地を爆破していなかった。

彼の奥の手を一つさらした。

自然現象と科学の融合だ。特定の気象条件及び密室なら可能だった。

冬に近い寒さ、つまり乾燥して火を起こしやすい状況だ。

そして、まだ戦闘が行われている。

もうすぐ休戦期間に入る以上はやっておかないと王子との約束を違えてしまう。

ジャティス王子の許可書を手に入れる取引と提示した最初の条件だった。

王子はもう決闘で確認は済んだからやらなくて良いと彼に言った。

それはそれ、これはこれときちんと彼なりに誠意を示してみた。

彼は律儀に個人で魔王軍に悪意を叩き込んだ。

アンデッドには潜伏スキルが効かない等彼はとつくの昔に知っていた。

だから、彼は泥にまみれ、闇に潜んだ。

潜伏スキルも併用した。彼は宴会芸スキルによる隠蔽工作への応用が可能だった。

芸達者になれるのはマジシャンに一時的になれることと同義だった。

彼の知る偉大なマジシャンはあの砂漠の狐すら騙しきった。

彼の個人の隠蔽等、マジックの応用で簡単にできた。

アンデッドであろうと彼に気が付けない。闇夜で暗視が平常運転だろうが無駄だ。

アーチャースキルの暗視と盗賊スキルとの併用の最強の暗殺者だ。彼は消音スキルの転生者が入ればさらに無敵だと確信した。

：潜伏スキルさえなければ勘の良い魔王軍の誰かが気が付いたかもしれない。

彼は魔王軍を高く評価していた。故に、隠蔽は全力だ。

眠る深夜の前線基地という名の居城に彼は燃料を投入した。

魔王軍の居城には水道まで通っていた。

魔法を使えば良いのに、魔王軍は何故か水道管まで引いていた。

古代ローマにも水道管は普通に存在する。

辺境の街にもこの世界では上下水道が完備されていた。

彼は文化遺失が軽微なこの世界の中世に喜びを隠せなかった。

多分、ここまで魔王軍は豊かと言いたいかと彼は思った。

前線基地にも水道が通ってます。貴様ら人間と違い、そんな暇すらある。

前線基地にあるから、水を求めて一旦撤退する必要がない。

水を作る魔力消費が抑えられた。この魔力消費が馬鹿にならない。彼はこの世界の水関係について詳しく調べていた。

無意識にアクアのことをチラついたのもあったと自覚しているくらいには知らべていた。

ベルゼルグ王国の王族すら冬は後方へ撤退した。
冬將軍という彼の琴線に響く精霊の存在もあった。

どうもチート過ぎるくらい強いらしい。

なお、この冬將軍、彼はバニル戦まではノリノリで倒す気でいた。
魔王戦でどこまで彼の個人技が通用するかの試金石として望んでいた。

：結果は、昨日判明した。彼の實力は、ジャティス王子に初見なら
通用するレベルだった。

恐らく彼のステータスは、これ以上はレベルアップでは上がらない
と彼は推測している。

知力は別だ。何故か彼の知力はぐんぐん上がる。

だが、彼の幸運値はレベル1から上昇しない。

彼は本当に幸運がなかったと自覚した。

だから、毎日の研鑽を彼は自分に課していた。

めぐみんの行う魔力上昇の瞑想や呼吸法を彼は独自に実践してい
たりする。

めぐみんが何かしていたので聞いたら、魔力を上昇可能なトレーニ
ングだった。

紅魔族しか効果ないかも知れないが、彼はめぐみん先生からやり方
を学んだ。

彼の食事だけ糞不味いドラゴン肉を食べたりして日頃から微妙な
能力値は延ばしていた。

本当に微量だが、毎日コツコツと彼はステータスを向上させてい
た。

チートがないので、努力するしか彼に道はなかった。

幸運は本当にどうしようもないので諦めた。

神器での補正がなかったら、もう本気で水爆コースだったと彼はホツとした。

女神エリスがいなければ、本当にこの世界がヤバかったと彼は確信した。

まさか、水爆まで女神エリスは読んでいたのかと彼は一瞬思った。

彼は女神エリスと会いたくなつた。

女神エリスなら悪魔に水爆擬きを使いかねないと彼は思った。有り得ないが、女神エリスは彼以上の策略家だ。

彼は、本気で確認したかった。

ベルディア討伐の際に金が入った。懸賞金の3億エリスだ。

彼はそれ以来、不味い上に値段も高い。

だけど、能力が微妙に上がるドラゴン肉等を定期的に摂取していた。

他三名は、ステータスに恵まれているので、彼だけ毎日不味い食事を食べている。

なるべく支出を抑えるように全力で彼は不味くて能力が上がる物を求めていた。

不味いという条件付きなら能力が上がる食材でもまだ安かった。

ちなみに、美味しくてステータスが上がりそうな食材は皆で食べていた。

そんなのはめつたに手に入らないが、割と無茶ぶりして月一で彼は仕入れていた。

ダクネスすら驚いたが、何か適当に誤魔化していたら納得した。

彼は貴族のお嬢様の反応をダクネスから学んだ。

彼は料理スキルを取得した。冒険者なら可能だとアクア達に相談して取得した。

アクアは喜んでいいる。彼の調理技術は前世から更に補正がかかった。

彼のはサバイバル技術に近い調理法だ。食えば良いを極めた調理法だった。

美味しいかどうかは微妙だった。

そんな彼の料理だが、アクアは文句言わずにキッチンと何でも食べた。

この辺は流石、女神だと彼は褒めた。本当に好き嫌いをアクアはしなかった。

狂人の彼の仲間なので彼が稀にアクアを女神と褒めてもセーフだった。

カエル肉は彼としても調理しやすい食材だ。

前世ではただで取れるたんぱく質としてほぼ毎日食べてすらいいた。勿論、そういう物を忌避する人種もいると彼は知っていた。

普通の人間は、カエルを捕まえて食ったりしないことくらいは空気の読めない彼でも察していた。

だから、好き嫌いしないアクアを素で褒めた。そして彼の称賛をアクアは素直に喜んだ。

その光景を目撃したためぐみんからそれはアクアを馬鹿にしているのかと彼は聞かれた。

彼がそれはどういう意味か聞いた。

めぐみんから何でもないと言われてしまった。

彼はめぐみんというザリガニから雑草まで食べていた。

だが、彼は余所の畑から盗んだりしない。

彼は調子に乗って黒歴史を暴露したためぐみんに常識を説いた。
めぐみんは物凄く複雑そうな顔をしていた。
何か不味いことを言ったのか彼は疑問だった。

どう考えても彼からすれば犯罪はアウトだ。

彼は畑から野菜を盗んだりしない。

：近所の猫たちと彼は幼い頃、生存競争を熾烈に争った。

ガチで彼の獲物を狙う猫を彼は嫌悪した。

だから、猫と他称されるちよむすけとは和睦したかった。

彼の気配はこの世界の猫に対して、恐怖と絶望を与えるらしい。

彼はこの国の猫は弛んでる等と戯れ言をほざいてみた。

彼はちよむすけの反応に対するシヨックを隠した。：彼は本当に
面倒臭かった。

めぐみんは彼の割りと理不尽な言い分にキレた。

ちよむすけへ近づかないように彼は、めぐみんから厳命された。

多分、ちよむすけは猫じゃないと彼は思っていた。

何か、彼の前世で感じた気配をちよむすけから感じるのだ。

だが、めぐみんに忠告を受けた彼は律儀にその旨に従った。

そして、ちよむすけに近づいて確かめられないので彼は確かめるの
を辞めた。

無害ならセーフと彼はスルーした。

邪神でも無害とは前世と色々違うのかと彼は思った。

なお、彼は料理スキル取得の際、スキルポイントの無駄遣いとダク
ネスに言われた。

彼はこの正論を無視した。

ドラゴン肉は本気で高い。そして不味い。

正直、料理スキルで調理しないと彼ですら食いたくなくなった。

彼はパツと見はわからないように偽造して不味い能力値上昇の食材を堂々と食べていた。

スキルポイントアップのポーションを何本か消費し宴会芸スキルなど個人的に彼は取得していた。

これ以上の強化は爆裂魔法とテレポートに使いたかった。

…これが馬鹿にならないくらいスキルポイントを消費する。

彼のステータスの伸び率では魔王に通用しないと思った。

魔王軍幹部に戦略兵器を使わないと彼は勝てないことが判明した。

彼の切り札の一つ、寿命を対価に能力が上昇する禁制の禁術の詰

まった水晶はアクアに没収されていた。

だから、魔王は確実に戦略兵器を使うことを彼は決意した。

彼は日常から殺伐とした現世に思考を戻した。

約束や取引は彼からは絶対違えない。

王子がしなくて良いと言っても彼は実行した。

そして、今回行う彼の行為は人類の利益にしかならなかった。

彼は魔王の前線基地に伸びる水道管から、無駄な足掻きは辞めて苦痛なく死ぬ。

魔王軍の無慈悲な宣告のように彼は感じた。

なお、彼ならばこういう意図を込めたからそう思っているだけだ。

情報戦としては生活レベルの差をアピールするのは有効だ。

戦意をこれでもかと挫いた。彼ですら何か負けた気がする。

…風呂に定期的に入りたいたとか抜かすアホがいれば話は別だった。

魔王の娘がいるらしい。彼はまさかと思った。

今回の戦争では撤退したという見方が強いらしい。

彼は思考を切り替えて魔王軍に対する爆破テロの準備をしていた。

彼は魔王軍の拠点へ延びる水道管から可燃液をぶち込んでいた。マナタイトで強化した初級魔法ウインドブレスにより強制的にポンプの性能を現代以上に強化した。

初級魔法のウインドブレスでないといけなかった。

中級のウインドカーテンは矢除けの魔法だ。

風を作り出すウインドブレスによる水道管の液体燃料の投入が必要だった。

送り込むだけでなく、破裂させる必要があった。

可燃液が水道管を伝い、脆いだろう蛇口及びその付近に可燃液を飛び散らせる。

魔王軍の居城は水び出しになったと彼ですら聞き取れた。

彼は少し離れて、水道管へ火矢を放った。

.....

魔王軍最前基地（12月1日1時頃）

火で包まれた密室を作り出した。

大慌てで魔王軍は脱出と消火を急いでいるが、彼は安全を確保しつつ邪魔した。

潜伏や狙撃、魔法で彼は魔王軍をガンガン混乱させた。宴会芸スキルで声真似をして人類の奇襲だと叫んだ。

彼は堂々と燃え上がる魔王軍の前線基地に潜入し、用意していた仕掛けを施した。

彼の偽装は完璧だ。混乱している状況では、人間と魔王軍は区別がつかなかった。

彼は戦争中に堂々と敵の食堂でランチ食べて帰って来たとか抜かす

アホを知っていた。

これくらい混乱させれば、幸運値の低い彼でも容易だった。

魔法軍は彼の計画通り、個人ではなく軍隊だと勘違いし逃げ始めた。

個人で軍隊に挑む馬鹿はいないと彼は思っていた。

なので、初見なら通じると彼は思っていた。

彼は全ての部屋の窓を閉め、空気を遮断し、密室を作った。

彼が仕掛け終わった際、逃げ遅れた女性兵士がいたので、共に脱出した。

彼に礼を述べていたが、それどころじやないと逃がした。

後方からの反応で探されまくっていたらしい。

重役の娘か何かかだったのかと彼は考えた。

：彼はこれから行う非道を内心一度だけ詫びた。

そして、時間が経過した。

一見鎮火したように見えたので魔王軍が様子を見に戻って来た。

建物の窓が火の熱でヒビが入った辺りだったので、彼は魔王軍の拠点の窓へ狙撃した。

これに魔王軍を巻き込む計画だった。数瞬遅ければ拠点破壊しかなかった。

彼は幸運に感謝した。魔王軍への非道を彼は躊躇わなかった。

その瞬間、建物に空気がなだれ込んだ。

彼の計算通りにだ。

凶面から類推した建物を彼は計算していた。

実際見て確認した。彼の計画が可能な程度の密室は作り出せた。

不完全燃焼を起こすように彼は仕込んでいた。

これが彼の罠だった。そして、彼を暗殺しようとした技術だった。

不完全燃焼で燻る火種に一気に酸素が供給されると、炎は爆発的に蘇る。

バックドラフトだ。彼は爆裂魔法並みの内部爆発を科学と自然現象で生み出せた。

彼は、大爆発で吹き飛んだ魔王軍最前基地を眺め、人類側へ帰還した。

彼は人類拠点で適当に挨拶だけして、部下のテレポートでアクセルに帰還した。

まだ、彼の結果は人類には届いていなかったが、彼は王都に向かう日なので反応を知らなかった。

彼は本当に個人で魔王軍を壊滅させた。

兵士しかいない前線での彼の実験は、魔王軍に撤退を決意させるには十分だった。

彼の行為は魔王軍を恐怖のどん底に叩き落とし、人類戦力の温存を齎した。

彼の行為は取引通り隠蔽された。人類側の記憶は魔王軍の火事として処理された。

彼の行為は証拠一つ残らなかった。彼はそこまで計算していた。燃えれば何が起こったのか類推すら不可能な状況を彼は作り上げた。

彼の計画は完璧だった。

ただ、一人の目撃者を除いて。

彼女はただの兵士や重役の娘ではなかった。

この時、彼は魔王の娘の存在を素で忘れていた。

第十五話 シンフォニア家の『恥』牢屋直送事件

11月18日14時 ベルゼルグ王城

彼は知らない。アイリス王女の誘いを断る冒険者は今までいなかった。

彼なら普通に断る。何よりも情報漏洩を恐れた。だが、それをした者がいなかった。

あつても本当に不味い状況で、後日に謁見するというのはあつた。冒険話を聞きたがるお姫様に面会できるなら即座に話をしに行く勇者候補は多い。女性の転生者でも話に行つた。

実際、アイリス姫は見目麗しく、名誉や利益以外でもサブカルチャーに汚染された日本の若者達はもちろん、この世界の冒険者さえ魅了された。

ミツルギキョウヤくらいだ。ミツルギはアイリス王女に下心無しに近づいたイケメン勇者だった。クレアもこの点は高く評価していた。

だが、アイリス王女の誘いを彼は完全に断つた。

手紙では丁寧な文体で申し訳なさが滲み出ているように感じた。

レインは素直に受け止めた。他の騎士団等も似たような反応だった。

しかし、アイリス姫は彼の真意を何となくわかつた。

そして、クレアは彼の真意を変態の洞察力で察した。

冒険者とは思えないかなり上位の貴族を思わせる気品に満ちた手

紙だった。

…彼はアイリス王女に会うのを本気で拒否してきた。

『私は魔王を討伐しないといけないのです。申し訳ありませんが、時間がありません。』

：変態や狂人で有名な最弱の冒険者を見たいとかアイリス王女は暇なのでしょうか？

これ私のステータスです。酷いでしょうか？ 仲間の魔法使いにすら筋力で負けます。

早めに魔王討伐します。全てが終わったら仲間達がきつと会いに行きます。

楽しみに待っていてください。楽しい愉快なお話が聞けることだと思います。

それまではお誘い有難いのですが、ミツルギキョウヤ等と仲良くしてあげてください』

アイリス王女が感じた彼の手紙の中身はこうだった。

クレアは本気で彼の真意のみを汲み取ったので気が付けない。

純粋なアイリス姫は彼のサディズム溢れる真意を汲み取れなかった。

だから気が付けた。

教養ある丁寧な文章に隠された彼の焦りを察せた。

そして、どこかアイリス王女を心配していた。

彼については貧弱なステータス以外何も書かれていなかった。

なお、長々しい手紙で仲間へべた褒めしていた。

だが、具体的な魔法や能力は書いてない。仲間のアークプリーストに至っては名前を書いていなかった。

彼的に魔王軍に漏れると不味いからだ。

それでも彼は詩的な表現で緊迫感溢れる戦いを書いて寄越した。

王都に行けない代わりにと小説仕立てで書いてみた。

彼は仲間の活躍を本気で盛った。

魔王軍幹部を倒したという一報は、ベルゼルグ王国だけでなく世界を震撼させた。

冒険者登録わずか三週間、パーティー4人の結成2日目で魔王軍幹部ベルディアとその配下を全滅させた。

彼の計画はここで大幅な修正を加えられた。

彼の印象操作はこの世界では化け物だったので計画に戻すことができていた。

ダステイネス家のララティーナ、紅魔族のアークウィザードとアークプリーストが大活躍をしたという評判で王都ですら話題で持ち切りだった。

アイリス姫はこれまで色んな冒険者達をわざわざ呼ぶ程、冒険や英雄の話が大好きだった。

アイリス姫は気が付いた。

彼の話は卑怯な罠で嵌め殺したという話しか広がっていなかった。

誰かに『彼』の情報が意図的に遮断されていると気が付けた。

手紙から推測できた。：彼はアクアのアホがうつっていた。

これは前世の彼なら絶対しないミスだった。

彼は自分を卑下し過ぎて、11歳のお姫様に勘付かれた。

最も、バイアスから気が付けないはずだった。

有り得ない偶然が起こっていた。

彼とアイリス王女は一つの点で一致していた。

彼の推測通り、アイリス王女は『孤独』だった。

周囲に満たされていながら、孤独だった。

.....

経済的に豊かな国であるほど、切実な問題となってくる傾向がある。

経済的・物質的に恵まれた人ほど、酷い『心のむなしさ』にさいな

まれている人の数が増える傾向がある。

20世紀のアメリカ心理学者のアブラハム・マズローはこれを『自己実現の欲求』と言い、彼は『孤独』と呼んだ。

アイリス王女は冒険話と英雄譚を好む、彼曰く野蛮な国のお姫様だった。

中世で孤独に苛まれる程、アイリス王女の人格形成は進んでいた。

そして、彼は孤独を超越した『自己超越者』だった。

マズローが言う、地球世界の人口のおよそ2%しかいない超人だった。

彼は三歳で自我形成を終えた理性の化け物だった。これは有り得ないことだった。

彼の精神力は凄まじかった。もはや神に近い精神を確立していた。

だが、『少年』から『彼』になった際、愛の欠落というのは致命的な欠陥だった。

彼は愛を知るといふ目的にのみ没頭する孤独の魔王の才能そのものだった。

彼は理性で才能を殺し、必要ならば即座に引き出すことが前世ではできていた。

彼は人間の善性を信じていた。彼は善人だったが、本当に不幸過ぎた。

彼の才能を知った善人達は悪を警戒し、彼を裏切ってしまった。

彼の心動かされた姫君もまた超人だった。目的のためには彼も殺せた。

彼はそれを悟っていたが、同類である姫君に無意識に依存しかけた。

故に、彼は仲間仲間を殺された。

彼はその後の行動を後悔してはいないが、仲間の仇を取れる瞬間に躊躇した。

彼は内心でこそ仲間の仇である姫君を檻樓糞に貶す。

だが、仲間の仇を取れない自分自身の弱さを悔いていた。

それは弱さではなかった。彼を指摘できる者はいなかった。

姫君はそんな彼の状態を理解していたが、放置してしまった。

彼の皮肉通り頭が良く、同じ超人が故にわかつてはいたが立場が歩み寄りを許さなかった。

その間に彼は自分の答えを見つけて死を受け入れた。

彼は愛を知れなかった。彼は孤独のまま死んだ。

だから、女神は彼の異常を指摘しようとした。

.....

11月18日14時 ベルゼルグ王城

これだけではなかった。

魔剣の勇者ミツルギは彼に一方的に叩きのめされ、三回負けたと言っていた。

一回だけなら何かの間違いを疑った。だが、三回負けたとミツルギは言い切った。

ミツルギの仲間達は嵌められたとミツルギを擁護した。しかし、魔剣の勇者ミツルギは完全に負けたと断言した。そして、修行が足りないことを悟ったので鍛えなおすと魔剣の勇者ミツルギはアイリス姫に挨拶をして去って行った。

クレアは大げさに言ったか、持ち前の知力を活かした口頭での論戦で負けた等と考えた。

クレアはアイリス王女の護衛の騎士だ。騎士として基礎的な戦闘は当然できた。

何よりシンフォニア家の、権力者だ。

クレアは冒険者ギルドに彼が書いて寄越したステータスが誤りがないか問い合わせられた。

彼の手紙に嘘はないと裏が取れたので、アイリス王女に断言できた。

返事の後には、異常なレベルアップをしていたが、ステータスは微増程度だった。

彼の書いて寄越したステータスはその辺の一般人と変わらなかった。

レベルアップしても同様だった。

知力が異常に高いくらいで幸運やや高い程度だった。

彼のステータスでは魔剣の勇者ミツルギには絶対勝てるわけがなかった。

魔剣グラムがある状態のミツルギとの決闘等滅茶苦茶過ぎた。

だから、アイリス姫は気になっていた。だが、アイリス姫は我儘を言わなかった。

彼を呼び寄せると言ったクレアの様子がおかしくても、もう一人の有名じゃない魔王軍幹部討伐という口実をクレアは持ってきていた。

なお、バニルはドマイナーも良いところな無害な魔王軍幹部だった。これはバニルの印象操作と努力の賜物だった。まず高位の冒険者じゃないと知らない。

しつかり目撃されまくっているのに、バニルが能力を活かせば王都で堂々と買い物できるくらいバニルの隠蔽は凄まじかった。

そんなバニルに対応できる時点で彼はヤバいが、この世界の住民達はそれに気が付けない。

アイリス王女は彼について気になっていたのでクレアの提案を了承した。

彼は非常識過ぎた。

.....

12月5日14時 ベルゼルグ王国王都謁見室

アイリス王女の内心なぞ知らない彼は空気を読まない。

計画を実行する狂人だった。

彼はアクアと奇妙な会話をした後、全力でアイリス王女とクレアがいる謁見室の扉に体当たりを敢行しぶち明けた。

「フハハハハ!!初めまして、アイリス第一王女様。

私は無礼な冒険者。道化師でございます」

彼は女神エリスへやったような優雅な仕草でお辞儀をした。

彼は全力で煽ってみた。アイリス王女とクレアだ。

クレアは余裕で引っかかった。

「アイリス様に何たる無礼!!死ね!!!」

クレアが全力で彼に切りかかって来た。

ダクネスが慌てて彼に駆けつけるが間に合うはずがない。彼は今の強化されたダクネスの防御力なら傷すら負わないと確信していた。

これは彼の喧嘩だった。彼は売られた喧嘩は必ず受けた。アクアに負けたのは本気でショックだった。

彼はクレアの行動を完全に予想していたので、平然と躲した。

それは完璧な動きだった。

クレアが怒りで大振りな動きだったとは言え、彼の動きは低ステータスの冒険者のものではなかった。

彼はステータス外の勘を身に着けていた。剣の間合いを把握していた。

彼のステータスに反映されない部分での成長スピードは尋常ではなかった。

剣の間合いを完全に見切り、カラぶった剣を足で踏みつけてクレアの手から剣を落とさせた。

クレアは信じられなかった。クレアからすれば完全に奇襲をしたつもりだった。

彼はステータスを無視した『強さ』をクレアに体験させていた。

この世界で体験し辛い戦闘を彼は前世世界で散々経験していた。大体は見えていただけだが、この世界に来て参考になった。

彼はこの世界で才能を活かしきっていた。

そして、彼は戯言をまくし立てた。計画通り、台本の役者を演じ切った。

「申し訳ありません。」

実は魔王軍のドッペルゲンガーが私を殺そうとしているという話がありました。

「犯人はわかりました。この方だったようです」
彼は嘘を言っていない。

だが、その魔王軍の潜入工作の話を作ったのは彼だ。

当然アイリス姫は混乱していた。彼的には無理もない反応だった。
アイリス王女は彼の言葉に心当たりがあった。

：クレアはここ最近ずっと不自然だった。

彼を呼び出す提案をした辺りからずっと様子がおかしかった。

更にここ二、三日はおかしかったとアイリス王女は思っていた。

彼はこの異常を察する誰かはいると確信していた。

彼はクレアに宣戦布告したし、クレアは彼の真意を察していたからだ。

変態クレアが執着するアイリス姫は気が付くかもしれない。

少なくとも彼が思考誘導したレインなら気が付くと思っていた。

彼は非常識だ。クレアもいきなり切りかかってきた。

何より、魔王軍の潜入工作とか有り得なさ過ぎた。

彼は手紙で魔王討伐をやたら強調していた。

彼と仲間達は魔王軍幹部討伐を短期間で2人成し遂げていた。

この偉業はいくら彼が非常識な存在とはいえ、第一印象に残った。
これをアンカリングの罠という。

人は最初に得た情報にどうしても拘り、続く思考や判断が鈍ってしまふ。

他の要素に目を向けさせないで、戯言の真実味を強調するためだけに彼は一連の非常識を敢行した。

彼はここまで計算していた。

クレアがどうやっても詰みに持っていけた。

嘘発見器を持っていないなら持つてこさせれば良い。

彼は嘘をついていない。なので、最悪でも王都出禁になる程度に持つていけた。

彼は魔王軍からアイリス王女を守ろうとした悲劇の冒険者だ。

魔王軍の卑劣さを世界にアピールできた。アクシズ教の根も葉もない悪口ではない。

割と根拠がありそうな国が認めるでっち上げだ。

想定されるクレアの仕返し等ちっとも怖くなかった。彼の前世に比べたらマシだ。

クレアを牢獄に入れられない程度の仕返しにしかならない。

彼はそれに拘る程彼は愚かではなかった。

しかし、彼はクレアが嘘発見器を持つてきていると確信していた。

彼はそれくらい本気でクレアを貶していたからだ。

クレアの変態並みの忠誠心があれば持つてきた。

彼の確信通り、クレアは嘘発見器を仕込んでいたであろう胸元を一瞬触った。

アイリス姫の護衛としては見過ごせない話だから彼の否定の前にしてしまった。

彼の想定通りの反応だった。否定からでも持つていけたが、彼は内心笑った。

「私は女性である」
彼はそう言ってみた。

チーン

音がなった。嘘発見器だった。

クレアは持つてきていない可能性も彼は考えていたが、クレアは今持つていた。

彼の思惑通り過ぎた。クレアは何故今持つてくるのか言い訳が可能だった。

ただし、彼が常識的に振る舞えば、だ。

彼の悪い噂を聞いて用意したのだと言えば本来ならば失礼極まりない。

だが、名家のシンフォニア家の御令嬢ならギリギリ許された。クレアは彼を殺す気で根回しもしていた。

何か言おうとするクレアの前に彼は捲し立てる。

非常識の彼の戯言が一瞬の呆然を生み出していた。

「クレアさん。いや、魔王軍の潜入工作員のドツペルゲンガー。

もう言い逃れはできない。私は知っていた。

警察の嘘発見器を盗み出して、私を処刑しようと言論む魔王軍の者がいたという話があった」

ここまで彼は言い切れた。そういう話なのは嘘ではない。

ただし、彼が捏造した話だ。その後の取り調べにはレイン君を用意していた。

「さて、誤……」

嘘発見器がならないのを見て、彼の言葉が真実であるとクレアは誤

認した。

ああ、何たることだ！彼は魔王軍の卑劣さを今後の情報戦で活かす気満々だった。

こういった作戦はアメリカのCIAが良く使う手口だった。

彼の計画はCIAのスパイマニュアルの応用だった。

CIAのスパイたちは閉じこもっているターゲットに脅迫文や外壁にメッセージを書き込んだりしている。

自分以外の第三者に罪をなすりつける情報工作であり印象操作だった。

これが単純だが意外と効く。

アメリカだけでなく、あらゆる国が真似をして応用しまくっていた。

適当な写真データに本題の文章を仕込むことで簡単な偽装工作になる。牛乳からプラスチックを即座に作れる。ハンガーと紐があれば古い車なら余裕で開錠できる等々。

彼はそう言ったマニュアルを探偵業務に取り入れていた。

暗器作成等はロシアのCBPや某国のマニュアルを参考にしていた。

例えば、金属製の箸は即死クラスの貫通性を持った武器になる。

投げ方さえマスターすれば木に風穴を開けることだって余裕でできる。

暗殺程度は身の回りの物のできるので彼は前世で警戒していた。

彼は偽りの魔王軍を仕立て上げ、それに合法的に罪を押し付けることが可能だった。

これはクレアへの仕返しだけでなく、エルロード国のラグクラフト宰相へのブラフも兼ねていた。

彼の推測である魔王軍のドツペルゲンガー説が正しければ動く。

人間であり正しくなくても確認のために普通は動いた。

魔王軍にどの程度入れ込んでいるか知る判断材料になる。

ベルゼルグ王国に対する卑劣な魔王軍のドツペルゲンガー潜入は露骨なメツセージだ。

宰相を観察するだけで正体が簡単にわかる。

宰相は彼の些細なお茶目で引けない程にエルロード国に食い込んでいた。

これを戯言として処理すれば、対応すらしなければ、その行動を知るだけで類推可能だ。

彼は部下に見張らせていた。国にいてわかる程度で良かった。

スパイの活動はその国の新聞や雑誌を纏めて報告する程度で本来良かった。

彼は前世で情報戦と心理戦を極めた男だ。

この時代と世界にバレないギリギリの潜入工作を依頼していた。

ラグクラフト宰相の反応等、彼がアクセルに戻れば確認できた。

この一手はエルロード国を調べる材料でもあった。

彼に情報戦や心理戦で勝てる者はバニルぐらいでないと無理だった。

そんな彼の真骨頂が発動していることよりもクレアへの復讐が出来たことの方が彼は嬉しかった。

彼はクレアがブタ箱に放り込まれる瞬間をできれば見たかった。

だが、残念ながら彼の計画上見られなかった。

この展開では嬉々として揶揄うのではなく恩を売るべきだと彼は考え、諦めた。

「バインド」

彼はベルトの一番上の黒く染めた金属の紐を触って呟いた。

彼は仕込みに仕込んでいた。一見、ベルトと一体化していたミスリルの細い紐だった。

彼の着てきたスーツの第二ボタンは、めぐみんの自己紹介の演出の

ための小さな煙玉だったりする。

身体検査をくぐり抜けての色々な仕掛けを彼ならば仕込めた。

クレアは彼のバインドに縛られて、地面に叩きつけられた。

彼はすかさずクレアの口に猿轡をした。

どう見ても手際が良すぎたが、彼は後からいくらでも言い訳可能だった。

なお、彼がドアをぶち明けてからクレアに猿轡を嚙ませるまでわずか十秒だった。

アイリス王女も我に返ったようだった。

彼は早すぎる覚醒からアイリス王女の頭の切れを悟ったが回復の暇は与えなかった。

「レインさん!!クレアさんが本人かどうかを確認してください。

幸い、嘘発見器までご丁寧にあった。クレアさんをよく見知っているあなたが適任だ」

彼は思考を予め誘導しておいたレインに伝えた。

初対面のはずのレインの名前を彼が何故知っているか等、普段なら疑う。

だが、彼は悪魔以上の悪魔。外道だった。

今は緊急事態だったが故にまずこの異常は気が付かれない。

気が付ける可能性がある経験値の浅い王女様なら余裕で騙しきれた。

めぐみんは騙しきれないかも知れないが、彼は何一つ嘘をついていない。

だから、信じる他ない。魔法の嘘発見器が正常なのは彼がきちんと見せつけたから。

この世界の常識は彼からすれば隙だらけだった。嘘発見器、魔道具の信用は彼からすれば致命的過ぎた。

これが彼の最も得意な心理戦、思考誘導の基礎だった。

「わ、わかりました。嘘発見器まで本当にあつた何て……」

レインが余計なことを口に出した。

だが、彼の計画は達成された。

「これ自体が魔王軍の策略かもしれません。なので、クレアさんとして扱ってください」

嘘発見器の有効範囲外を彼は知っていた。

なので、ギリギリ聞こえないくらいの距離を確保した上で彼は言った。

彼は近くの騎士に言った。

レインにクレアかも知れないので丁重に扱うように伝えてと頼んだだけだ。

何も不自然じゃない。

彼はクレアがブタ箱に直送されるまで紳士を演じた。かなり無理やりだがセーフだった。

最も嘘発見器がある以上、一時間もしない内にブタ箱からクレアが出てくる。

彼なりのお茶目だからこれで良かった。

魔王軍の脅威と魔王軍幹部討伐実績がある彼が主張すればギリギリ通った。

貴族たちも警察も取引済みだ。もう彼の想定内だった。

彼は満足した。正直、スカツとしたのもう帰りたかった。大よその内政面は王都での活動で把握できた。

アイリス姫の僅かな視線や反応で優秀な王女だと彼は確信した。彼は一分に満たない反応でアイリス王女の能力を悟った。

非常事態に対して、予想外に切り替えが早かった。何度か発言しようとしていた。

暇を与えないから彼は騙しきれた。

：孤独かどうか彼は知りたかったことを思い出した。

彼はクレアをどうやったら合法的にボコれるかをずっと考えていた。

彼は素で最初の目的を忘れていた。

でも、アイリス王女は彼に悪感情しか持っていないと考えていた。

ジャテイス王子に若干申し訳なかった。だが、手紙を使わなかったので彼はホツとした。

彼はアイリス王女の忠実な騎士クレアを『誤解』とは言え公衆の面前で縛り上げた。

大義名分、魔王軍のスパイ説は公衆の面前が保証してくれる。

普通に確認はできるが、アイリス王女が孤独だったら、そもそも彼は何をしたかったのか自分がわからなかった。

「あ、あのー」

彼の想定外から声がかかった。アイリス王女だった。

「お話を今聞かせてくれませんか？」

アイリス王女にこんなことを言われた。

彼は察した。アイリス王女は何故か自分に興味を持っていた。

クレアの心配をしているのは確かだ。

普通に動揺していたし、仕切ろうとする前に思考を誘導したので彼の想定外は起きなかった。

アイリス王女は、ミツルギをインチキで倒した糞野郎と罵っているのではと思っていた。

それくらいにはアイリス王女とミツルギは親交があったはずだった。

彼は何を知りたいかは知らない。

しかし、ダクネスが彼に襲い掛かって来る寸前なので助かった。

彼はダクネスに公衆の面前で縛り上げられるところだった。

彼はダクネスの注意を完全に無視して、扉に突撃した。

アクアは本当に良いタイミングで彼を挑発してくれた。

狂人ならやりかねない自然な形で扉をぶち破れた。

彼はベルトを外してダクネスにバインドをしたくなかった。

スーツを着た状態で公衆の面前でベルトを外すなどみつともないからだ。

だが、それ以上にダクネスに縛り上げられるのは嫌だった。

そのため、彼は大変気分が良かったので、アイリス王女とお話することにした。